

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第321集

向中野館跡第4次・小幅遺跡第11次  
・台太郎遺跡第19次発掘調査報告書

盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査



(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# **向中野館跡第4次・小幅遺跡第11次 ・台太郎遺跡第19次発掘調査報告書**

**盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査**

## 序

岩手県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財を有しております、平成10年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,500箇所を超えております。先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました盛岡南新都市開発整備事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるために地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発事業という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的な課題となっております。

当財團法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す処置をとってまいりました。

本書は、盛岡市による盛岡南新都市開発整備事業に関連した、向中野館跡第4次・小幡遺跡第11次・台太郎第19次調査の発掘調査結果をまとめたものであります。遺跡は、いずれも零石川右岸の河岸段丘上に立地し、向中野館跡は平安の集落跡及び中世の館跡、小幡遺跡は平安の集落跡、台太郎遺跡は奈良・平安時代の集落跡が確認されています。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力と御援助を賜りました盛岡市開発部盛南開発課や盛岡市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成12年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

## 例　　言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割124-1ほかに所在する向中野館跡第4次および岩手県盛岡市本宮字小幡88-1ほかに所在する小幅遺跡第11次調査、岩手県盛岡市向中野字向中野16-6ほかに所在する台太郎遺跡第19次調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は次のとおりである。

向中野館跡第4次調査	L E 26-0205・O MN-98-04
小幅遺跡第11次調査	L E 16-2009・O K II-98-11
台太郎遺跡第19次調査	L E 16-2269・O D T-98-19
3. 本遺跡の調査は、盛岡市新都市土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局文化課の調整を経て、盛岡市の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 野外調査の期間と調査面積・調査担当者は次のとおりである。

向中野館跡第4次調査	発掘調査期間 平成10年7月1日～9月4日
	室内整理期間 平成11年2月1日～3月15日
	発掘調査面積 911m <sup>2</sup>
	調査担当者 潟 浩二郎・山口俊規
小幅遺跡第11次調査	発掘調査期間 平成10年9月1日～9月30日
	室内整理期間 平成11年3月16日～3月31日
	発掘調査面積 819m <sup>2</sup>
	調査担当者 潟 浩二郎・山口俊規
台太郎遺跡第19次調査	発掘調査期間 平成10年7月1日～8月31日
	室内整理期間 平成10年12月1日～平成11年3月31日
	発掘調査面積 4,757m <sup>2</sup>
	調査担当者 下田隆衛・佐藤綾子・鈴木見詠
5. 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。

座標原点の測量	……吉田測量設計
空中写真撮影	……東邦航空株式会社
6. 本報告書の執筆の担当は次の通りである。

向中野館跡第4次・小幅遺跡第11次	瀧 浩二郎・山口俊規
台太郎遺跡第19次	下田隆衛・佐藤綾子・高橋義介・高橋與右衛門(分担執筆により文末に氏名を記載)
7. 発掘調査において次の機関の協力を得た。

盛岡市教育委員会・地域振興整備公団
8. 本遺跡の調査に関わる記録、遺物等の諸資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
9. 実測図の凡例は14頁に記載した。

## 本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	2
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 地形と地質	2
2. 周辺の遺跡	7
III. 野外調査と整理方法	10
1. 野外調査	10
2. 室内整理	10
IV. 向中野館跡第4次調査	15
1. 遺跡の立地	16
2. 基本土層	16
3. 検出された遺構と出土遺物	16
(1) 穫穴住居跡〈R A〉	16
(2) 上坑〈R D〉	26
(3) 溝状遺構・堀跡〈R G〉	27
(4) 柱穴群〈R Z〉	30
4. 遺構外出土遺物	30
5. まとめ	37
(1) 遺構	37
(2) 遺物	39
(3) おわりに	40
V. 小幅遺跡第11次調査	55
1. 遺跡の立地	56
2. 基本土層	56
3. 検出された遺構と出土遺物	56
(1) 穫穴住居跡〈R A〉	56
(2) 上坑〈R D〉	63
(3) 焼上遺構〈R F〉	63
(4) 溝状遺構〈R G〉	65
(5) 円形周溝・柱穴群〈R Z〉	67 * 70
4. 遺構外出土遺物	77
5. まとめ	79
(1) 遺物	79
(2) 遺構	81
(3) おわりに	82

## VI. 台太郎遺跡第19次調査

1. 遺跡の位置と立地 .....	100
2. 基本土層 .....	101
3. 検出された遺構と出土遺物 .....	101
(1) 窩穴住居跡〈R A〉 .....	105
(2) 窩穴状遺構〈R E〉 .....	139
(3) 掘立柱建物跡〈R B〉 .....	143
(4) 土坑〈R D〉 .....	147
(5) 溝跡〈R G〉 .....	158
(6) 柱穴状土坑群〈R Z〉 .....	188
(7) 焼土遺構〈R F〉 .....	193
(8) 道路跡状遺構〈R Z〉 .....	193
(9) 遺構外の出土遺物 .....	195
4. まとめ .....	230
5. 最後に .....	230

## 〔図版目次〕

第1図 遺跡位置図 .....	1	第4図 周辺の遺跡分布図 .....	9
第2図 遺跡周辺の地形分類図 .....	4	第5図 グリッド配置図 .....	11
第3図 周辺の地形図 .....	5・6	第6図 凡例図 .....	14

---

### 〈向中野遺跡第4次調査〉

第1図 基本上層 .....	16	第9図 R D03・04・07 .....	26
第2図 遺構配置図 .....	17・18	第10図 R G02 .....	27
第3図 R A02 .....	19	第11図 R G06～08 .....	29
第4図 R A06 .....	21	第12図 R Z01(柱穴群) .....	31・32
第5図 R A06 .....	22	第13図 遺構内出土遺物(R A02・06) .....	33
第6図 R A09 .....	23	第14図 遺構内出土遺物(R A09・11・12) .....	34
第7図 R A11 .....	24	第15図 遺構内(R D03, R G02, R G06・ 07, 遺構外出土遺物 .....	35
第8図 R A12 .....	25		

〈小幡遺跡第11次調査〉

第1図 基本土層	56	第10図 R Z 017	69
第2図 R A 021	57	第11図 R Z 018	71・72
第3図 R A 021	58	第12図 遺構配置図	73
第4図 R A 022	59	第13図 遺構内出土遺物(R A 021)	74
第5図 R A 023	61	第14図 遺構内出土遺物(R A 021~023)	75
第6図 R A 024	62	第15図 遺構内出土遺物(R A 023・R A 024,	
第7図 R D 227~231, R F 013~016	64	R G 087・R G 088)	76
第8図 R G 089	66	第16図 遺構外出土遺物	77
第9図 R G 087・088	67・68		

〈台太郎遺跡第19次調査〉

第1図 遺跡周囲の地形図	100	第26図 R A 232堅穴住居跡	139
第2図 基本土層柱状図	101	第27図 R E 005堅穴状遺構	140
第3図 調査範囲の位置	102	第28図 R E 006堅穴状遺構	141
第4図 遺構配置図	103・104	第29図 R E 013・R E 017堅穴状遺構	142
第5図 R A 116堅穴住居跡	106	第30図 R E 021堅穴状遺構	144
第6図 R A 159堅穴住居跡	107	第31図 R B 005掘立柱建物跡	146
第7図 R A 161堅穴住居跡	109	第32図 R B 008掘立柱建物跡	147
第8図 R A 164堅穴住居跡(1)	110	第33図 R B 009掘立柱建物跡	149
第9図 R A 164堅穴住居跡(2)	111	第34図 土坑類(1)	153
第10図 R A 165堅穴住居跡(1)	113	第35図 土坑類(2)	155
第11図 R A 165堅穴住居跡(2)	114	第36図 土坑類(3)	157
第12図 R A 166堅穴住居跡	116	第37図 R G 046溝跡	161
第13図 R A 172堅穴住居跡	117	第38図 R G 094溝跡・R G 095溝跡	162
第14図 R A 175堅穴住居跡	119	第39図 R G 111溝跡	164
第15図 R A 186堅穴住居跡	121	第40図 R G 098溝跡・R G 099溝跡・R G 118溝跡	
第16図 R A 187堅穴住居跡	122	・ R G 119溝跡・R G 125溝跡	
第17図 R A 188堅穴住居跡	124	・ R G 127溝跡・R G 129溝跡	165・166
第18図 R A 197堅穴住居跡	126	第41図 R G 100溝跡	168
第19図 R A 198堅穴住居跡	127	第42図 R G 026溝跡・R G 101溝跡・R G 102溝跡	
第20図 R A 200堅穴住居跡	129	・ R G 134溝跡・R G 135溝跡	
第21図 R A 209堅穴住居跡	131	・ R G 136溝跡・R G 166溝跡	169・170
第22図 R A 210堅穴住居跡	132	第43図 R G 117溝跡	172
第23図 R A 227堅穴住居跡	134	第44図 R G 120溝跡	174
第24図 R A 228堅穴住居跡	136	第45図 R G 122溝跡	175
第25図 R A 229堅穴住居跡	138	第46図 R G 124溝跡・R G 128溝跡	177

第47図 R G126溝跡・R G142溝跡	178	第68図 遺構内出土遺物(R A210-2・R A211 ・R A227-1)	209
第48図 R G132溝跡・R G133溝跡	181	第69図 遺構内出土遺物(R A227-2・R A228 ・R A230・R A231 ・R A229-1)	210
第49図 R G138溝跡・R G143溝跡	183	第70図 遺構内出土遺物(R A229-2)	211
第50図 R G144溝跡・R G145溝跡 ・R G146溝跡・R G162溝跡	185	第71図 遺構内出土遺物(R A229-3・R D131 ・R E013-1・R G045)	212
第51図 R G157溝跡	187	第72図 遺構内出土遺物(R E013・R E015 ・R E017・R E021 ・R G045-1・R G099)	213
第52図 R Z017柱穴状土坑群	189	第73図 遺構内出土遺物(R G045-2)	214
第53図 R Z018柱穴状土坑群	192	第74図 遺構内出土遺物(R G045-3)	215
第54図 R Z005道路跡状遺構	194	第75図 遺構内出土遺物(R G045-4)	216
第55図 R Z009道路跡状遺構	196	第76図 遺構内出土遺物(R G045-5)	217
第56図 遺構内出土遺物(R A116-1)	197	第77図 遺構内出土遺物(R G045-6・R G098-1)	218
第57図 遺構内出土遺物(R A116-2)	198	第78図 遺構内出土遺物(R G098-2・R G099-1)	219
第58図 遺構内出土遺物(R A161・R A164-1)	199	第79図 遺構内出土遺物(R G099-2)	220
第59図 遺構内出土遺物(R A164-2・R A165-1)	200	第80図 遺構内出土遺物(R G099-3)	221
第60図 遺構内出土遺物(R A165-2)	201	第81図 遺構内出土遺物(R G099-4・R G111 ・R Z005・R A175)	
第61図 遺構内出土遺物(R A165-3)	202	遺構外出土遺物	222
第62図 遺構内出土遺物(R A165-4・R A166-1)	203	第82図 遺構内出土遺物(R E005)	223
第63図 遺構内出土遺物(R A166-2・R A172 ・R A175・R A186-1)	204		
第64図 遺構内出土遺物(R A186-2・R A187-1)	205		
第65図 遺構内出土遺物(R A187-2・R A188 ・R A198-1)	206		
第66図 遺構内出土遺物(R A198-2・R A200-1)	207		
第67図 遺構内出土遺物(R A209・R A210-1)	208		

## [写真図版]

### 〈向中野館跡第4次調査〉

写真図版1 空中写真	42	写真図版9 R D03・04・07, R G06	50
写真図版2 調査区、基本土層	43	写真図版10 R G06	51
写真図版3 R A02	44	写真図版11 R G06~08	52
写真図版4 R A06	45	写真図版12 遺構内出土遺物(R A02・06・09)	53
写真図版5 R A06	46	写真図版13 遺構内(R A11・12, R D03, R G02-06-07)、遺構 外出土遺物	54
写真図版6 R A09	47		
写真図版7 R A11	48		
写真図版8 R A12	49		

〈小櫛遺跡第11次調査〉

写真図版 1 空中写真	84	写真図版 9 R F 013~016	92
写真図版 2 調査区・基本上層	85	写真図版10 R G 087~088	93
写真図版 3 R A 021	86	写真図版11 R G 089	94
写真図版 4 R A 021	87	写真図版12 R Z 017	95
写真図版 5 R A 022	88	写真図版13 遺構内出土遺物(R A 021)	96
写真図版 6 R A 023	89	写真図版14 遺構内(R A 022~024)	97
写真図版 7 R A 024	90	写真図版15 遺構内(R A 024, R G 088・089)、 遺構外出土遺物	98
写真図版 8 R D 227~231	91		

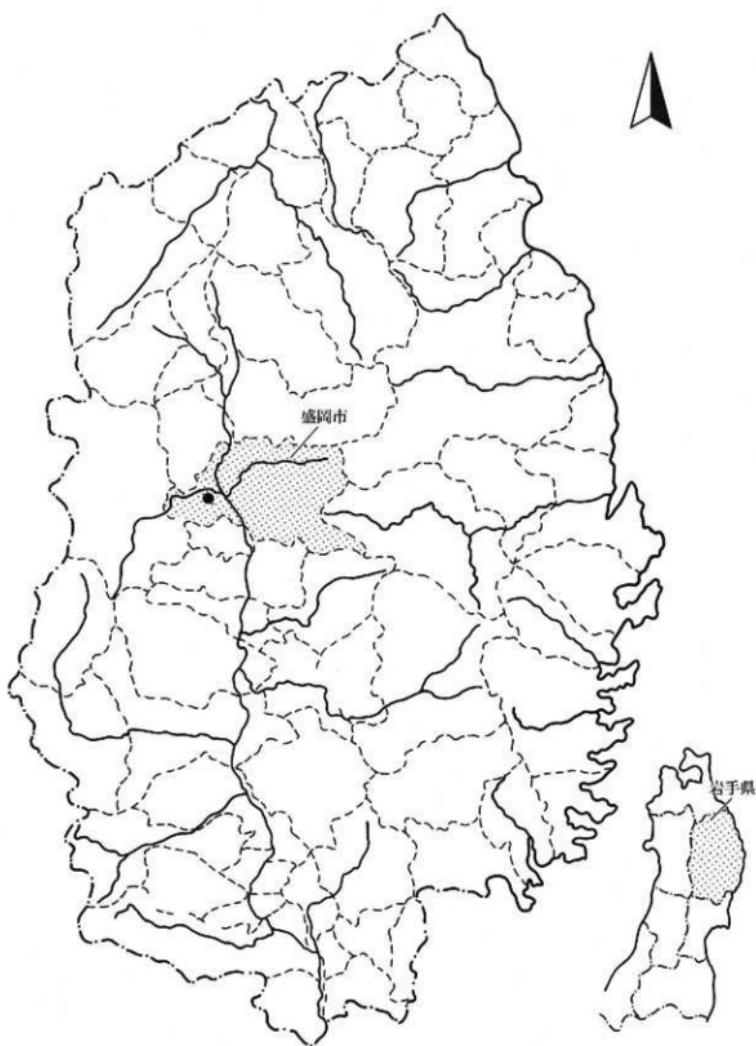
〈台太郎遺跡第19次調査〉

写真図版 1 R A 159堅穴住居後	233	写真図版27 R B 005掘立柱建物跡(1)	259
写真図版 2 R A 161堅穴住居後	234	写真図版28 R B 005掘立柱建物跡(2)	260
写真図版 3 R A 164堅穴住居後	235	写真図版29 R B 008掘立柱建物跡	261
写真図版 4 R A 165堅穴住居後(1)	236	写真図版30 R B 009掘立柱建物跡	262
写真図版 5 R A 165堅穴住居後(2)	237	写真図版31 土坑類(1)	263
写真図版 6 R A 166堅穴住居後(1)	238	写真図版32 土坑類(2)	264
写真図版 7 R A 166堅穴住居後(2)	239	写真図版33 土坑類(3)	265
写真図版 8 R A 172堅穴住居後	240	写真図版34 土坑類(4)・焼土遺構	266
写真図版 9 R A 175堅穴住居後	241	写真図版35 溝跡(1)	267
写真図版10 R A 186堅穴住居後(1)	242	写真図版36 溝跡(2)	268
写真図版11 R A 186堅穴住居後(2)	243	写真図版37 溝跡(3)	269
写真図版12 R A 187堅穴住居後(1)	244	写真図版38 溝跡(4)	270
写真図版13 R A 187堅穴住居後(2)	245	写真図版39 溝跡(5)	271
写真図版14 R A 188堅穴住居後	246	写真図版40 溝跡(6)	272
写真図版15 R A 197堅穴住居後	247	写真図版41 溝跡(7)	273
写真図版16 R A 198堅穴住居後	248	写真図版42 溝跡(8)	274
写真図版17 R A 200・209堅穴住居後	249	写真図版43 溝跡(9)	275
写真図版18 R A 210堅穴住居後	250	写真図版44 溝跡00	276
写真図版19 R A 227堅穴住居後	251	写真図版45 溝跡01	277
写真図版20 R A 229堅穴住居後	252	写真図版46 溝跡02	278
写真図版21 R A 232堅穴住居後	253	写真図版47 溝跡03	279
写真図版22 R E 005堅穴状遺構	254	写真図版48 溝跡04	280
写真図版23 R E 006堅穴状遺構	255	写真図版49 溝跡05	281
写真図版24 R E 013堅穴状遺構	256	写真図版50 溝跡06・R Z 017柱穴群	282
写真図版25 R E 017堅穴状遺構	257	写真図版51 R Z 005道路跡状遺構(1)	283
写真図版26 R E 021堅穴状遺構	258	写真図版52 R Z 005道路跡状遺構(2)	284

写真図版53	R Z 009道路跡状遺構(1) .....	285	写真図版66	遺構内出土遺物(R A227~R A230) .....	298	
写真図版54	R Z 009道路跡状遺構(2) .....	286	写真図版67	遺構内出土遺物(R A229・R A231) .....	299	
写真図版55	遺構内出土遺物(R A116) .....	287	写真図版68	遺構内出土遺物(R A229・R D131 • R E013) .....	300	
写真図版56	遺構内出土遺物(R A116) .....	288	写真図版69	遺構内出土遺物(R E013・R G045 • R G099・R E015 • R E017・R E021) .....	301	
写真図版57	遺構内出土遺物(R A116・R A164) .....	289	写真図版70	遺構内出土遺物(R G045) .....	302	
写真図版58	遺構内出土遺物(R A164・R A165) .....	290	写真図版71	遺構内出土遺物(R G045) .....	303	
写真図版59	遺構内出土遺物(R A165) .....	291	写真図版72	遺構内出土遺物(R G045) .....	304	
写真図版60	遺構内出土遺物(R A165) .....	292	写真図版73	遺構内出土遺物(R G045・R G098) .....	305	
写真図版61	遺構内出土遺物(R A165・R A166) .....	293	写真図版74	遺構内出土遺物(R G098・R G099) .....	306	
写真図版62	遺構内出土遺物(R A166・R A172 • R A175・R A186) .....	294	写真図版75	遺構内出土遺物(R G099) .....	307	
写真図版63	遺構内出土遺物(R A186~R A188 • R A198) .....	295	写真図版76	遺構内出土遺物(R G099・R G111 • R Z 005・R A175) .....	308	
写真図版64	遺構内出土遺物(R A198・R A200 • R A209) .....	296	写真図版77	遺構外出土遺物 .....		
写真図版65	遺構内出土遺物(R A209~R A211 • R A227) .....	297			写真図版77 遺構内出土遺物(R E005) .....	309

### [表目次]

第1表	R Z017柱穴状土坑群計測表 .....	190	第4表	陶器観察表 .....	229
第2表	R Z018柱穴状土坑群計測表 .....	191	第5表	石製品観察表 .....	229
第3表	土師器・須恵器観察表 .....	224	第6表	土製品観察表 .....	229



第1図 遺跡位置図

## I. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発整備事業は、盛岡市がきたるべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された土地区画整備事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした土地区画整備事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成10年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市と御岩手県文化振興事業団の両者に通知され、これを受けた両者は、平成10年4月1日に御岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。実際の発掘調査は向中野館跡第4次調査が平成10年7月1日に着手され、同年9月4日に終了し、小幅遺跡第11次調査が平成10年9月1日に着手し、同年9月30日に終了した。台太郎遺跡第19次調査が平成10年7月1日に着手し、同年8月31日に終了した。

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地と地形・地質

向中野館跡・小幅遺跡・台太郎遺跡の所在する盛岡市は、岩手県のほぼ中央に位置し、北は岩手郡滝沢村・玉山村、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は紫波郡紫波町・稗貫郡大迫町、西は岩手郡零石町に接する。近世南部氏の城下町として発展し、現在は岩手県の県庁所在地で、面積489.15km<sup>2</sup>、人口約28万3千人を有する、北部太平洋側における中核都市であり、東北地方交通の大動脈である東日本旅客鉄道東北本線と国道4号線が地内を南北に縱貫し、JR田沢湖線と国道46号線が西の秋田県に通じている。市域の中央部を北上川が、西から零石川、東から中津川・斐川を合わせて南流し、東西に迫る山々に挟まれた盛岡盆地を形成しており、盛岡市の市街地はこの盆地を中心に広がっている。北西には古来から「南部富士」「巌驚山」と呼ばれる岩手山(2040.5m)がコニーデ火山特有の禍野を東方に広げ、北東には姫神山(1124.5m)が、岩手山と向き合うようにそびえている。また、南東には北上山地の最高峰、秀峰早池峰山(1913.5m)が定高性を示す周囲の山塊からひとときわ抜きん出た山稜を望ませている。また、大迫町および川井村との境にある毛無森は標高1,437mであり、鶴ノ木沢山・阿部館山など2,000m以上の山々が東境に連なり、区塊嶺を越えて国道106号とJR山田線が太平洋沿岸の宮古市方面に通じている。

北上川は、岩手・宮城の両県をまたがって流れ主流部の延長249km、流域面積10,250km<sup>2</sup>、支流数216を有する東北地方最大の河川で、西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を涵養し、宮城県石巻湾に注いでいる。この流域は、盛岡市北部の四十四田峡谷と一関市孤擣寺峡谷を境にして上・中・下流に分けられており、盛岡は中流域の上流部に当たる。

中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いによって対象的な様相を呈している。新第三系および火山岩類を主体とする褶曲山地である奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給し、大小の扇状地が複合する広い平野部を西岸に作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって解析されて段丘化している。これに対して老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山地に続く丘陵縁辺部に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。

北上川流域の第四系および地形の研究を行っている中川久夫らは、中流域の段丘を上部から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類し、中流域北部ではこれらに相当するものとして高位の石鳥谷段丘、中位の二枚橋段丘、低位の花巻段丘、都南段丘に区分している。小幅遺跡の立地する本宮地区も零石川の右岸に形成された沖積段丘上に位置している。

向中野館跡は北緯 $39^{\circ}40'32''$ 、東経 $141^{\circ}08'32''$ 、小幅遺跡は北緯 $39^{\circ}41'06''$ 、東経 $141^{\circ}07'37''$ 、台太郎遺跡は北緯 $39^{\circ}40'44''$ 、東経 $141^{\circ}08'30''$ にそれぞれ位置し、国土地理院の1:50,000の地形図では「盛岡」(N J - 54-13-14)の図幅に含まれる。これらの遺跡は、零石川によって形成された沖積段丘上に立地しており、現状は水田・畑地及び宅地である。なお、延暦22年(803年)坂上田村麻呂によって造営された志波城も同地形面に立地している。遺跡が載る冲積面は零石川の度重なる氾濫を受けており、旧河道や自然堤防が入り組む様子が地形図上でも、水田の区割り等から明確に読みとれる。

## 2. 周辺の遺跡

平成10年4月の岩手県教育委員会のまとめでは盛岡市内には508ヶ所の遺跡が登録されている。第4図では今回調査した遺跡の所在する本宮・飯岡新田周辺を中心に125箇所の遺跡を紹介する。

本遺跡の載る零石川右岸と左岸では対称的な様相を呈している。左岸の台地上には大館遺跡群をはじめとした繩文時代の遺跡が数多く知られている一方で、右岸の沖積段丘面上には志波城跡や今回当センターで調査した3遺跡をはじめ大宮北遺跡、鬼柳A遺跡・本宮熊堂B遺跡など奈良～平安期の遺跡が数多く分布している。

### 〈引用・参考文献〉

岩手県企画開発室(1974)『北上川系開発地域土地分類基本調査－日誌－』

岩手県文化振興事業団(1994)『小幅第2次発掘調査報告書』

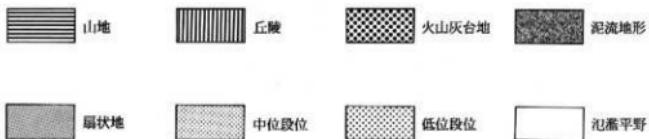
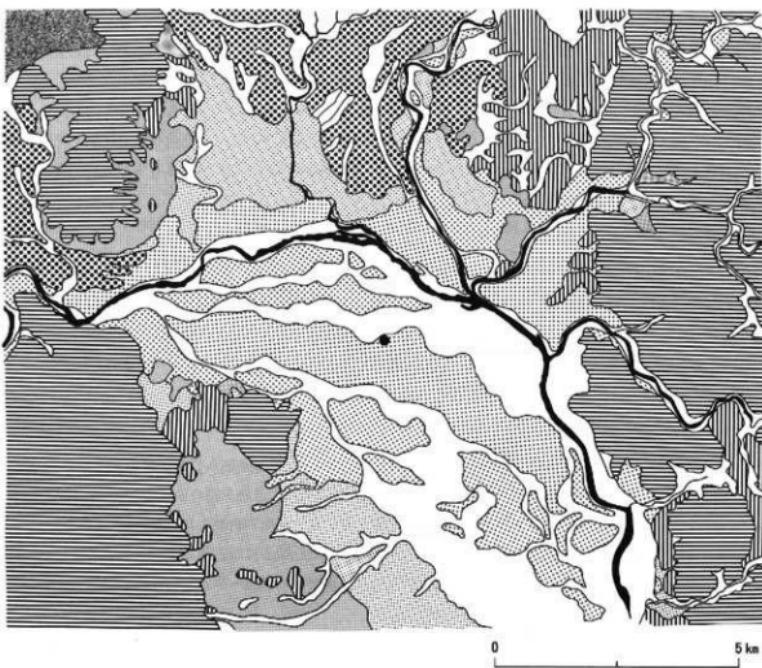
■ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第241集

岩手県文化振興事業団(1995)『小幅第4次発掘調査報告書』

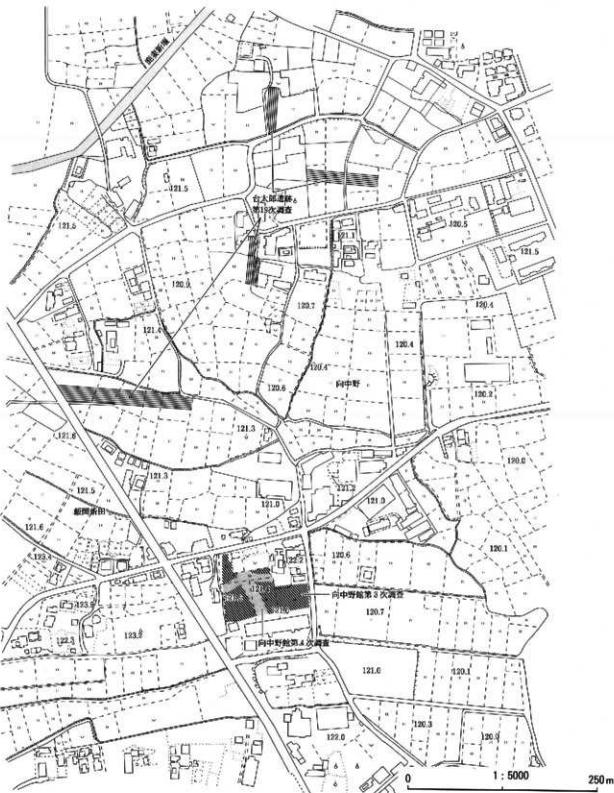
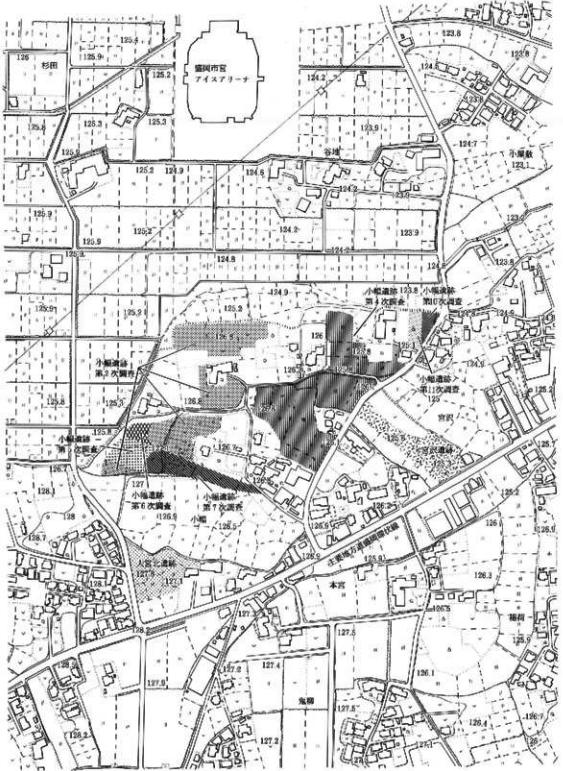
■ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集

岩手県文化振興事業団(1998)『大宮北・本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書』

■ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第281集



第2図 遺跡周辺の地形分類図



第3図 周辺の地形図

周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
1	田面野木	散布地	縄文／古代	土器
2	猪去八幡館	城館跡	中世	堀、郭
3	上宿去	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器、土坑、獨立柱建物跡
4	棚田	散布地	平安	土師器
5	塚ノ木	集落跡	平安	土師器
6	ハツロ	散布地	古代	土師器、住居跡
7	八卦	集落跡	古代	土師器、刀、玉、和向環坏
8	大田郷奥森古墳群	古墳	奈良	土師器、刀、玉、和向環坏
9	館	集落跡	平安	土師器
10	上野原敷	散布地	古代	土師器
11	畠中	集落跡	古代	土師器
12	小沼	集落跡	平安	土師器、縄文陶器、住居跡
13	一本木	集落跡	平安	土師器、住居跡
14	五戸街新田	集落跡	古代	土師器
15	天沼	集落跡	古代	土師器
16	竹鼻	集落跡	古代	土師器
17	志波城	城柵跡	平安	土器、獨立柱建物跡、門跡、築堤、大溝
18	田貝	集落跡	古代	土師器、住居跡
19	竹花前	集落跡	平安	土師器、縄文陶器、住居跡
20	新堀端	城柵跡	縄文／古代	土器（縄文晚期）、古代：住居跡、土師器、土坑、大溝
21	石仏	集落跡	古代	土師器
22	田中	散布地	平安	土師器
23	林城	集落跡	平安	土器、獨立柱建物跡
24	小橋	集落跡	平安	土器、住居跡、獨立柱建物跡／報告遺跡
25	大宮	集落跡	古代	土師器
26	大宮北	集落跡	平安	住居跡、土師器／日8年調査
27	鬼柳A	散布地	古代	土師器／日9年調査
28	小林	集落跡	古代	土師器
29	水門	集落跡	古代	土師器
30	上越場A	集落跡	古代	土師器
31	宮沢	散布地	平安	土師器片／日8年調査
32	本宮熊堂A	集落跡	縄文	縄文土器（後・晩期）／日8年調査
33	本宮熊堂B	集落跡	古代	土師器／日5・日9年調査
34	鬼柳B	集落跡	古代	土師器
35	稚荷	集落跡	古代	土師器
36	鬼柳C	集落跡	古代	土師器
37	野古A	集落跡	古代	土師器／日9年調査
38	野古B	散布地	古代	土師器
39	台太郎	集落跡	古代／平安	土師器、住居跡、溝跡／II9、10年度調査
40	上平	集落跡	縄文／古代	土器、（中～晩期）、土師器、住居跡
41	猪去館	城跡	縄文／古代	土器、土坑、住居跡、獨立柱建物跡
42	蟹沢下	散布地	古代	土師器
43	二ツ沢	散布地	縄文／古代	土師器
44	小和田館	城館跡	中世	堀、郭
45	蟹沢	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
46	ヒビ堂	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
47	オミ坂	散布地	縄文／古代	縄文土器（早・晩期）、土師器
48	大ケ森	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
49	辻原敷	集落跡	古代	土師器
50	内田A	集落跡	古代	土師器
51	上越場B	集落跡	古代	土師器
52	西H3B	集落跡	古代	土師器、須恵器
53	前田	集落跡	古代	土師器
54	向中野館	城館跡	平安／中世	堀、住居跡、土師器、須恵器／報告遺跡
55	細谷地	集落跡	古代	土師器
56	南仙北	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器、住居跡
57	向中野橋	集落跡	古代	土師器
58	飯岡沢田	集落跡	古代	住居跡
59	飯岡才川	集落跡	古代	鬲六、土坑、溝／日10年調査
60	中村	散布地	平安	土師器、須恵器
61	月見山	散布地	縄文／古代	土器
62	山中	散布地	縄文／古代	土器（早・中期）、土師器

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
63	飯岡館	城館跡	中世	空堀、繩文土器(中期)
64	堀	散布地	繩文～古代	繩文土器、土師器
65	高鈴古墳群	古墳	奈良～平安	素手刀、切小玉、土師器
66	鹿島II	散布地	平安?	土師器
67	高鈴	散布地	繩文	土器(中期)、石器
68	大椿I	集落跡	古代	土師器、須恵器
69	大椿II	散布地	古代?	土師器?
70	鶴野前	散布地	繩文	土器(後期)
71	龜岡山館	城館跡	中世	
72	氣岡赤坂	散布地	古代	
73	いたこ塚	各洞跡	近世	
74	赤坂II	散布地	平安?	土師器
75	羽場館	城館跡	中世	空堀
76	羽場百日本	散布地	繩文	土器(小柄)
77	砂子塚	散布地	古代	小塚
78	アイノ沢	散布地	繩文	土器(後期)
79	因幡	散布地	繩文～古代	繩文土器、土師器
80	木節	集落跡	平安	
81	福千代	集落跡	奈良	
82	二又	散布地	古代	土師器、須恵器
83	内村	集落跡	平安	土師器、常滑
84	中尾敷	散布地	古代	土師器
85	藤島I	集落跡	繩文～古代	繩文土器、土師器
86	深瀬I	集落跡	平安	住居跡
87	高尾敷	散布地	古代	須恵器
88	法橋林現塚	祭祠跡		
89	象岡林現塚I	集落跡	古代	土師器、須恵器、硯、住居跡
90	象岡林現塚II	集落跡	平安	土師器
91	上新田	集落跡	平安	土師器、住居跡
92	深瀬II	集落跡	平安	住居跡
93	上新田I	集落跡	平安	住居跡
94	下久根I	散布地	繩文～古代	繩文土器、土師器
95	石持	散布地	古代	土師器、須恵器
96	高尾敷II	散布地	平安	土師器、須恵器
97	西	集落跡	平安	土師器、住居跡
98	西田	集落跡	平安	須恵器
99	下久根II	散布地	繩文～古代	繩文土器
100	燕堂I	集落跡	繩文～古代	繩文土器、石器、土師器、住居跡
101	松島	集落跡	古代	土師器、須恵器
102	熊堂裏	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
103	熊堂II	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
104	田中	奥落跡	平安	土師器、須恵器、石器
105	南谷地	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
106	夕対	散布地	古代	土師器
107	横原	集落跡	古代	土師器、須恵器
108	葛木	散布地	古代	土師器、石器
109	新井田I	散布地	古代	土師器、須恵器
110	新井田II	散布地	古代	土師器、須恵器
111	新田	集落跡	平安	土師器、須恵器
112	間渡I	散布地	古代	土師器
113	下羽場	集落跡	平安	土師器、須恵器、硯、陶器
114	下湯沢	散布地	古代	土師器、須恵器
115	大鳥	散布地	古代	土師器、須恵器
116	湯森	散布地	繩文	土器(後期)、石器
117	湯森絆塚	絆塚	中世	中世、常滑
118	後鳥	散布地	繩文	土器、石器
119	湯沢	散布地	繩文	土器(前・中・後期)、石器
120	鳥	墳墓	不明	小塚
121	小田I	散布地	古代	土師器
123	間渡II	散布地	古代	土師器、須恵器
125	矢盛	集落跡	古代	土師器、住居跡、墓壙/H 4年調査



第4図 周辺の遺跡分布図

### III. 野外調査と整理方法

#### 1. 野外調査

##### (1) グリッドの設定

###### ・向中野館跡

向中野館跡第4次調査のグリッド設定にあたっては基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区範囲内の長軸線上に載るように中央に基準点1、西側に基準点2を設置した。座標値は以下のとおりである。

基1 ( $X = -35,950.000$   $Y = 26,500.000$ )

基2 ( $X = -35,950.000$   $Y = 26,470.000$ )

基1から西に50m、北に50mの地点を任意の座標原点とし、これを基に1升50m×50mの大グリッドを設定し、東方向へはアルファベットのA、Bを南方向へはI、IIを与え、IA、IBというように表示した。

小グリッドは大グリッドを $5 \times 5$ mに区割り、北西隅を基点に、東方向へはa～j、南方向へは1～10をつけて1a、10jというような設定にした。遺構外土上の遺物の取り上げはこの調査区名を使用している。

###### ・小幅遺跡

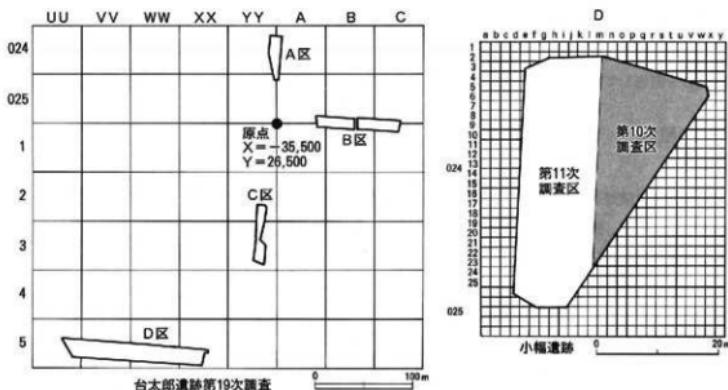
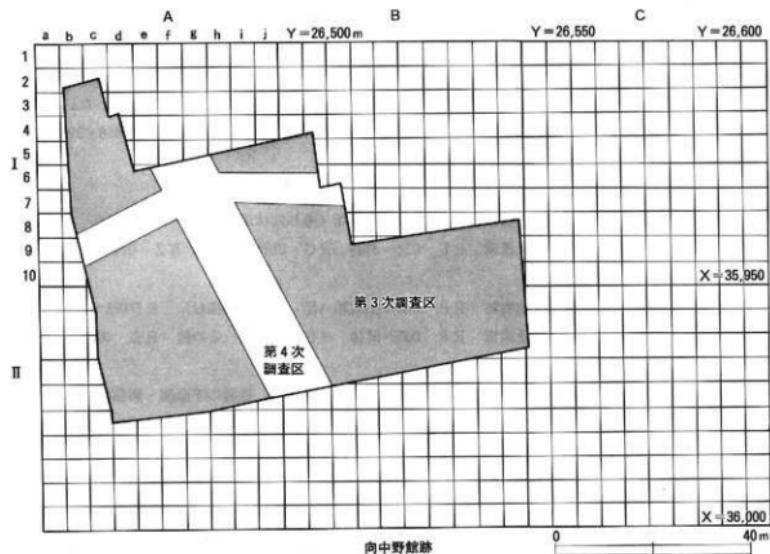
小幅遺跡第11次調査のグリッドの設定にあたっては盛岡市教育委員会の方針に準じた。平面直角座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。大宮地区の調査座標原点は $X = -35,000.000$ 、 $Y = +25,000.000$ である。50mの大グリッドは北西隅を基点に、東方向へはアルファベットの大文字でAA～YY (YYから東へはA、B...) 南方向へは算用数字で1～25となり、これを組み合わせて1AA、2BB...25YYというように示される。小グリッドは大グリッドを $2 \times 2$ mに区割り、北西隅を基点に、東方向へはa～y、南方向へは1～25をつけて1a、25yというような設定にした。平面図の作成にあたっては調査原点の $X = -35,000.000$ 、 $Y = +25,000.000$ を基点としてRY±0・RX±0と表現し、この調査原点を中心にして北方向へはRX+、南方向へはRX-、西方向へはRY-、東方向へはRY+と表記している。

###### ・台太郎遺跡

台太郎遺跡のグリッドの設定にあたっては盛岡市教育委員会の方針に準じた。平面直角座標第X系を座標変換した調査座標で表示した。調査座標原点は $X = -35,500.000$ 、 $Y = +26,500.000$ である。50mの人グリッドは北西隅を基点に、東方向へはアルファベットの大文字でA～Y (Aから西へはYY、XX、WW...)、南方向へは算用数字で1～25(1から北へは025、024、023...)となり、これを組み合わせて1A、2B...25Yというように示される。小グリッドは大グリッドを $2 \times 2$ mに区割り、北西隅を基点に、東方向へはa～y、南方向へは1～25をつけて1a、1b、...25yというような設定にした。平面図の作成にあたっては調査原点の $X = -35,500.000$ 、 $Y = +26,500.000$ を基点としてRY±0・RX±0と表現し、この調査原点を中心にして北方向へはRX+、南方向へはRX-、西方向へはRY-、東方向へはRY+と表記している。

##### (2) 粗掘り

本調査に先立って盛岡市教育委員会が行った試掘調査によって今回の調査対象面積の約40%の部分については遺構の粗密や層序・遺物の状況がある程度把握されていた。また小幅遺跡に関しては、隣接した西側を盛岡市教育委員会が調査を行なっており、その成果によって今回調査対象となっている区域の遺構・遺物に関する状況がある程度把握されていた。さらに試掘の入らない所には人力によるトレンチを設定して、細部



第5図 グリッド配置図

の状況を確認した。これにより遺構が検出するレベルまで遺物が少ないこともあり、重機によって、表土を除去し、その後人力による遺構検出を行った。

### (3) 遺構の命名

検出された遺構の命名については盛岡市教育委員会の方法に準じており、下記のとおりに行った。各種遺構番号は、向中野館跡(第3・4次調査)は新規、小幡遺跡(第10・11次調査)、<sup>往1)</sup>台太郎遺跡(第18・19次調査)については前回調査からの通し番号で下記の通り命名した。

#### 〈小幡遺跡第10・11次調査〉

堅穴住居跡 R A 019～掘立柱建物跡 R B 015～土坑類(陥し穴状遺構含む) R D227～

堅穴状遺構 R E 034～炉・焼土遺構 R F 034～溝跡 R G 087～その他 R Z 017～

#### 〈台太郎遺跡第18・19次調査〉

堅穴住居跡 R A 047～掘立柱建物跡 R B 005～土坑類(陥し穴状遺構含む) R D091～

堅穴状遺構 R E 005～炉・焼土遺構 R F 005～溝跡 R G 026～その他 R Z 002～

### (4) 遺構の精査と実測・遺物の取り上げ

検出された遺構は、堅穴住居跡・堅穴状遺構は4分法で精査を実施し、遺構の平面図・断面図は20分の1の縮尺で実測を行った。一部堅穴住居跡のカマド・炉の平面・断面については10分の1で実測している。溝跡や廻跡については平板測量で40分の1の平面図を作成した。なお断面図は20分の1である。その他の遺構については2分法で精査を実施し、基本的には平面図・断面図とともに20分の1の縮尺で実測したが、例外的に10分の1で実測を行った遺構もある。遺構内出土の遺物については、埋土層に基づいて取り上げ、必要に応じて写真撮影。図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、前述のとおり、調査区ごとに出土した層位を記して取り上げた。

### (5) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ(モノクロ)を1台、35mm判カメラ(モノクロ、カラー・リバーサル)を2台、この他にボラロイドカメラ1台をメモ的な用途として使用した。撮影に当たっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。また、調査終了にあたり調査現場の航空写真撮影を実施している。

## 2. 室内整理

### (1) 作業手順

遺構については調査現場で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース図版作成の順に進めた。遺物については、接合、復原を行った後、仕分け・登録と併行して実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成を順に進めた。また、これらの作業と併行して鑑定依頼、原稿作成し、報告書に掲載した。

### (2) 遺構

遺構図面の縮尺は堅穴住居跡・堅穴状遺構については平面図・断面図とともに50分の1、カマドの各断面図は25分の1、溝状遺構・廻跡は平面図は100分の1、断面図は40分の1、土坑・井戸跡は平面図・断面図とともに50分の1、焼土遺構は平面図50分の1、断面図25分の1を原則として掲載したが、一部に変更もあり、図面にはそれぞれスケール・縮尺率を付した。遺構写真の縮尺については不定である。

### (3) 遺物

土器の実測図は原則として、反転実測が可能なものに限ったが、一部平面実測を行ったものもある。遺物

写真の縮尺については実測図版に準じている。遺物の実測図に付している番号は遺物写真図版に付した番号と同一である。拓本図版・写真図版掲載遺物の縮尺率は下記の通りである。

土器・陶磁器・木片・・・1/3 大型の土器・・・1/4 石器・上製品・古錢・・・1/2

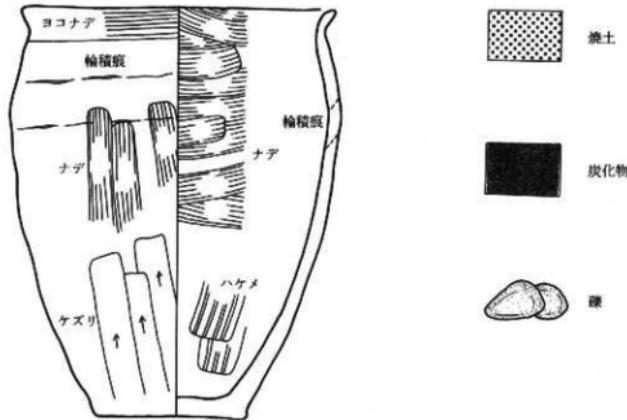
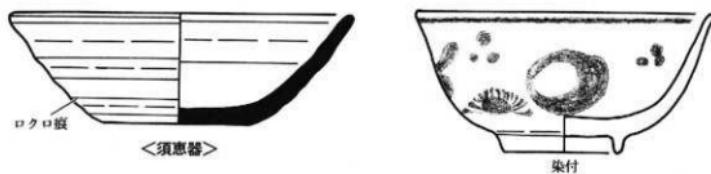
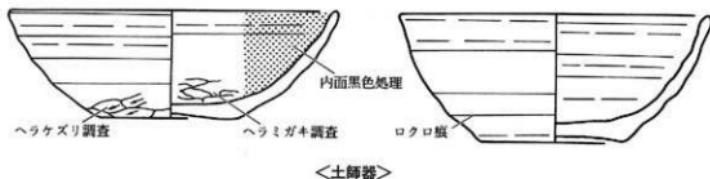
図版中の土器はP、罐はS、木片はWと表している。

注1) 小幅遺跡第10次・第11次調査の遺構名変更について

小幅遺跡第10次・第11次発掘調査は当初、第8次・第9次調査として行われ、遺構名を第7次調査からの続番号を使用し、報告書を作成したが、遺跡全体を統括する盛岡市教育委員会が同時期に行った小幅遺跡の発掘調査を第8次・第9次とするため、今回、県埋文が発掘調査を行った第8次・第9次調査を第10次・第11次調査と変更するよう依頼され、これに従い遺構名を第7次調査からではなく、第9次調査の続番号にするよう依頼されたが、発刊作業途中にあり、本文・図版に記載されたすべての遺構名の変更は不可能な状況であったため、本文中では、当初から使用していた遺構名を記載し、これと変更後の新登録名との対応表を下記のとおり作成した。

(尚、遺構名の変更に伴って、報告書に記載された本文や図版の内容に一切変更はない。)

掲載番号	新登録名	掲載番号	新登録名	掲載番号	新登録名
R A019 → R A032	R D227 → R D343	R G087 → R G128			
R A020 → R A033	R D228 → R D344	R G088 → R G129			
R A021 → R A034	R D229 → R D345	R G089 → R G130			
R A022 → R A035	R D230 → R D346	R Z017 → R Z021			
R A023 → R A036	R D231 → R D347	R Z018 → R Z022			
R A024 → R A037					
R A025 → R A038					



第6図 凡例図

## IV. 向中野館跡第4次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割124-1 ほか  
委 託 者 地域振興整備公団  
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理  
発掘調査期間 平成10年7月1日～9月4日  
調査対象面積 911m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 911m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 LE26-0205・OMN-98-04  
調査担当者 潤 浩二郎・山口俊規  
協 力 機 関 盛岡市教育委員会

## 1. 遺跡の立地

向中野館遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅から南西に約1.3kmに位置し、零石川によって形成された標高126m前後の河岸段丘上に立地している。調査区の現況は水田および畠地である。本遺跡の西約1kmに国指定史跡の志波城跡、北100mには奈良・平安時代の集落跡の台太郎遺跡がある。

## 2. 基本土層

本遺跡は開田時の削平による影響もあって、南側は旧耕作土下にある遺構・遺物の包含層が旧耕作土を除去するとほとんど残存せず、北側ほど残存状態があるためIA5-iグリッドに深掘りをかけ、これの北面を基本土層とした。

第I層：10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 固くしまる  
第II層：10YR2/3 黒褐色土 粘性なし 固くしまる  
第III層：10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり  
第IV層：10YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりあり  
第V層：10YR5/4 にぼい黄褐色土90%、10YR6/4 黄褐色土10%の混合上層 粘性あり しまりあり  
第VII層：10YR4/2 灰黄褐色土 粘性あり しまりあり

## 3. 検出された遺構

### R A02 積穴住居跡

遺構(第3図・写真図版3)

〈検出状況・重複関係〉 I B区の南西に位置する。第III層で検出し、重複している遺構はない。

〈形状・規模〉 ほぼ正方形に近い形状で、規模は338×364cm、  
総床面積は約12.30m<sup>2</sup>である。主軸方向はN-9°-Eである。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、上～中位は黒褐色土、下位は黑色土による構成である。検出面から床面までの深さは16～34cmである。

〈壁〉 壁面は内湾して立ち上がる。

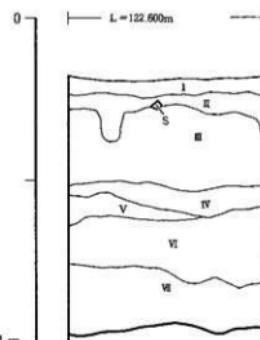
〈床面〉 床面はほぼ平坦で西側の一部が窪んでいる。

〈その他〉 カマドはなく、床面北端に焼土遺構が確認された。焼土粒は含むが、二次堆積遺構である。

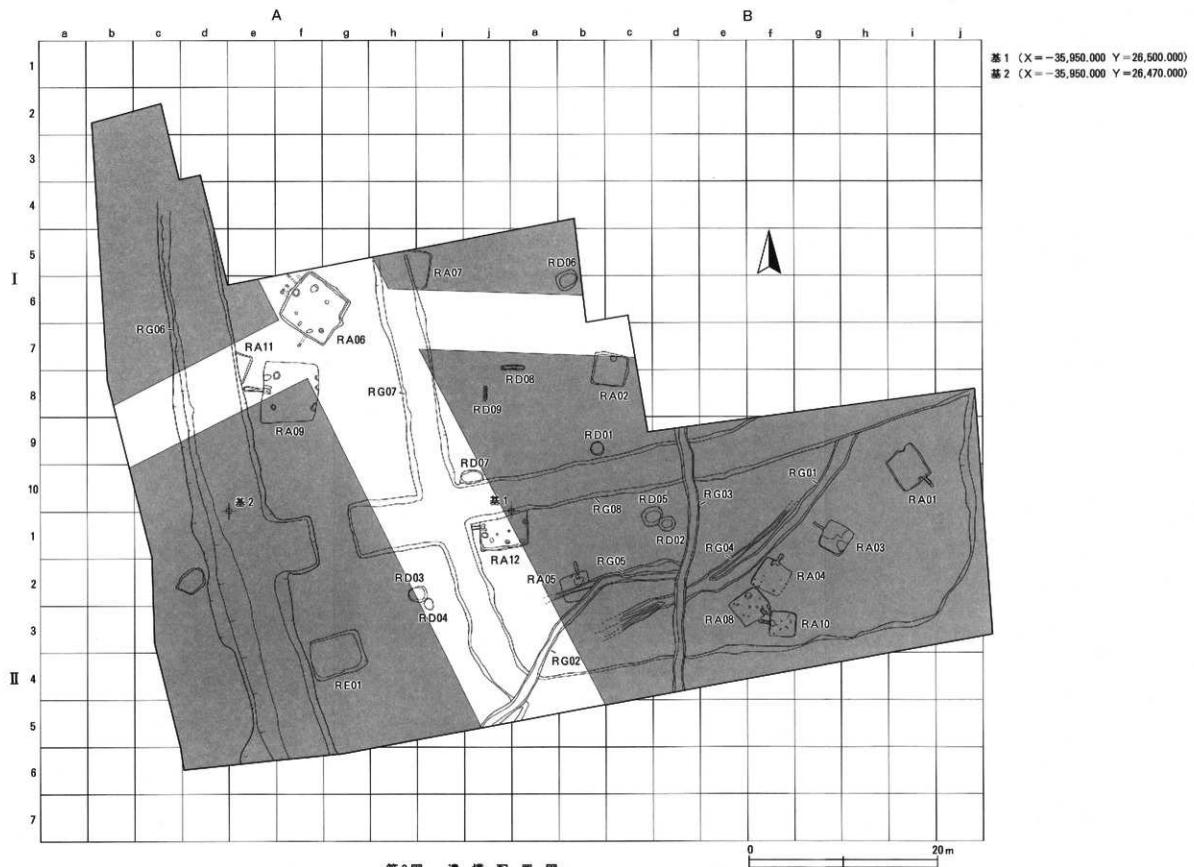
遺物(第13図・写真図版12)

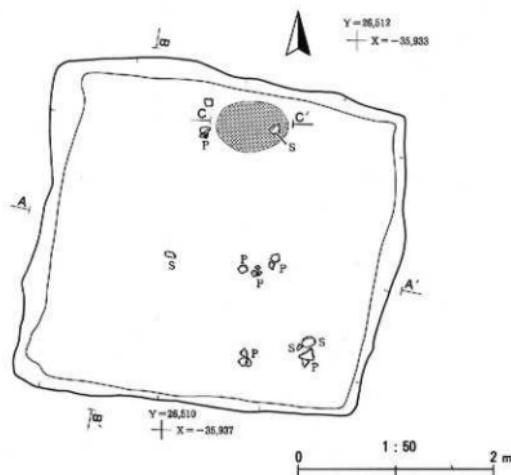
〈出土状況〉 1・2は酸化炎焼成の壺で内黒処理が施されている。3は還元炎焼成の壺で胴部下～底部の破片で非クロロ成形である。器面の調整は表面はケズリ、内面はナデが施されている。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第1図 基本土層





A-A' L = 121.600m A'-A'



1. 10YR 2/2 黒褐色土 脱性ややあり しまりあり 橙色土(10YR 4/6) 3%含む。
2. 10YR 3/2 黒褐色土 脱性あり しまりあり 橙色土(10YR 4/6) 5%含む。
3. 10YR 2/1 黒褐色土 脱性あり しまりややあり 橙色土(10YR 4/6) 10%含む。
4. 10YR 3/2 黒褐色土 脱性あり しまりあり 橙色土(10YR 4/6) 15%含む。
5. 10YR 2/1 黒褐色土 脱性あり しまりややあり 上部に植物根が量多くなる。
6. 10YR 2/1 黒褐色土 脱性あり しまりあり 橙色土(10YR 4/6) 30%含む。

B-B' L = 122.600m B'-B'



1. 10YR 3/2 黑褐色土 脱性ややあり L 3.0m 橙色土(10YR 4/6) 3%含む。
2. 10YR 3/2 黑褐色土 脱性あり L 3.0m 橙色土(10YR 4/6) 5%含む。
3. 10YR 2/3 黑褐色土 脱性あり L 3.0m 9%含む 橙色土(10YR 4/6) 10%含む。
4. 10YR 2/2 黑褐色土 脱性あり しまりやや 橙色土(10YR 4/6) 15%含む。
5. 10YR 2/1 黑褐色土 脱性あり しまりややあり 上部に植物根が量多くなる。
6. 10YR 2/1 黑褐色土 脱性ややあり しまりやや 水耕化鉢底15%含む。

C-C' L = 122.600m

1. 10YR 4/6 増色土 脱性あり しまりあり 明赤増色土(5YR 4/5) 3%含む。

第3図 RA02

#### R A06 穹穴住居跡

遺構(第4・5図・写真図版4・5)

〈検出状況・重複関係〉IA区中央に位置し、第III層で検出した。旧畠地で削平を受けない所にあり、遺構の残存状況は良い。重複している遺構はない。

〈形状・規模〉形状は正方形で、規模は613cm×588cm、総床面積は約36.04m<sup>2</sup>である。主軸方向はW-33°-Nである。

〈埋土〉自然堆積を呈し、全体が暗～黒褐色土で構成され、下位に一部黑色土が混じる。検出面から床面までの深さは25～42cmである。

〈壁・床面〉壁は緩く内湾ぎみに立ち上がり、床面は平坦で、北壁際に溝が走る。

〈カマド〉カマドは南西壁に1カ所、北西壁に5カ所設けられていた痕跡があり、1号カマドは66×44cm、5号カマドは39cm×30cmの範囲で燃焼痕が確認された。規模は1号カマドは煙道部の長さ112cm、煙出し部径32.5cm、煙出し部の深さ63.5cm、2号カマドはそれぞれ76cm、23cm、57.5cm、3号カマドは57cm、18cm、30cm、4号カマドは54cm、19cm、62cm、5号カマドは113cm、21cm、34cm、6号カマドは煙道部の長さのみで53cmである。煙道部の構造はいずれも割り貫きで煙出し部に近づくに従って低くなっている。袖部や燃焼痕が無いことから同時期に使用された物ではなく崩落などによって使用不能となり、作り替えを行ったと思われる。また、6号カマドは煙道部のろで煙出し部は無く、途中で構築を止めたと考えられる。袖部はいずれも消失しており、構成段がわずかに散在するのみである。

〈その他〉規模46cm×48cmの集石遺構が床面西側で検出された。5cm前後の石がびっしり詰まっており、右間に暗赤褐色焼上が堆積している。遺構上面や周囲には炭化物粒が多く散在し、炉跡の性格をもつ遺構と考えられる。

遺物(第13図・写真図版12)

〈出土遺物〉4～9は酸化炎焼成の壺でいずれも成型はロクロである。底部の切り離し技法は回転糸切りであるが、9には再調整した痕が窺える。10は酸化炎焼成の高台付の壺で器面の表裏に黒色処理が施されている。11・12は酸化炎焼成の甕で器面の調整は表面がナデ、ケズリ、裏面がナデが施されている。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。

#### R A09 穹穴住居跡

遺構(第6図・写真図版6)

〈検出状況・重複関係〉IA区の中央や南側に位置し、第IV層で検出した。重複している遺構はない。

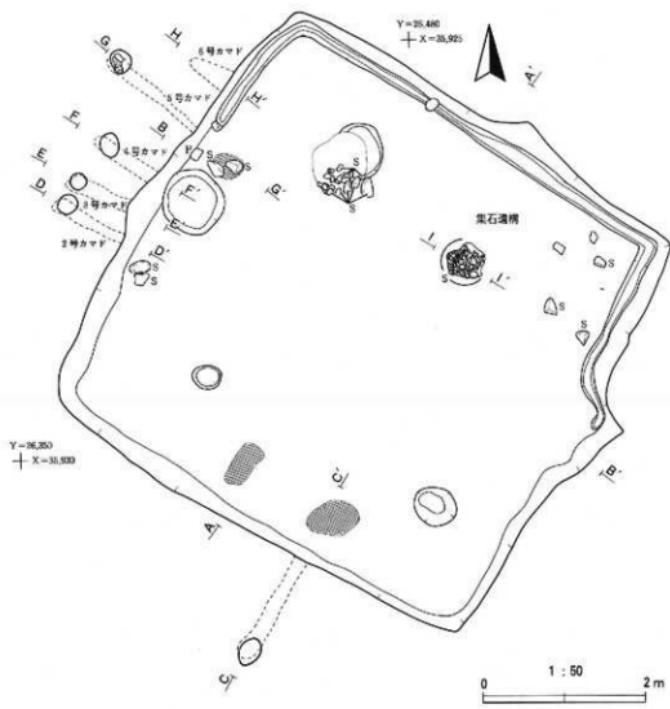
〈形状・規模〉正方形に近い形状で、規模は592×629cm、総床面積は37.23m<sup>2</sup>である。主軸方向はW-4°-Nである。

〈埋土〉削平の影響で床面での検出状況であったので観察可能なほどの埋土はない。検出面から床面までの深さは0～1cm弱である。

〈壁〉削平のため残存しない。

〈床面〉床面は平坦で1カ所に柱穴がある。

〈カマド〉西壁の中央部に設けられており、煙道部の長さは160cm、煙出し部の径は56cm、煙出し部の深さは47cmである。煙道～煙出し部の埋土には礫が多く含まれている。燃焼部の範囲は42×36cmである。焼土の厚さは8cmである。

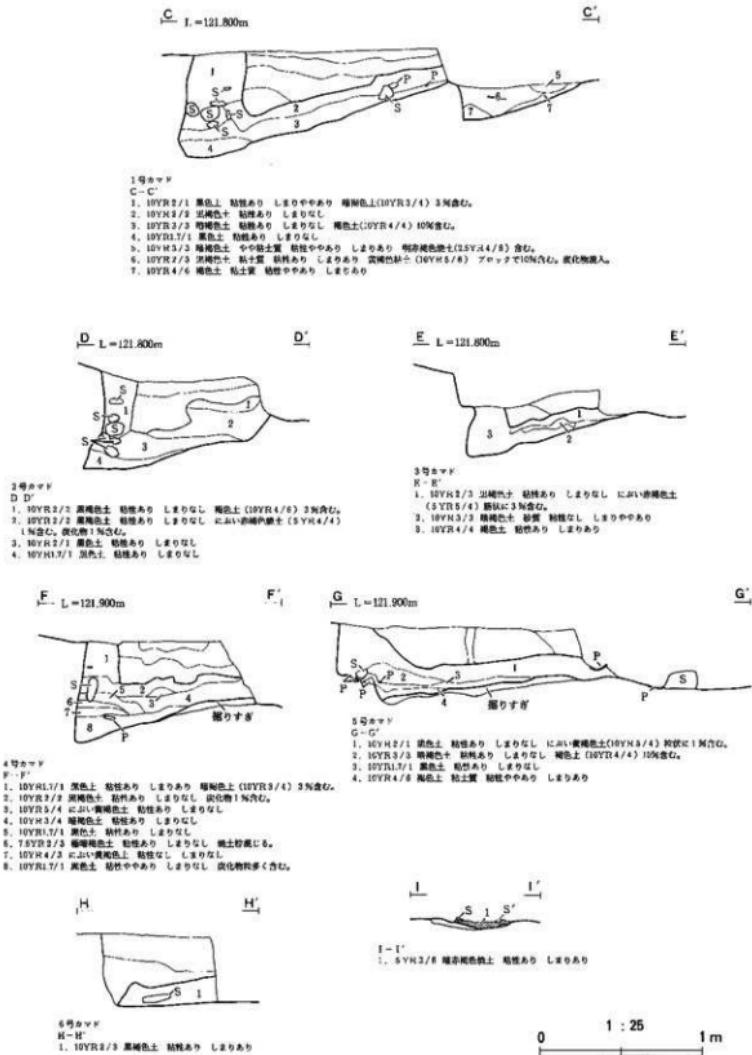


- A-A'
1. IYVR3/4 硫酸塩土 剥離なし しまりなし 残石付 (IYVR3/1) 15%含む。
  2. IYVR3/2 黑褐色土 剥離なし しまりなし 残石付 (IYVR3/3) 5%含む。
  3. IYVR3/3 黑褐色土 剥離なし しまりあり 残石付 (IYVR3/6) ブロッケで構成。
  4. IYVR3/2 黑褐色土 やや剥離 しまりあり 残石付 (IYVR3/6) ブロッケで構成。
  5. IYVR3/2 黑褐色土 剥離あり しまりなし 残石付 (IYVR3/6) 1%含む。
  6. IYVR3/2 黑褐色土 剥離あり しまりなし 残石付 (IYVR3/6) 20%含む。
  7. IYVR3/2 黑褐色土 残石付 剥離あり しまりあり 残石付 (IYVR3/6) 40%含む。



- B-B'
1. IYVR3/4 硫酸塩土 剥離なし しまりなし 残石付 (IYVR3/1) 15%含む。
  2. IYVR3/3 黑褐色土 剥離なし しまりあり 残石付 (IYVR3/6) 5%含む。
  3. IYVR3/2 黑褐色土 剥離あり しまりあり 残石付 (IYVR3/6) 1%含む。
  4. IYVR3/2 黑褐色土 剥離あり しまりあり 残石付 (IYVR3/6) 40%含む。

第4図 RA06

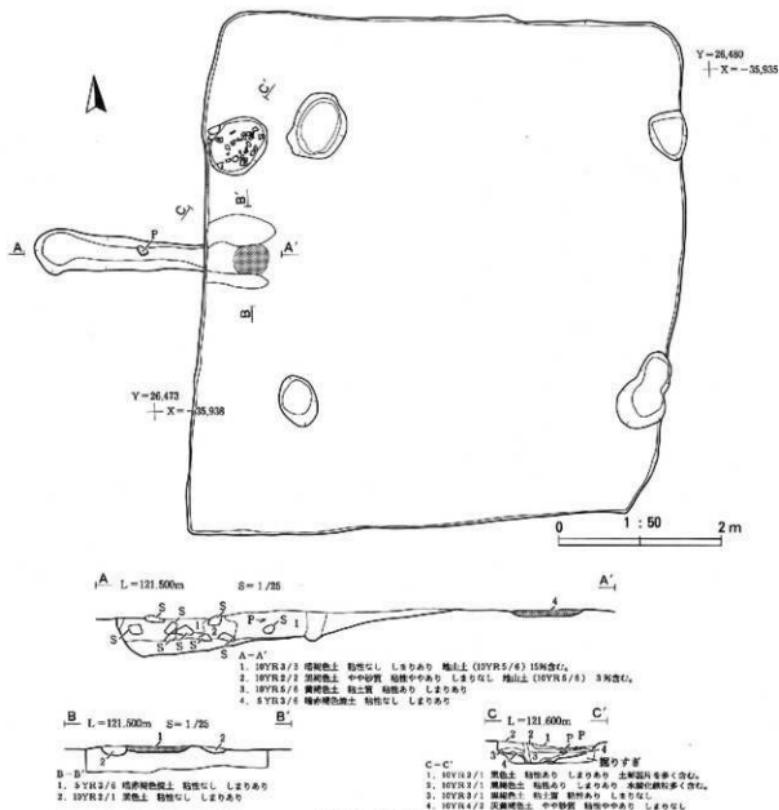


第5図 RA06

遺物(第6図・写真図版12)

〈出土遺物〉13~15は酸化炎焼成の壺でいずれも成形はロクロである。16~18は酸化炎焼成の壺で成形は16・18が非ロクロ、17はロクロ成形で内黒処理が施され、底部の切り離し技法は回転糸切りである。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第6図 RA09

### RA11 穹穴住居跡

遺構(第7図・写真図版7)

〈検出状況・重複関係〉II A区東側に位置し、第IV層上で検出された。RG06と重複し、これより古い。

〈形状・規模〉RG06に西半を切られているため定かではないが方形状と推測され、残存する東壁の長さは290cmである。

〈埋土〉上位は黒褐色土、中～下位は黑色土で構成されている。

〈壁〉壁は外反ぎみに立ち上がり、東壁の残存高は14cmである。

〈床面〉床面は平坦で貼り床はない。柱穴はない。

〈カマド〉なし

遺物(第14図・写真図版13)

〈出土状況〉19は酸化炎焼成の环で成形はロクロである。内面には黑色処理が施されている。20は酸化炎焼成の甕で成形はロクロ、内面はナデの調整が施されている。

時期 平安時代と考えられる。

### RA12 穹穴住居跡

遺構(第8図・写真図版8)

〈検出状況・重複関係〉II A区北隅に位置する。重複している遺構はない。

〈形状・規模〉北面はRG08に切られ、消滅しているが形状は方形と推測される。残る南壁の長さは515cmである。主軸方向はW-1°-Sである。

〈埋土〉自然堆積で埋土の大半は暗～黒褐色土で下位はにぶい黄褐色土で構成されている。検出面から床面までの深さは10～16cmである。

〈壁〉壁は外反して立ち上がる。

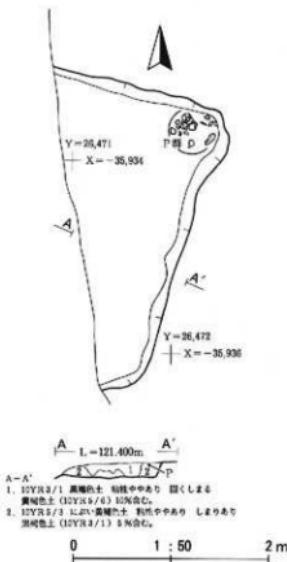
〈床面〉床面は平坦で貼り床はない。中央付近に柱穴状の小土坑がある。

〈カマド〉西壁に設けられ、煙道部は削平のためすべてではないが残存高は129cm、燃焼部の範囲は48×28cmである。袖は黑色土を固めて作られている。

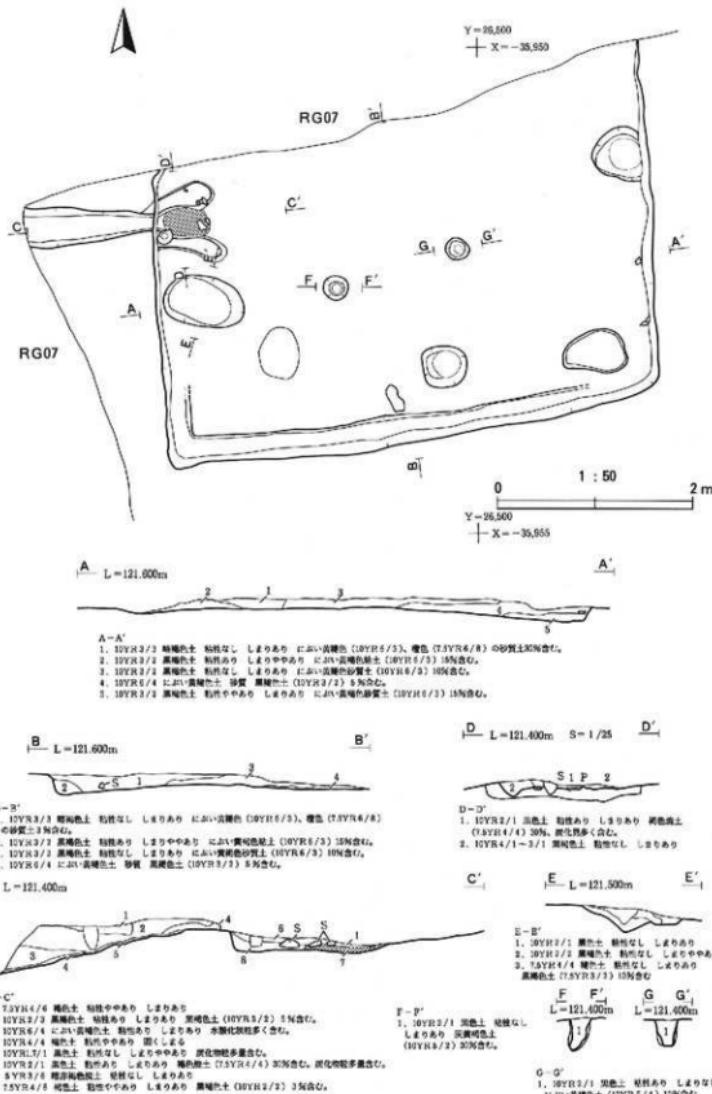
遺物(第14図・写真図版13)

〈出土状況〉21はカマド付近から出土した遅元炎焼成の环で底部の切り離し技法は回転糸切りである。22は床面直上より出土した酸化炎焼成の环で成形はロクロ、内黒処理が施されている。

時期 出土した遺物から平安時代と考えられる。



第7図 RA11



第8図 RA12

### R D03 土坑

遺構(第9図・写真図版9)

〈位置・重複関係〉 II A 2 i に位置し、R D04と重複するが新旧関係は曖昧である。

〈規模・形態〉 形状は不整な楕円状を呈し、規模は開口部径は198×168cm、底部径は167×126cm、深さ32cmである。断面形は緩いU字状を呈する。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、上位は黒色土、中～下位は2層の黒褐色土による構成である。

遺物(第15図・写真図版13)

〈出土遺物〉 23は底面で出土した還元炎焼成の甕の口縁部破片で、成形はロクロによるものである。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。

### R D04 土坑

遺構(第9図・写真図版9)

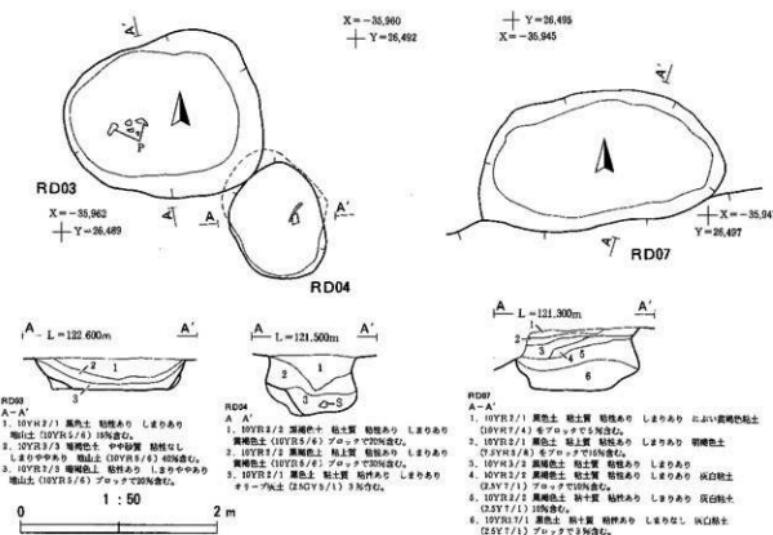
〈位置・重複関係〉 II A 2 i に位置し、R D03と重複するが新旧関係は曖昧である。

〈規模・形態〉 形状は不整な楕円状を呈し、規模は開口部径111×89cm、底部径130×98cm、深さ61cmである。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、上～中位は黒褐色土、下位は黒色土による構成である。

遺物 出土遺物はない。

時期 不明である。



第9図 RD03・04・07

### R D07 土坑

遺構(第9図・写真図版9)

〈位置・重複関係〉 I A 10 j に位置し、R G 08と重複するが不手際により新旧関係は不明である。

〈規模・形態〉 形状は梢円形を呈し、規模は開口部径248×147cm、底部径221×115cm、深さ65cmである。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、上位は黒色土、中位は黒褐色土、下位は黒色土による構成である。

遺物 遺物は酸化炎焼成の土器片が検出面より微量出土した。

時期 不明である。

### R G02 溝状遺構

遺構(第10図)

〈位置・重複関係〉 II B 区北西に位置する。R G03、R G05と重複し、R G03に切られ、R G05を切る。

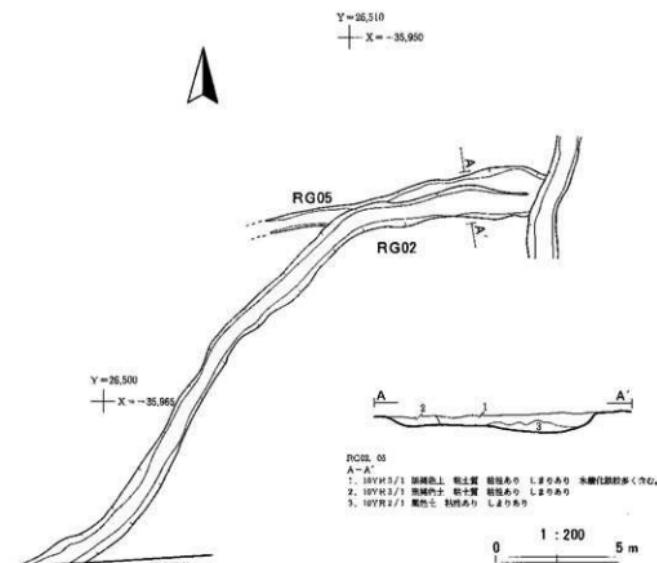
〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅130～70cm、下端幅90～50cm、埋土の深さは4～18cm、両端の高低差は21cmで全長は約25mにわたって検出された。断面形は緩いU字状を呈する。方向はほぼ東北東～南西でR G05と平行に延び、R G03に切られた部分で腰味になる。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、上～中位は黒褐色土、下位は黒色土による構成である。

遺物(第15図・写真図版13)

〈出土状況〉 埋土から24・25が出土した。いずれも酸化炎焼成の杯で24は内面に黒色処理が施されている。

時期 不明である。



第10図 R G02

### R G06 堀跡

遺構(第11図・袋詰図版・写真図版9~11)

〈位置・重複関係〉 I A、II A区にまたがり西側に位置する。R G08と重複し、これを切る。

〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅11.2~4.5m、下端幅5.1~3.3m、最深部100cmで、全長は71mにわたって検出された。断面形は逆台形状を呈する。方向は北~南で両端いずれも調査区外へと延びる。

〈埋土〉 全体が黒色~黒褐色土の多層で最下部に灰色土が堆積する。

遺物(第15図・写真図版13)

〈出土状況〉 26・27はいずれもB-B'断面の埋土7層と8層の境から出土した木製品の破片である。

時期 中世の遺構と考えられる。

### R G07 堀跡

遺構(第11図・袋詰図版・写真図版11)

〈位置・重複関係〉 I A区南半~II A区東部へと続く。R A12、R G08と重複し、R A12を切る。R G08との新旧複造構はない。

〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅94~68cm、下端幅64~50cm、最深部95cmで、全長は50mにわたって検出された。断面形は逆台形状を呈する。方向は北~南で北端は調査区外へと延び、南端は50m地点で東へ折れ、さらに44mの地点で北へ折れる。これらはいずれも調査区外に跨っているため、全容が明らかではなく、また、調査区周辺に巡る用水路の影響もあって不明瞭であり、R G07と同一遺構であるかどうかは不明である。

〈埋土〉 埋土は全体的に多数の黒色上層の堆積によって構成され、一部中位に黒褐色土、下位に暗褐色土が堆積している。

遺物(第15図・写真図版13)

〈出土遺物〉 28は埋土より出土した還元炎焼成の甕の口縁部破片で成形はロクロである。

時期 中世の遺構と考えられる。

### R G08 堀跡

遺構(袋詰図版・写真図版11)

〈位置・重複関係〉 II A、II B区北半に位置し、R G06、R G07と重複する。

〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅590~400cm、下端幅460~320cm、深さは西端で52cm、全長は約70mにわたって検出された。方向は西~東で東端はR G06と交わる所を基点とし、そこから西~4.8mの所で幅約4mの土橋を残している。また東端から西~20mの地点でR G07と交わり、交点より東は幅が(上端幅で460~320cm)狭くなってしまい、時期の異なる遺構の可能性がある。

〈埋土〉 自然堆積で上位は黒色土と暗褐色土、中~下位は黒色土による構成である。

遺物 なし。

時期 中世の遺構と考えられる。

### R Z01 柱穴群

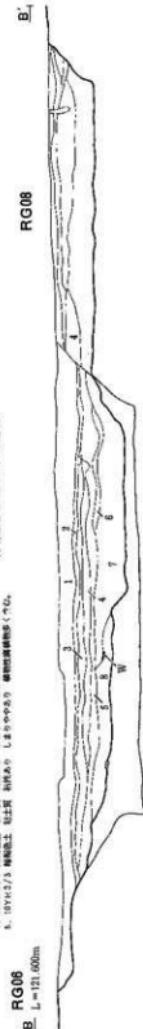
遺構(第18図)

〈位置〉 調査区北半に散在する柱穴状土坑70基を登録・記載した。

RG06  
A L = 122,000m

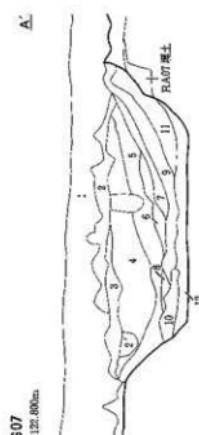


B  
L = 121,000m



第11図 RG06~08

RG07  
A L = 122,000m



1 : 50  
0 2 m

〈配列〉 70基のうち規則性のある配列をもつものはP67・P57・P56・P69・P51が柱間約2m (P69・P51間は8m)の列を成している。

遺物 なし。

時期 明確に時期を知り得る資料はないが、周辺からの出土遺物により、近世遺構の遺構であると考えられる。

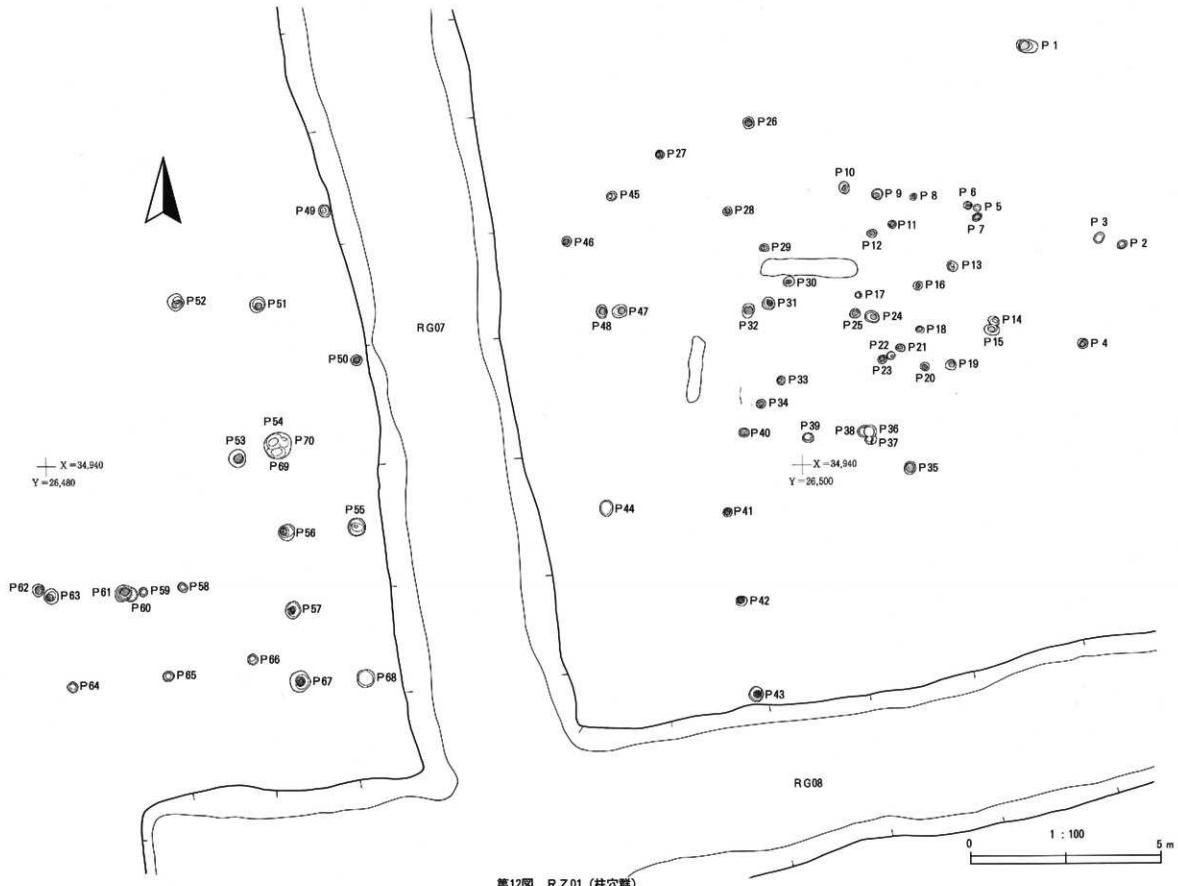
柱穴観察表

P No.	径(cm)	深さ(cm)	柱痕	備考
1	52×36	31.6		
2	28×22	34.7	有	
3	30×25	34.2		
4	27×25	18.6	有	
5	19×17	14.6		
6	22×21	15.2		
7	25×19	14.3	有	
8	20×18	11.3	有	
9	34×27	14.9	有	
10	32×27	11.1	有	
11	23×21	10.6	有	
12	26×21	18.4	有	
13	29×26	26.3	有	
14	29×25	32.3	有	
15	38×30	16.2	有	
16	24×22	14.2	有	
17	19×16	9.6		
18	22×18	14.0	有	
19	29×26	28.5	有	
20	24×21	12.7	有	
21	24×19	8.0		
22	20×18	11.5	有	
23	23×20	12.2	有	
24	37×29	28.8	有	
25	28×24	11.0	有	
26	30×28	21.8	有	
27	23×22	15.9	有	
28	22×25	16.3	有	
29	24×20	13.2	有	
30	31×24	21.2	有	
31	33×32	21.9	有	しまり弱い
32	38×31	20.5		
33	23×21	26.5	有	
34	22×26	11.2	有	
35	37×32	24.4		

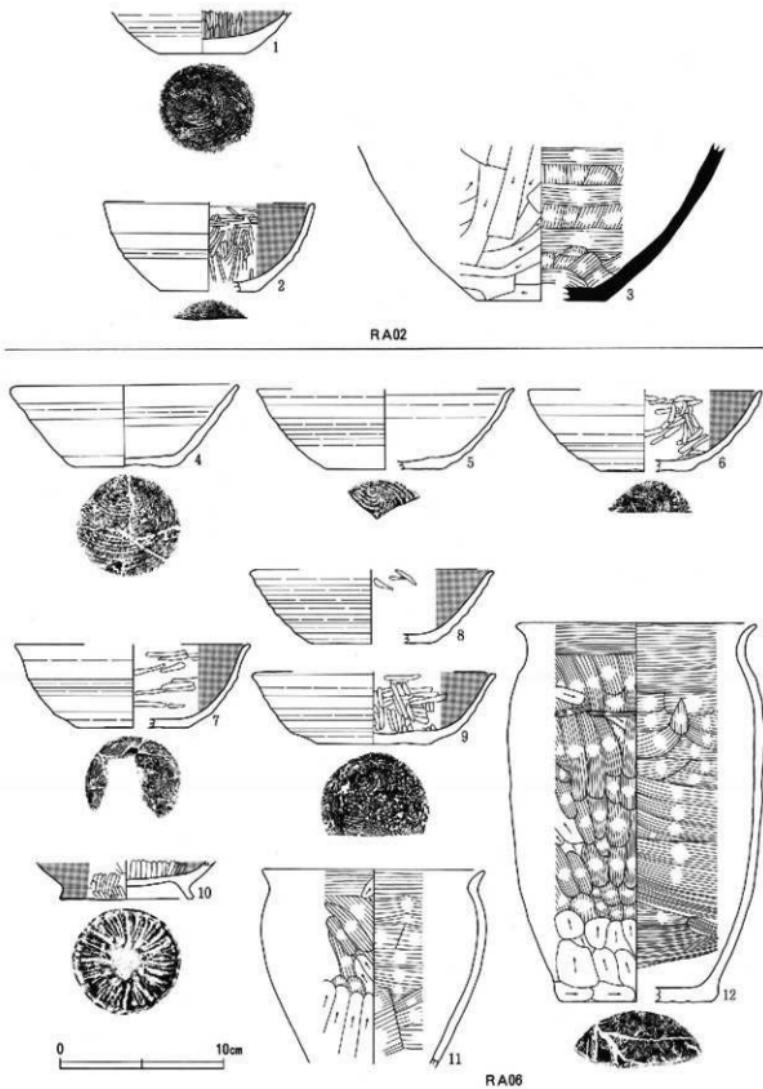
P No.	径(cm)	深さ(cm)	柱痕	備考
36	40×35	23.4		
37	30×30	15.1		
38	30×28	32.8		
39	27×25	22.8	有	
40	27×23	16.1	有	
41	23×22	13.1	有	
42	30×24	16.9	有	
43	42×37	20.2	有	
44	43×35	4.3		
45	30×26	8.0	有	
46	27×24	18.3	有	
47	40×34	43.1	有	杭痕?
48	35×28	36.1	有	
49	34×30	52.2		
50	43×28	15.5	有	
51	49×38	13.2	有	
52	44×41	21.7	有	
53	44×43	33.7	有	
54	62×42	50.9		
55	48×46	49.3		
56	43×42	50.7	有	
57	42×40	50.7	有	
58	25×23	9.8		しまり強い
59	26×23	17.5		
60	38×32	10.2		
61	52×39	23.6	有	
62	32×30	19.6	有	
63	37×35	33.6	有	底に木片あり
64	27×24	10.1		
65	30×24	17.8		柱痕に縦混入
66	28×26	19.2		
67	53×50	63.7	有	
68	46×44	18.6		
69	50×38	19.8		
70	44×30	37.2		

#### 4. 遺構外出土遺物

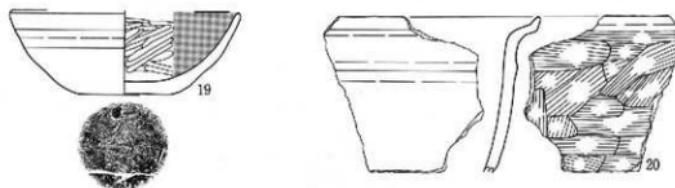
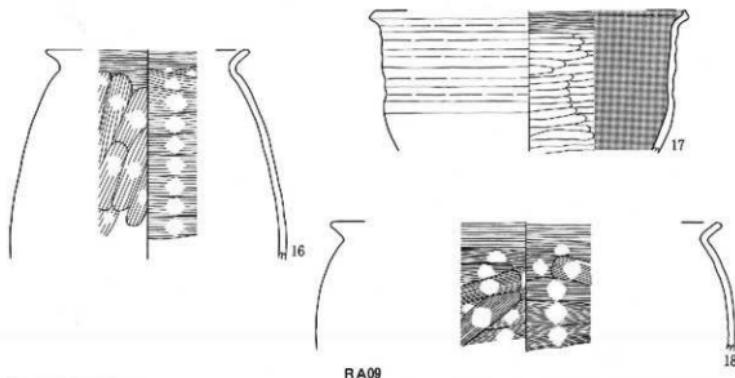
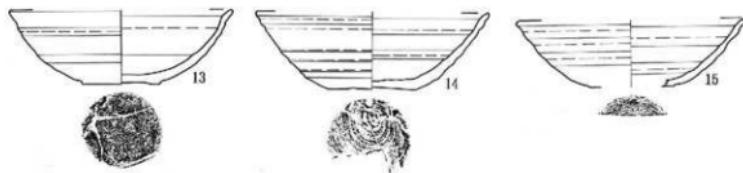
3点を掲載した。29は酸化炎焼成の壺で成形はロクロ、底部の切り離し技法は回転糸切りである。30・31は繩文土器の壺で口縁部の破片である。いずれも刻目をもつ隆帯が貼付されており、他に横位の継縫文が施されている。



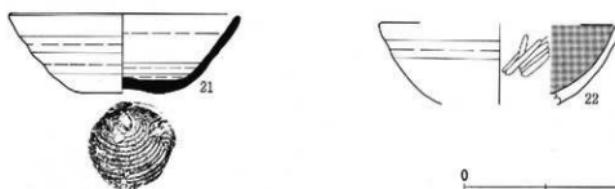
第12図 RZ01 (柱穴群)



第13図 遺構内出土遺物(RA02・06)



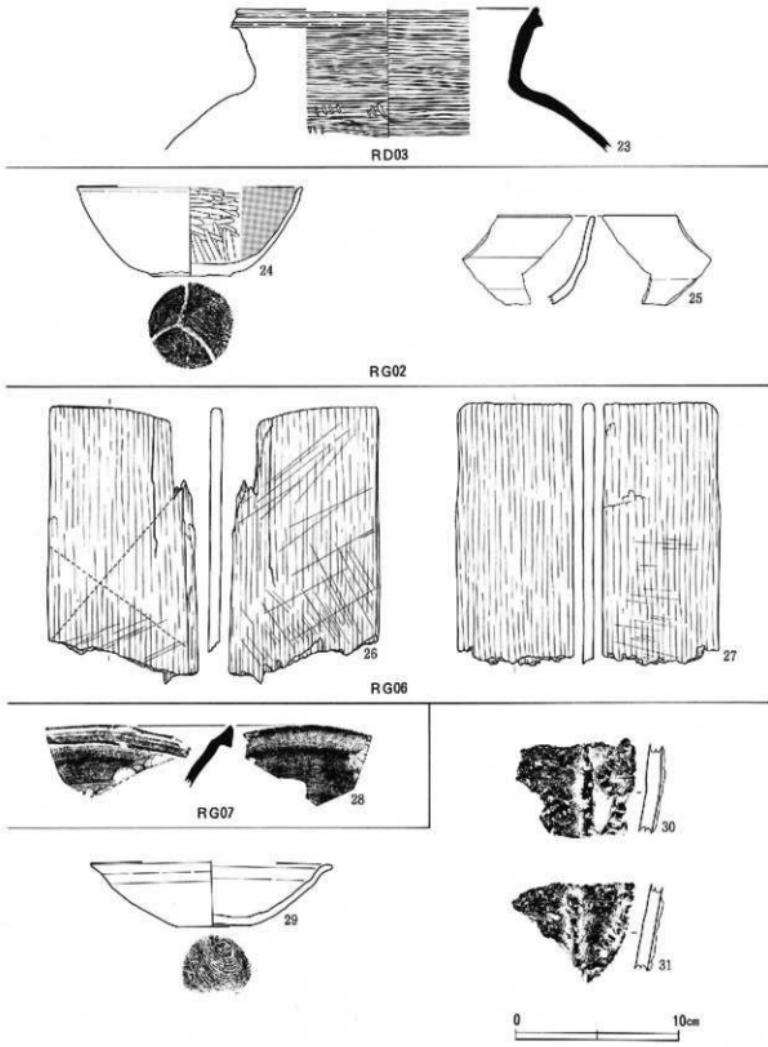
RA11



0 10cm

RA12

第14図 造構内出土遺物(RA09・11・12)



遺構外

第15図 遺構内(R D 03, R G 02, R G 06・07, 遺構外出土物)

土器觀察表(1)

No.	出土 地点	器種	或形	口縁部(内/外)	側部(内/外)	底面(内/外)	口径	直径	器高	分類	備考
1	FA02	土/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロデナ	ミガキ/回糸切	12.8	5.5	(6.0)	A I a	内黒
2	FA02	土/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロデナ	ミガキ/ケズリ	23.0	6.0	(6.0)	A I a	内黒
3	FA02	須/壺	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロデナ	ロナデ/ケズリ	14.2	6.2	5.1	A II a	
4	FA06壺上下部	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロデナ	ロナデ/回糸切	17.3	5.0	5.0	A II a	
5	FA06壺土	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロデナ	ロナデ/回糸切	15.6	5.0	5.0	A II a	
6	FA06壺土	土/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロデナ	ミガキ/ナデ	14.4	5.4	5.1	A I c	内黒
7	FA06カマド支脚	土/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロデナ	ミガキ/回糸切	14.3	5.6	5.2	A I a	内黒
8	FA06壺底	土/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロデナ	ミガキ/ナデ	15.1	7.7	4.6	A I c	内黒
9	FA06壺土	土/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロデナ	ミガキ/回ナデ	14.8	6.3	4.5	A I b	
10	FA06壺土	土/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロデナ	ミガキ/逸脱	8.1	8.1	8.1	A I	内黒 高台付
11	FA06壺土下部	土/壺	非	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	ナデ/ケズリ	13.6	4.0	4.0	A II	
12	FA06壺土下部	土/壺	非	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	ナデ/逸脱	14.8	9.2	23.5	A II	
13	FA06壺土上部	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/回糸切	14.0	4.8	4.6	A II a	
14	FA06壺土上部	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/回糸切	14.3	5.3	4.8	A II a	
15	FA09壺土上部	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/回糸切	14.0	5.2	4.2	A II a	
16	FA09カマド管道	土/壺	非	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	ナデ/逸脱	12.2	5.0	5.0	A II	
17	FA09貼り灰中	土/壺	非	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	ナデ/逸脱	15.8	5.0	5.0	A I	内黒?
18	FA09カマド管道	土/壺	非	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	ナデ/逸脱	24.0	5.4	5.2	A II	
19	FA11壺土	土/壺	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	ミガキ/回糸切	14.3	5.4	5.2	A II a	内黒
20	FA11壺土中位	土/壺	口	ナデ/ロナデ	ナデ/ロナデ	ナデ/逸脱	14.4	5.2	4.9	B I a	
21	FA12カマド付近	須/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	15.0	5.0	5.0	A I	
22	FA12貼り灰中	土/壺	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	ミガキ/逸脱	18.3	5.3	5.5	B I	
23	FD03壺土下部	須/壺	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/逸脱	15.4	5.3	5.5	A I b	内黒
24	FG02壺土	土/坏	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	ミガキ/逸脱	15.2	7.0	7.0	A II	
25	FG02壺土	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/逸脱	15.0	4.5	4.1	A II a	
26	FG07壺土	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/逸脱	15.2	7.0	7.0		
27	FA07壺土	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/逸脱	15.2	7.0	7.0		
28	FA07壺土	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/逸脱	15.2	7.0	7.0		
29	FA9 i	土/坏	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/逸脱	15.0	4.5	4.1		

土器觀察表(2)

No.	出土 地点	器種	縁・部位	外 面	内面	備考
30	I A 8 IV層下	壺	口縁部	刻目のある貼付縫帶文、輪状文	ナデ	31と同一個体
31	I A 8 IV層下	壺	口縁部	刻目のある貼付縫帶文、輪状文	ナデ	30 "

木製品觀察表

No.	出土地點	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
26	RG06壺土 6 ~ 7 層	16.0	9.1	0.6	
27	RG06壺土 6 ~ 7 層	15.2	7.0	0.6	

## 5.まとめ

### (1) 造構

今回調査を行ったのは第4次調査であるが、本調査区が同時に実行された第3次調査区のなかに位置し、両調査区に跨る造構が多かったことから、竪穴住居跡に関しては第3次調査区を含めて観察した。

#### 竪穴住居跡

今回の調査で12棟が検出された。詳細は項目別にまとめた。

#### 竪穴住居跡観察表

遺構名	位 置	形 状	規 模	主 軸	埋 土	重複関係
RA01	B I i 10	方形	366×406	S-35°-E	自然堆積を呈し、全体が黒色の粘土質土による構成である。	
RA02	B I c 8	"	338×364	N-9°-E	上～中位は黒褐色土、下位は黒色土による構成である。	
RA03	B II g 1	"	296×310	W-33°-N	上位は黒褐色土、中～下位は黒色土による構成である。	
RA04	B II f 2	正方形	330×332	N-30°-E	大半が黒色土	
RA05	B II b 2	方形	278×306	N-15°-W	全体が黒色土、粘土質	R G02に切られる。
RA06	I A f 6	"	588×613	W-33°-N	自然堆積、全体暗～黒褐色土、下部に黑色土	
RA07	I A i 6	?	390×?		自然堆積、上～中位黒～黒褐色土、下位に褐色土	R G07より古い。
RA08	B II f 3	方形	315×348	S-37°-E	全体に黒色土、下位に黒褐色土	R A10と重複、R A10より新しい。
RA09	A I f 8	"	592×628	W-4°-N	削平で壇子觀測出来ず	
RA10	B II f 3	"	268×278	W-9°-N	削平で大半が無い。黒褐色土の割合	R A08と重複、R A08より新しい。
RA11	A I e 7	"		?	黒褐色土上にぶい黄褐色土が混含	R G06と重複し、これより古い。
RA12	II A j 1	"	515×?	W-1°-S	自然堆積、大半が暗～黒褐色土、下位にはぶい黄褐色土	R G07と重複し、これより古い。

\* 単位はいずれもcmである。

〈占地〉調査区北西部に大型住居1棟、南半東部に小型住居が占地している。大型住居の構築されている場所は住居床面がシルトで南半東部の住居群の床面は礫層に当たる。またこれ以外の中型住居(R A07、R A12)も調査区中央～北部に分布しており、土地の選択が行われた可能性が考えられる。

〈平面形〉R A04は正方形、他の住居も短辺と長辺の割合が10%未満ではほぼ正方形を呈している。

〈規模〉各住居跡の床面積の分布を表グラフに示した。最大はR A09で37.23m<sup>2</sup>、最小はR A10で7.45m<sup>2</sup>、平均値は16.38m<sup>2</sup>である。平均値を越える住居跡は2棟で、ほとんどどの住居跡が平均値より低い。

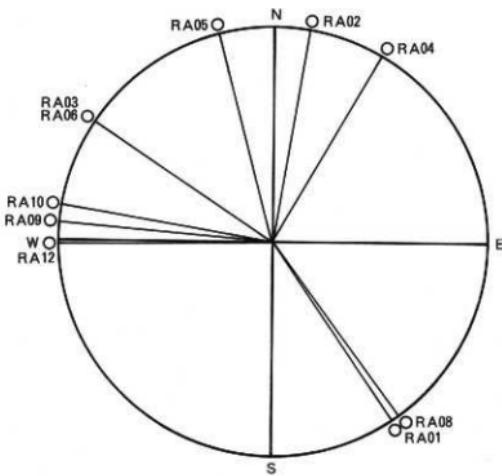
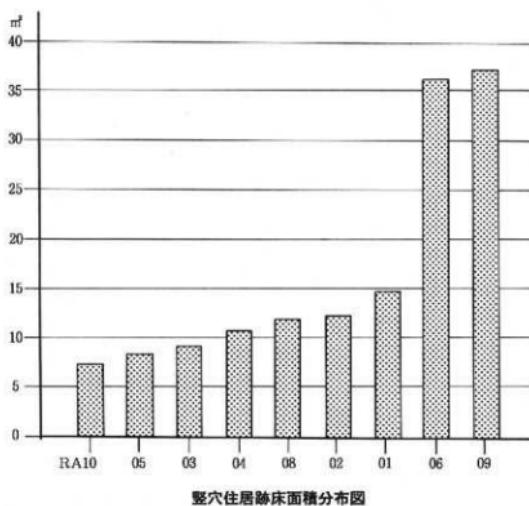
〈軸方向〉カマドを持つ壁と直交する線を軸線し、座標値との角度を軸方向としたのが表2である。これをみると、西にカマドを有するもの(I群・R A09・R A10・R A11)、南東にカマドを有するもの(II群・R A01・R A08)、北西にカマドを有するもの(III群・R A03・R A06)、北にカマドを有するもの(IV群・R A02・R A04・R A05)のまとまりがあるのが判る。

〈壁・床〉壁の立ち上がりはやや外傾するものと若干内湾ぎみに立ち上がるものとがある。壁の残存高は最高42cm(R A06)、最小はほとんど壁が判らないもの(R A09)で削平の影響によるものである。

床は大抵平坦で、床土はぶい黄褐色土で基本土層の第V層と同じである。またR A01、R A03、R A04、R A08、R A10の床面は小縫が散在し、凸凹となっているため、床に他の材を持ち込んで、これを敷いて生活を行っていたものと思われる。

〈柱穴〉R A09が4基、R A12が2基の柱穴を有する。他はない。

〈カマド〉R A02以外で重複等により全体が判らないものを除いては、すべてにカマドを有する。構築場所はI群は西壁中央部、II群は南東の左側の共通性をもつことから、同じ時期に構築された住居跡と考えられる。



住居跡主軸分布図

## 塗跡

今回検出した塗跡は3条である。切り合いによる新旧関係から外堀(R G06)が最後に構築されたことが判った。いずれも遺構は調査区外へと続くため、全容は明らかではないが、規模はR G06が南北71m、上端幅11.2m~4.5m、下端幅5.1~3.3m、最深部は100cm、R G07が南北50m、上端幅470~360cm、下端幅320~240cm、最深部は95cm、R G08が東西70m、上端幅590~400cm、下端幅460~320cm、西端部の深さは52cmで堀の断面形はいずれも逆台形状でR G06の外側壁は緩い立ち上がりとなっている。遺構からの出土遺物はR G06の埋土中~下位から木片2点、R G07の埋土中からロクロ成形の土師器片が数点出土しているが時期の確定には至らない。

## 土坑

2基を検出した。形状はいずれも不整な梢円形を呈し、R D03は平安時代、R D04は不明である。

## 溝状遺構

調査区南東部で1条検出された。登録名はR G02で遺構の規模は上端幅130~70cm、下端幅90~50cm、埋土の深さ4~18cmである。時期は出土遺物から平安時代と考えられる。

### (2) 遺物

今回の調査では遺構内外で大コンテナ2箱分の遺物が出土した。内訳は遺構内からは主に平安時代の土師器・須恵器の环・甕で遺構外からは陶磁器類が出土している。

#### (a) 分類

分類に当たっては、周辺遺跡の報告書に掲載してある出土遺物の分類にならい、器種と焼成方法、調整技法によって細分した。

器種には环・高台付环・甕・壺がある。

A群：酸化炎焼成されているもの。(土師器)

I類・・・内面にミガキ、黒色処理が施されるもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

b種・・・切り離し後に再調整が施されるもの。

c種・・・再調整のため切り離し技法が不明なもの。

II類・・・内外面ともロクロ痕以外の調整をもたないもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りのもの。

b種・・・切り離し技法が不明なもの。

B群：還元炎焼成されているもの。(須恵器)

I類・・・底部の切り離し技法が回転糸切りによるもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

b種・・・切り離し後に再調整が施されるもの。

c種・・・再調整のため切り離し技法が不明なもの。

### 〈高台付坏〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

I類・・・内面にミガキ、黒色処理が施されているもの。

II類・・・外外面ともロクロ痕以外の調整をもたないもの。

### 〈壺〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

I類・・・ロクロによって成形されているもの。

II類・・・ロクロによって成形されないもの。

B群：還元炎焼成されているもの。

#### (b) 出土量の割合

器種は坏、高台付坏、壺(蓋?)が出土した。坏は14点を実測、掲載した。A群(酸化炎焼成)は13点、B群(還元炎焼成)は1点である。各群における出土数は、A群I類は8点中、A I aが4点、A I bが1点、A I cが2点、底部欠損1点、A群II類は5点すべてA II aである。B群はI aが3点である。高台付坏はA IIが1点のみ出土で、両面黒色処理が施されている。壺は7点を実測、掲載した。A群は6点でロクロ成形が1点、B群は1点で非ロクロ成形である。これらを遺構別にまとめたのが下記の表であるが、土器の絶対数が少ないため比較検討は難しい。

上部器・須恵器の遺構別構成表(R A)

遺構名	土器器(A群)								須恵器(B群)									
	坏	I	I a	I b	I c	II	II a	II b	壺	I	II	高台付坏	I	I a	I b	I c	II	壺
RA02		2															1	
RA06		1	1	2			2				2	1						
RA09							3		1	2								
RA11		1								1								
RA12	1													1				

#### (3) おわりに

今回の調査で向中野館跡第4次調査区が平安時代の集落跡、中世の館跡の一部であることが確認された。向中野館については中世の時代、この地方を支配下においていた飯岡氏は、1184年(文治5)、源頼朝による奥州征伐に従軍し、功を立てて岩手郡の地頭職に補佐された工藤小次郎行光の末裔と伝えられている。

『志和軍記』によると、飯岡氏の支配領は「南は湯沢領から赤林村地頭赤林左衛門領まで及び、北は猪去館領、太田館領を経て大釜館大釜奇衛領に至り、東は向中野館向中野金吾領を巡回して三本柳村地頭三本柳四郎衛門領に達していた。」とあり、また『飯岡山の今昔歴史』には「飯岡新殿には南館北館に東野文七居住して東の押へとし」の記述がある(北館-東野文七、南館-向中野金吾)。

今回の調査で検出された壺跡は南北いずれかの館跡に伴う遺構である可能性が考えられ、今後の調査で詳細が明らかになるであろう。

〈引用・参考文献〉小幡遺跡108頁にまとめて記載。

向中野館跡第4次  
写真図版

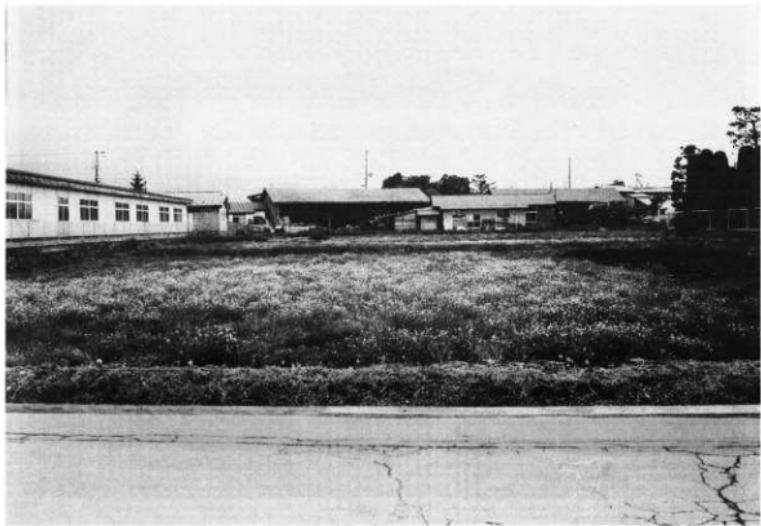


遺跡遠景

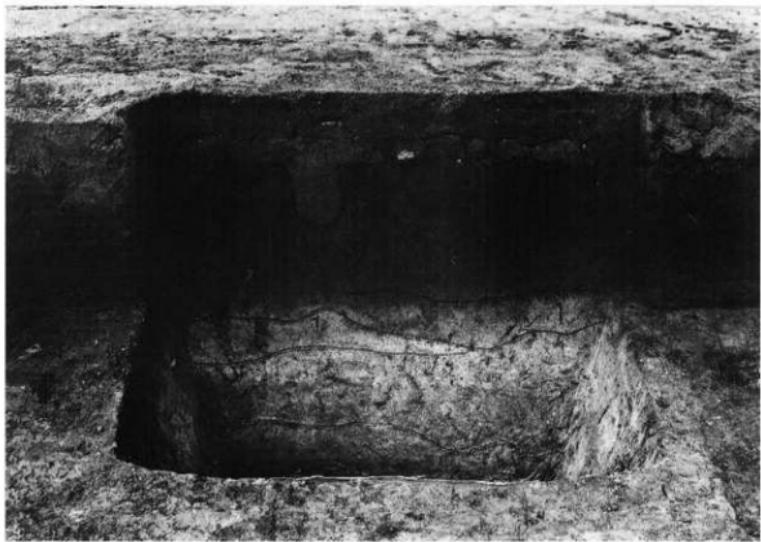


遺跡全景

写真図版 1 空中写真



調査区南側（近景）



土層断面

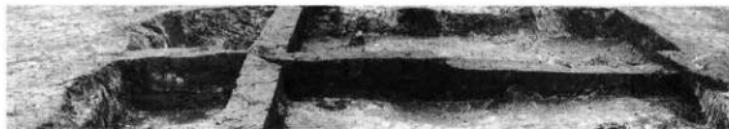
写真図版 2 調査区・基本土層



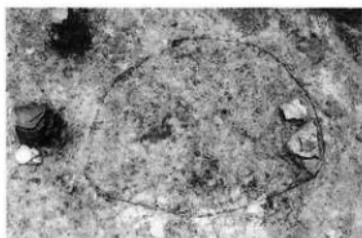
RA02 (平面)



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (W-E)



烧土遗構 (平面)



烧土遗構 (断面)

写真図版 3 RA02



RA06 (平面)



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (W-E)

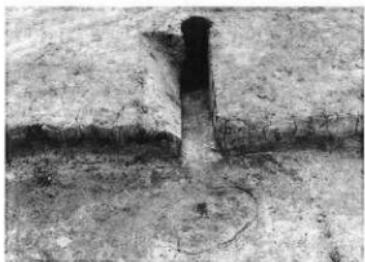


集石遺構 (平面)



集石遺構 (断面)

写真図版 4 RA06



1号カマド（断面）



1号カマド（平面）



1号カマド燃焼部（断面・S→）



北側カマド群



2号カマド（断面）



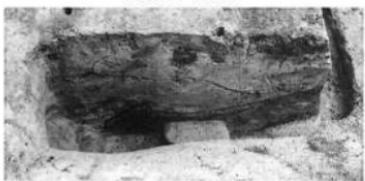
3号カマド（断面）



4号カマド（断面）



5号カマド（断面）



6号カマド（断面）



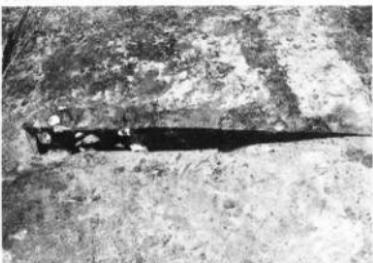
遺物出土状況



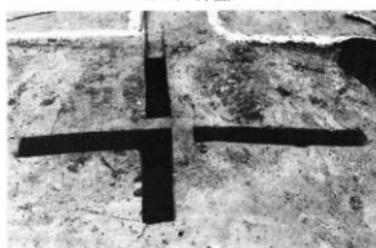
RA09(平面)



カマド(平面)



カマド煙道部(断面)

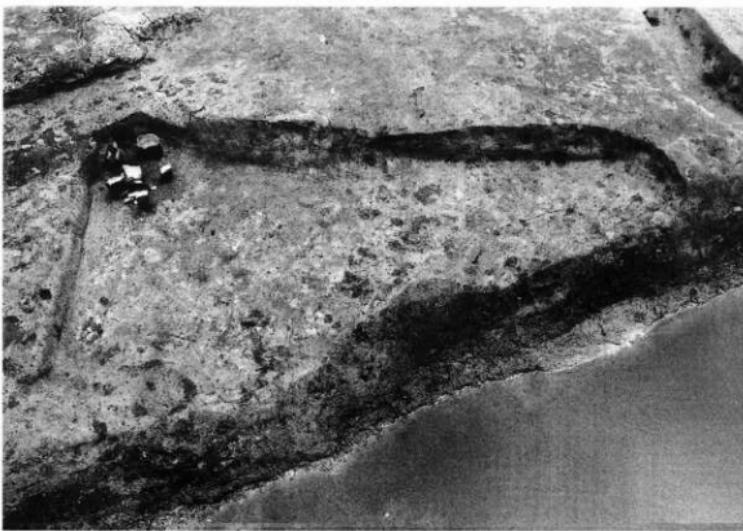


カマド袖・燃焼部(断面・E→)



土坑(平面)

写真図版 6 RA09



RA11 (平面)



埋土断面 (W-E)

写真図版 7 RA11



RA12



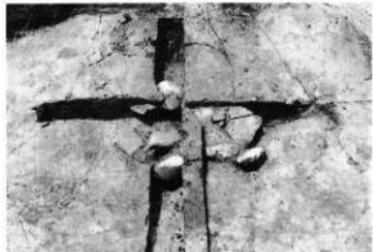
埋土断面（S-N）



埋土断面（W-E）

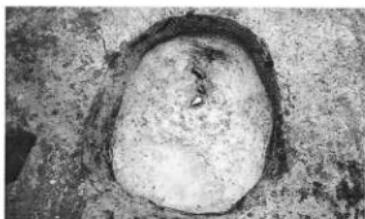


カマド（平面）



カマド袖部～燃焼部（断面・E→）

写真図版 8 RA12



RD03 (平面)



RD03 (断面)



RD04 (平面)



RD04 (断面)



RD07 (平面)



RD07 (断面)

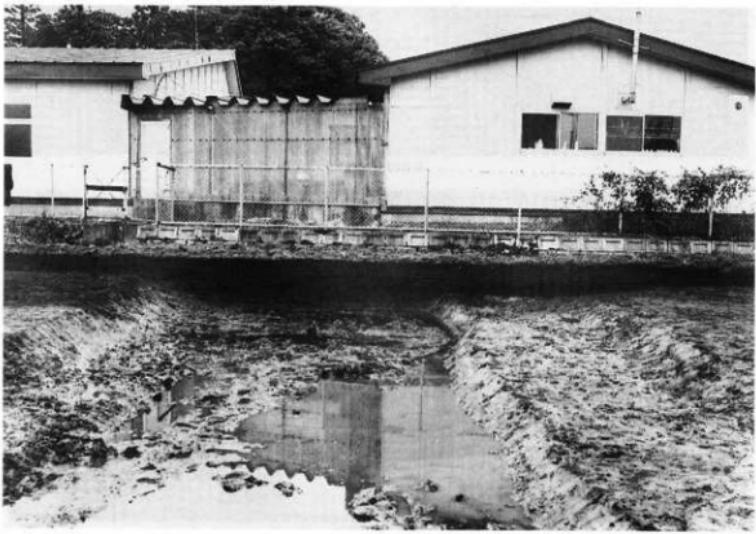


RG06 (北側・平面)

写真図版 9 RD03・04・07, RG06

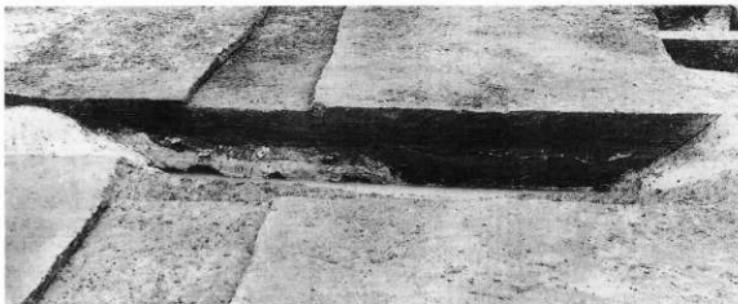


RG06（南側・平面）



RG06（南端・断面）

写真図版10 RG06



RG06 (中央南・断面)

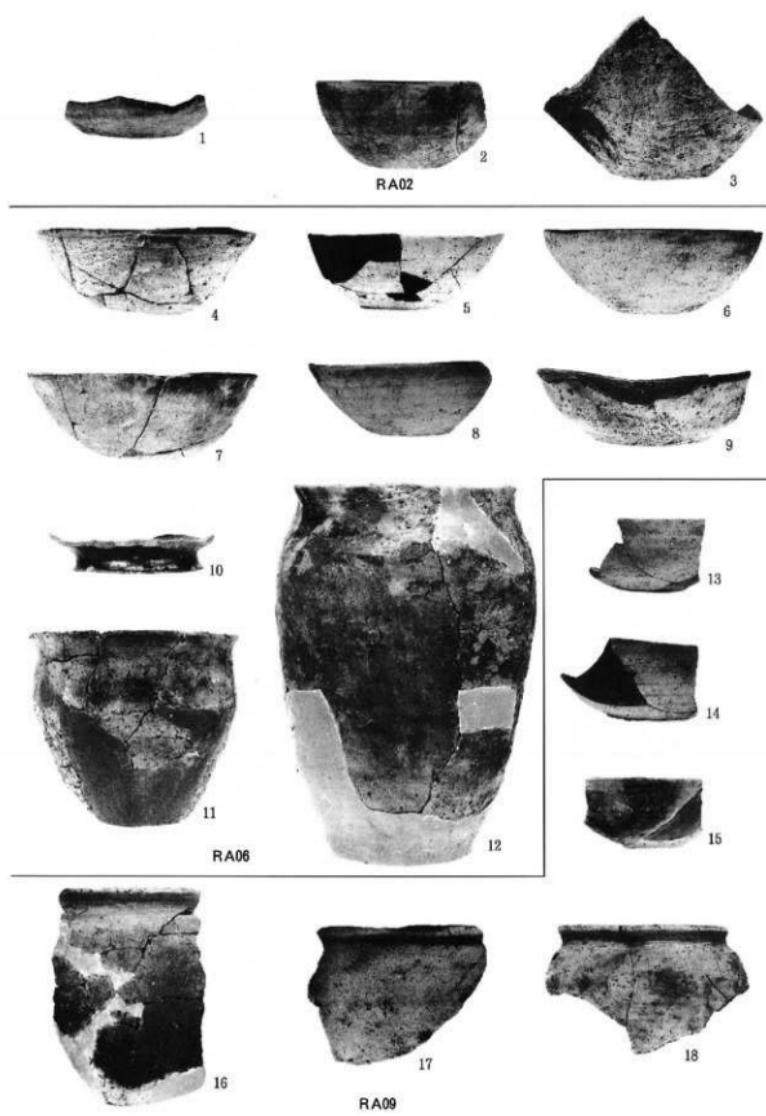


RG07 (平面)

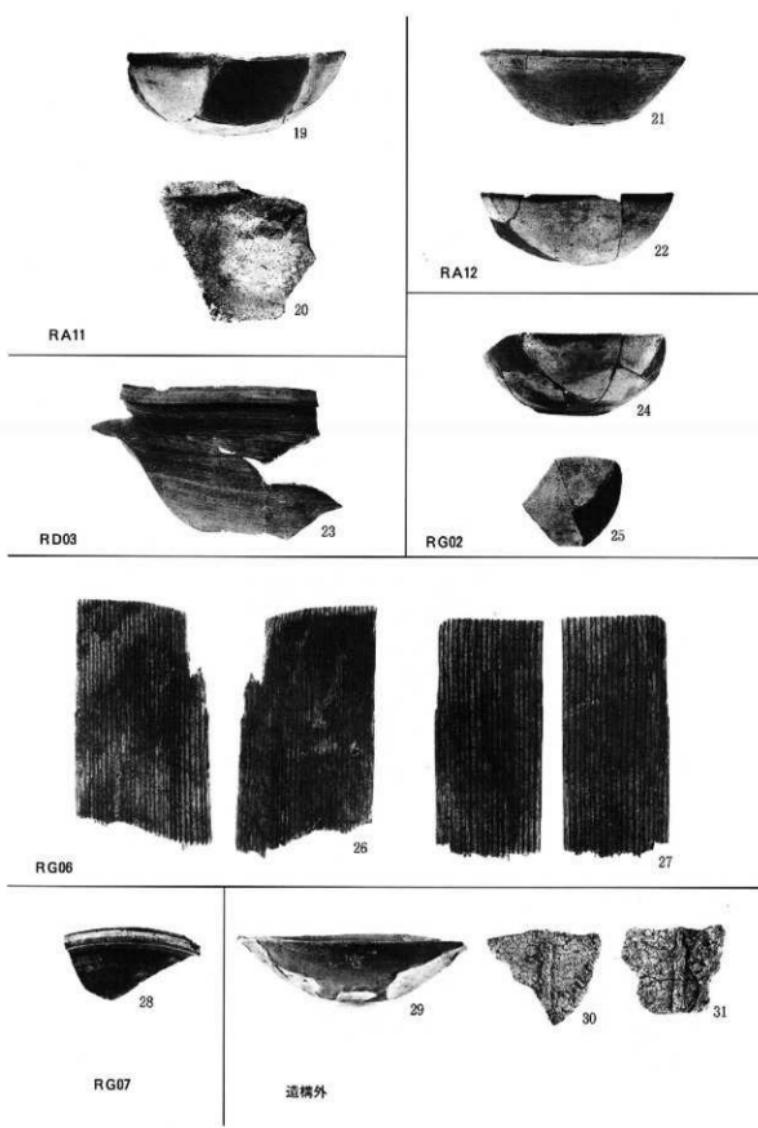


RG08 (平面)

写真図版11 RG06~08



写真図版12 遺構内出土遺物 (RA02・06・09)



写真図版13 造模内 (RA11・12, RD03, RG02・06・07), 造模外出土遺物

## IV. 小幅遺跡第11次調査

所 在 地 盛岡市本宮字小幡88-1 ほか  
委 託 者 地域振興整備公団  
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理  
発掘調査期間 平成10年9月1日～9月30日  
調査対象面積 819m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 819m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 LE16-2009・OKH-98-11  
調査担当者 潤 浩二郎・山口俊規  
協 力 機 関 盛岡市教育委員会

## 1. 遺跡の立地

小幡遺跡は東日本旅客鉄道仙北町駅より西約2.3kmに位置し、犀石川によって形成された標高125m前後の河岸段丘上に立地している。調査区の現況は林檎園である。

## 2. 基本土層

調査区は平坦な地形上にあり、南北での高低差は約20cm以下であり、地点による地層の相異も無いことから平行して行った第10次調査区の024D-190グリッドに深掘りをかけ、これを遺跡の基本土層とした。

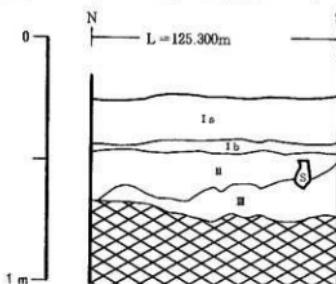
第Ⅰa層：10YR3/1 黒褐色 粘性なし 固くしまる

表土である。

第Ⅰb層：10YR2/2 黒褐色土 粘性なし 固くしまる  
水酸化鉄粒多く含む。

第Ⅱ層：10YR2/2 黒褐色土 粘性ややあり しま  
りあり 平安時代の遺物・遺構  
の検出面である。

第Ⅲ層：10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりあり  
地山



## 3. 検出された遺構

RA021 積穴住居跡(正→RA034)

遺構(第2図・写真図版3・4)

〈検出状況・重複関係〉 024D-11nグリッドに位置し、第Ⅱ層で検出した。RA020、RA025と重複関係にあり、これらより古い時期の遺構である。

〈形状・規模〉 形状は正方形で、規模は652cm×693cm、総床面積は45.18m<sup>2</sup>である。

〈埋土〉 上～中位は黒褐色土、下位は黒色土で構成されている。検出面から床面までの深さは6cm、埋土巾には小礫が多く含まれる。

〈壁・床〉 壁は緩く内湾して立ち上がり、床面は平坦であるが北壁際の面には縦が多い。

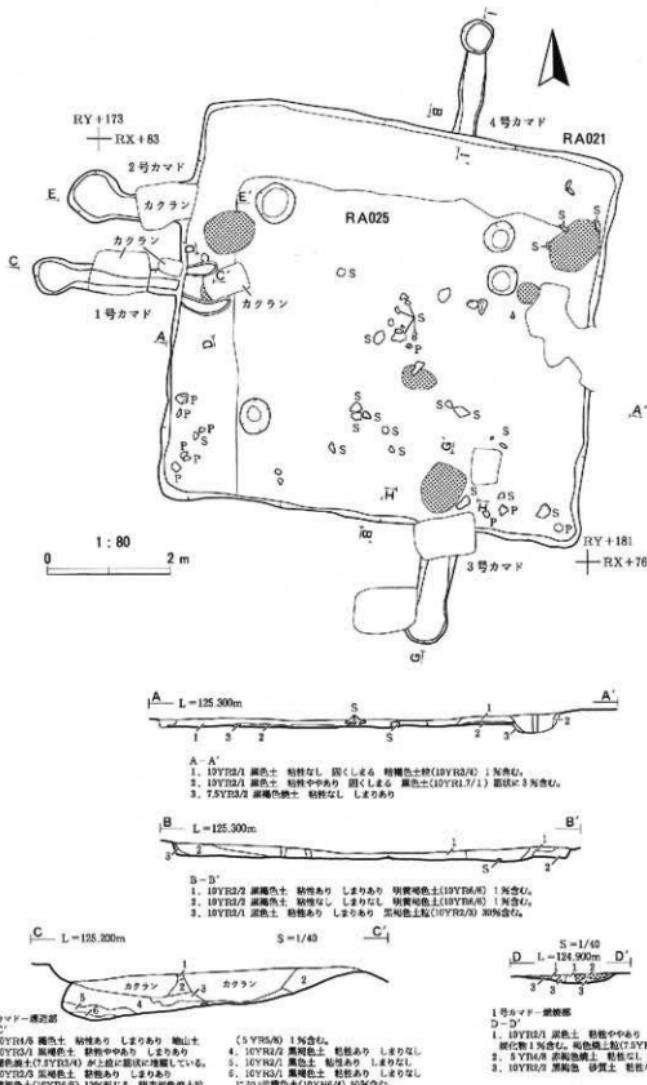
〈カマド〉 西に2カ所、北に1カ所、南に1カ所の計4カ所に煙道が残り、このうち1号カマド西側、2号カマド、3号カマド所に燃焼痕が確認された。いずれも林檎の苗木を植えるために掘ったと思われる擾乱の影響を多分に受ける。構造はいずれも例り貫き式である。

遺物(第13・14図・写真図版13)

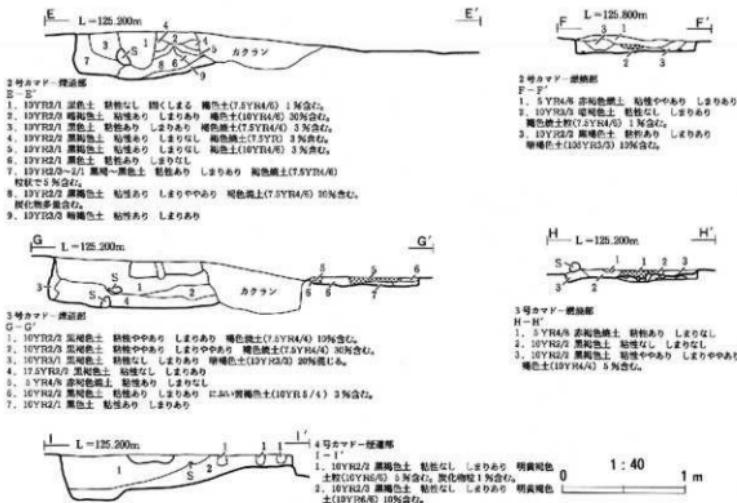
〈出土状況〉 1～3は酸化炎焼成の壺で切り離し技法による回転糸切り痕をもち、器面の調整はロクロのみである。4～8は内黒処理された酸化炎焼成の土師器壺で6・8は表面に墨書きが記され、内面の調整はミガキである。9・10は還元炎焼成の須恵器壺で切り離し技法は回転糸切りで、10は口唇部が外反する。11～13は酸化炎焼成の甕で表裏面とともにヘラナデ、表面下半にはケズリ調整が施されている。14は還元炎焼成の甕でロクロ成形である。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。

第1図 基本土層



第2図 RA021



第3図 RA 021(断面図)

#### RA 022 整穴住居跡(正→R A035)

遺構(第4図・写真図版5)

〈検出状況・重複関係〉 024D-16iグリッドに位置する。第II層で検出した。

〈形状・規模〉 形状は正方形で規模は300cm×302cmである。総床面積は約9.06m<sup>2</sup>である。主軸方向はW-5°-Nである。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、大半が黒褐色土で構成され、下位には一部黒色土が堆積している。検出面から床面までの深さは40~43cmである。

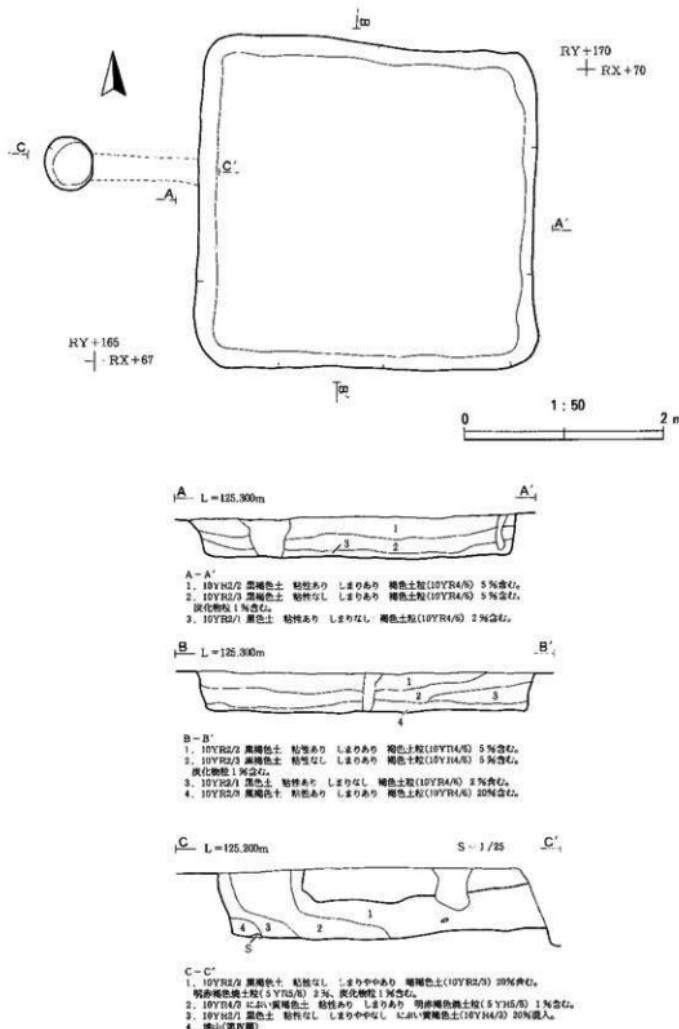
〈壁・床〉 壁面はやや外反ぎみに立ち上がる。床面は疊層で炭化物が広がる。柱穴はない。

〈カマド〉 カマドは西壁中央付近に設けられ、割り貫き式の構造である。煙道部の長さは110cm、煙出し部径は54cmである。袖、燃焼痕は曖昧でカマド全体に炭化物粒、焼土粒が微量に散布するのみである。

遺物(第14図・写真図版22)

〈出土状況〉 いずれも埋土上位からの出土で、15は内黒処理された酸化炎焼成の壺で内面は丁寧にミガキが施されている。16は週元炎焼成の須恵器壺で切り離し技法は回転糸切りで、器面の調整はロクロのみである。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第4図 RA022

#### R A023 穹穴住居跡(正→R A036)

遺構(第5図・写真図版6)

〈検出状況・重複関係〉 024D-6jグリッドに位置する。第II層下で検出した。RG088、RA024と重複し、RG088より古く、RA024より新しい。遺構中央部、南東壁、北東壁は擾乱によって消滅している。

〈形状・規模〉 形状は正方形を呈し、規模は420cm×461cm、推定総床面積は約19.36m<sup>2</sup>あったと思われ、主軸方向はN-15°-Wである。

〈埋土〉 全体が粘土質の黒色土で構成されている。検出面から床面までの深さは一律7~8cmである。

〈壁〉 壁は残存値が少ないため曖昧な部分もあるがやや内湾気味に立ち上がる。

〈床面〉 床面は平坦で貼り床はない。

〈カマド〉 カマドは東壁面の中央部や南側に設けられ、煙道部の長さは96cm、煙出し部径は60×45cm、煙出し部の深さは24cmである。燃焼部の範囲は39×44cmと狭い。袖には地山土を住居の構築段階で残し、そのまま利用している。

遺物(第14・15図・写真図版14)

〈出土状況〉 17~21は酸化炎焼成の环で切り離し技法は回転糸切りで、器面の調整はロクロのみで、17・19は体部表面に墨書きが記されている。22~25は内黒処理された酸化炎焼成の环で、底面の切り離しは23・24は糸切りで、22・25は切り離し後の再調整のため切り離し技法は不明である。26は内黒処理された酸化炎焼成の壺の体部下~底部で、器面調整は表面はケズリ、内面はミガキである。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。

#### R A024 穹穴住居跡(正→R A037)

遺構(第6図・写真図版7)

〈検出状況・重複関係〉 024D区北側に位置する。RA024、RG088と重複し、これらに切られている。また他に溝状を呈した擾乱に南側の一部が消滅しているほか遺構の北側は調査区外となるため範囲確認のみ行ったが削平により、ほとんど壁面は消滅した状況であった。

〈形状・規模〉 形状は正方形と推定され一辺の長さは535cm、主軸方向はE-20°-Sである。

〈埋土〉 自然堆積を呈し、全体が暗~黒褐色土で構成され、下位に一部黒色土が混じる。検出面から床面までの深さは12~20cmである。

〈壁〉 壁はやや外反気味に立ち上がる。

〈床面〉 床面は平坦で貼り床はない。

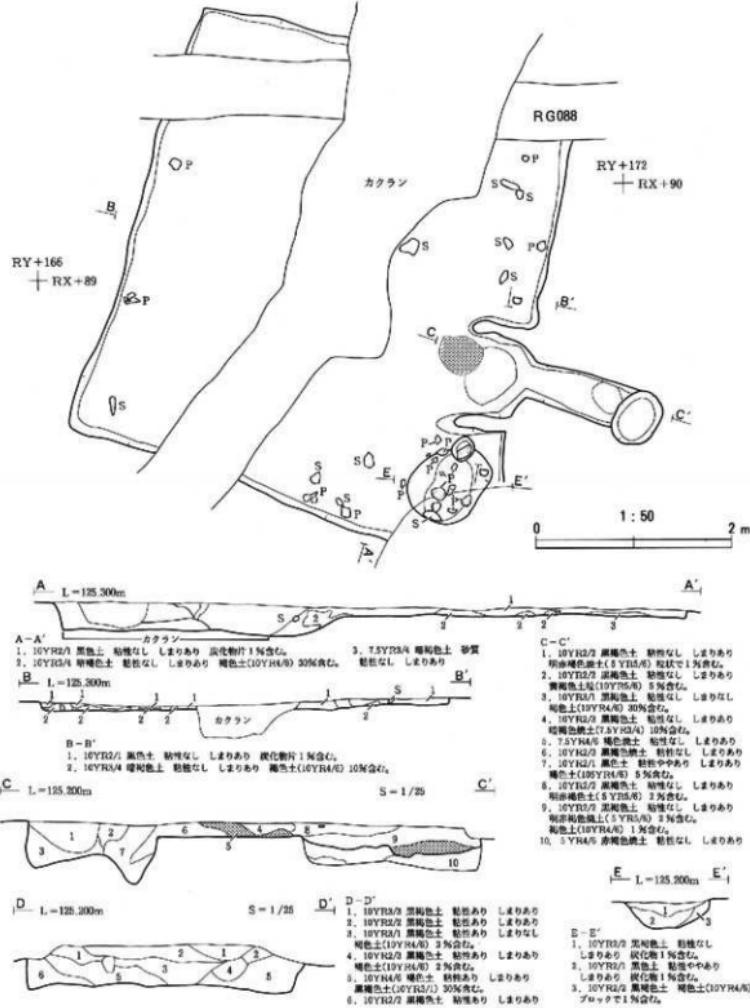
〈カマド〉 カマドは南壁の西よりに設けられ、袖はなく、燃焼範囲はRG088との重複の影響ではっきりしないが径50~60cmの範囲に拡がる。煙道部の長さは112cmで煙出し部との区別はない。

〈その他〉 2カ所に2次堆積焼土と浅い土坑が2基検出している。

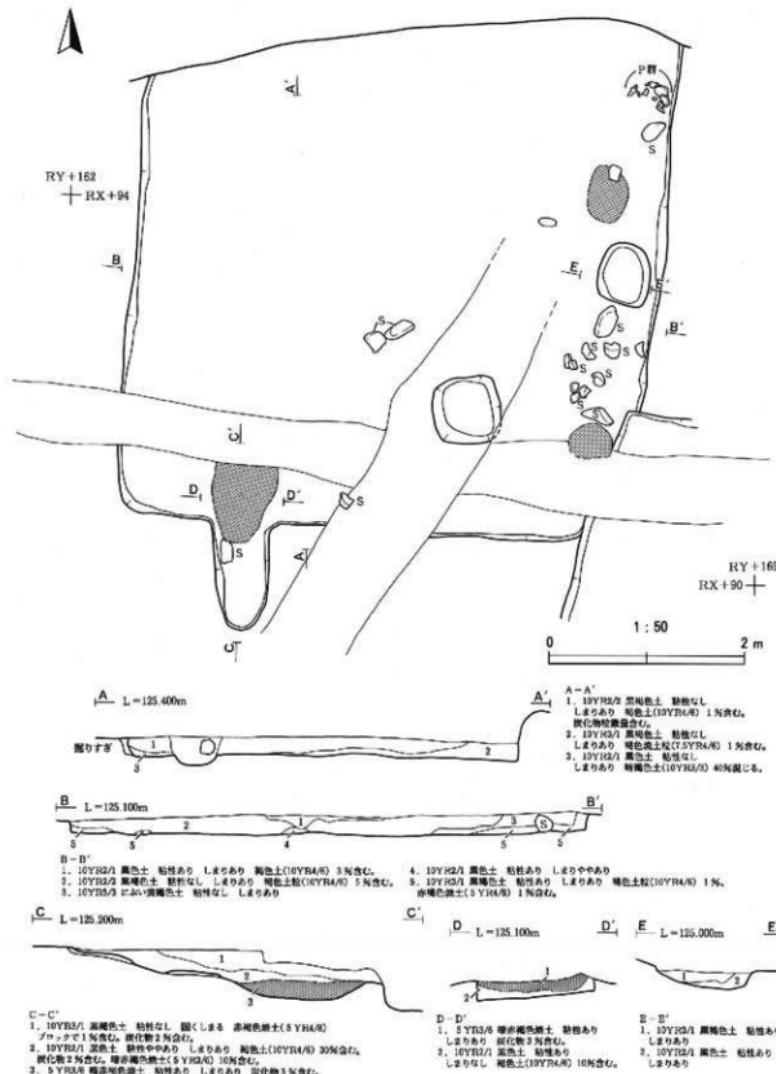
遺物(第15図・写真図版14・15)

〈出土状況〉 27は還元炎焼成の須恵器環片で成形はロクロ、底部の切り離し技法は回転糸切りである。28は土師器壺の口縁~体部の破片で非ロクロ成形である。29は須恵器壺の破片で両面に叩き目痕がある。

時期 出土遺物から平安時代と考えられる。



第5図 RA023



第6図 RA024

## 2. 土坑

土坑は5基検出した。調査区の南側に集中する。時期は出土遺物がないためすべて不明である。このうちRD228、RD230が重複関係にあり、RD228がRD230を切る。またRD231がRZ017と重複関係にありRD231が新しい時期に属する。詳細は下記の表の通りである。

土坑観察表

遺構名	位置	形状	規模	深さ	埋 土	備 考	図版	写図
RD227	D024-e15	円形	125×111	12	自然堆積を呈し、全体が黒褐色土による2層構成である。		7	8
RD228	D024-e16	円形	115×102	12	上位に一部褐灰色土がある他は黒褐色土による構成である。	RD230と重複し、これより新しい。	7	8
RD229	D024-f22	楕円形	202×158	28	自然堆積を呈し、埋土構成は最下部に明黄褐色土、他は黒褐色土となっている。		7	8
RD230	D024-e15	椭円?	106×93	20	自然堆積を呈し、全体が黒褐色土で構成されている。	RK228と重複し、これより古い。	7	8
RD231	D024-i14	円形	138×135	17	自然堆積を呈し、黒褐色土による3層構成である。	RZ017と重複し、これより新しい。	7	8

\* 単位はいずれもcmである。

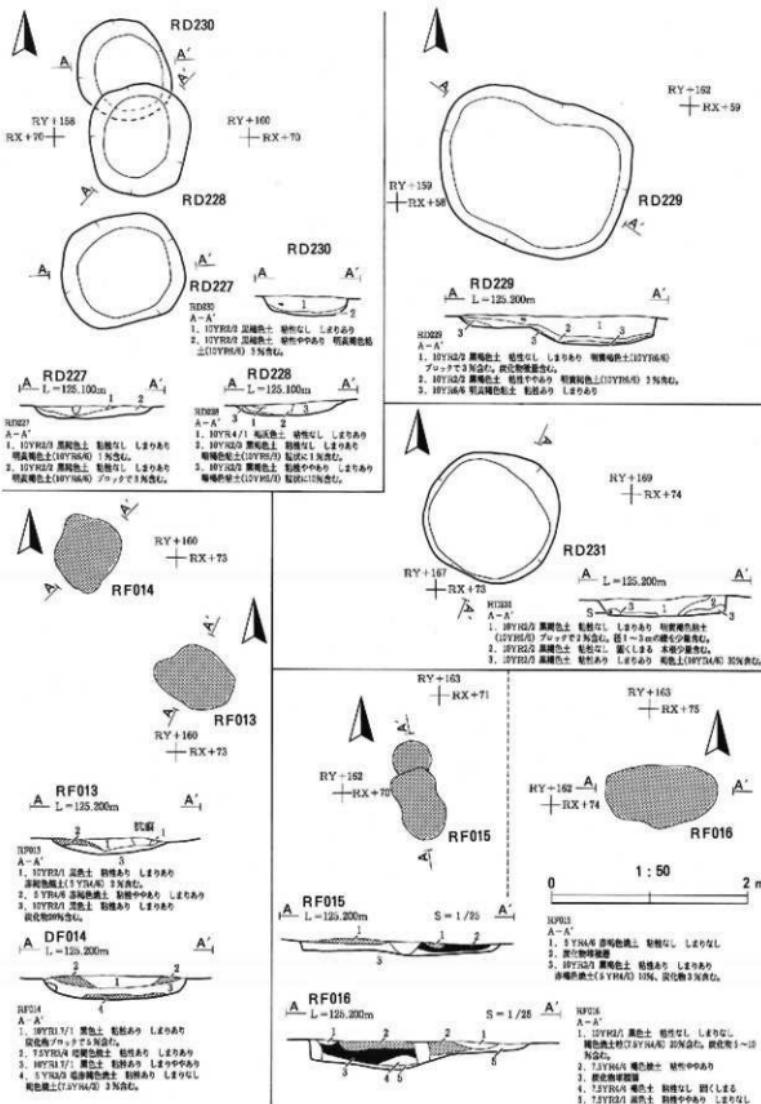
## 3. 焼土遺構

焼土遺構は4基検出された。検出範囲は調査区の中央部に集中する。いずれも出土遺物がないため確かな時期は不明であるが、残存状態から近世以降の遺構であると考えられる。詳細は下記の表の通りである。

焼土遺構観察表

遺構名	位置	燃焼範囲	幅厚	埋 土	備 考	図版	写図
RF013	D024-f15	71×60	8	3層構成で上～下位に黒色土、南側の上～中位に黒褐色焼土が堆積している。	杭による擾乱を受けている。	7	9
RF014	D024-e14	71×62	12.5	上～中位に黒色土、暗赤褐色焼土が堆積している。		7	9
RF015	D024-g15	103×44	7	上位に暗赤褐色焼土、上～中位に炭化物堆積層、下位に黒褐色土が堆積している。	木根による擾乱を受けている。	7	9
RF016	D024-g13	113×62	15	上位に褐色焼土を主とし、中位に炭化物下位に褐色、黒褐色土が堆積している。	杭による擾乱を受けている。	7	9

\* 単位はいずれもcmである。



第7図 RD227~231, RF013~016

R G087 溝状遺構(正→R G128)

遺構(第9図・写真図版10)

〈位置・重複関係〉 024D区南西部～025D区北西部に位置する。重複する遺構はない。

〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅150～100cm、下端幅95～50cm、深さ31cmで全長約20.15mにわたって検出された。断面形はU字状を呈する。方向は北～南ではほぼ直線に延びる。南端は調査区外に続く。低面両端の高低差は僅かに5cmである。

〈埋土〉 自然堆積で上位と下位は黒褐色土、中位は黒色土による構成である。

遺物 埋土から磁器皿片が1点出土した。32は中国産磁器で器種は皿、時期は16世紀と考えられる。

時期 遺物の出土状況からは時期の特定は難しく、詳細は不明である。

R G088 溝状遺構(正→R G129)

遺構(第9図・写真図版10)

〈位置・重複関係〉 024D区北西部～東部に位置する。R G089と重複し、これに切られる。また、遺構の一部が現代の溝状遺構による搅乱を受けており消滅している。

〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅75～50cm、下端幅50～25cm、深さ30cmで全長約25mにわたって検出された。断面形は鉢状を呈する。方向は西～東で東端部はR G089と重複し、これから西に直進し、西端部の搅乱へと延びている。低面両端の高低差は約14cmである。

〈埋土〉 上～中位は黒褐色土、下位は黒色土による構成である。

遺物(第15図・写真図版11)

〈出土遺物〉 31は還元炎焼成の土師器壊片で成形はロクロ、底部の切り離し技法は回転糸切りである。

時期 平安時代の遺物が出土しているが時期の断定はできない。

R G089 溝状遺構(正→R G130)

遺構(第8図・写真図版11)

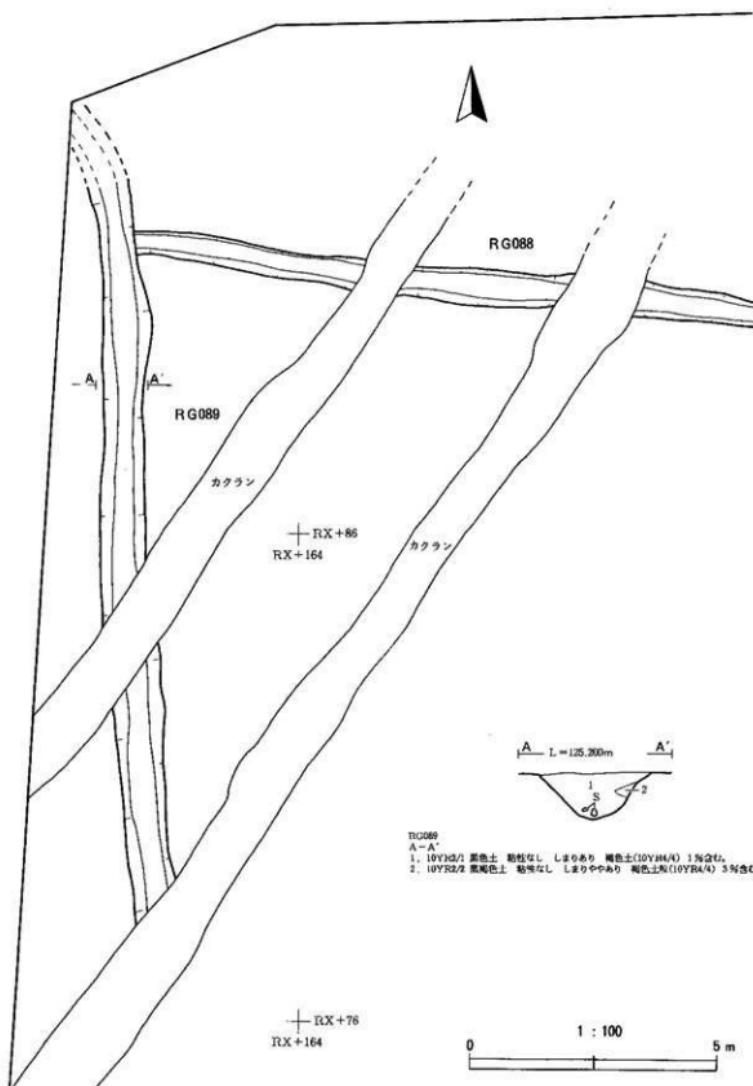
〈位置・重複関係〉 024D区南西部～025D区北西部に位置する。R G088と重複し、これを切る。また、現代の溝状遺構による搅乱を受けており南端部が消失している。

〈規模・形態・方向〉 規模は上端幅105～70cm、下端幅55～30cm、深さ38cmで全長約16.5mにわたって検出された。断面形は緩いU字状を呈する。方向は南～北で北端は遺構外へと延びる。低面両端の高低差は約80cmである。

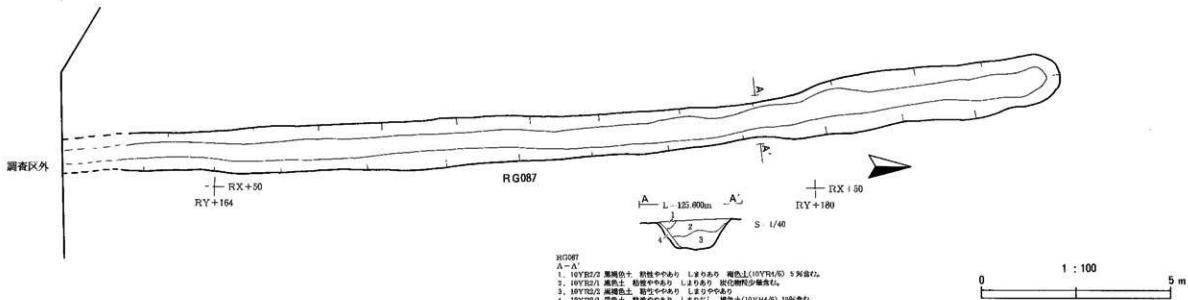
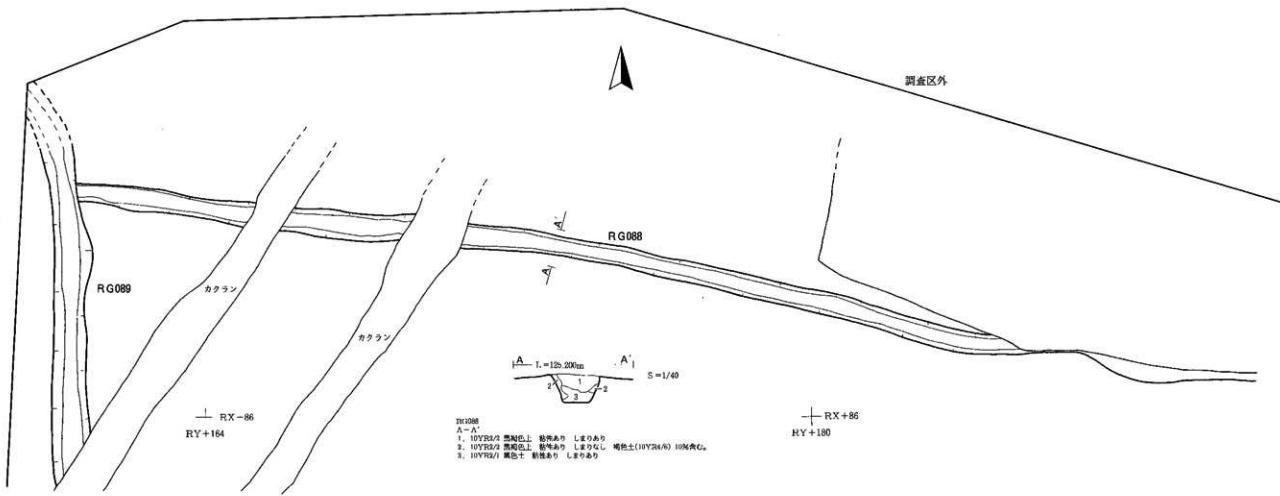
〈埋土〉 全体が黒色土でわずかに黒褐色土が混じる。

遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がなく、不明である。



第8図 RG089



第9図 RG087・088

R Z 017 円形周溝(正→R Z 021)

遺構(第10図・写真図版12)

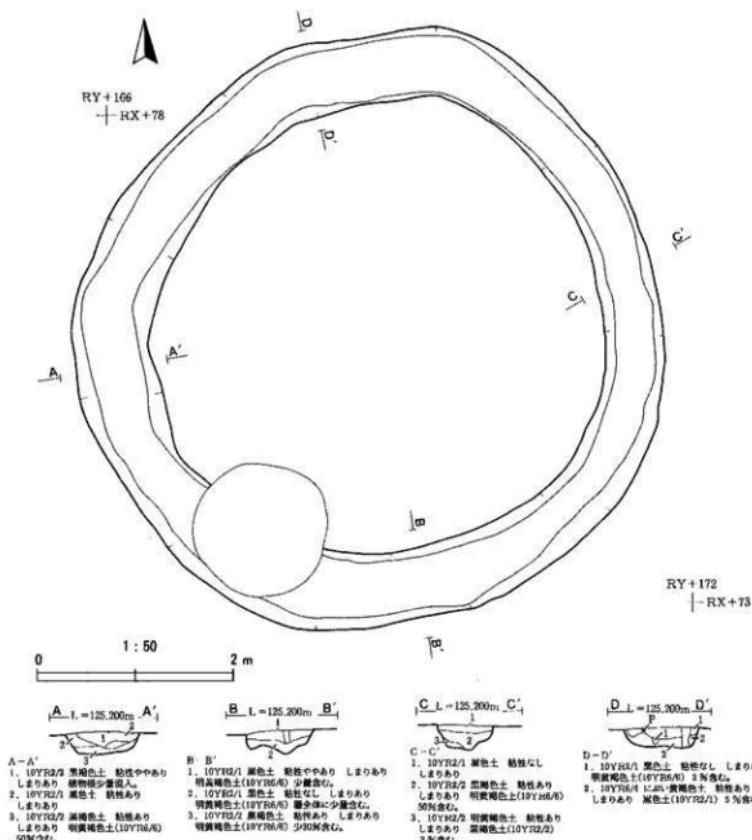
〈位置・重複関係〉 024D区中央部に位置する。R D231と重複し、これに切られる。

〈規模・形態・方向〉 形態は円形でドーナツ状を呈する。規模は外径9.9m、内径4.5m、溝上端幅70~59cm、下端幅54~36cm、深さ26cmで溝の底面は凸凹である。円内の平坦部には遺構らしき埋り込みは無い。

〈埋土〉 全体が黒色、あるいは黒褐色土で構成され、下位に明黄褐色土がわずかに混じる。

遺物 埋土の上位から酸化炎焼成の土器片が若干出土しているが、いずれも小片である。

時期 時期を特定できる出土遺物がなく、不明である。



第10図 R Z 017

## R Z 018 柱穴群(正→R Z 022)

## 遺構(第11図)

〈位置〉 調査区中央～南部に散在する柱穴を111基登録、記載した。

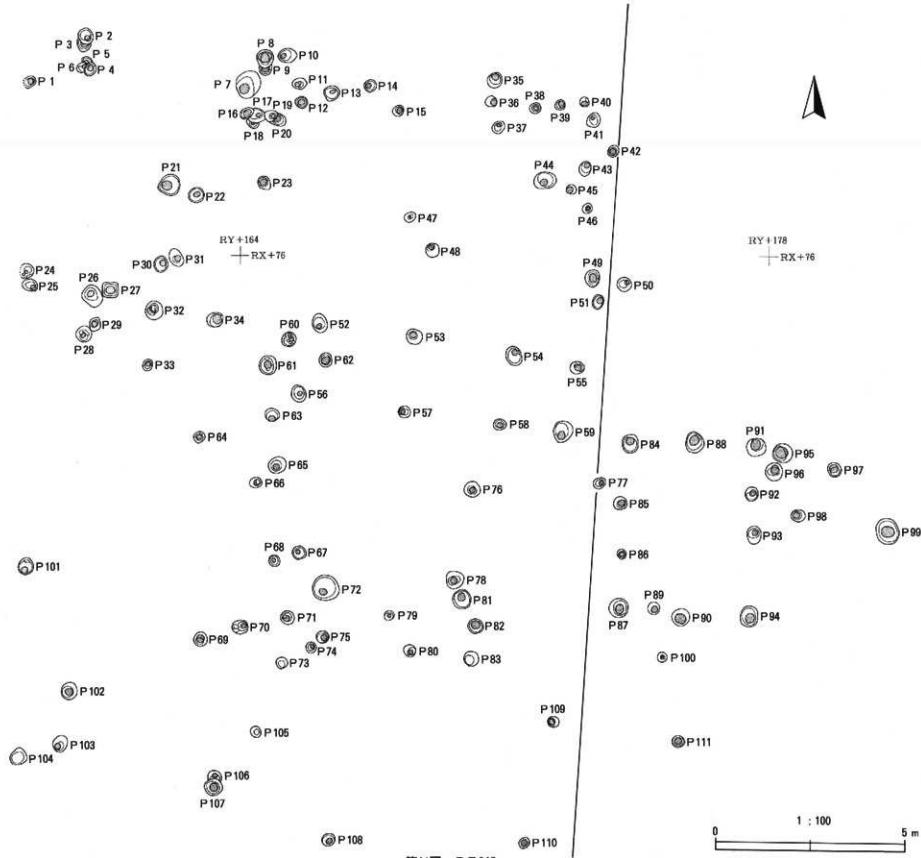
〈配列〉 111基のうち規則性をもつのはP84～P94が2間×3間の建物跡の構造をとっており、他ではP52～P55とP56～P59が柱穴列を成している。他にも規則性をもつ配列があると思われるが、点在する現代の搅乱(植苗痕)によって消滅した柱穴もあることや柱穴群が調査区西側に続くことからその結果を割て全体を把握してから検討する必要がある。

〈埋土〉 全体が黒色～黒褐色土で構成され、礫を含むものも數基ある。

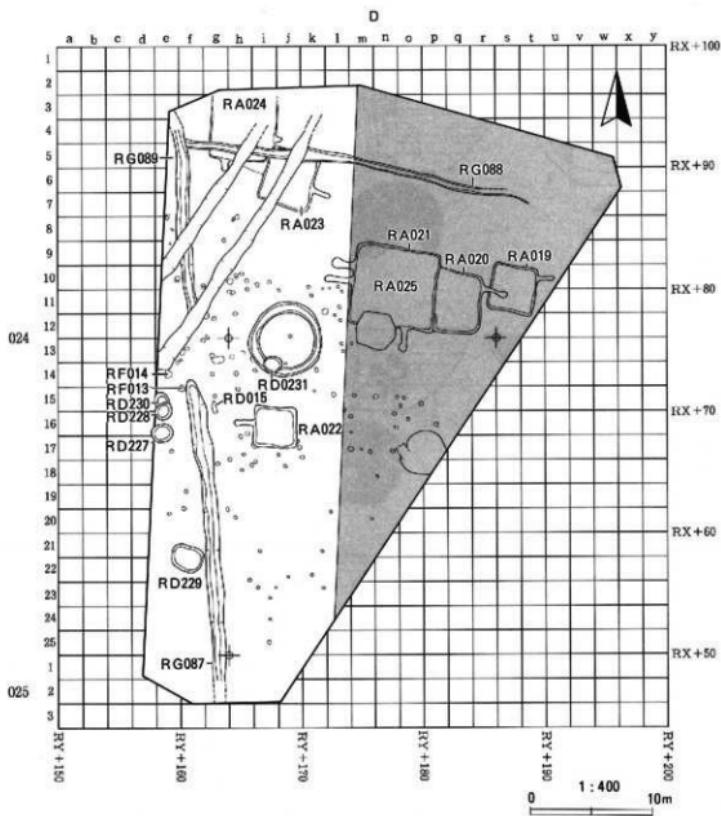
遺物 埋土の上位から酸化炎焼成の土器片が若干出土しているが、いずれも小片である。

柱穴計測表

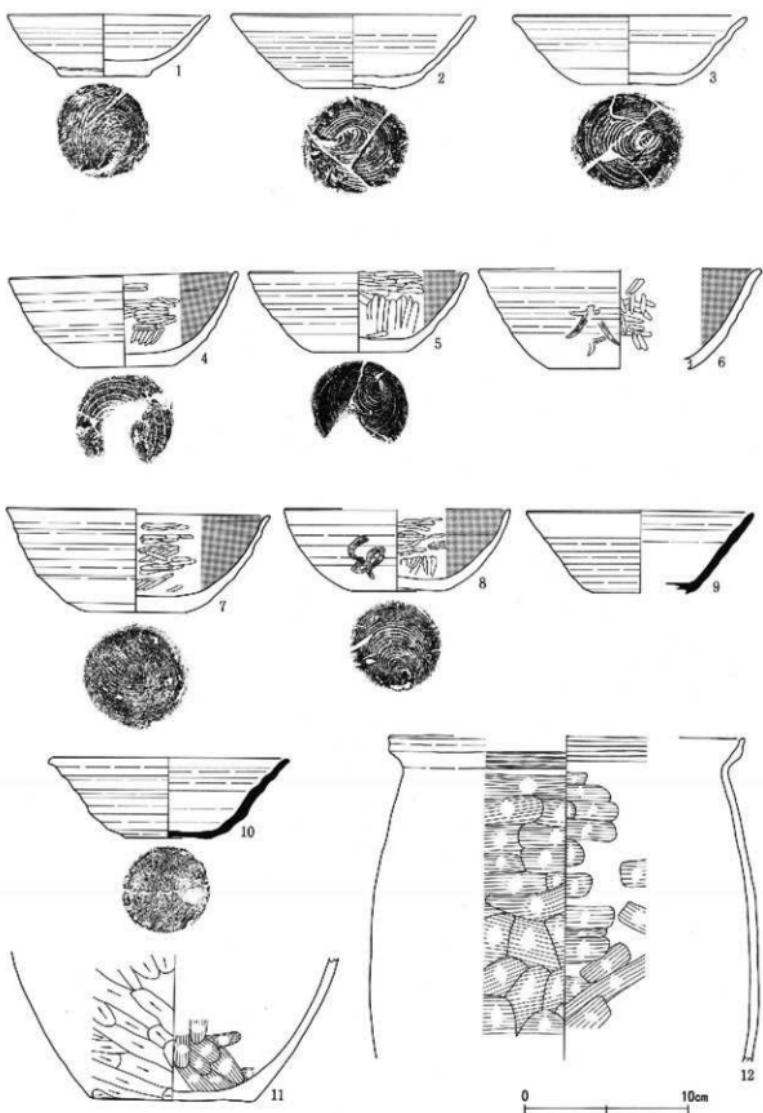
PNo.	径(cm)	深さ(cm)	柱頭	備考				
1	31×26	29.0	有		56	48×38	42.2	有
2	43×37	53.8	有	径10cmの礫を含む。	57	31×25	34.6	有
3	46×40	44.7	有		58	32×27	50.4	有
4	33×28	39.0	有	径10cmの礫を含む。	59	55×48	42.9	有
5	28×25	31.0	有	礫を少量含む。	60	39×34	43.9	有
6	36×24	26.9	有		61	53×45	52.6	有
7	75×62	44.9	有	径10cmの礫を少量含む。	62	36×32	38.7	有
8	45×49	30.8	有		63	37×32	37.9	有
9	38×34	31.2	有		64	29×28	27.3	有
10	51×35	48.5	有	径5cm大の礫を少量含む。	65	48×44	40.9	有
11	37×29	36.1	有	小礫を含む。	66	30×25	22.7	有
12	33×29	19.3	有		67	38×36	24.1	有
13	41×38	32.0	有		68	29×36	33.6	有
14	31×29	38.8	有		69	35×31	37.1	有
15	33×28	31.9	有		70	42×36	35.0	有
16	37×29	33.5	有		71	36×34	19.3	有
17	51×37	44.7	有	径3～5cm大の礫を複数含む。 1つまり弱い。	72	71×67	33.7	有
18	27×21	16.4	有		73	27×26	10.2	有
19	32×29	34.4	有		74	30×28	12.6	有
20	45×34	37.0	有	礫を多量に含む。	75	31×29	25.7	有
21	56×53	50.6	有		76	44×40	26.6	有
22	41×28	41.0	有		77	34×25	39.4	有
23	39×30	31.4	有		78	48×44	19.5	有
24	41×38	53.8	有	径10cmの礫を含む。	79	26×23	25.7	有
25	41×32	48.8	有		80	31×29	42.0	有
26	56×48	49.1	有		81	53×48	15.1	有
27	41×28	31.4	有		82	39×35	21.5	有
28	45×42	27.0	有		83	43×38	42.5	
29	41×35	24.3	有		84	46×42	30.0	有
30	41×37	17.5	有		85	32×30	24.9	有
31	50×33	45.3	有	径10cmの礫を含む。	86	37×22	15.6	有
32	50×47	49.9	有	径10cm程の礫を含む。	87	51×50	36.8	有
33	30×24	24.4	有		88	53×45	21.6	有
34	41×39	51.1	有	径10cm程の礫を含む。	89	31×25	41.5	有
35	42×37	40.1	有		90	45×42	24.0	有
36	31×29	52.2	有	径15cm大の礫を1点含む。	91	50×45	38.3	有
37	36×21	34.2	有		92	37×28	12.5	有
38	29×29	47.3	有		93	44×38	21.9	有
39	30×27	47.3	有		94	51×45	26.8	有
40	25×?	37.4	有		95	52×45	28.7	有
41	35×32	58.6	有		96	50×45	20.4	有
42	31×26	44.2	有		97	39×33	24.3	有
43	43×31	46.0	有		98	36×29	10.7	有
44	56×14	46.6	有		99	68×58	19.3	石
45	30×24	24.4	有		100	28×22	36.6	有
46	30×26	44.4	有		101	44×40	30.4	有
47	41×38	29.1	有		102	48×42	32.0	有
48	37×33	40.8	有		103	44×35	34.0	有
49	42×35	46.0	有		104	42×39	40.5	
50	38×35	42.9	有		105	30×26	26.5	有
51	39×30	19.9	有		106	39×37	33.9	有
52	59×42	42.6	有	小礫を少量含む。	107	65×41	25.9	有
53	41×37	41.2	有		108	34×39	25.0	有
54	59×42	50.3	有		109	31×26	37.4	有
55	40×32	37.5	有		110	30×25	24.8	有
56					111	32×29	30.5	有
								小礫1点含む。



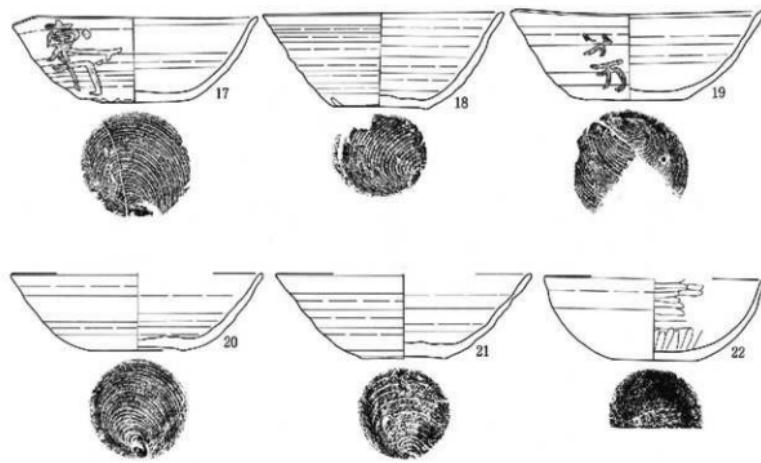
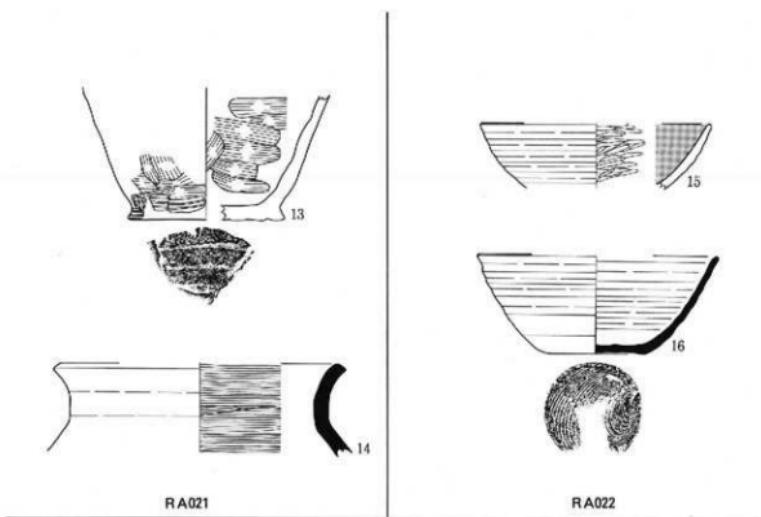
第11図 R Z018



第12図 造構配図



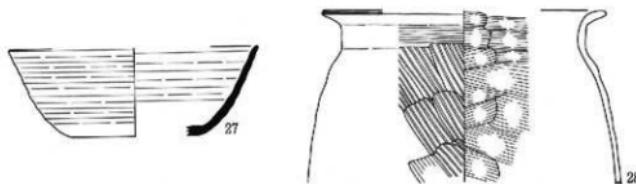
第13図 造機内出土遺物(RA 021)



第14図 遺構内出土遺物(RA021~023)



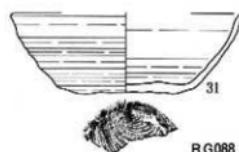
RA023



RA024



R G087

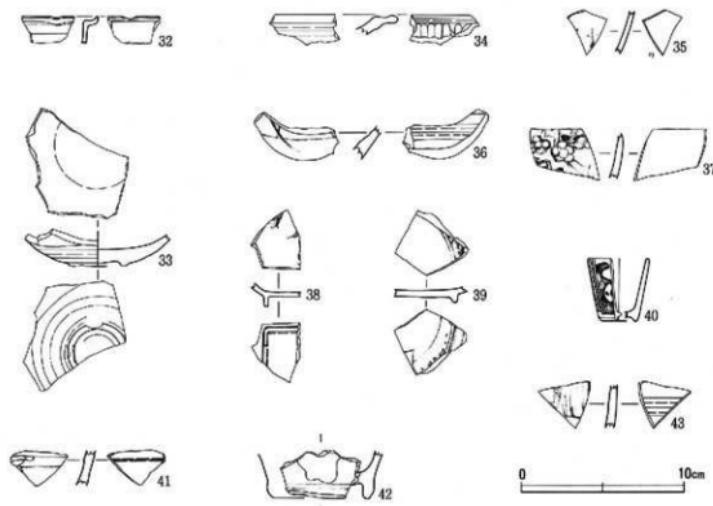


第15図 遺構内出土遺物(R A023・R A024, R G087・R G088)

#### 4. 遺構外出土遺物

##### 陶磁器（第16図・写真図版15）

いずれも遺構外から出土した小片で32は大堀相馬産の陶器皿で釉薬には灰釉が使われている。時期は16世紀前半で器面は灰白色をしている。33も表採で取り上げた大堀相馬産の陶器皿で器面は灰色をし、時期は16世紀に比定される。34は美濃産で内面に丸のみによる削ぎが菊花状に施された折縁菊皿で、16世紀のものである。35～41はいずれも肥前産の染付が施された磁器で、器種は35が碗、36・37が瓶、38・39・41が皿、40が猪口である。時期は35が17世紀後半で他は18世紀に属すると思われる。



第16図 遺構外出土遺物

土器觀察表

No	出土地点	器種	成形	口縁部(内/外)	脚部(内/外)	底面(内/外)	口径	底径	器高	分類	備考
1	RA021床直	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/回条切	12.3	5.5	3.8	A I a	
2	RA021埋土	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/回条切	15.0	6.0	4.6	A II a	
3	RA021床直	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/回条切	14.4	5.7	4.3	A II a	
4	RA021埋土	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ミガキ/回条切	14.2	6.0	5.7	A I a	内黒
5	RA021埋土	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ミガキ/回条切	(9.3)	5.5	5.2	A I a	内黒
6	RA021埋土	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ミガキ/回条切	(15.8)			A I	内黒、系書
7	RA021埋土	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ミガキ/回条切	16.3	6.0	6.4	A I a	内黒、墨書
8	RA021床直	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ミガキ/回条切	(13.7)	5.4	5.1	A I a	内黒
9	RA021床直	須/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	13.8	(6.2)	4.8	B I	
10	RA021カマド遮熱部	須/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/回条切	6.4	5.2	5.0	B I a	
11	RA021カマド煙出部	土/擦	非			ナデ/ケズリ				A II	
12	RA021床直	土/擦	非	ハケメ/ハケメ	ナデ/ナデ		(22.4)			A I	
13	RA021埋土	土/擦	非	ハケメ/ハケメ				(9.4)		A II	
14	RA021カマド	須/擦	口	ナデ/ナデ			(18.0)			B I	
15	RA022埋土上位	土/环	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ		(14.0)			A I	内黒
16	RA022埋土上位	須/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	(14.7)	6.0	5.1	B I a	
17	RA023埋土下部	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	14.8	6.7	5.5	A II a	墨書
18	RA023埋土下部	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	14.6	5.7	6.1	A II a	
19	RA023埋土下部	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	15.3	6.8	5.7	A II a	墨書
20	RA023埋土	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	(15.3)	6.0	4.8	A II a	
21	RA023埋土下部	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	(15.5)	5.3	5.2	A II a	
22	RA023埋土下部	土/环	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	(13.4)	5.4	5.1	A I c	内黒
23	RA023埋土下部	土/环	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	(14.5)	5.2	5.2	A I a	内黒
24	RA023埋土下部	土/环	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	13.3	5.0	5.1	A I a	内黒
25	RA023埋土	土/环	口	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	ミガキ/ロナデ	(12.7)	5.6	4.8	A I c	内黒
26	RA023埋土	土/擦	非			ミガキ/ケズリ	(9.3)			A II	
27	RA024埋土	須/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ナデ	(15.2)	(8.0)	5.5	B I	
28	RA024埋土	土/擦	非	ナデ/ナデ		ナデ/ハケメ	(17.4)			A II	
29	RA024埋土上位	須/擦	非			叩き目/叩き目				B II	
31	RG088埋土下部	土/环	口	ロナデ/ロナデ	ロナデ/ロナデ	ロナデ/回条切	(14.0)	6.0	4.9	A II a	

陶磁器觀察表

No	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	产地	年代	備考
30	RG087-壁上	磁器	皿		(11.0)	(2.3)	白色	中国	16C	
32	D024-g 7	陶器	灰釉皿				灰白色	大堀相馬	16C前半	
33	表探	陶器	皿				灰色	大堀相馬	16C末	
34	表探	陶器	灰釉皿	(11.0)	(2.2)	灰色	美濃	16C中	折縁陶皿・灰釉・内面丸壓削	
35	D024-i 7	磁器	染付瓶				灰色	肥前	17C後半	
36	D025-e 1	磁器	染付瓶				灰色	肥前	18C	灰釉
37	D025-e 1	磁器	染付瓶				白色	肥前	18C	
38	D024-g 12	磁器	染付皿				白色	肥前	18C	
39	D025-e 1	磁器	染付皿				白色	肥前	18C	高台部輪むら
40	D024-i 7	磁器	染付罐口	(4.9)	(2.1)	3.9	白色	肥前	18C?	
41	D025-e 1	磁器	染付瓶			(2.2)	灰色	肥前	18C?	内面無輪
42	D024-i 7	磁器	碗類?				灰色	肥前	18C	内面無輪
43	D025-e 1	磁器	染付瓶				白色		19C?	

## 5. まとめ

### (1) 遺物

今回の調査では遺構内外で大コンテナ2箱分の遺物が出土した。内訳は遺構内からは主に平安時代の土師器・須恵器の壺・甕で遺構外からは陶磁器類が出土している。

#### (a) 分類

分類に当たっては、これまでの本遺跡出土遺物の分類にならい、器種と焼成方法、調整技法によって細分した。

器種には壺、高台付壺、甕、壺がある。

A群：酸化炎焼成されているもの。(土師器)

I類・・・内面にミガキ、黒色処理が施されるもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

b種・・・切り離し後に再調整が施されるもの。

c種・・・内調整のため切り離し技法が不明なもの。

II類・・・内外面ともロクロ痕以外の調整をもたないもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りのもの。

b種・・・切り離し技法が不明なもの。

B群：還元炎焼成されているもの。(須恵器)

I類・・・底部の切り離し技法が回転糸切りによるもの。

a種・・・底部の切り離し技法が回転糸切りで、再調整が施されないもの。

b種・・・切り離し後に再調整が施されるもの。

c種・・・再調整のため切り離し技法が不明なもの。

#### 〈高台付壺〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

I類・・・内面にミガキ、黒色処理が施されているもの。

II類・・・内外面ともロクロ痕以外の調整をもたないもの。

#### 〈甕〉

A群：酸化炎焼成されているもの。

I類・・・ロクロによって成形されているもの。

II類・・・ロクロによって成形されないもの。

B群：還元炎焼成されているもの。

(b) 出土量の割合

器種は壺、高台付壺、甕が出土した。

壺は23点を実測、掲載した。A群(酸化炎焼成)は19点、B群(還元炎焼成)は4点である。各群における出土数は、A群 I類は10点中、A I a 6点、A I c 2点、底部欠損2点、A II a は9点、B群はI aが2点、底部欠損が2点である。

甕は6点を実測、掲載した。A群は5点でロクロ成形が1点、B群は1点のみでロクロ成形である。

これらを造構別に下記の表にまとめた。

土器構成表 (RA出土)

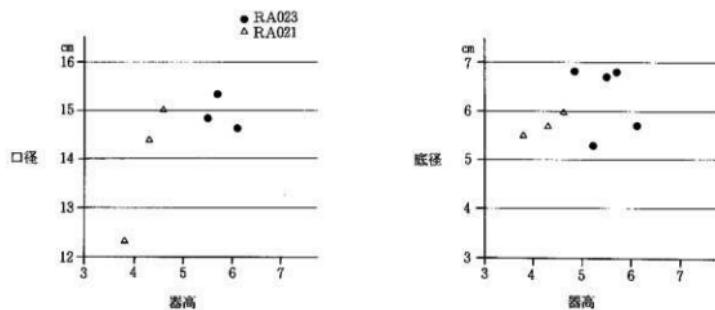
造構名	上師器 (A群)												須恵器 (B群)					
	壺						甕			台付壺			壺					
	I	I a	I b	I c	II	II a	II b	I	II	I	II	I	I a	I b	I c	I	II	
RA021	1	4				3		1	2			1	1			1	1	
RA022	1												1					
RA023		2		2		5			1									
RA024						1			1			1						

(c) 壺の分析

表にはRA021とRA023から出土量の多いA II aの口径・器高、底径・器高の分散図を示した。なお作図には反転実測による推定値は取り上げていない。

表からA II aの器高は3.5~6.1cm、口径は12.3~15.3cm、底径は5.3~6.8cmの範疇にあり、これを見る限り、A II aはある程度の分布域に納まっている。

また造構別では口径、底径はほぼ同じであるがRA023出土上器はやや器高があることが確認できる。



## (2) 遺構

### 堅穴住居跡

〈住居〉今回の調査で検出された平安時代の堅穴住居跡は4棟で、このうちRA023とRA024が重複している。遺構別の詳細は下記の観察表のとおりである。

堅穴住居跡観察表

遺構名	位 置	形 状	規 模	主 軸	越床面積	埋 土	重 複 関 係
RA021	024D-11n	〃	652×693		45.18m <sup>2</sup>	上位は黒褐色土、中～下位は黒色土による構成である。	RA020、RA025と重複し、これより新しい。
RA022	024D-16i	〃	340×332	W-5°-N	11.28m <sup>2</sup>	大半が黒色土の堆積である。	
RA023	024D-6j	〃	420×461	E-20°-S	19.36m <sup>2</sup>	全体が粘土質黒色土による構成である。	RG088、RA024と重複し、RG088より古く、RA024より新しい。
RA024	024D-4h	〃	535×?	S→		自然堆積、全体暗～黒褐色土、下に黒色土が堆積している。	RG088、RA022と重複し、これより古い。

### 〈カマド〉

カマドの芯材にはRA023・RA024・RA025は壁からの削り出しで礫や土器片による補強は見られなかった。RA022は燃焼痕や炭化物が散在しなかった事と、床土にしまりが無かった事から結果的に床を掘り下げすぎてしまいカマドの袖を確認できなかった。

### 溝状遺構

3条検出された。RG087、RG089はとともに北～南方向へ延びる溝で、RG087は024D-14fグリッドを起点として南へ約20mの所で調査区外へと続き、RG089はD024-f11を起点とて北へ約16.5mの所で調査区外へと続く。いずれも方向、掘り方方が似ており、性質、時期が一致する可能性もあるが、時期については出土遺物がなく不明である。RG088は西～東方向で西端はRA089との重複地点を起点とし、第10次調査区へと延び、搅乱によって消滅する。出土遺物は平安時代に属する酸化炎焼成の灰が1点であるが、流れ込みの可能性も考えられ、時期の判断は出来ない。

### 土坑

5基検出された。形状は円、梢円形を呈し、RD228とRD230が重複関係にある。時期については出土遺物がなく不明である。

### 焼土遺構

4基検出された。燃焼範囲は71～113cm、層厚は7～15cmの範囲である。埋土の構成は主に黒色土、暗赤褐色土焼土で、RF015、RF016は中層に炭化物が堆積している。検出状態から近・現代に属すると思われるが、出土遺物がないため断定には至らない。

#### 円形周溝

1基検出された。溝の埋土からは酸化炎焼成の壺の小破片が出土している。第4次調査で検出された円形周溝の底面に見られた工具痕は確認できなかった。造構の時期は平安時代の可能性が考えられるが、造構の性格は不明である。

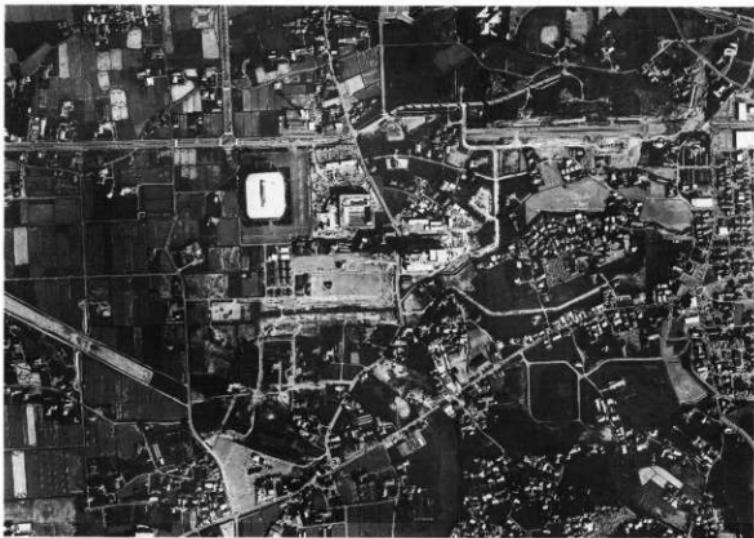
### 3. おわりに

今回の調査で小幅遺跡第11次調査区が平安時代の集落跡であることが確認された。これまでの小幅遺跡の調査でも比較的新しい時期(9世紀後半~10世紀前半)に属すると思われる。また、出土遺物から、中世~近世、現代まで居住したと考えられる。

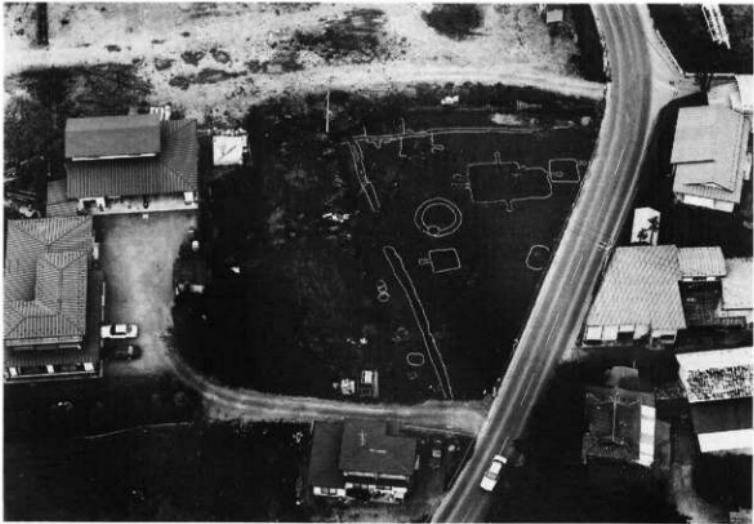
〈向中野館第4次・小幅遺跡第11次参考・引用文献〉

- (1) 岩手県文化振興事業団(1994)『小幅遺跡第2次発掘調査報告書』  
同岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第244集
- (2) 岩手県文化振興事業団(1995)『小幅遺跡第4次発掘調査報告書』  
同岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集
- (3) 岩手県文化振興事業団(1998)『大宮北・本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書』  
同岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第281集
- (3) 岩手県文化振興事業団(1998)『小幅遺跡第5・7次発掘調査報告書』  
同岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第267集
- (4) 岩手県文化振興事業団(1999)『本宮熊堂遺跡第4次・鬼柳八遺跡第4次発掘調査報告書』  
同岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第308集
- (5) 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正(1982)「岩手の土器」 岩手県立博物館
- (6) 八木光則(1992) 古代斯波郡と爾離体の土器群相 第18回古代城柵官 遺跡検討会

小幅遺跡第11次  
写 真 図 版

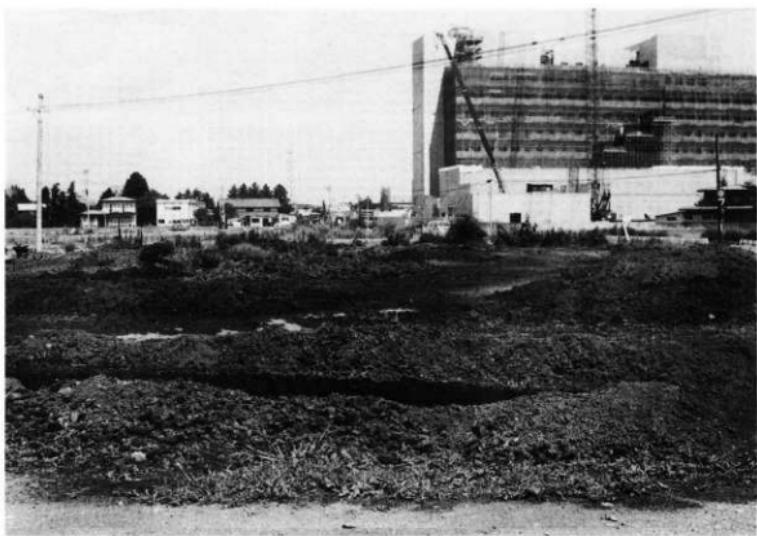


遺跡遠景



遺跡全景

写真図版 1 空中写真



調査区近景



基本土層

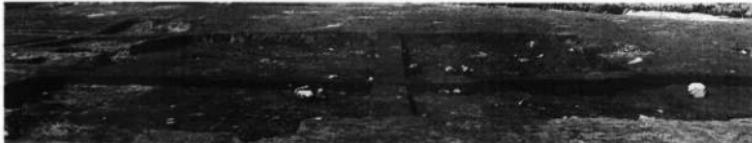
写真図版 2 調査区・基本土層



RA021 (平面)



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (W-E)

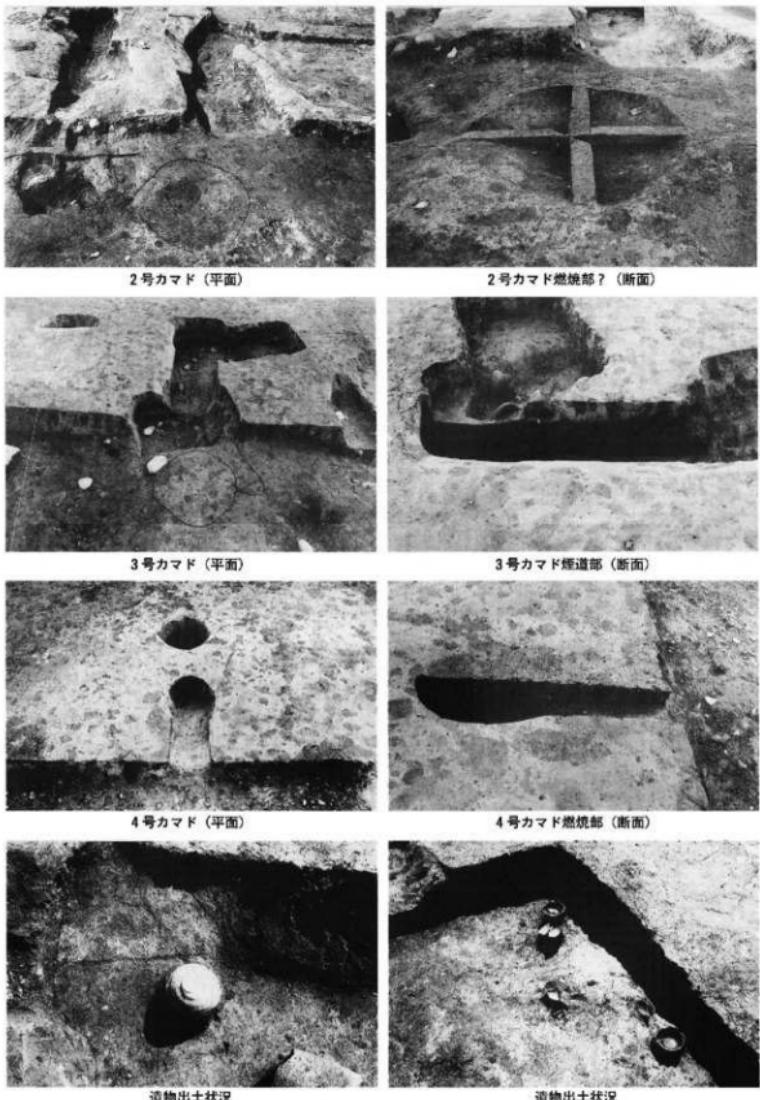


1号カマド(平面)



1号カマド袖・燃烧部 (断面)

写真図版 3 RA021



写真図版 4 RA021



RA022 (平面)



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (W-E)



RA022 (実機)



カマド煙道部 (断面)

写真図版 5 RA022



RA023 (平面)



埋土断面 (N-S)



カマド (平面)



カマド袖・燃焼部 (断面)



遺物出土状況



土坑 (平面)

写真図版 6 RA023



RA024(平面)



埋土断面(W-E)



カマド(平面)



カマド燃焼部(断面・N→)

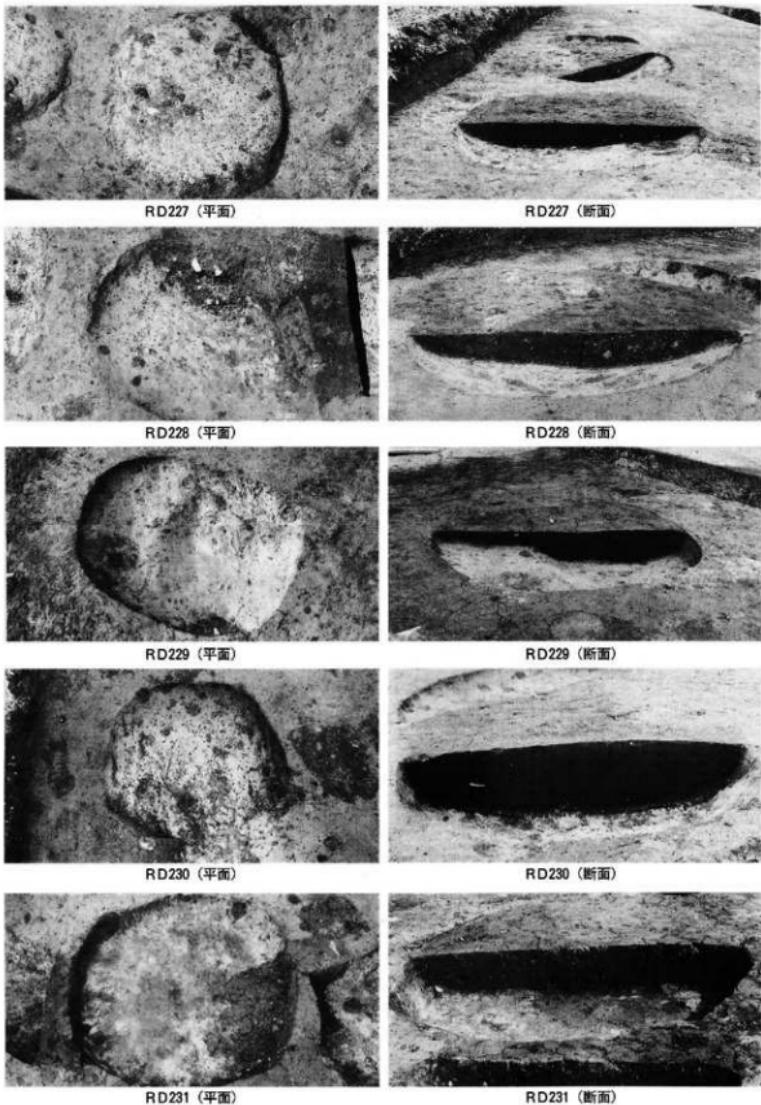


カマド燃焼部(断面・E→)

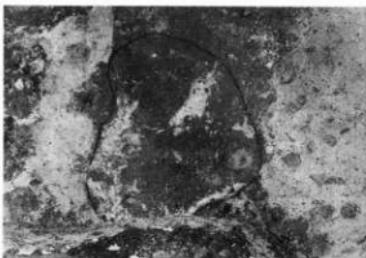


焼土(断面)

写真図版7 RA024



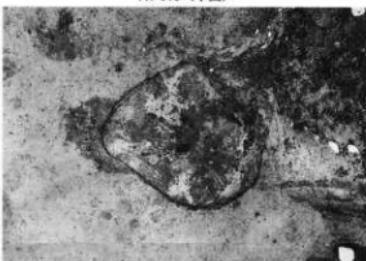
写真図版 8 RD227~231



RF013 (平面)



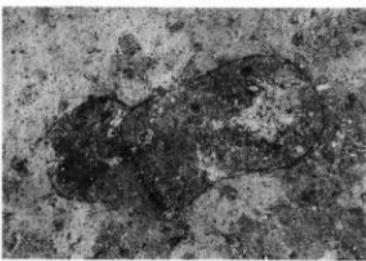
RF013 (断面)



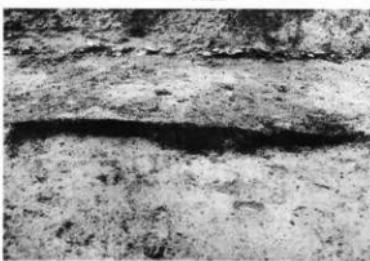
RF014 (平面)



RF014 (断面)



RF015 (平面)



RF015 (断面)



RF016 (平面)



RF016 (断面)

写真図版 9 RF013~016



RG087 (平面)



RG088 (平面)



RG087 (断面)

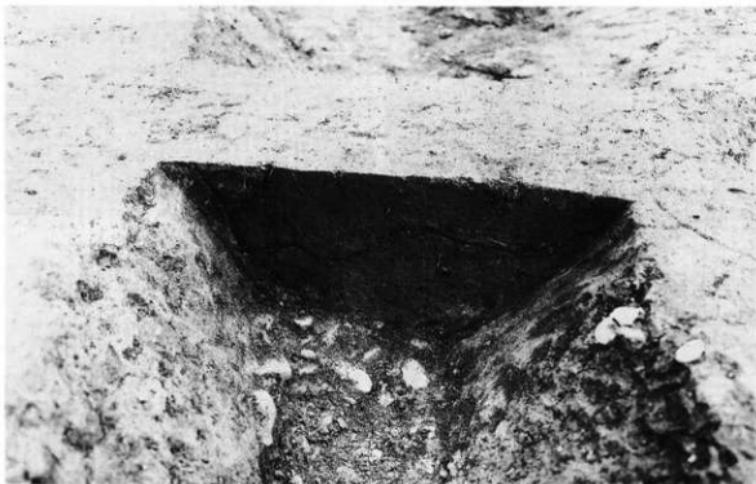


RG088 (断面)

写真図版10 RG087・088

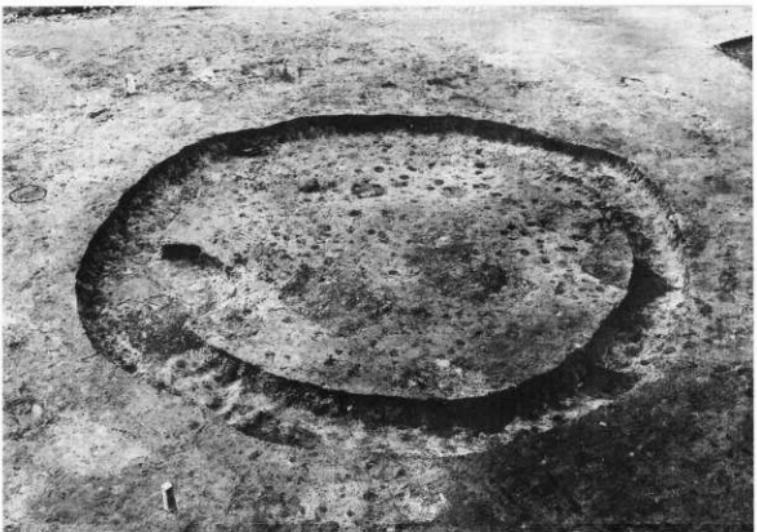


RG089 (平面)



断面 (S→)

写真図版11 RG089



R2017 (平面)



断面①



断面②

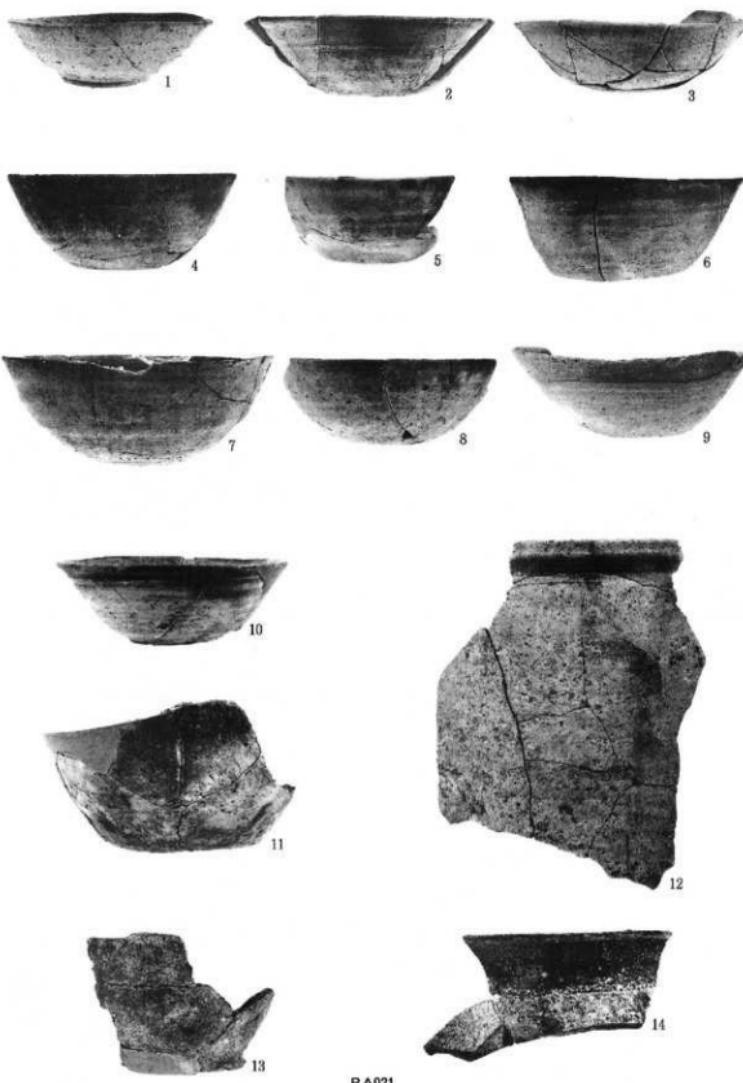


断面③



断面④

写真図版12 R2017



RA021

写真図版13 造構内出土遺物 (RA021)



15



16

RA022



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

RA023



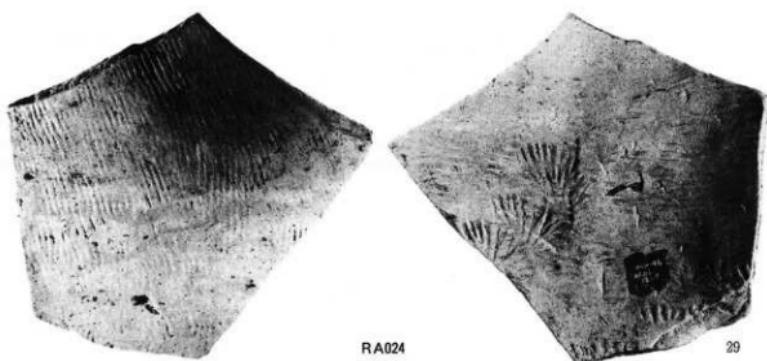
27



28

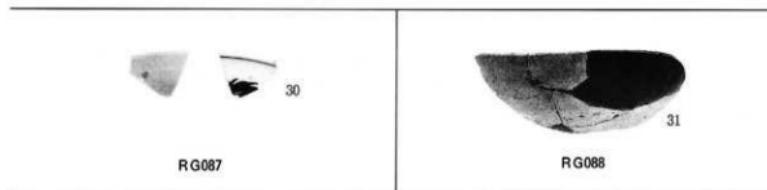
RA024

写真図版14 這構内出土遺物 (RA022~024)



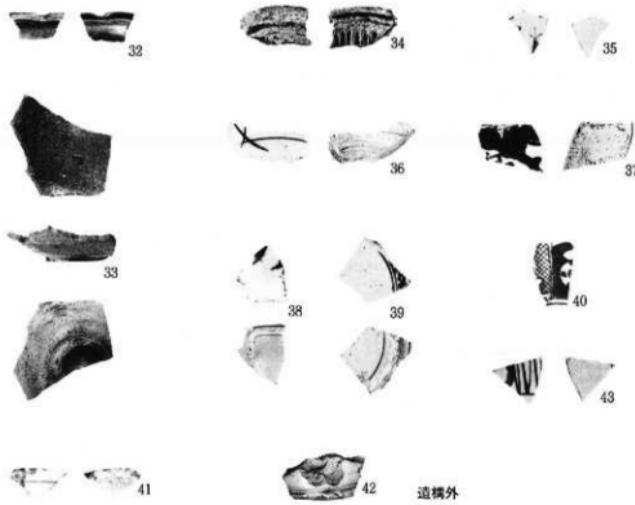
RA024

29



RG087

RG088



造構外

写真図版15 造構内（RA024・RG087・088）造構外出土遺物

## VI. 台太郎遺跡第19次調査

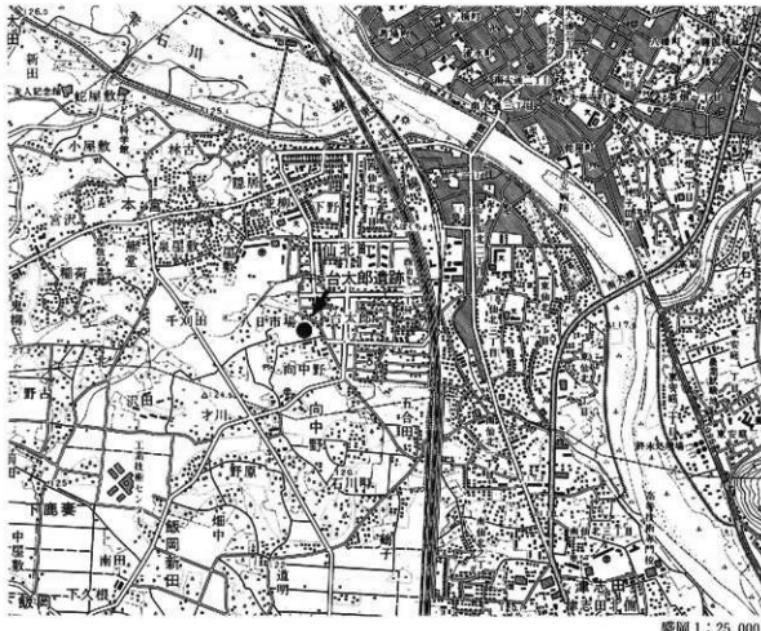
所 在 地 盛岡市向中野字向中野16-1他  
委 託 者 地域振興整備公団  
発掘調査期間 平成10年7月2日～同年8月31日  
調査対象面積 4,755m<sup>2</sup>  
発掘調査面積 4,755m<sup>2</sup>  
遺跡番号・略号 LE16-22、ODT-98-19  
調査担当者 文化財専門調査員 下田 隆衛  
期限付専門職員 佐藤 純子  
期限付専門職員 鈴木 見誌  
協 力 機 関 盛岡市・盛岡市教育委員会

## 1. 遺跡の位置と立地

当遺跡の所在する盛岡市は、岩手県のほぼ中央部に位置するが、遺跡はJR東北本線仙北町駅の南西約900mに在り、零石川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「盛岡N J-54-13-14-2(盛岡新庄14号-2)」の図幅に含まれ、北緯39度40分47秒、東経141度8分40秒付近に当たる。標高は120.3~121.6mで、現状は畠地と水田そして宅地として利用されているが、調査した範囲はいずれも畠地と水田のみである。

東側は下閉伊郡岩泉町・川井村、西側は岩手郡零石町、南側は紫波郡紫波町・稗貫郡大迫町、北側が岩手郡滝沢村・玉山村の4町3村と接している。

盛岡市は、近世南部氏の城下町として発展をとげ、現在は岩手県の県庁所在地として政治・経済の中心都市である。総面積は489.15km<sup>2</sup>、人口が平成10年度で28万3000人を擁する北東北の中核都市である。



第1図 遺跡周辺の地形図

## 2. 基本土層

調査区内は既述のように、微高地は畠地として若干低い場所は水田であったことから、全体としてはあまり高低差のないほぼ平坦といえる状態の地形であつたが、一部は耕地整備による削平を受けており、旧地表面の改変が著しい場所も多く、地層の堆積状況も地点により違いが見られ一様ではない。

特に、平成10年度の調査地点は全体30,000m<sup>2</sup>以上の範囲に調査箇所が4箇所に分散しており、全体を統一した基本層序として平均化することには無理があるとも言えるが、地点によって大同小異のあることを承知の上で、あえて統一的な土層として見ると上位層から以下のようにⅠ～Ⅴ層に分類される。

Ⅰ層：黒褐色～暗褐色、a・bの2層に細分される。

a層は黒褐色土（10Y R3/2）、現在の表土層で休耕田および畠地の耕作土であり、層厚は10～30cm。

b層は暗褐色粘土質土（10Y R3/3）で全体が堅く締まり、旧水田の堆積土で層厚2～5cm。一部で確認。

Ⅱ層：褐色粘土（10Y R4/4～4/6）で層厚は約2cm前後。旧水田面の床土で下部に赤褐色水酸化鉄が集積。

Ⅲ層：黒褐色シルト質土（10Y R2/2～3/2）で層厚は10～20cm。

褐色土と黒褐色土の漸移層である。

IV層：褐色砂質シルト（10Y R3/4～4/4）で層厚は10～16cm前後。

全体として堅く締まり、粘性がある。層厚は地点により差があり、調査範囲の南側ほど厚い。

V層：段丘の基盤をなす砂礫層（10Y R4/6）である。層厚は確認していないが、調査範囲の西側はIV層を挟まないでⅢ層下部から移行するし、砂礫に粗粒が混入されさらに細分が可能な地点もある。

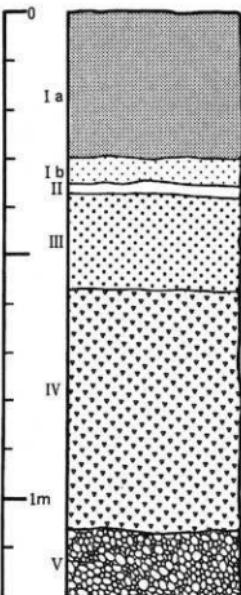
## 3. 検出された遺構と遺物

既述のように、調査範囲が4地点に分散していることから、北に位置する調査範囲から便宜的にA～D区と命名し調査を進めたことから、A調査区から順次D調査区の遺構という順序で記載するが、以下に各地区ごとの検出遺構の概要について記すこととする。

### 【A調査区】

A区としたのは調査範囲の中ではもっとも北に位置する100m<sup>2</sup>の面積を有し、ほぼ南北に延びる都市計画道路予定路線内が該当する。

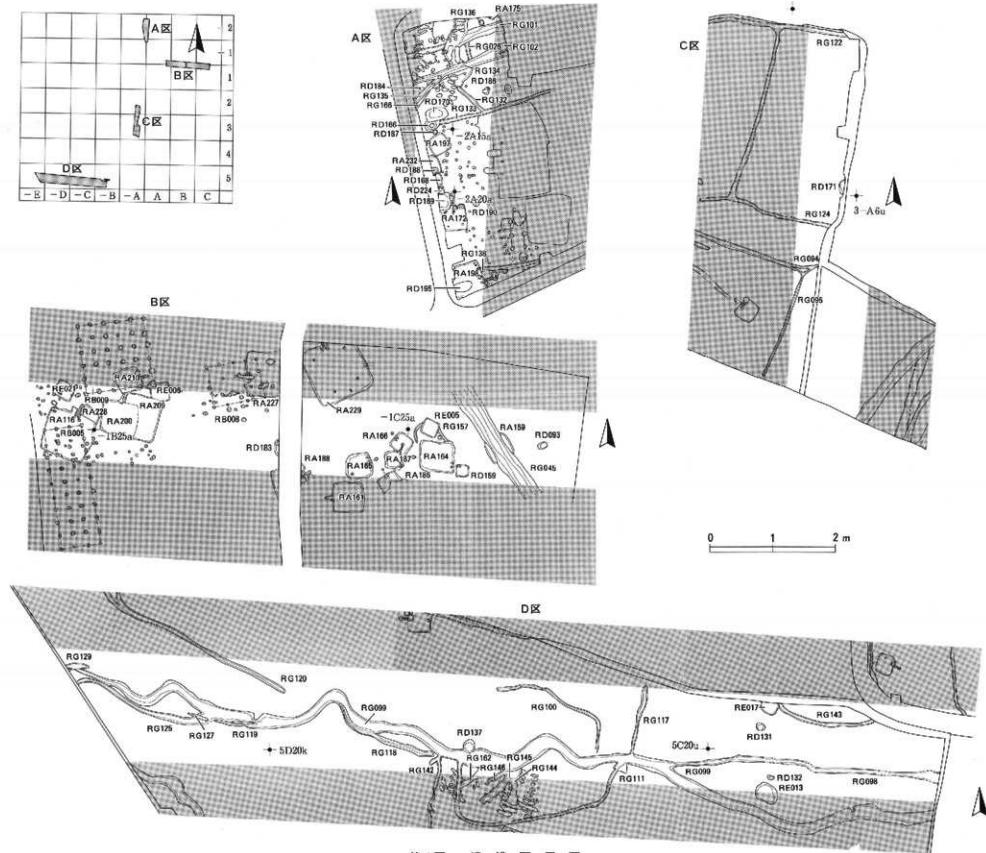
当区内から検出された遺構は、堅穴住居跡5棟、土坑11基、堅穴状遺構1棟、溝跡10条であり、小範囲の中に多くの遺構が重複して密集し、隣接する18次調査区にまたがる遺構が多い。



第2図 基本土層柱状図



第3図 調査範囲の位置



第4図 遺構配置図

#### 〔B調査区〕

B区としたのは全体調査範囲の中では北東隅部に相当する位置ではほぼ東西方向に延びる範囲で111m<sup>2</sup>の範囲であるが、検出された遺構は、奈良時代の堅穴住居跡3棟、平安時代の堅穴住居跡11棟、時期が不明な堅穴住居跡1棟、中世～近世の掘立柱建物跡3棟、平安時代の土坑1基、時期が不明な土坑2基、奈良時代の堅穴状造構1棟、平安時代の堅穴状造構1棟、時期が不明な堅穴状造構1棟、中世の堀（環濠）1条、時期が不明な溝跡1条、柱穴状土坑80基など、多くの遺構がある。また、検出遺構のうち掘立柱建物跡や住居跡・堀の一部は隣接する第18次調査区（盛岡市）にまたがる遺構が多い。

#### 〔C調査区〕

当区はA区の真南10mに位置し、ほぼ南北の範囲100m<sup>2</sup>である。調査によって検出された遺構は土坑1基、溝跡4条と少なく、遺構のすべてが隣接する18次調査区にまたがる。

#### 〔D調査区〕

当区は調査範囲全体からすると南端部西端に位置し、面積も100m<sup>2</sup>ともっとも広い範囲を有する。検出された遺構は、堅穴状造構2基、土坑3基、溝跡18条と、隣接する18次調査区には数棟の堅穴住居跡があるものの、住居跡がほとんど立地しない範囲である。

以上のように遺構が各地区に分散して検出されているが、以下の記載では遺構の種類ごとに分類した後、登録番号順に従って記述し、所在する調査区については位置・重複関係の項で明記することとする。

### (1) 堅穴住居跡〈R A〉

住居跡はA調査区から5棟、B調査区から15棟の合計20棟検出されており、C・D調査区ではまったく検出されなかった。しかし、C・D調査区とも隣接する18次調査範囲では複数検出されており、19次調査の範囲ではたまたま検出されなかったという偶然的な結果と言うことが出来る。

#### 1) R A116堅穴住居跡

##### 遺構（第5図）

〈位置・重複関係〉B調査区の西側－1 A区に位置し、北側の1.45mにR E021堅穴状造構、東側1mにR A200堅穴住居跡が立地する。R B005掘立柱建物跡・R A228堅穴住居跡と重複しており、R B005に切れR A228を切っていることから、新旧関係は（新）R B005→R A116→（旧）R A228である。また、南東コーナーは第18次調査区に延びている。

〈平面形・規模〉北東コーナーと北壁の一部は他遺構と重複していることから不詳である。平面形は方形を呈しており、規模は7.58×6.86m（下場で計測）である。

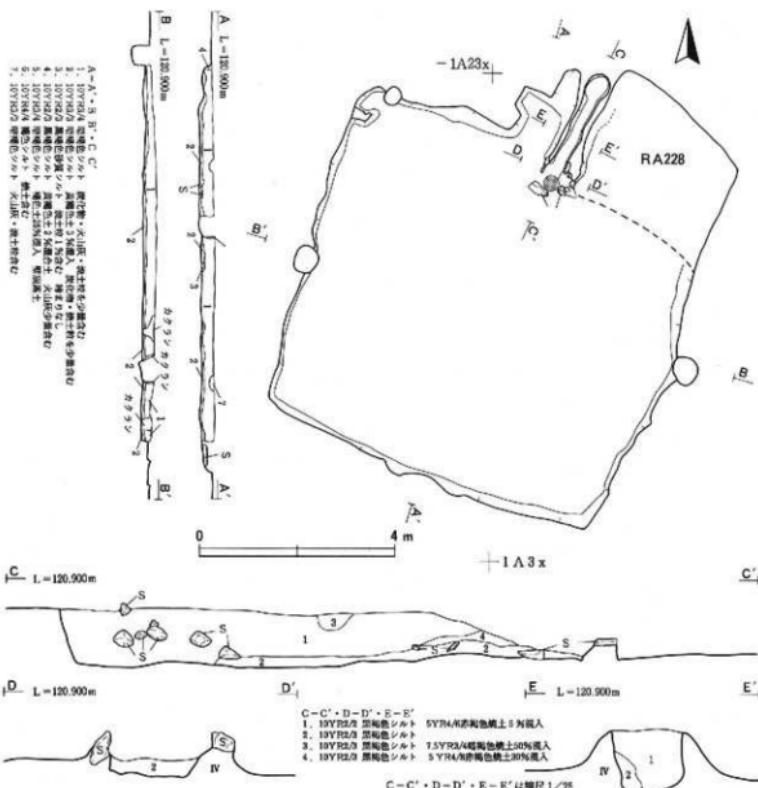
〈埋土〉暗褐色土を主体とする2層に大別される。上位～中位にかけては炭化物・焼土・火山灰を少量含む暗褐色シルト、下位は暗褐色シルトに黄褐色土が少量混入している。自然堆積の様相を呈している。

〈壁〉壁の上半部は崩落するものの、床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁20cm、西壁10cm、南壁22cm、北壁19cmを測る。

〈床〉床面はほぼ平坦で堅く織まり、円礫が散在する。重複するR A228とは床面の比高はない。

〈柱穴・貯藏穴〉検出されない。

〈カマド〉北壁のほぼ中央に設置している。本体部の左右袖部を含む大部分は崩壊しているが、燃焼部周辺に径8～40cmの亜角礫が8個散在しており、カマドの構築に関わるものである可能性もある。燃焼部の焼土



第5図 RA 116堅穴住居跡

範囲は径33×30cmの円形状である。支脚は確認されていない。

煙道部上半部は、削平のため切りぬき式かは不明であるが、長さは1.56mを測り、燃焼部床面からほぼ平坦に煙出し部へと続き、煙出し穴は径約54×48cmで深さ28cmの円形状土坑が掘り込まれている。埋土は黒褐色シルトに焼土と大小の礫を含んでいる。

(佐藤)

遺物（第56・57・58図・写真図版55・56）

埋土上位～中位で土師器の壺・甕、須恵器の壺・甕等が出土している。破片での出土が多いものの、尖測図と拓本を含めて14点を掲載した。

1～3はロクロ成形の土師器の壺である。1の内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。底部は一部に再調整を施している。口縁部は2が外傾し、3が内湾気味に立ち上がっている。底部の切り離しは回転糸切りで、3は一部に再調整を施している。

4・5は非クロロ成形の土師器の壺である。4は底部、5が口縁部を欠損している。4の口縁部は頸部からくの字状に外反し、口唇部に浅い2条の沈線が巡っている。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部内外面ともハラナデ調整である。5の底部は木葉痕で、内面はハケメ調整を施している。

6～14は須恵器壺の口縁部および体部破片である。6・7は口縁部破片で、6は口唇部を上に引き出している。10・12・14は体部内外面に平行叩き具痕、8・9・11・13は外面が平行叩き具痕、内面が放射状の当て具痕を施している。

時期 出土遺物から平安時代前期に比定される。

(高橋)

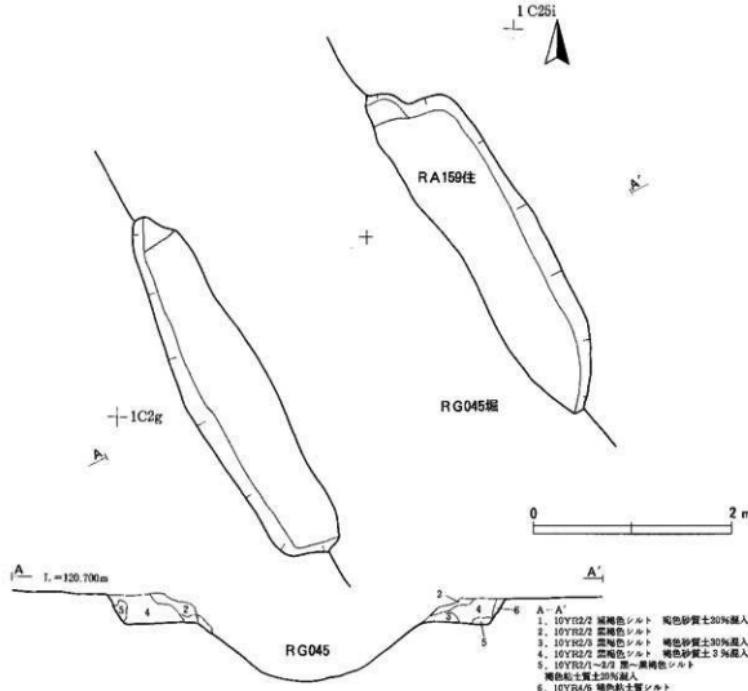
## 2) RA159堅穴住居跡

遺構(第6図・写真図版1)

〈位置・重複関係〉B調査区東側の1C区に位置し、遺構中央部をRG045溝跡によって切られている。

〈平面形・規模〉現存部から推定すると規模は3.41×3.18m、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉遺構中央部を溝跡に大きく切られているため、埋土は僅かしか残っていない。黒褐色シルトを主体とする6層に分けられ、褐色砂質土がブロック状に混入している。土層の堆積状況を観察すると、人為的に



第6図 RA159堅穴住居跡

埋め戻している可能性が強い。

〈壁〉壁は床面からやや急傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁27cm、西壁30cmである。

〈床〉溝に切られ大部分が失われている。現存部分は平坦で堅く締まっている。

〈カマド〉検出されない。RG045に切られたものと考えられる。 (佐藤)

遺物 遺構の中央部を溝跡によって掘削を受けているため、検出範囲が狭いことから遺物の出土はない。

時期 遺物の出土がないので明確でないが、重複するRG045溝跡から出土した遺物が平安時代前期の物に限定されることから、当遺構は奈良時代～平安時代前期に属するものと考えられる。 (高橋)

### 3) RA161堅穴住居跡

RA161は北側煙道部分のみが本調査区にかかり、大部分は第18次調査区にかかっていることから、詳細は第18次発掘調査報告に譲ることとし、遺構の位置・北カマド・北カマド周辺の遺物・時期の記載のみとする。

遺構 (第7図・写真図版2)

〈位置・重複関係〉B調査区東側の1B区に位置し、北側60cmにRA165堅穴住居跡、東側3mにRA128堅穴住居跡、RA186堅穴住居跡が近接している。北壁と西壁の2箇所にカマドを持ち、北側煙道はRA165を、西側煙道及び西壁の一部はRA139堅穴住居跡を切っている。

〈北カマド〉北壁のやや北東隅部寄りに位置し、左右袖部を含む本体部の大部分は崩壊している。燃焼部の焼土範囲は径60×45cmの不整規円形状で、層厚は最大で8cmを測る。燃焼部周辺の床面から土師器壊・甕の破片及び角錐形の甕が出土したが、カマドの構築材に関わるものであるかは不明である。支脚は確認されていない。

煙道の一部と煙出し部の上半部は削平されているが、長さは1.15mを測る削り貫き式の煙道で、燃焼部からほぼ平坦に60cmほど延びた後、約16度の下り勾配で煙出し部へ続く。煙出し部は現存する開口部で径46×40cm、深さ約23cmを測る円形状の土坑である。 (佐藤)

遺物 (第58図・写真図版57)

床面からの出土はほとんどないが、埋土中～下位から土師器や須恵器の壊・甕等が比較的多く出土しており、実測図・拓本合わせて10点掲載した。

15はロクロ成形され内面がミガキ後黒色処理された土師器の壊である。底部は回転糸切り後一部再調整され、体部は丸味を持って軽く外傾し、口縁端部はほぼ直立する。

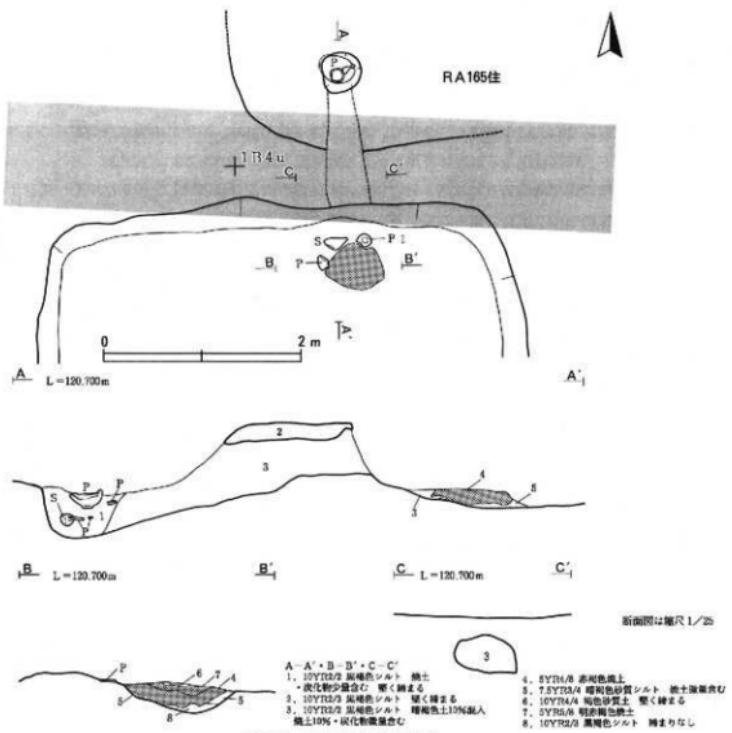
16・17はロクロ成形された須恵器の壊である。いずれも欠損しているが、底部は回転糸切り後再調整される。器形は底部から軽く内湾気味で大きく外傾し、口縁端部が軽く外方に折れる。

21は非ロクロ成形の土師器甕の底部から体部下半部の破片であるが、体部の外傾から球脛形になるものと推定される。器面調整は体部外面がハケメ、内面がヘラナデである。

19は須恵器の肩部に耳の付いた長頸瓶、20は壺もしくは瓶の破片であるが、いずれも肩部のみを残存する。両方ともロクロ成形され19は内外面ともロクロナデ痕跡、20は頸部から肩部最大径まではロクロナデ痕跡・体部は縱方向のヘラケズリ調整痕がある。

時期

遺物が埋め土の上～中位からの出土ではあるが、遺物の特徴が21のみは奈良時代と推定されるが、他は平安時代に属することから当遺構は平安時代前期9世紀代に位置づけられると推測される。 (高橋)



第7図 RA161堅穴住居跡

#### 4) RA164堅穴住居跡

遺構（第8・9図・写真図版3）

〈位置・重複関係〉B調査区東側1C区に位置し、北側55cmにR E005堅穴状遺構、西側1.52mにRA166堅穴住居跡が立地する。RD159土坑・RG157溝跡と重複し、これらを切っていることから新旧関係は（新）RA164→（旧）RD159・RG157である。遺構検出面はIV層の上面で、黒～黒褐色土の広がりによって確認している。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸長方形を呈しており、規模は5.19×4.29mである。

〈埋土〉埋土は黒褐色土を主体とする3層に大別される。上位～中位は焼土・炭化物を微量含む黒褐色シルト質土がレンズ状に堆積し、下位は褐色土を含む黒褐色シルトで構成され、堅く締まっている。南側と東側の崖際には暗褐色シルトの壁崩落土が堆積している。堆積状況の観察から自然堆積によって埋没したものと推測される。

〈壁〉壁の上半部は崩落しており、床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁34cm、西壁26cm、

南壁26cm、北壁26cmを測る。

〈床〉東側がやや低いものの、ほぼ平坦で堅く締まっている。床面から床上5cmで径8~20cmの亜角礫が20個ほど散在している。黒褐色シルト混じりの砂質土で貼り床が施されており、厚さは2~13cmである。

〈柱穴・貯藏穴〉検出されない。

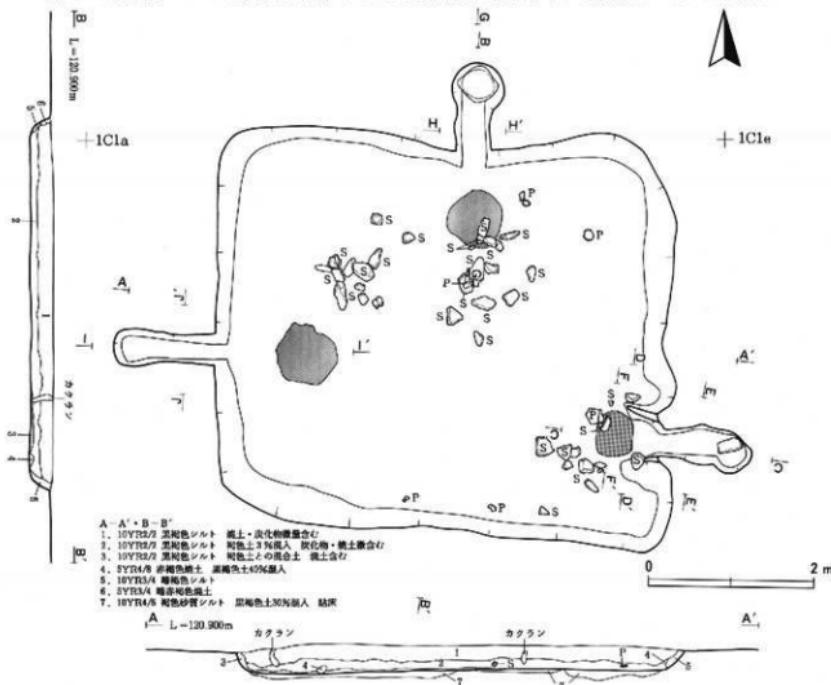
(佐藤)

〈カマド〉当住居跡では北壁中央部やや東寄り、東壁の南東隅部寄り、西壁の中央やや南寄りの3カ所から検出されているが、残存状況から最後に使用されたのは東壁のカマドである。

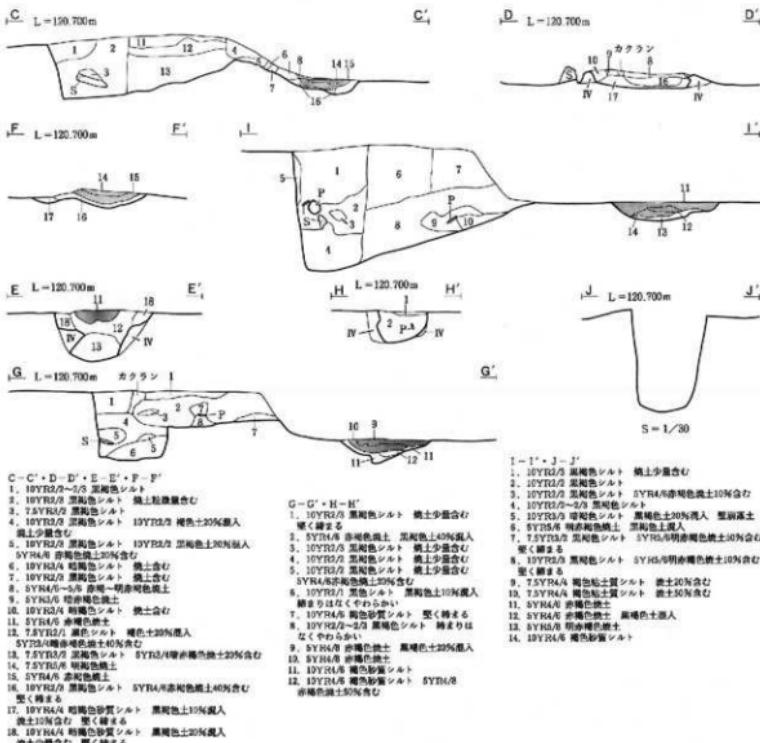
東カマド—東壁の東南隅部寄りに設置されている。本体部の大部分は崩壊し、僅かに袖部が残存するのみである。袖部はIV層を削り出して造られている。燃焼部の底面が住居床面から約22度の傾斜で立ち上がり煙道部へと続く。燃焼部は幅約40cm、奥行き約70cmほどであり、焼土の範囲は径56×45cmの梢円形状をなし層厚は最大で6cmを測る。支脚は確認されていない。

煙道部は削平され矧り貫き式かは不明であるが、長さは66cmで奥壁から約18度の下り勾配で煙出し部へ続き、煙出し部は径50×50cm、深さ35cmの円形形状の土坑である。埋土は黒~黒褐色シルトを主体に構成され、上位には赤褐色焼土が広がっている。

〈北カマド〉北壁のカマドは袖部等が残存しておらず、燃焼部を貼り床下から検出したことから、東壁のカ



第8図 RA 184整穴住居跡 (1)



第9図 RA 164縫穴住居跡 (2)

マドよりも古い時期に使用されていたものと考えられる。燃焼部の焼土は径70×66cmの不整形形状で、層厚は最大で9cmを測る。

煙道部は削平のため倒り貫き式かは不明であるが、煙道部底面は住居床面より8cm高く、長さは72cmを測る。煙出し部は径62×58cm、深さ43cmの円形状土坑で、煙道底面より20cm深く掘り下げている。

〈西カマド〉 西壁のやや南北隅部に設置する。北カマド同様に袖部等は残っておらず、燃焼部は貼り床下からの検出であるが、北・西カマドの新旧関係は不明である。燃焼部焼土の範囲は径75×72cmの梢円形、層厚は最大で10cmを測る。

詳細は不明であるが煙道部は倒り貫き式と思われ、長さは約93cmで住居床面から約20度の下り勾配で煙出し部へ続き、煙出し部は径46×45cm、深さ75cmの円形状の土坑が掘り込まれている。煙道内の埋土は上～中位にかけて多量の焼土を含む。

(高橋)

### 遺物（第58・59図・写真図版57・58）

埋土上～中位からのみの出土であるが、破片での出土が多くまた量的にも少ないが土師器や須恵器の坏・甕等が出土しており、その中から火薬匁や拓本で7点掲載した。

22～26はロクロ成形された土師器と須恵器の坏であるが、いずれも内外面ともロクロナデ痕のみを持ち、内面にミガキや黒色処理は観察されず、22～24の色調が明るい褐色であり土師器的であるが、本来は須恵器である可能性が強い。底部は回転糸切りで後一部再調整され、体部は丸味を持って軽く外傾し、口縁端部はほぼ直立する。

16・17はロクロ成形された須恵器の坏である。いずれも欠損しているが、底部は回転糸切りで再調整はない。器形は底部から直線的に大きく外傾し、口縁端部が軽く外方に折れる。

28・29・31・32は上師器の甕である。31はロクロ成形であるが、他は非ロクロ成形である。28・32は口縁部から体部、29は体部から底部を残すがいずれも大型の長胴形をなす器形と推定されるが、器外面が縱方向、内面が横または斜め方向のハケメ調整され、口縁部は内外面ともヨコナデ調整される。31はロクロ成形、底部回転糸切りされた体部から底部を残存する個体であるが、形状から球胴形と推定される。器面調整は内外面ともロクロナデ痕のみである。

27は外面に平行叩き目痕、内面に平行當て具痕を持つ須恵器大甕の体部破片である。

### 時期

遺物が埋め土の上～中位からの出土ではあるが、31以外の甕が非ロクロ成形と奈良時代的であるが、坏がいずれもロクロ成形であることを加味すると、平安時代初期の9世紀初頭頃に位置づけられると推測される。

(高橋)

### 5) RA165堅穴住居跡

#### 遺構（第10・11図、写真図版4・5）

〈位置・重複関係〉B調査区東側のI B区に位置し、南側60cmにはRA161堅穴住居跡、南東側1.35mにはRA186堅穴住居跡、東側2.00mにRA187堅穴住居跡が立地する。IV層の上面で黒～黒褐色土の広がりによって検出している。RA161堅穴住居跡の北カマド煙道と重複し、当遺構が切られている事から新旧関係は、(新) RA161→(旧) RA165である。

〈平面形・規模〉規模は3.70×3.57mを測り、平面形は隅丸長方形を呈している。南西コーナー及び南壁の一部は第18次調査区に延びている。

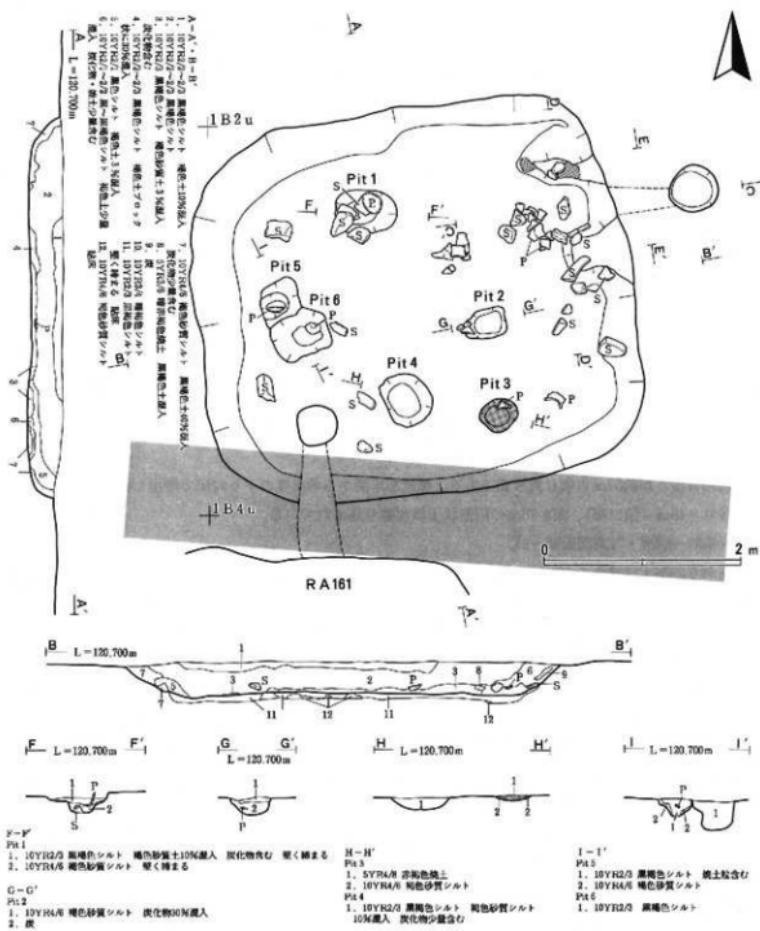
〈埋土〉黒褐色土を主体として構成される。上～中位は黒褐色シルト質土がレンズ状に、下位の一部は褐色砂質シルトで、堅く結まっている。4方の壁際には褐色砂質シルトに黒褐色土が混入する壁崩落土が堆積している。堆積状況の観察から自然堆積で埋没したものと推測される。

〈壁〉壁の上半部は崩落しており、南壁は床面から急傾斜で、他の壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁33cm、西壁28cm、南壁27cm、北壁22cmを測る。

〈床〉黒褐色シルトで貼り床が施されており、厚さは4～7cmである。北側が若干高いが、ほぼ平坦で堅く結まっている。

〈柱穴〉柱穴状土坑はP1～P6の6基を検出している。平面形はP1・P4・P6が椭円形、P2・P5が不整形、P3が円形を呈する埋土はP1・P4～P6では黑色土を主体に構成されている。P2は中位～下位に炭化物を、P3は上～下位にかけて焼土を含んでいる。いずれも位置的に主柱穴とは考えられない。

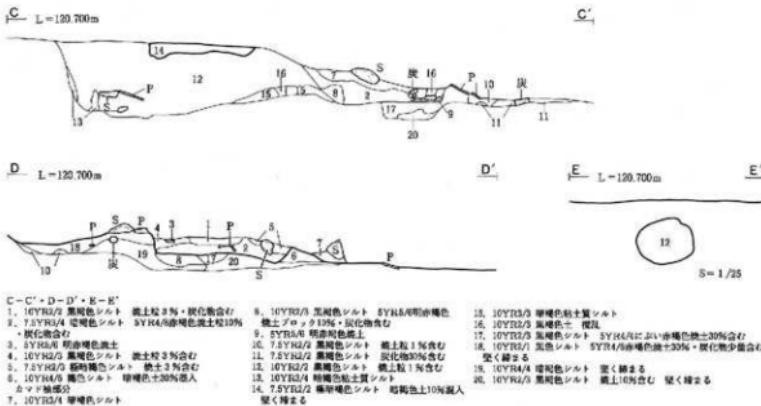
〈カマド〉西壁北東隅部寄りに位置している。袖部が僅かに残存するが大部分は崩壊している。燃焼部付近



第10図 R A 165堅穴住居跡 (1)

には数個の亜角砾と土師器壊の破片が散在するが、カマドの構築材に関わるものであるかは不明である。燃焼部は幅約50cm、奥行き約70cmほどである。袖部の一部に燃焼を受けた痕跡が確認された。支脚は確認され

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直徑cm	63×44	41×29	40×34	57×44	40×38	58×43
深さcm	20	18	5	12	17	29



第11図 RA165堅穴住居跡(2)

ていない。

煙道部は長さが約57cmの倒り貫き式である。燃焼部床面から約11度の下り勾配で煙出し部に続き、煙出しが部は径51×48cm(開口部)、深さ78cmの円形状土坑が掘り込まれている。  
(佐藤)

#### 遺物(第59~62図・写真図版58~61)

床面からの出土はほとんどないが、埋め上上~中位から多く出土しており、実測図と拓本を含めて23点掲載した。

33はクロコ成形、底部回転糸切り一部再調整、内面がミガキ後黒色処理された壺であり、体部が底部から軽い丸味を持ち外傾し端部が僅かに外反する器形を示す。30はクロコ成形、体部外面が上半部がロクロナデ、下半部が縦や斜め方向のヘラケズリ調整、内面ミガキ後黒色処理された底部を欠失する鉢である。34・35は非ロクロ成形の長胴形壺であるが、34は体部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ調整され、底径が大きく体部が軽く外方に膨らみながら外傾し、頸部で軽く窄んだ後口縁部が外反する器形をなす。35では体部外面が縦方向ハケメ、内面斜め方向ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ調整され、34より底径が小さく、底部から丸味を持って大きく外傾下体部が直立気味に立ち上がり、頸部で僅かに窄んだ後口縫部が大きく外反する器形を示し、34とは際だった違いがある。36はロクロ成形された長胴形の壺であるが、体部外面は上部がロクロナデ、中・下部はヘラケズリ、内面は中・上部がロクロナデ、下部の一部がヘラナデ調整される。器形は底径の大きな底部から僅かに膨らみながら立ち上がり、頸部で軽く窄んだ後口縫部が外反する。38は体部の下部と底部のみを残す非ロクロ成形された球胴形の壺であり、内外面にヘラナデやハケメ調整がある。

31~54までは須恵器であるが、器種には大壺・瓶・壺・長頸瓶がある。37はロクロ成形された壺であり、体部外面下半部は縦方向ヘラケズリ以外は内外面ともロクロナデ壺を残す。39・40・43~51大壺であるが、39・40はロクロ成形痕を残す口縁部破片である。43~51は外面に平行叩き具痕を付す大壺の体部破片であるが、内面には無文の43、45~51の平行當て具痕、44は平行當て具痕に放射状當て具痕が付される。41・42・52~54は壺・瓶である。41と53は内外面ともロクロ成形痕のみを残し口縁部~体部上部を残す41と、頸部~

肩部を残す大壺51である。42・52・54は長頸瓶であるが、42は口縁端部、52は頸部～口縁部、54は頸部下端～体部中位を残存し、体部外面の下半部がヘラケズリ調整される以外はロクロナデ調整のみである。

#### 時期

床面からの出土はほとんどないが、土師器甕にロクロ成形と非ロクロ成形が混在することと甕がロクロ成形であることから、平安時代初期～前期の9世紀前半頃に位置づけられるものと推測される。 (高橋)

### 6) RA166堅穴住居跡

遺構 (第12図、写真図6・7)

〈位置・重複関係〉B調査区東側の1B～1C区に位置し、東側1.52mにRA164堅穴住居跡、北東側1.83mにRE005堅穴状遺構、東側40cmにRG157溝跡が立地する。RA187堅穴住居跡(平安時代)と重複し、当遺構が切られている事から新旧関係は、(新)RA187堅穴住居跡→(旧)RA166堅穴住居跡である。検出面はIV層上面で、黒～黒褐色土の広がりによって確認している。

〈平面形・規模〉規模は2.72×2.64mで、平面形は隅丸方形を呈している。

〈埋土〉黒～黒褐色土を土体とし、6層に分けられる。下位に焼土と炭化物を少量含んでいる。北西側と南東側の壁際には暗褐色シルトの壁崩落土が堆積している。人為的な埋め戻しの可能性が強い。

〈壁〉壁は床面からやや急傾斜に立ち上がっており、壁高は南東壁24cm、北西壁25cm、南西壁30cm、北東壁20cmを測る。

〈床〉重複するRA187の床面より約15cm高く、平坦で堅く締まっている。

〈柱穴・土坑〉検出されない。

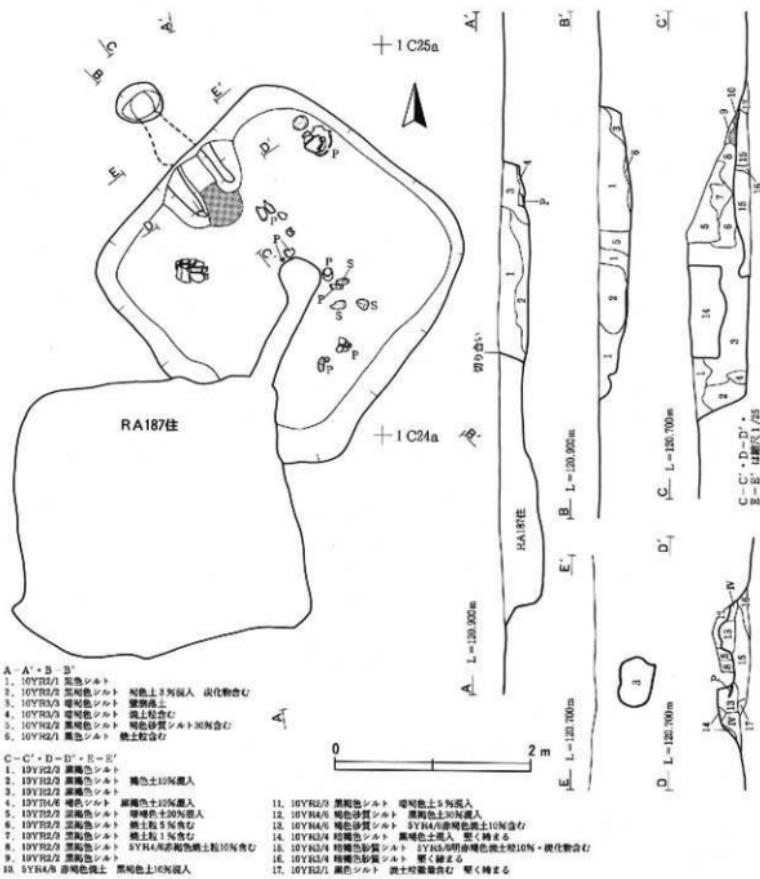
〈カマド〉北西壁のほぼ中央部に設置されている。袖部はIV層を削り出して造られており、芯材に石や甕等の使用は認められない。燃焼部は径45cm×44cmの円形状で、焼土の層厚は最大で7cmを測る。支脚は確認されていない。

煙道部は削り貫き式で、長さは0.49mを測り、本体部からほぼ平坦に煙出し部に続いている。煙出し部は径48×40cm(開口部)、深さ54cmの楕円形状の土坑が掘り込まれている。 (佐藤)

遺物 (第62・63図、写真図版61・62)

床面と床面土坑からの他に埋め土内からも小破片が出土したが、床面と床面土坑から出土した6点を実測図で掲載した。

出土した遺物には非ロクロ成形された土師器甕と甕の他、ロクロ成形された須恵器甕がある。56はロクロ成形され底部が回転糸切りで周辺部が再調整された須恵器甕である。55は土師器甕であるが、底部が小平底状で体部が軽い丸味を持って大きく外傾する器形をなし、器面は内外面ともヘラナデ調整されるが、外面には微かなハケメが部分的に残っている。57・58・60は土師器長胴形甕であるが、57は底部を欠失する。体部は僅かな膨らみを持って底部から外傾して頸部で軽く窄み口縁部は外反や外傾または外反した後直立気味に立ち上がり受け口状になる器形である。器面調整は、口縁部は外面はヨコナデと共に通するが、内面はヨコナデかヘラナデ・ハケメがあり、体部の外面にはハケメ・ヘラナデ・ミガキがあり、内面についてもほぼ同様な様相を示す。特徴的なことは、58の頸部が有段であることと60の頸部に2条一単位として鋸歯状沈線が2段と山形状沈線が付されることである。59は土師器の球胴形甕であるが、器形以外の器面調整については長胴形のそれと同様である。



第12図 RA 166整穴住居跡

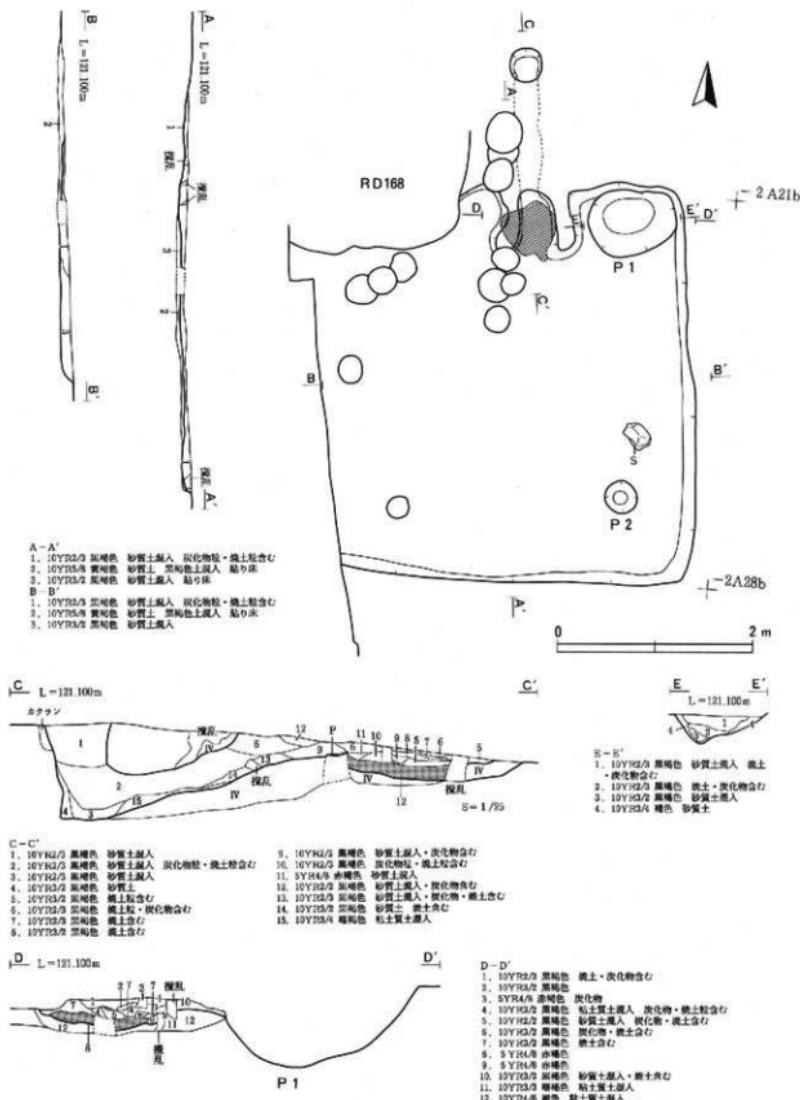
#### 時期

ほとんどの遺物が遺構に伴う形で出土しているとは言え、56の須恵器壊の存在が気掛かりである。56以外の土器はすべて同様の特徴を持つことから、遺構に直接伴うのは土器壊とすると、古墳時代末期～奈良時代前期の7世紀末～8世紀前半に位置づけられるものと推測される。

(高橋)

#### 7) RA 172整穴住居跡

遺構(第13図・写真図版8)



第13図 RA 172堅穴住居跡

〈位置・重複関係〉 A調査区東側の2A区に位置し、北側10mにR A197堅穴住居跡、南側8mにR A198堅穴住居跡、東側2mにR D190土坑が立地している。北西部分がR D169土坑と重複し当遺構が切られている他、西側が現用道路に延びているため、全体の調査は出来なかった。

〈平面形・規模〉 R D168上坑との重複と道路下に延びるため全体規模は不明であるが、相対する壁の明確な南北方向が約4mであることから、本来は4m×4m前後の規模と推定され、平面形は方形または長方形を呈するものと推測される。

〈埋土〉 中層に黄褐色が混在するものの黒褐色土を主体とし、全体が3層に分けられる。下位が砂質であり上層には炭化物や焼土粒を含む。土層の堆積状況から自然堆積による埋没と推測される。

〈壁〉 壁は床面からやや傾斜して立ち上がっており、南側と東側の最深部で約10cm、その他は不明である。

〈床〉 若干の起伏が見られるものの、ほぼ平坦で堅く舗まり、部分的に貼り床が観察される。

〈柱穴・土坑〉 カマド右袖の右側北東隅部の北壁際に東西約1m、南北約65cm、深さ約30cmの柱穴P1と、径約35cmほどの柱穴状のP2が検出されている。その他、実測図に記載されている柱穴状の小土坑は時期の新しい土坑であり、関連はない。

〈カマド〉 北壁の中央部と推定される位置に設置されている。袖部はIV層を削り出して造られ、芯材に石や甕等の使用は認められない。燃焼部は幅35cm、奥行き70cmほどあり、焼土の範囲が50cm×50cmの円形状で層厚は最大で7cmを測る。支脚は確認されていない。

煙道部は割り貫き式で、長さは1mを測り、燃焼部床面からほぼ平坦に煙出し部に統一、約30度の下り勾配で次第に低く掘り込まれ、煙出し穴は径約30cmで約50cmの深さの土坑状である。

#### 遺物（第62図、写真図版62）

カマド付近の他埋め土下部などから土器が出土しているが、他破片での出土が多く、5点の実測図を掲載した。

出土した遺物には非ロクロ成形された土器器環・甕の他、ロクロ成形された土器器環がある。61はロクロ成形され底部回転糸切りで内面ミガキ黒色処理される。62～64も61同様ロクロ成形された土器器環であるが、内面のミガキ後黒色処理がなく、底部は回転糸切り無調整であり、64には高台が付される。65は非ロクロ成形の休部の下半部～底部の一部を残す土器器長胴形甕であり、器面調整は、外側がヘラナデ、内側はカキメ調整される。

#### 時期

出土した土器の特徴から平安時代前期9世紀代後半頃に位置づけられるものと推測される。（高橋）

### 8) R A175堅穴住居跡

#### 遺構（第14図・写真図版9）

〈位置・重複関係〉 A調査区東端部の2A区東隅部に位置し、南側約20mにR A197堅穴住居跡が立地し、北側が現用道路に延びる他南部をR G101が掘削している等、検出された範囲が一部であるため、全般的なことは不明である。

〈平面形・規模〉 既述のように重複と道路下に延びる等のため規模や平面形等定かでないが、検出された西の一部が直線的であることから規模は不明であるが平面形は方形か梢円形と推測される。

〈埋土〉 全体がやや粘性としまりのある黒褐色土を主体とし、混入物によって5層に分けられる。全体に砂粒が混入するが下層ほど量が多く、4層には黄褐色土粒が多量に混入している。自然堆積による埋没と推測

される。

〈床〉小起伏が見られるものの、平坦で堅く締まり、床面全面に貼り床が観察される。

〈柱穴・土坑〉西壁際に長径約1m、短径約70cm、深さ約25cmの貯蔵穴P1と、径約30cmほどの柱穴状のP2が検出されている。

〈カマド〉調査・検出された範囲からは検出されていない。

遺物（第63・81図・写真図版62・76）

埋土内から須恵器長頸瓶の破片が1点出土したのみである。

66はロクロ成形された須恵器の長頸瓶の頸部～口縁部を残存する破片である。内外面ともロクロナデ痕のみを付す。

時期

出土した長頸瓶から平安時代と推測されるが詳細な時期は定かでない。

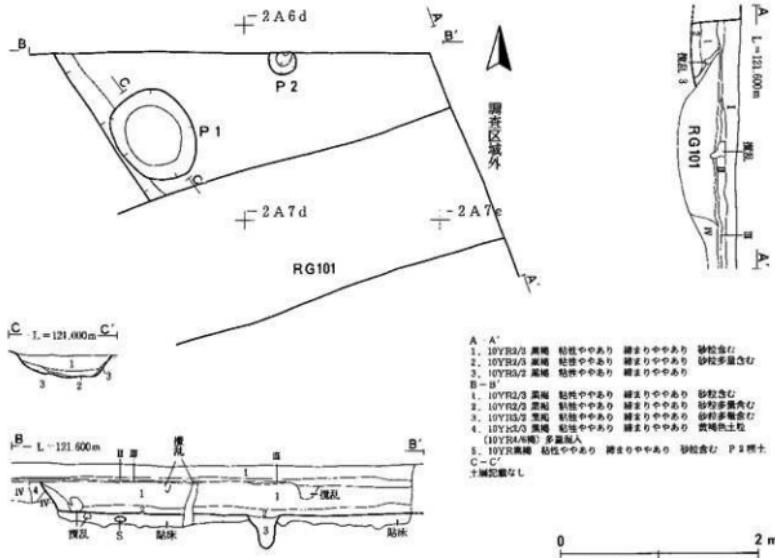
（高橋）

### 9) RA186堅穴住居跡

遺構（第15図・写真図版10・11）

〈位置・重複関係〉B調査区東側の1B区に位置し、北側の23cmにRA187堅穴住居跡、北西側1.35mにRA165堅穴住居跡が立地する。遺構南側でRA128堅穴住居跡と重複し、切られていることから新旧関係は、（新）RA128→（旧）RA186である。検出面はIV層上位である。

〈平面形・規模〉北西隅部を含む遺構南側の大部分は隣接する第18次調査区内に延びている。平面形は隅丸



第14図 RA175堅穴住居跡

方形を呈すると考えられ、現存する規模は東辺1.79m、西辺1.90m、北辺2.85mである。

〈埋土〉 R A128に切られて僅かしか残っていないが、黒褐色シルトを主体とし、中位～下位にかけて褐色土が混じっている。自然堆積による埋没と考えられる。

〈壁〉 床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高は東壁29cm、西壁21cm、北壁27cmを測る。

〈床〉 重複するR A128との床面の比高はないが、小起伏があるもののほぼ平坦で堅く締まっている。

〈柱穴〉 検出されない。

〈カマド〉 北壁側の中央部に設置している。一部は崩壊しているが左右の袖部も良く残存し、燃焼部内から甕が2個埋設された状態で出土している。両袖部はIV層の削り出しで造られ、焚き口部には土師器長胴形甕を倒立で埋設している。支脚は確認されていない。燃焼部は幅約45cm、奥行き60cmほどあり、燃焼部の焼土は明確にされていない。煙道部は割り貰き式と思われるが上半部は削平され不明である。長さは85cmあり、燃焼部床面から平坦に伸びて煙出し部へと続き、煙出し部は径35×32cm前後、深さ40cmの円形容の土坑が掘り込まれている。

(佐藤)

遺物（第63・64図・写真図版62・63）

カマド内とカマド焚き口部埋設の他床面・埋め土内から出土しており、実測図を8点掲載した。

出土した遺物はすべて非ロクロ成形の土師器甕のみである。67～71・73・74の7点は長胴形の甕であるが、69・71がカマド内の埋設土器であり、68・70が焚き口部の埋設土器である。体部と口縁部の器形に若干の異同は見られるものの、器面調整は73がミガキが多用される他は内外面とも大同小異のハケメを多用している。72の器形は体部がやや膨らむ球胴形を示す他、器面調整は同様である。

時期

出土した土師器の特徴から奈良時代8世紀前半に位置づけられるものと推測される。

(高橋)

## 10) R A187堅穴住居跡

遺構（第16図、写真図版12・13）

〈位置・検出〉 B調査区東側の1C区に位置し、東側2.51mにR A164堅穴住居跡、西側2.00mにR A165堅穴住居跡、南側23cmにR A186堅穴住居跡が立地している。IV層の上面で黒～黒褐色土の広がりによって検出している。R A166堅穴住居跡と重複し、当遺構が切っている事から新旧関係は（新）R A187→（旧）R A166である。

〈平面形・規模〉 規模は2.39×2.37mで、平面形は方形を呈している。

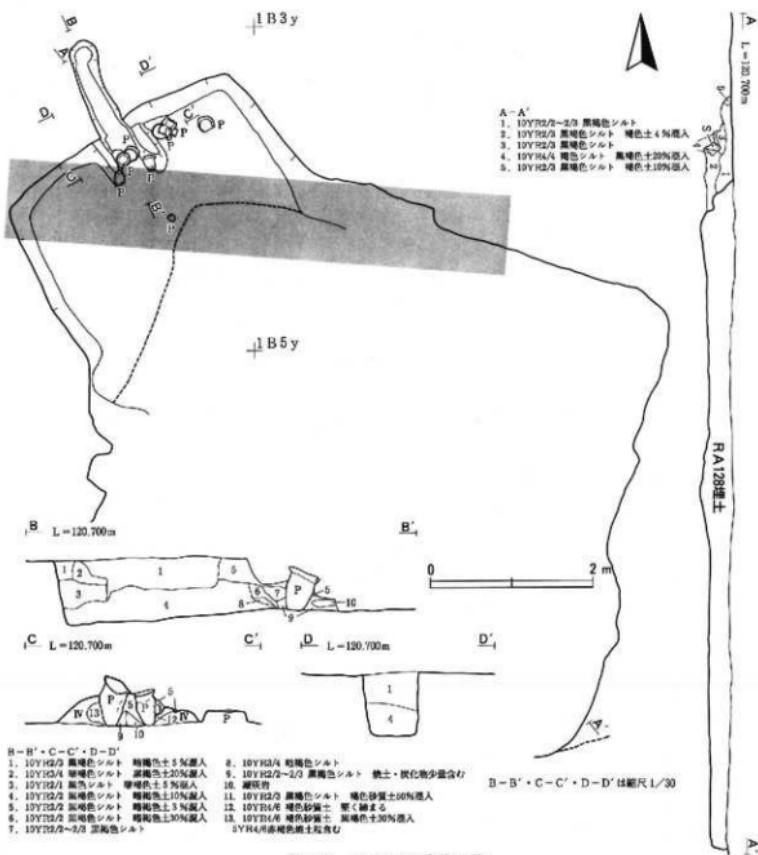
〈埋土〉 黒褐色シルトを主体とする6層に大別される。下位には褐色土を多く含んでいる。自然堆積による埋没と推測される。

〈壁〉 北東コーナー付近はR A166との切り合いにより、壁の上半部が失われている。西壁はやや緩やかな傾斜で立ち上がり、他の壁は床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は北壁43cm、東壁25cm、南壁56cm、西壁40cmを測る。

〈床〉 床面はIV層中にあり、ほぼ平坦で堅く締まっている。重複するR A166の床面より約15cm低い。

〈柱穴〉 柱穴状土坑はP1、P2の2基を検出しているが、いずれも位置的に主柱穴ではない。P1の平面形は不整形を呈する。埋土は黒褐色シルトの単層で、焼土・炭化物を含んでいる。P2は平面形が円形を呈し、埋土は4層に分かれれる。黒褐色土を主体とし、上～中位にか

土坑No	P 1	P 2
直径cm	39×35	43×40
深さcm	6	31



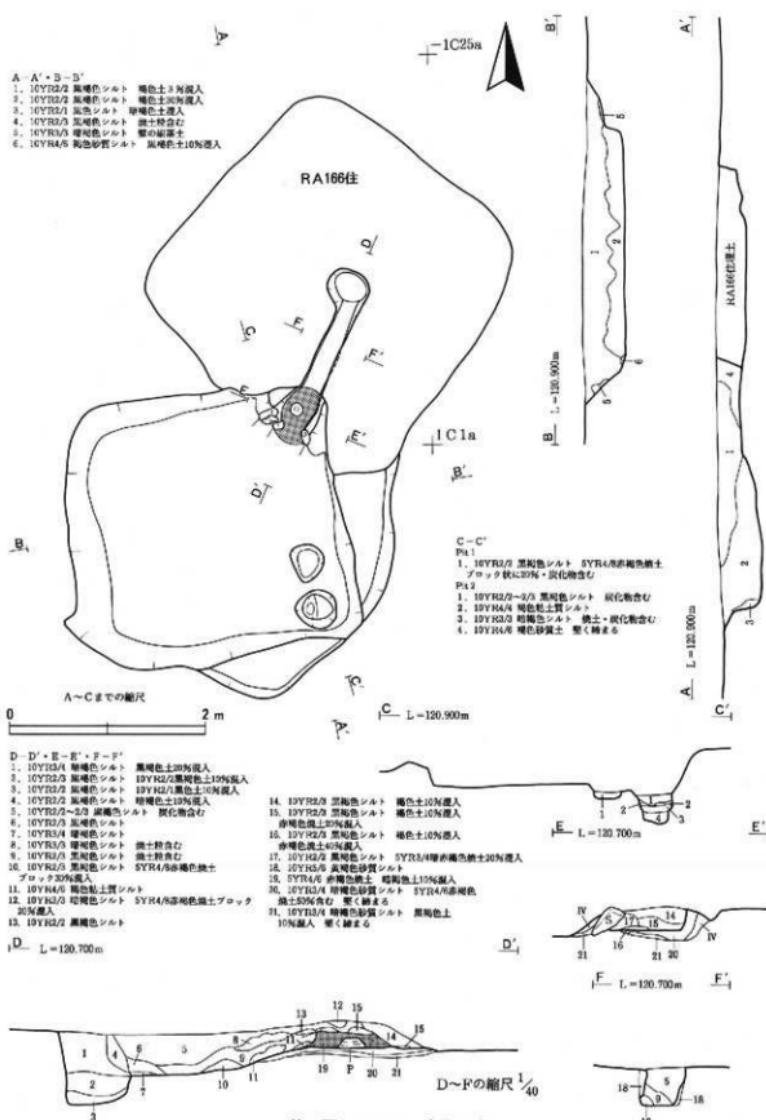
第15図 RA 186堅穴住居跡

けて炭化物・焼土を含んでいる。

〈カマド〉北東隅部に設置されている。北壁と東壁を袖部として利用しており、左袖部に2個、右袖部に1個の亜角礫が芯材として焚き口部に据えられている。燃焼部は幅約55cm、奥行き約70cmであり、燃焼部の焼土は径60×37cmの不整形状の範囲を呈し、最大16cmの厚さがある。燃焼部中央には支脚と考えられる土師器の环が据えられている。

煙道部の上半部は削平のため割り貫き式かは不明であるが、長さが93cmを測り燃焼部奥壁から20度の下り勾配で煙出し部へと続き、煙出し部は径44cm×35cm、深さ16cmの橢円形状土坑で、煙道部底面より約15cm深く掘り込まれている。

(佐藤)



#### 遺物（第64・65図・写真図版63）

カマド燃焼部の他、埋め土内から出土しているが、量も少ないとから実測図と拓本合めて3点掲載した。75はカマド燃焼部に支脚として据えられたロクロ成形され底部回転糸切り再調整、内面ミガキ後黒色処理された坏である。76は非ロクロ成形の長胴形壺の体部中位～底部を残す破片であり、体部の内外面はヘラナデ調整される。77はロクロ成形され内外面にロクロナデ痕を持つ須恵器の壺または瓶の体部破片である。

#### 時期

カマド内から出土した土師器坏の特徴から平安時代前期の9世紀後半に位置づけられるものと推定される。

（高橋）

#### 11) RA188堅穴住居跡

##### 遺構（第17図・写真図版14）

〈位置・重複関係〉B調査区中央部の1B区に位置し、北東隅部と煙道の一部以外は第18次調査区に延びている。南西側1.70mにはRA183土坑が立地する。RA139堅穴住居跡と重複し、切っていることから新旧関係は（新）RA188→（旧）RA139である。検出面はIV層の上面で、黒～黒褐色土の広がりによって検出している。

〈平面形・規模〉遺構の中心を道路に切られていることから詳細は不明であるが、検出された範囲と形状から推定すると、規模は約5.00×4.50m、平面形は方形または菱形の形状を呈すると考えられる。

〈埋土〉黒褐色土を主体とし、上位に十和田a火山灰を含み、中～下位にかけて炭化物を微量含んでいる。自然堆積の様相を呈している。

〈壁〉床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁で35cm、西壁で31cmを測る。

〈床〉床面はIV層中にあり、ほぼ平坦で堅く締まる。北西コーナー付近の床面で、径28×16cmの楕円形状焼土を検出している。重複するRA139の床面との比高差はない。

〈柱穴〉検出されない。

〈カマド〉東壁側の北東隅部寄りに設置している。袖部が現残する他は崩壊しており、燃焼部は幅・奥行きとも不明の他、燃焼部の焼土についても約径22cmの不整形状に広がる焼土を確認したが、大部分は道路の下に潜るために詳細は不明である。芯材・支脚とも存在の確認が出来ず不明である。

煙道部は長さ約66cmを測る割り貫き式で、燃焼部奥壁から約35cm平坦に延びた後、煙出し部に28度の傾斜で下っている。煙道内の一部の側壁が火熱によって赤褐色の変化が見られ、煙出し部は径53×50cm、深さ25cmの円形状土坑が掘り込まれている。

（佐藤）

##### 遺物（第65図・写真図版63）

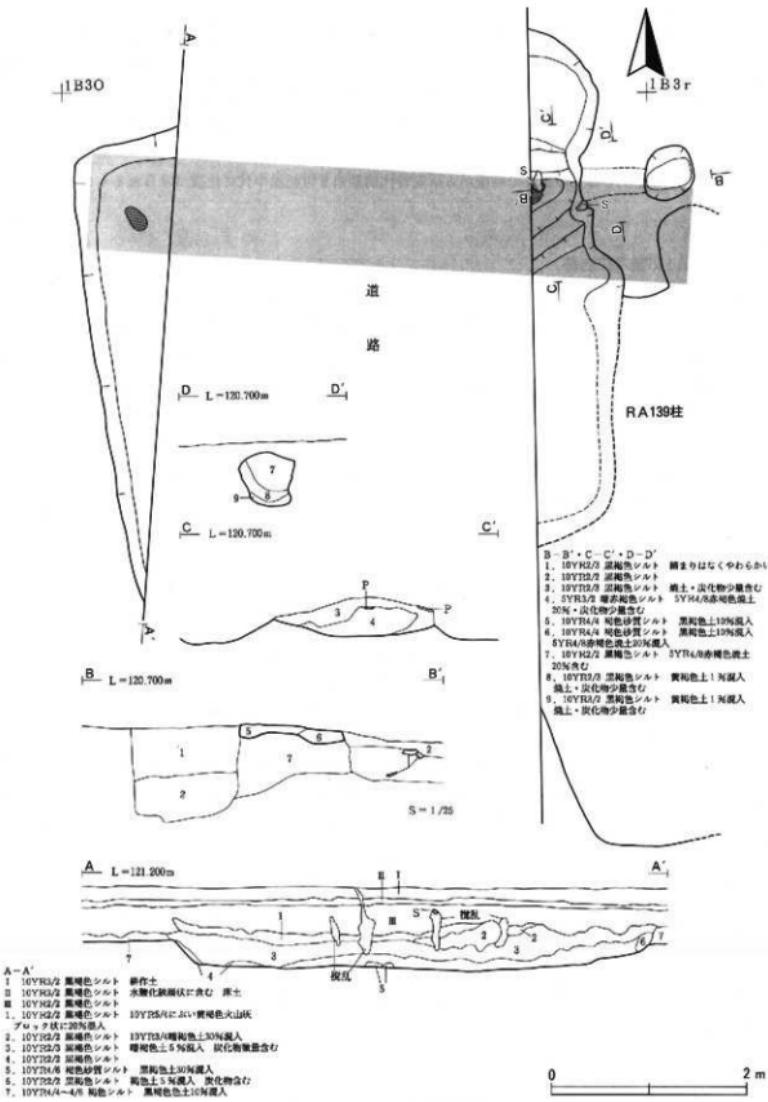
埋め土内から須恵器の破片が1点出土しており、実測図で掲載した。

78は大甕の肩部上位から口縁部を残す破片であり、頸部～口縁部はロクロナデ痕が顕著であり、肩部は外曲が平行叩き具痕・内面は青海波文か同心円文の當て具痕を付す。

#### 時期

出土した遺物が須恵器大甕の破片であるため時期の特定は困難であるが、奈良時代～平安時代の遺構と推測される。

（高橋）



第17図 RA 188堅穴住居跡

## 12) RA197堅穴住居跡

遺構（第18図・写真図版15）

〈位置・重複関係〉 A調査区東側のほぼ中央2A区に位置し、南側10mにRA172堅穴住居跡、北東側20mにRA175堅穴住居跡が立地している。重複する遺構もなく単独で検出された。

〈平面形・規模〉 南東-北西約3.1m、南西-北東が約3.2mの規模があり、平面形は若干不整ではあるが方形である。カマドが確認されていないので主軸方位は定かでないが、磁北に対して約20度ほど北西に傾く。

〈埋土〉 主体は砂質か砂質土が大量に混入した黒褐色土であるが、色調では黒色～褐色まで差があり、混入物も2層には炭化物、6・11層には炭化物と焼土粒、10層には焼土が混在する。土層観察から自然堆積による埋没と推測される。

〈壁〉 床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁高は30cm～35cmを測る。

〈床〉 若干の起伏が見られるものの、ほぼ平坦で堅く締まり、全体的に最大で約10cmほど貼り床されている。また、床面上に炭化物や焼土粒が散在する状況が観察されていることから、当住居跡は焼失した可能性を考えられる。

〈柱穴・土坑〉 まったく検出されていない。実測図に記載される柱穴状の小土坑は時期の新しい土坑であり、関連はない。

〈カマド〉 所謂カマド跡は確認されていないが、南隅部付近の壁近くの床面から炭化物が混在し15cm×40cmの不整形に広がる焼土を検出したが、カマド跡の痕跡なのかは明確にできなかった。

遺物

埋め土内や床面から遺物がまったく出土していない。

時期

遺物の出土がないため時期を明示出来ないが、周辺部から検出されている遺構の時期や当遺構の形状などから奈良時代か平安時代の住居跡と推定される。  
(高橋)

## 13) RA198堅穴住居跡

遺構（第19図・写真図版16）

〈位置・重複関係〉 A調査区東側の2A区に位置し、北側7mにRA192堅穴住居跡が立地し、南部と西部は現用道路の下に延びているため、全体の調査は出来なかった。また、RG138溝跡とRD195土坑が当住居跡と重複するが、当遺構の方が旧いことが確認されている。

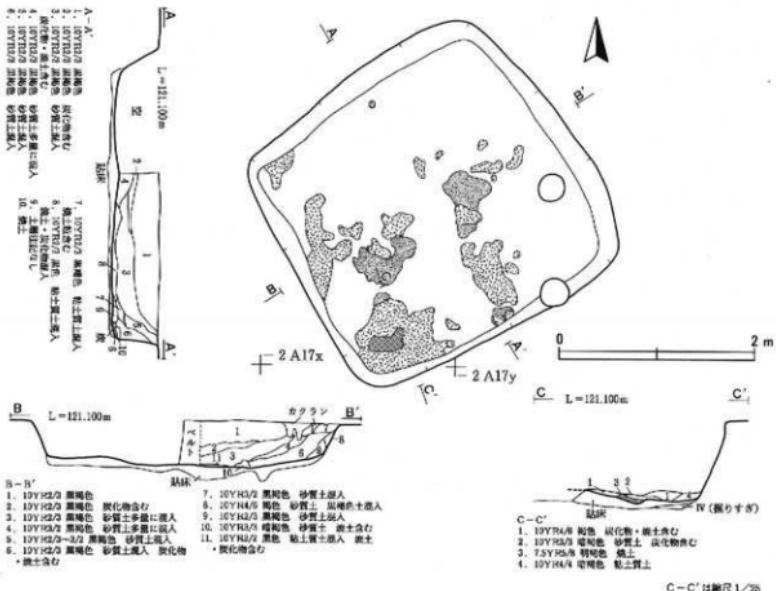
〈平面形・規模〉 現用道路下に延びるため全体規模は不明であるが、検出された部分は東西1.8m、南北2mであることから、全体では2m以上の規模と推測される。平面形は検出された形状から方形または長方形形を呈するものと推測される。

〈埋土〉 砂質土が混入した黒褐色土が主体であるが、混入物の種類と多少によって6層に分類される。堆積の状況から自然埋没したものと推定される。

〈壁〉 壁は床面からやや傾斜して立ち上り、北側で約10cm、東側が約16cmの壁高がある。

〈床〉 僅かな起伏が見られるものの、ほぼ平坦で堅く締まり、全体的に貼り床で構築される。

〈柱穴・土坑〉 所謂貯蔵穴状の土坑は検出されていないが、東壁際の床面から3基と北西隅部寄りの壁際と床面から各1基の合わせて5基の柱穴状土坑が検出されている。P1とP3が住居跡の主柱穴である可能性が推測されるものの、明確ではない。



第18図 RA 197堅穴住跡

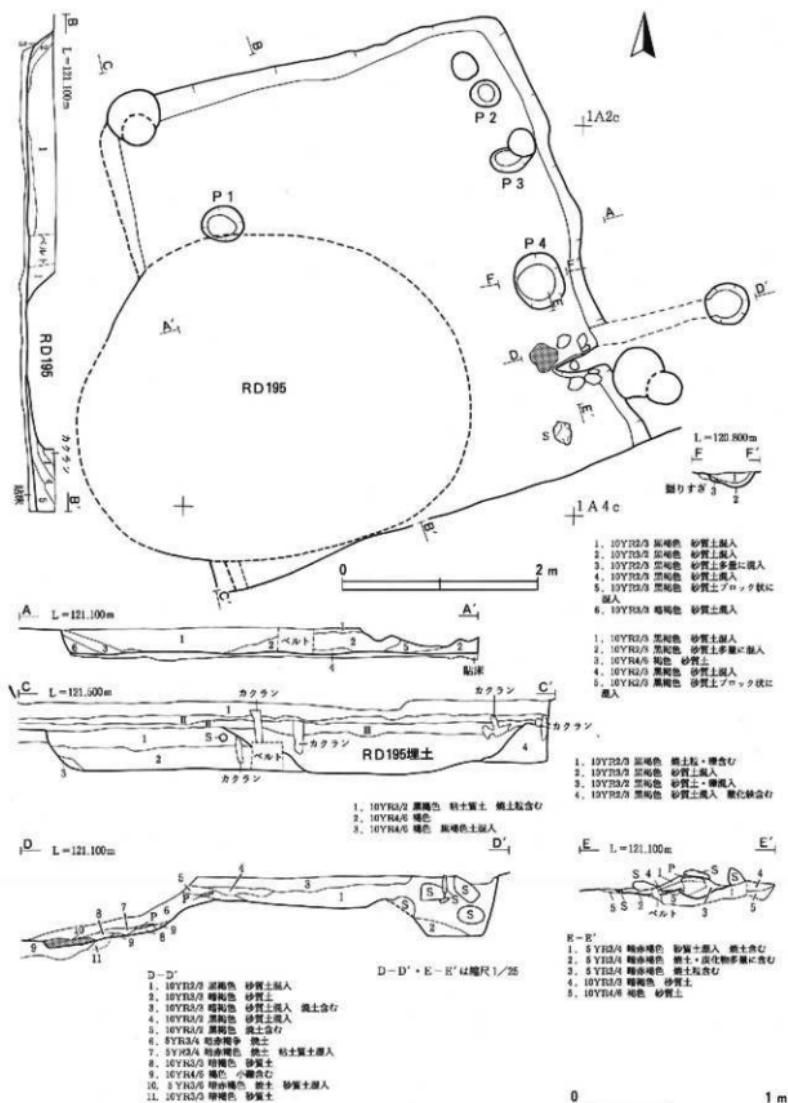
〈カマド〉東壁の両隅部寄りと推定される位置に設置されている。右袖部を残存するのみで詳細は不明であるが、燃焼部の幅が約35cm前後、奥行き約50cmの広さと推定され、燃焼部の焼土は層厚8cmで30cm×30cmの不整円形の範囲に広がり、土師器壺を倒立で据えた支脚が確認されている。

煙道部は割り貫き式で、長さは1.6mを測り、燃焼部の奥壁から若干の下り勾配で煙出し部に続き、煙出し穴は径約45cmの円形で約65cmの深さがあり、煙道底面より約25cmほど深く掘られている。

#### 遺物（第65・66図、写真図版63・64）

カマド内や煙出し穴から土師器が出土しており、実測図を10点掲載した。

79~81はロクロ成形後底部が回転糸切り離された环であるが、79と80の内面はミガキ後黒色処理されるが、81はロクロ成形痕のみで再処理のない所謂赤焼き土器である。7点の甕は87・88のロクロ成形と、他の82~86の非ロクロ成形の2種類に分けられる。ロクロ成形された2点は体部~底部を残し底部が回転糸切り無調整であり、共に小型の甕である。非ロクロ成形の5点は、82の口縁部が丸味を持って大きく外反する器形と他の個体と違があるものの、そのほかは体部寸胴に近く口縁部が短くさらに小さく外反する器形と共に通する。器面調整は、口縁部は両面共ヨコナデが主とほぼ共通し、体部の外面は82がハケメ・ヘラナデの後ヘラミガキされ、他はヘラナデかヘラケズリと共通し、内面はヘラナデかハケメとすべて共通する。



第19図 RA 198堅穴住居跡

### 時期

出土した土師器の特徴に奈良時代的な82を含んでいるが、他の個体にはほぼ共通した時期的な特徴を示すことから、平安時代前期9世紀代後半頃に位置づけられるものと推測される。(高橋)

#### 14) R A200堅穴住居跡

遺構(第20図・写真図版17)

〈位置・重複関係〉B調査区の西側-1B区に位置し、西側20cmにR A228堅穴住居跡、北側1.20mにR B009掘立柱建物跡が立地する。R A209堅穴住居跡と重複し、これを切っていることから新旧関係は、(新)R A200→(IH) R A209である。

〈平面形・規模〉R A209住居跡との重複により北東隅部及び東壁が判然としないが、検出・調査された部分より規模は西辺4.18m、南辺約4.53m、北辺約1.89mであり、平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると考えられる。

〈埋上〉黒褐色土を主体とする2層に大別される。上位は褐色土が混入し堅く締まり、中～下位は焼土粒・炭化物が微量含まれる。自然堆積の様相を呈している。

〈壁〉壁の上半部は削平されており、床面から急傾斜で立ち上がり、壁高は西壁約21cm、南壁約28cm、北壁約26cmを測る。

〈床〉重複するR A209の床面との比高はほとんどなく、小起伏があるもののほぼ平坦で堅く締まり、段丘疊層の大小の円錐が露出し散在する。

〈柱穴〉検出されない。

〈カマド〉北壁のやや北東隅部寄りに設置している。袖部を含む大部分が崩壊しており、残存するのは燃焼部の焼土と煙道である。燃焼部付近には径10～25cmの礫が散在するが、カマドの構成に関わるものかは不明である。燃焼部の焼土は径101×82cmの椭円形状をなし層厚は最大で7cmを測る。支脚は確認していない。

煙道部の上半部が削平されている事から割り貫き式かは不明であるが、長さは1.13mを測り、燃焼部奥壁から約7度の下り勾配で煙出し部へと統き、煙出し部は径53×53cm、深さ29cmの円形の土坑が掘り込まれている。

埋土は黒褐～暗褐色土で構成されており、下位は砂礫を含む黒褐色シルトが堆積している。(佐藤)

遺物(第66図・写真図版64)

埋め土内の他床面とカマド内から出土しており6点の実測図と拓本を掲載した。

89～91はロクロ成形された壺(89・90)と高台付き壺(91)であるが、体部の内外面ともロクロナデ痕のみを持ち内面ミガキ後黒色処理のない所謂赤焼き土器である。いずれも底部が回転糸切り無調整であるが、91には高台が付される。92・93はロクロ成形された口縁部～体部、底部～体部を残す土師器長胴型壺であるが、器表は体部の上半部はロクロナデ痕、下半部はヘラケズリ調整され、内面はロクロナデやカキメが観察される。94は外面に平行叩き具痕、内面に同心円文や青海波文を付す須恵器大甕の体部破片である。

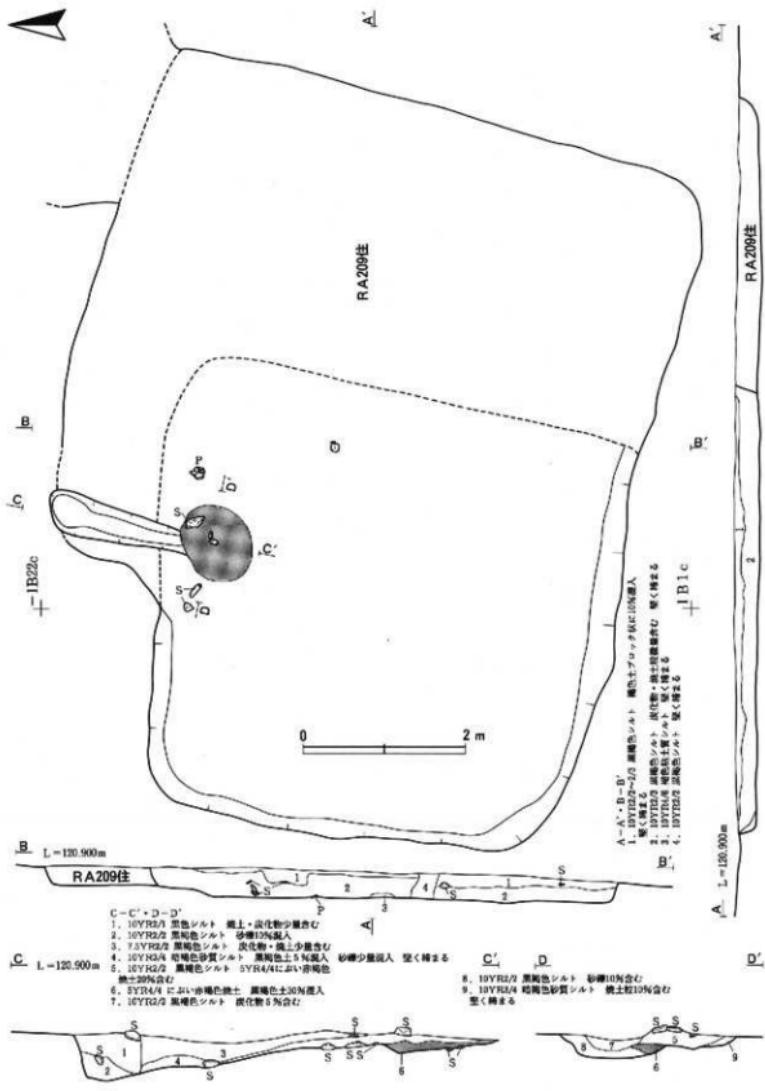
### 時期

出土した土師器の壺と壺の特徴から、平安時代中期10世紀代に位置づけられるものと推定される。(高橋)

#### 15) R A209堅穴住居跡

遺構(第21図・写真図版17)

〈位置・重複関係〉B調査区の西側-1B区に位置し、北側1.50mにR B009掘立柱建物跡が立地する。



第20図 RA 200整穴住居跡

R A 200堅穴住居跡に切られ、R E 006堅穴状遺構を切っていることから、新旧関係は（新）R A 200→R A 209→（旧）R E 006である。北壁の一部はR A 200堅穴住居跡と接している。

〈平面形・規模〉遺構南西部部分をR A 200に切られていることから詳細は不明であるが、残存部分より平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。検出された部分から、規模は東辺約6.34m、南辺約2.96m、北辺約6.02mを測る。

〈埋土〉炭化物・焼土を含む黒褐色土を主体とする5層で構成されている。東壁際には褐色粘土質シルトが堆積している。自然堆積の様相を呈している。

〈壁〉壁の上半部は崩落しているものの、床面から緩やかな傾斜で立ち上がりっている。壁高は東壁24cm、南壁16cm、北壁23cmを測る。

〈床〉床面はほぼ平坦で堅く締まり、床面上に大小の礫が散在している。重複するR A 200の床面との比較はない。焼土が2箇所に広がっており、北側の焼土1は径143×64cmの不整形、南側の焼土2は径70×39cmの楕円形状である。

〈柱穴〉検出されない。

〈カマド〉床面の2カ所で焼土が検出されているが、カマド燃焼部の焼土とは考えられない。R A 200と重複する場所に位置する可能性が強い。  
(佐藤)

遺物（第67図・写真図版64・65）

床面からの出土ではなく、ほとんどが埋め土上～中位からの出土であるが、須恵器や土師器が出土していることから、9点の実測図と拓本1点を掲載した。

96～97はロクロ成形、底部回転糸切り離し後再調整され、体部が底部から口縁部まで丸味を持って外傾する器形を示す土師器の杯である。99～102はロクロ成形、底部回転糸切り離し後一部（101）再調整される須恵器の杯である。内外面ともロクロナデ痕のみを持ち、体部が底部から直線的に外傾する器形をなす。103はロクロ成形された土師器皿の口縁部～体部を残存し、内外面ともロクロナデ痕のみを付す破片である。95・106は須恵器大甕の体部破片であるが、95は両面とも硯に転用されている可能性があり、106は器表に平行叩き具痕、内面に青海波文の当て具痕が付される。

時期

埋め土内の出土ではあるが、土師器・須恵器の杯とも同時期の特徴を持つことから、当住居跡は平安時代前期の9世紀中葉頃に位置づけられるものと推定される。  
(高橋)

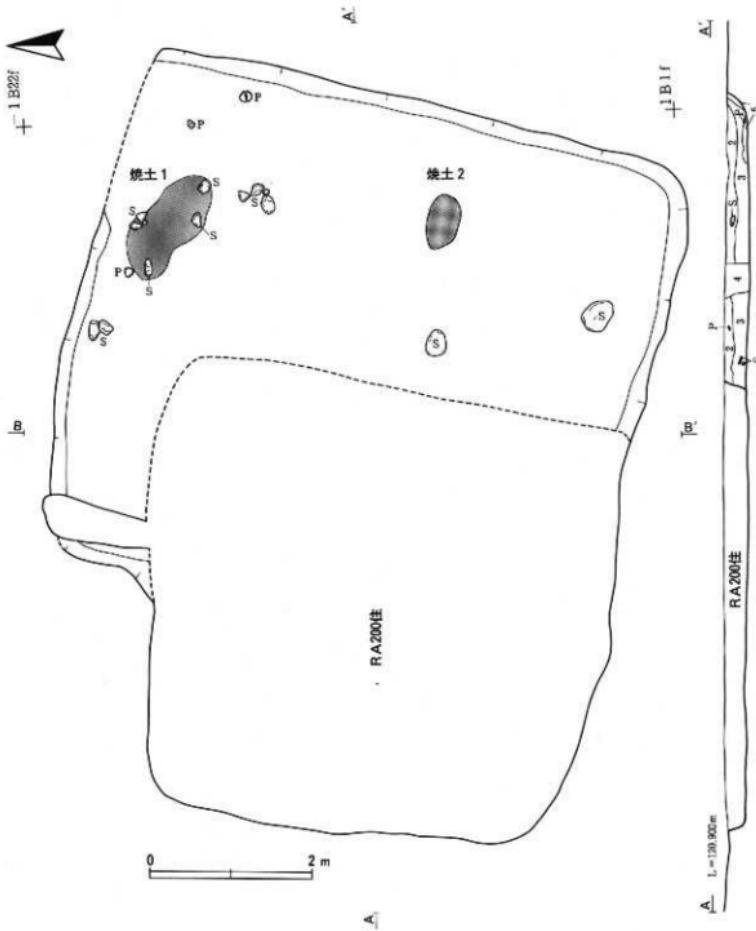
## 16) R A 210堅穴住居跡

遺構（第22図・写真図版18）

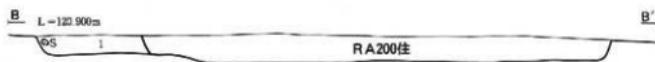
〈位置・重複関係〉B調査区西側-1B区に位置し、北方0.40mにR A 154堅穴住居跡、南東方1.52mにR E 006堅穴状遺構が立地している。R B 009掘立柱建物跡（中世）と重複し、切られていることから、新旧関係は（新）R B 009→（旧）R A 210である。南壁の一部はR A 209と接している。IV層の上面で黒～黒褐色土の広がりによって検出している。

〈平面形・規模〉南西コーナーと南壁、東壁の一部以外は、隣接する第18次調査区内に延びている。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は3.53×3.41mである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とする8層で構成されている。中央部は黒褐色シルト質土がレンズ状に、壁際の中位から下位は黒褐色シルトに褐色土や焼土・炭化物等が混入した土が堆積している。自然堆積の様相を呈する。



- A-A'・B-B'**
1. 13YR2/2-2/3 黒褐色シルト 坚く締まる
  2. 13YR2/2 黑褐色シルト 焼土粒 例含む 坚く締まる
  3. 13YR2/3 黑褐色シルト 焼土粒・炭化物少量含む 坚く締まる
  4. 13YR2/2 黑褐色シルト 砂礫混入
  5. 13YR6/6 棕褐色粘土質シルト 坚く締まる



第21図 RA 200堅穴住居跡

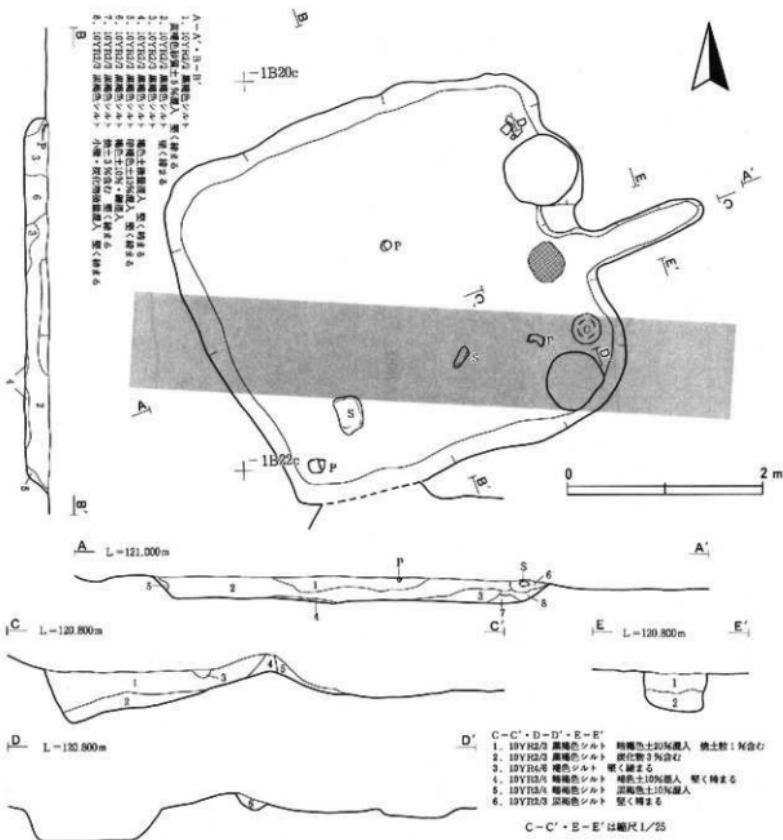
〈壁〉壁の上半部は削平されており、床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁17cm、西壁23cm、南壁23cm、北壁22cmを測る。

〈床〉床面はIV層中にあり、ほぼ平坦で堅く締まる。

〈柱穴・貯蔵穴〉検出されない。

〈カマド〉東壁のやや南東コーナー寄りに設置している。本体部の大部分は崩壊しており、左袖部が僅かに残存し、燃焼部は径39×35cmの楕円形状である。芯材・支脚は確認していない。

煙道部上半部は、削平されている事から割り貫き式かは不明である。長さは1.01mを測り、本体部から約17度の下り勾配で煙出し部へと続いている。埋土は黒褐色土を主体とし、上位には暗褐色土が混じり下位は



第22図 RA 210堅穴住居跡

炭化物を含んでいる。煙出し部の規模は径24cm、深さ26cmである。

(佐藤)

遺物（第67・68図・写真図版65）

床面からの出土した土師器の4点を実測図で掲載した。

107は非クロロ成形され底部が丸底で体部との境界の外面に明瞭な段を付し体部が丸味を持って外傾する器形の十脚器である。器表は、底部がヘラナデやハケメ、体部はヨコミガキで調整され、内面は放射状のミガキ後黒色処理される。108～110は土師器の甕であるが、器形から109は球形で他は長胴形に分けられる。109と110の甕は、後者は腰部が膨らみ108とは若干器形が異なるものの、器面調整は内外面ともハケメ調整され、大同小異である。109も器形の他に器面調整も器表がヘラナデ、内面がハケメ、口縁部は内外面ともヨコナデと長胴形甕とは若干様相が異なる。また、109の頸部には半沈線による鋸歯状の山形文が付されている。

時期

出土した土師器の特徴から奈良時代8世紀前半に位置づけられるものと推定される。

(高橋)

### 17) R A227堅穴住居跡

遺構（第23図・写真図版19）

〈位置・重複関係〉B調査区中央部-1B区に位置し、南側6.95mにR D183上坑が立地している。R B008掘立柱建物跡（中世）と重複し切られていることから、新旧関係は（新）R B008→（旧）R A227である。Ⅲ層の上面で、黒褐色土の広がりによって検出している。

〈平面形・規模〉遺構の東側を道路に切られており、南壁付近を除く大部分は隣接する第18次調査区に延びている。現存部分から平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は西辺6.88m、南辺4.69m、北辺4.58mである。

〈埋土〉黒褐色土を主体とする5層で構成されており、上位に炭化物・焼土粒を微量含んでいる。1層と2層の間に十和田a火山灰が帯状に堆積している。自然堆積の様相を呈する。

〈壁〉壁の上半部は崩落しているが、床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は西壁33cm、南壁26cm、北壁23cmを測る。

〈床〉床面はほぼ平坦で堅く締まって  
いる。大小の礫が特に西壁付近に散在  
している。

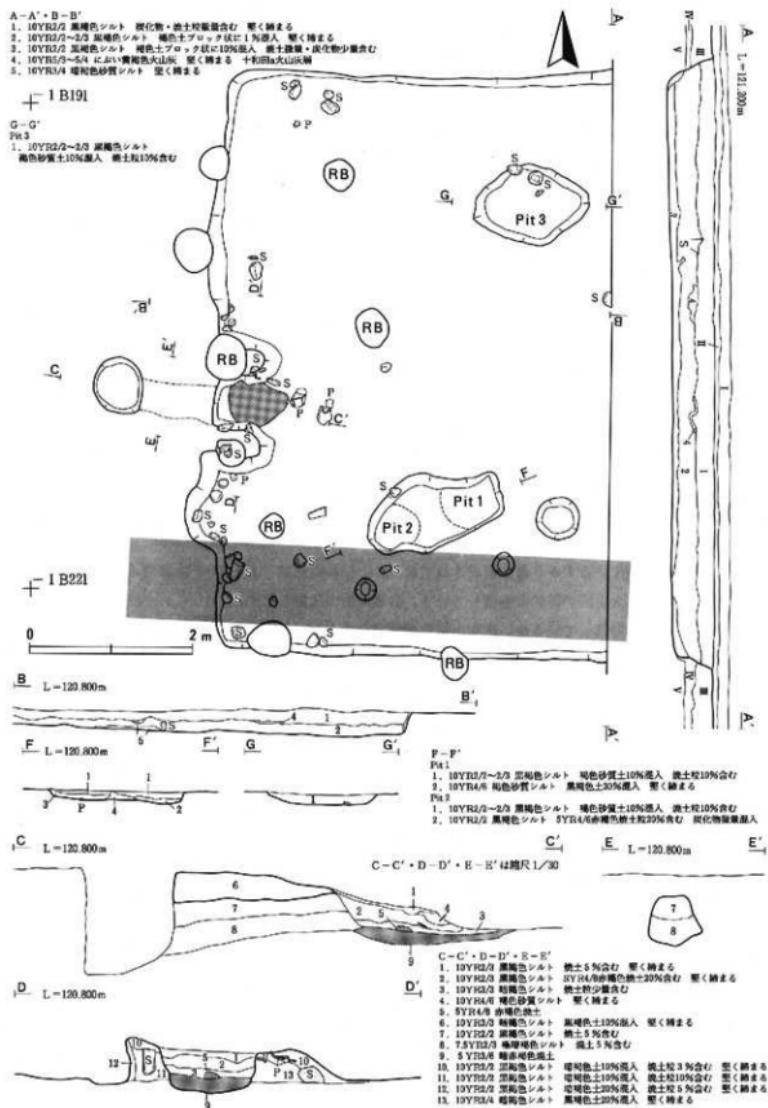
土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
直径cm	75×65	66×62	140×99	54×51	30×27	28×26
深さcm	14	12	12	19	29	32

〈柱穴・土坑〉土坑はP 1～P 3の3基を検出している。平面形はP 1・P 2が不整形、P 3が円形状である。埋土は黒褐色土主体で、少量の焼土粒を含んでいる。柱穴状土坑はP 4～P 6の3基を検出しているが、いずれも位置的に主柱穴ではない。埋土は黒褐色土を主体に構成しており僅かに褐色土が混じっている。柱痕は確認されていない。

〈カマド〉西壁のやや南西コーナー寄りに設置している。天井部は崩落によって失われているものの現存状態は良好である。袖部は数個の角礫を芯材に据え、この上を黒褐～褐色シルトで覆って構築している。燃焼部は径73×54cmの不整形形状を呈し、焼土の最大厚は8cmを測る。支脚は確認していない。

倒り貫き式の煙道部は、長さは88cmを測り、本体部から約11度の下り勾配で煙出し部へと続いている。埋土は黒褐～施暗褐色土主体で、焼土を少量含んでいる。煙出し部は径69×61cm、深さ62cmを測る。（佐藤）  
遺物（第68・69図・写真図版65・66）

埋め土中～下位からの出土が多いものの、床上と埋め土内から出土した遺物の中から8点を実測図と拓本を1点の合わせて8点掲載した。



第23図 R A 227堅穴住居跡

112~114はロクロ成形され底部が回転糸切り離しの土師器坏であるが、112・113は底部に再調整される他、内面がミガキ後黒色処理される。114は底部の再調整ではなく、内面のミガキ・黒色処理されない所謂赤焼き上器である。115・116は土師器の甕であるが、115は非ロクロ成形され器表がヘラナデ、内面がハケメで口縁部が内外面ともヨコナデ調整され、底面には木葉痕がある。116も非ロクロ成形的であるが、器表がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整され、平安時代の甕の特徴を示す。118~121は須恵器であるが、器種は119は壺、121は長頸瓶であり、他は甕と推定される。118は器表が平行叩き具板後ヘラケズリ、内面カキメ調整、119は器表の肩部より下位の体部はヘラケズリ、内面の一部にカキメ以外はロクロ成形痕のみを付す。120は118と、121は119の調整とほぼ共通する。

#### 時期

出土した土師器の中に、奈良時代の特徴である非ロクロ成形された坏と甕があるものの、ロクロ成形の土師器坏と須恵器の関係から、時期は不詳であるが平安時代前半に属すると推定される。 (高橋)

### 18) R A228堅穴住居跡

#### 遺構 (第24図)

〈位置・重複関係〉 B調査区西側-1B区に位置し、北側1.15mにR B009掘立柱建物跡、東側20cmにR A200堅穴住居跡、南西側1.40mにR B005掘立柱建物跡が立地している。R A116堅穴住居跡と重複し、切られていることから、新旧関係は(新) R A116→(旧) R A228である。

〈平面形・規模〉 遺構南側部分をR A116堅穴住居跡に切られていることから詳細は不明である。現存部分から平面形は方形を呈すると考えられる。規模は東辺1.96m、西辺2.27m、北辺2.75mである。

〈埋土〉 暗褐~黒褐色土を主体とする6層で構成されている。上位~中位は暗褐色シルト、下位は焼土・炭化物を含む黒褐色土が堆積している。自然堆積の様相を呈している。

〈壁〉 壁の上半部は削平されているが、床面からやや急傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁22cm、西壁22cm、北壁23cmを測る。

〈床〉 重複するR A116堅穴住居跡の床面との比高はなく、ほぼ平坦で堅く締まっている。

〈柱穴・貯蔵穴〉 検出されない。

(佐藤)

#### 遺物 (第69図・写真図版66)

埋土内から出土した土師器を1点実測図で掲載した。

117は非ロクロ成形され器表がヘラケズリ、内面がハケメ調整された土師器の甕である。

#### 時期

出土した土師器の特徴から奈良時代8世紀代に位置づけられるものと推定される。

(高橋)

### 19) R A229堅穴住居跡

#### 遺構 (第25図・写真図版20)

〈位置・重複関係〉 B調査区中央部-1B区に位置している。R A150堅穴住居跡と重複し、切られていることから、新旧関係は(新) R A150→(旧) R A229である。IV層の上面で黒褐色土の広がりによって検出している。

〈平面形・規模〉 北東コーナーは調査区外に延びており、北西コーナーを道路に切られている。また、南北

コーナーを除く大部分は隣接する第18次調査区に延びている。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は推定で8.98×8.87mである。

〈埋土〉 黒褐～暗褐色土を主体とする。全体に暗褐色土が混入し、下位には水酸化鉄を含んでいる。一部に焼土・炭化物を含む。自然堆積の様相を呈する。

〈壁〉 壁の上半部は削平されているものの、床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。壁高は東壁35cm、西壁30cm、南壁36cm、北壁21cmを測る。

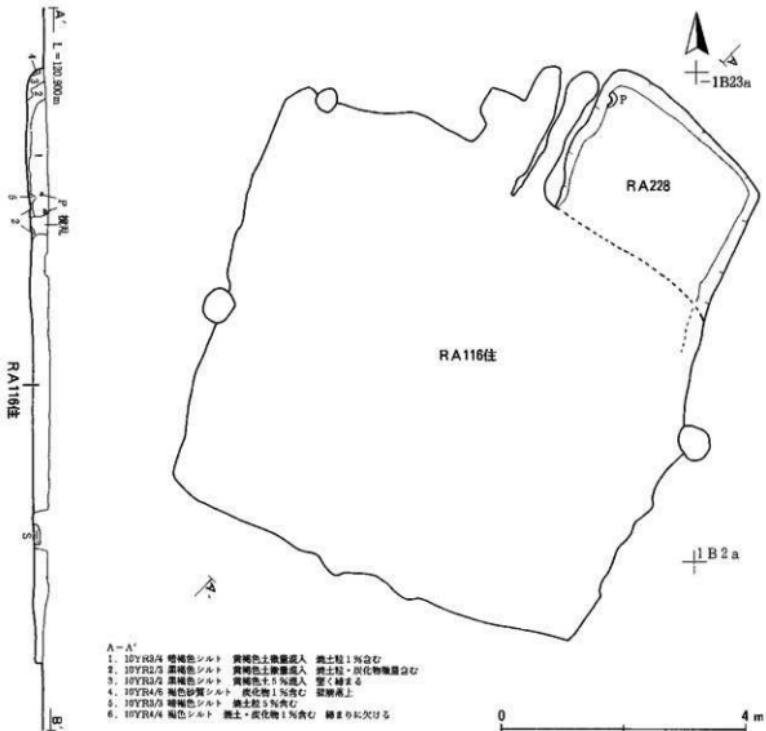
〈床〉 北側がやや高いが、床面は平坦で堅く締まる。

〈柱穴〉 柱穴状土坑はP 1～P 5の5基を検出しており、位置的にP 1～P 4が主柱穴である。平面形はP 1～P 4が円形、P 5が梢円形である。埋土は黒褐色土に、暗褐色土が少量混じっている。柱痕は確認され

土坑No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
直径cm	28×25	44×35	35×32	43×36	35×26
深さcm	77	65	76	87	9

ていない。

〈カマド〉 北壁中央部に設置している。削平を受け残存状態は良くない。袖部はIV層を削り出



第24図 RA 228堅穴住居跡

して造られており、芯材に石や甕等の使用はしていない。燃焼部は径64×60cmの不整形形状を呈し、焼土の最大厚は13cmを測る。支脚は確認されていない。

煙道上半部は削半されている事から倒り貫き式かは不明である。長さは現存部分で45cmを測り、ほぼ平坦に煙出し部へと続いている。煙土は黒褐色～極暗褐色土を主体とし、焼土を少量含んでいる。煙出し部は調査区外へ延びている。  
(佐藤)

#### 遺物（第69～71図・写真図版66～68）

埋土中～下位や床面から多くの土師器を中心とする遺物が出土しているが、土師器と須恵器13点と土製品2点の合わせて15点掲載した。

#### 〔土 器〕

122は非ロクロ成形で外面の底部がヘラケズリ、口縁部が下位ヨコナデで上部がミガキ調整され、内面はミガキ後黒色処理の土師器环である。器形は底部が丸底で口縁部との境界に段を持ち、丸味を持って外傾する。123はロクロ成形され底部に高台が付された須恵器环である。底部の切り離しは不明であるが、ロクロで成形して底部が切り離された後、回転ヘラケズリの再調整し腰に近い部分に低い高台が付される。124～131は非ロクロ成形された土師器の甕であるが、器形により124と127は大小はあるが球形、その他は長胴形に分けられる。球形の124と127の器面調整は口縁部はヨコナデと共に通するものの、体部の器表は124はハケメ、127がヘラナデとミガキと差があり、内面はヘラナデとハケメである。長胴形甕の器形も体部の最大径が体部中位か下位に持つなど大同小異は見られるが、器面調整では外面をハケメとする126・130・131とヘラナデやヘラミガキとする128と129に分けられ、内面はヘラナデかハケメでほぼ共通する。134は瓶、135は鉢であるが、所謂甕と器形に違いはあるが、器面調整は外面とも長胴形甕のそれと共に通する。132と133は須恵器大甕の口縁部と底部の破片であるが、口縁部はロクロ成形痕があり、底部は外面平行叩き具痕、内面には平行當て具痕が付された丸底である。

#### 〔土製品・石製品〕

上製と石製の筋輪車が1点ずつ出土している。両者とも截頭円錐台形状であるが、土製品の137は半球状に近い形である。全面にミガキ調整が観察され焼成されている。

#### 時期

出土した土師器と須恵器高台付き环の特徴から奈良時代8世紀初期～前半に位置づけられると推定される。

(高橋)

#### 20) R A232堅穴住居跡

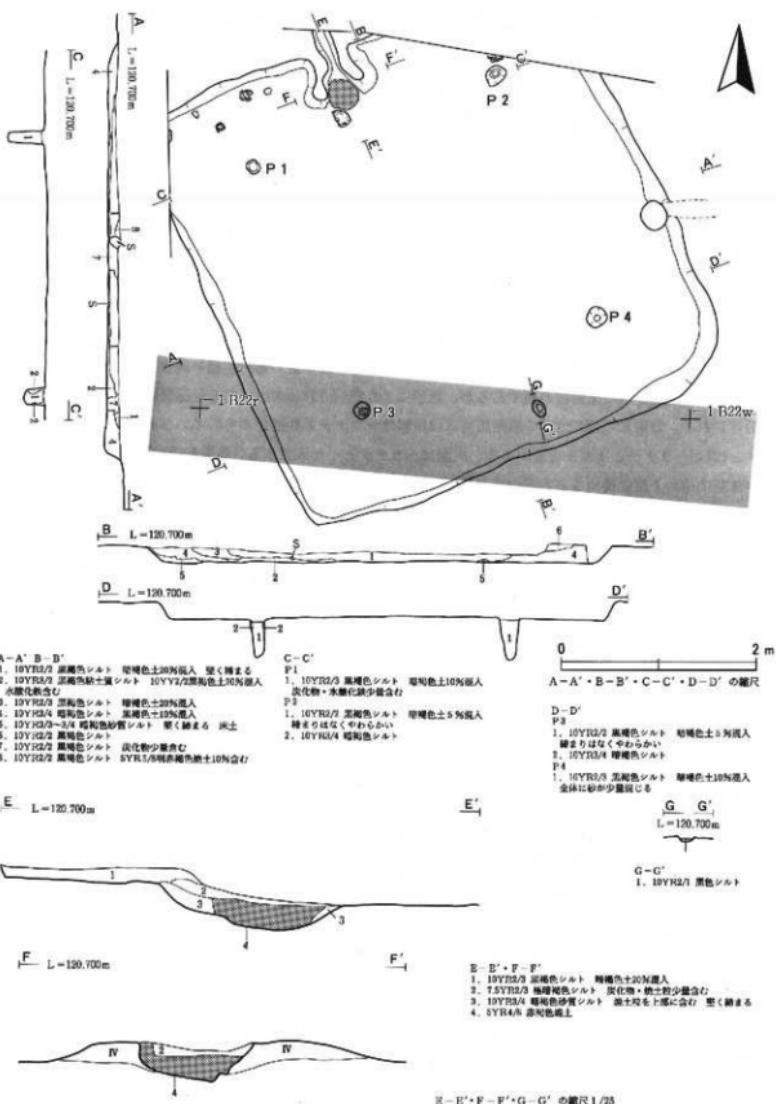
##### 遺構（第26図・写真図版21）

〈位置・重複関係〉A調査区東側の2A区に位置し、北側R A197堅穴住居跡、南側約6mにR A172住居跡が立地する。西部が現用道路の下に延びているため、全体の調査は出来なかった。また、南部がR D188土坑と重複し、当遺構の方が旧い遺構である。

〈平面形・規模〉現用道路下に延びるため全体規模は不明であるが、検出された部分は東西約1.5m、南北2.9mであることから、全体では2.9m以上の規模と推測される。平面形は検出された形状から隅丸方形または隅丸の長方形を呈するものと推測される。

〈埋土〉6層に分類されているが、色調は黒褐色が主体で褐色と暗褐色があり、砂質土の混入する土層が多く他に最下層には炭化物の混入も見られる。土層の状況観察では自然堆積したものと推定される。

〈壁〉壁は床面から丸味を持ってやや傾斜して立ち上り、北側で約50cm、東側が約30cmの壁高がある。



第25図 R A229穴住居跡

〈床〉僅かな起伏が見られるものの、ほぼ平坦で堅く締まり、貼り床は観察されない。

〈柱穴・土坑〉貯蔵穴状の土坑、柱穴状土坑とも検出されていない。

〈カマド〉検出された範囲内ではカマドに伴う遺構や焼土とも検出されていない。未調査部分に設置されていると推定される。

#### 遺物

床面や埋め土内から出土した遺物はない。

#### 時期

遺物の出土はないが、遺構の形状から奈良時代か平安時代の住居跡と推定される。

(高橋)

## (2) 壓穴状遺構〈RE E〉

壓穴状遺構としたのは、平面的な形状や壁・床面の状況は住居跡的であるが、カマドや柱穴が検出されない等住居跡と認定するのに若干条件不足と考えられる遺構に対して付した名称である。

当遺跡の当次調査範囲では、B調査区3棟、D調査区2棟の合わせて5棟検出されている。

### 1) RE 005壓穴状遺構

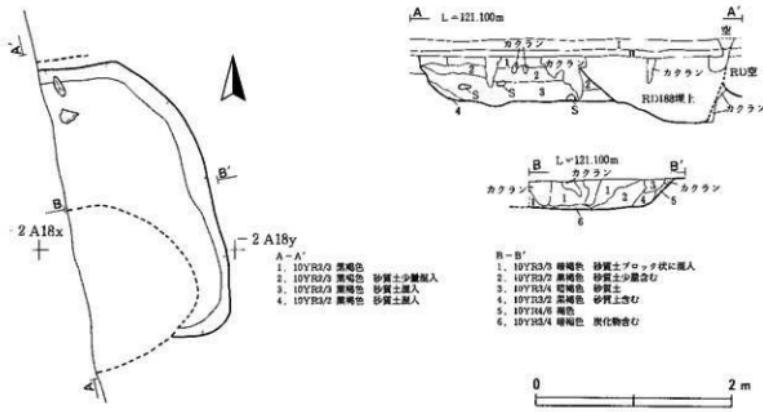
#### 遺構(第27図・写真図版22)

〈位置・検出〉B調査区東側-1C区に位置し、南側55cmにRA164壓穴住居跡、南西側1.83mにRA166壓穴住居跡が近接している。RG157溝跡と重複し、切っていることから、新旧関係は(新)RE 005→(旧)RG157である。検出はIV層上面で黒褐色土の広がりによって確認している。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸方形を呈し、規模は2.39×2.29mである。

〈埋上〉黒褐色土と暗褐色土の2層に大別される。1層は黒褐色シルトで土師器片を多く含み、2層は暗褐色シルトで黒褐色土が混入している。自然堆積の様相を呈している。

〈壁・床〉壁はいずれも床面からやや急傾斜で立ち上がり、壁高は東壁16.20cm、西壁19cm、南壁15.50cm、



第26図 RA 232壓穴住居跡

北壁14.30cmを測る。柱穴は検出されていない。床面は平坦で堅く締まっている。

(佐藤)

遺物 (第82図、写真図版77)

床面や埋め土内から土師器が出土しており、実測図4点を掲載した。

257は非ロクロ使用成形の环であり、底部は丸底で体部外面の口縁部との境界に沈線状の段が付され、外側はヘラナデ、内面がミガキ後黒色処理されている。体部が丸底から僅かに丸味をもって大きく外傾する器形である。256・258・259の3点は壺である。器形はいずれも共通するが、器面の調整が口縁部は外側よりもヨコナナデかハケメ、体部は外側がハケメかヘラミガキ、内面はハケメと若干の相違がある。奇形的な相違点は頸部へ口縁部で見られ、259は頸部が全廻りする沈線で区画されて直立し、口縁部は外反する。258は頸部から丸味を持って外湾し端部が直立気味に受け口状になる。256は直立で外傾する。

時期 出土した土師器の所属時期から奈良時代の8世紀前半代の遺構と推測される。

(高橋)

## 2) R E 006堅穴状遺構

遺構 (第28図・写真図版23)

〈位置・検出〉B調査区西側-1B区に位置している。R A209堅穴住居跡・R B009掘立柱建物跡(中世)と重複し、これらに切られていることから新旧関係は(新)R B009→R A209→(旧)R E 006である。IV層上面で黒褐色土の広がりによって検出している。

〈平面形・規模〉南西コーナーをR A209堅穴住居跡に、北西コーナーをR B009掘立柱建物跡に切られていることから規模の詳細は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は推定で2.77×2.63mである。

〈埋土〉黒褐色土主体の2層である。上～中位は黒褐色シルトに炭化物・焼土が混じり、下位は暗褐色シルトで構成されている。自然

堆積の様相を呈している。

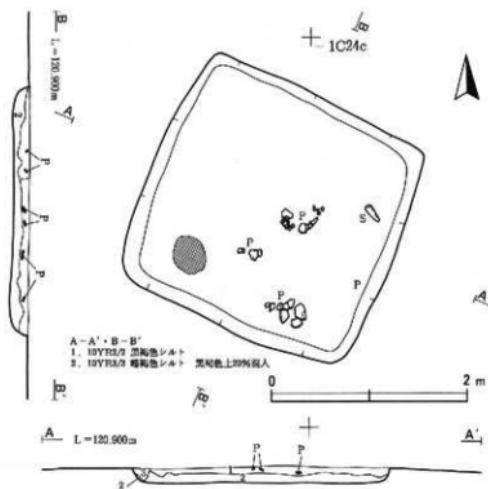
〈壁・床〉壁はいずれも床面からやや急傾斜で立ち上がり、壁高は東壁15cm、西壁15cm、南壁14cm、北壁20cmを測る。柱穴は検出されていない。床面は平坦で堅く締まっている。(佐藤)

遺物

出土していない。

時期

時期の確定資料は得られていないが、埋め土や重複関係等から古代の遺構と推定される。(高橋)



第27図 R E 005堅穴状遺構

### 3) R E 013堅穴状遺構

遺構（第29図・写真図版24）

〈位置・検出〉 D調査区の南東5C区に位置し、R E 017堅穴状遺構は北に約11mの距離がある。

重複する遺構もなく単独で検出されたが、遺構の60%は18次調査範囲に延びている。

〈平面形・規模〉 平面形はやや歪んだ隅丸長方形気味を呈するが、規模は北東-南西約3m×北西-南東約3.6mである。

〈埋土〉 粘性のある黒褐色土が主体で4層に分かれられる。全体として締まりが良く、1・2層に炭化物、3・4層には鉄錆が混在する。土層の堆積状況を観察すると自然堆積で埋没したものと推察される。

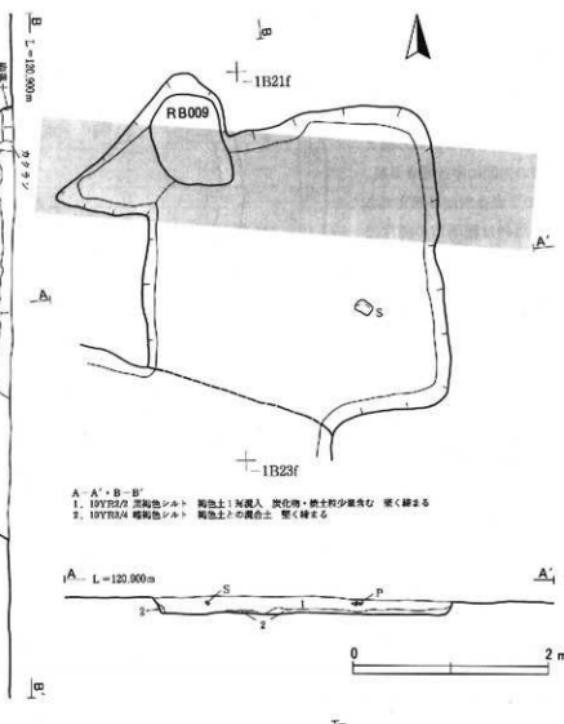
〈壁・床〉 南壁の一部分

以外は床面から丸味を持って大きく外傾する部分が多く、全体的に見ると浅皿形に近い断面を示す。壁高は20cm~30cmを測る。柱穴は検出されていない。床面は若干の起伏はあるものの、ほぼ平坦で堅く締まっている。カマドや炉跡の存在を示す焼土や施設の痕跡は確認されていない。

遺物（第71・72図・写真図版68・69）

埋土内から主体に土器器や須恵器が出土しているが、その中から実測図を8点と拓本を3点の合計11点掲載した。

139~142はロクロ成形され底部が回転糸切り離し無調整の土器器であるが、139と140は内面がミガキ後黒色処理され、141と142は再調整のない所謂赤焼き土器である。器形は、体部が底部から軽い丸味を持って外傾し、口縁端部が小さく外反気味となる。143と144はロクロ成形され底部の切り離しは再調整のため不明であるが、「へ」字状に踏ん張る高台が付される。内面のミガキや黒色処理はない。148はロクロ成形された長頸瓶の体部へ口縁部を残す破片であるが、体部下半部の内外面はヘラナデやヘラケズリ、肩部へ口縁部はロクロナデ痕のみである。全体的な器形は定かでないが、肩部に最大径を持って頸部まで丸く窄み、頸部下



第28図 R E 006 堅穴状遺構

端から口縁部に向かって次第に外溝し、口唇は角張り軽い受け口状となる。145～147は須恵器大型の体部破片であり、3点の外面と147の内面に平行叩き具痕、他の2点の内面は無文である。149は鷺羽口の破片である。

#### 時期

出土した遺物の中で、土師器と須恵器が平安時代の共通する特徴を持っていることから、平安時代前期9世紀代に位置づけられるものと推測される。(高橋)

#### 4) RE017堅穴状遺構 構

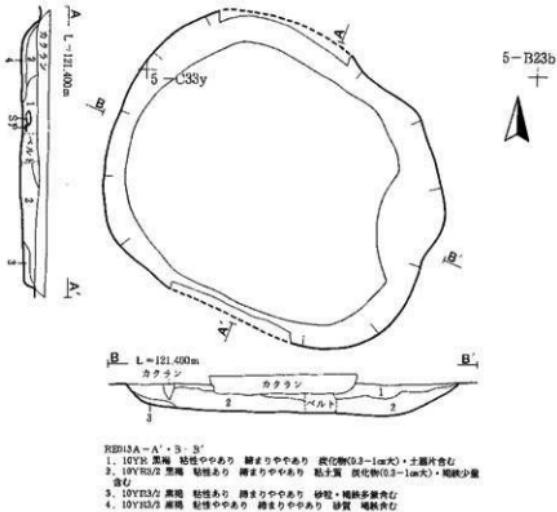
##### 遺構(第29図・写真図版25)

〈位置・検出〉 D調査区の南東5C区に位置し、RE013堅穴状遺構は南に約11mの距離がある。重複する遺構はないが、遺構の40%は現用農道の下に延び未調査である。

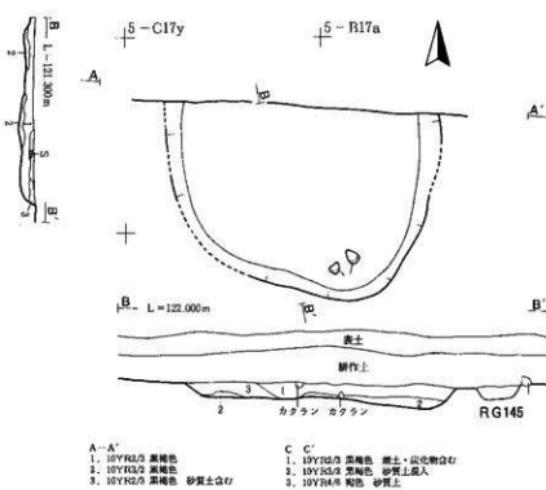
〈平面形・規模〉 全体を検出していないので全体形は定かでないが、検出部分からは隅丸方形的な平面形が推測される。規模は東西約2.8m×南北2m以上である。

〈埋土〉 色調が黒褐色土とほぼ共通するが、混入物によって4層に分けられる。

2・3層に砂質土、1層には炭化物や焼土の他十和田a



A, RE013堅穴状遺構



第29図 RE013・RE017堅穴状遺構

降下火山灰が混在する。土層の堆積状況を観察すると自然堆積で埋没したものと推察される。

〈壁・床〉壁の全体が床面から丸味を持って大きく外傾し、全体的に見ると断面が浅い皿形に近い。壁高は10cm～15cmを測る。柱穴は検出されていない。床面は若干の起伏はあるものの、ほぼ平坦で堅く締まる。

カマドや炉跡の存在を示す焼土や施設の痕跡は確認されていない。

遺物（第72図・写真図版69）

埋め土内からロクロ成形され底部回転糸切り離しの土師器壺が1点出土している。体部の内外面ともロクロナデ痕を残す小型の製品である。

時期

出土した土師器壺の特徴から平安時代9世紀代の遺構と推定される。

（高橋）

### 5) R E021堅穴状遺構

遺構（第30図・写真図版26）

〈位置・検出〉B調査区の西端-1A区に位置し、南側1.45mにR A116堅穴住居跡が近接している。IV層上面で黒褐色土の広がりによって検出している。

〈平面形・規模〉南コーナーを除く3方の隅を柱穴状土坑に切られていることから詳細は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は2.78×2.38mである。

〈埋土〉黒褐色シルトを主体とする3層で構成され、堅く締まっている。自然堆積の様相を呈している。

〈壁・床〉壁はいずれも床面からやや急傾斜で立ち上がり、壁高は北東壁25cm、南東壁28cm、南西壁27cm、北東壁24cmを測る。柱穴は検出されていない。床面は平坦で堅く締まっている。（佐藤）

遺物（第72図・写真図版69）

埋土内から須恵器の壺が2点出土しており、実測図で掲載した。

151・153はロクロ成形、底部が回転糸切り離しされており、ロクロナデ痕以外の調整痕はない。

時期

埋土内の出土であるが、壺の特徴から平安時代9世紀後半位に位置づけられるものと推定される。（高橋）

## (3) 挖立柱建物跡〈RB〉

B調査区から3棟検出されているが、隣接する18次調査範囲にも関連すると推測される遺構が検出されていることから、本来は18次調査範囲と19次調査範囲の両範囲検出の同様遺構が有機的に関連しあい、遺構群（屋敷か）を構成している可能性が強い。

### 1) RB005掘立柱建物跡

遺構（第31図・写真図版27・28）

〈位置・重複関係〉B調査区の最西端に位置している。調査区内では12本の柱穴が検出され、遺構の南側の大部分は第18次調査区に延びている。R A116堅穴住居跡（平安時代）と重複しており、新旧関係は堅穴住居跡を切っていることから（新）RB005→（旧）RA116である。遺構検出面はⅢ層上位であるが、西側の一部には砂礫層（V層）を露出する箇所もある。

〈規模・方向〉規模は桁行9間（19.30m）、梁行3間（6.05～6.42m）の掘立柱建物跡である。棟方向はやや南南東～北北西を示し、北に対し約8度30分西偏している。

〈身舎〉身舎の桁行柱間寸法は、A 1～10柱が2.37m+1.92m+2.16m+2.13m+2.30m+1.90+2.18m+2.06m+2.26m、D 1～10柱が2.22m+2.10m+2.20m+2.10m+2.18m+2.12m+2.16m+2.18m+2.15m。聚行柱間寸法は、北側のA 1～D 1柱が1.90m+2.00m+1.15m、南側のA 10～D 10柱が2.10m+2.22m+2.10mである。

〈掘り方・柱痕〉掘り方の規模は径30～85cm、深さ8～37cm(平均23.8)cmで、平面形は円形、楕円形、隅丸長方形を呈しており、楕円形が6割程度を占めている。

柱痕はC 4～6柱・D 4～5・7柱で確認されており、

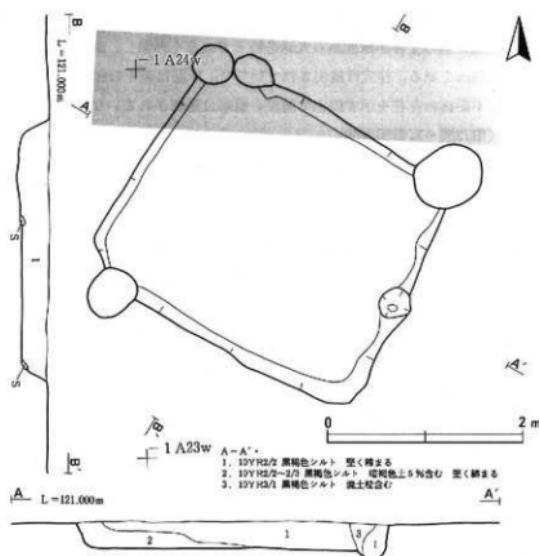
径は24～30cm前後を測る。礎石は径20～50cm大の扁平な河原石を使用しており、27本の柱穴から検出されている。本来はすべての柱に使用したと思われるが、

削平を受けていたことから他は不明である。柱穴の埋土は炭を微量に含む黒褐色シルトが主体である。

遺物・時期

遺物は流れ込みの土器破片を僅かに出土しただけであり、時期は柱間寸法等から中世に属すると思われる。

(高・義)



第30図 R E 021整穴状遺構

柱穴No	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8	A 9	A 10
直径cm	46×45	42×40	66×58	62×48	52×39	45×44	61×50	63×50	51×48	48×42
深さcm	35	22	12	18	26	18	22	20	31	8
柱穴No	B 1	B 2	B 3	B 4	B 5	B 6	B 7	B 8	B 9	B 10
直径cm	58×51	80×60	64×56	66×64	71×63	65×48	70×66	68×60	77×69	40×39
深さcm	29	34	26	32	20	20	21	17	23	24
柱穴No	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6	C 7	C 8	C 9	C 10
直径cm	53×46	39×30	50×48	55×53	45×42	79×55	72×52	70×54	68×60	52×48
深さcm	37	25	37	27	24	26	13	11	23	20
柱穴No	D 1	D 2	D 3	D 4	D 5	D 6	D 7	D 8	D 9	D 10
直径cm	58×50	49×46	85×42	58×50	60×53	67×58	81×60	70×57	66×52	56×43
深さcm	36	33	30	21	24	34	16	12	22	23

## 2) R B008掘立柱建物跡

遺構（第32図・写真図版29）

〈位置・重複関係〉B調査区の中央部寄りに位置し、RA227堅穴住居跡（平安時代）と重複している。新旧関係はRA227を切っていることから、（新）RB008→（旧）RA227である。遺構はⅢ層上面から中位で確認されている。遺構の大部分は北側第18次調査区に延びており、調査区内で検出されたのは桁行のA4～E4柱と梁行のA3柱である。

〈規模・方向〉規模は桁行4間（8.10～8.40m）、梁行3間（6.25～6.40m）である。棟方向はやや東北東～西南西を示しており、北に対し13度西偏している。

〈身舎〉身舎の桁行柱間寸法は、北側のA1～E1柱が2.00m+2.20m+2.00m+1.90m、南側のA4～E4柱が2.20m+2.10m+2.10m+1.00mを測る。梁行柱間寸法は、A1柱から2.20m+2.10m+2.10m、E1柱から1.96m+2.15m+2.14mである。

〈掘り方・柱痕〉掘り方の平面形は、円形ないし梢円形を呈している。規模は径29～56cm、深さは18～58（平均38cm）cmを測る。

柱痕は径15～20cm大で、A1・A3・A4・B1・D2・D3・E1・E3・E4柱で検出されている。柱穴の埋め土は暗褐色～黒褐色シルトで構成され、炭を微量に含んでいる。

遺物

出土していない。

時期

時期を決定する遺物は出土していないが、棟方向や柱間寸法等から中世に属すると思われる（高・義）

柱穴No	A 1	A 2	A 3	A 4	B 1	B 2	B 3	B 4	C 1	C 2
直径cm	50×45	33×32	53×50	47×42	52×35	37×33	—	37×34	30×29	39×37
深さcm	43	22	48	52	27	37	—	18	35	40
柱穴No	C 3	C 4	D 1	D 2	D 3	D 4	E 1	E 2	E 3	E 4
直径cm	—	3×32	51×42	56×48	46×37	60×56	42×39	53×45	46×40	37×36
深さcm	—	22	32	54	52	18	47	42	38	58

## 3) R B009掘立柱建物跡

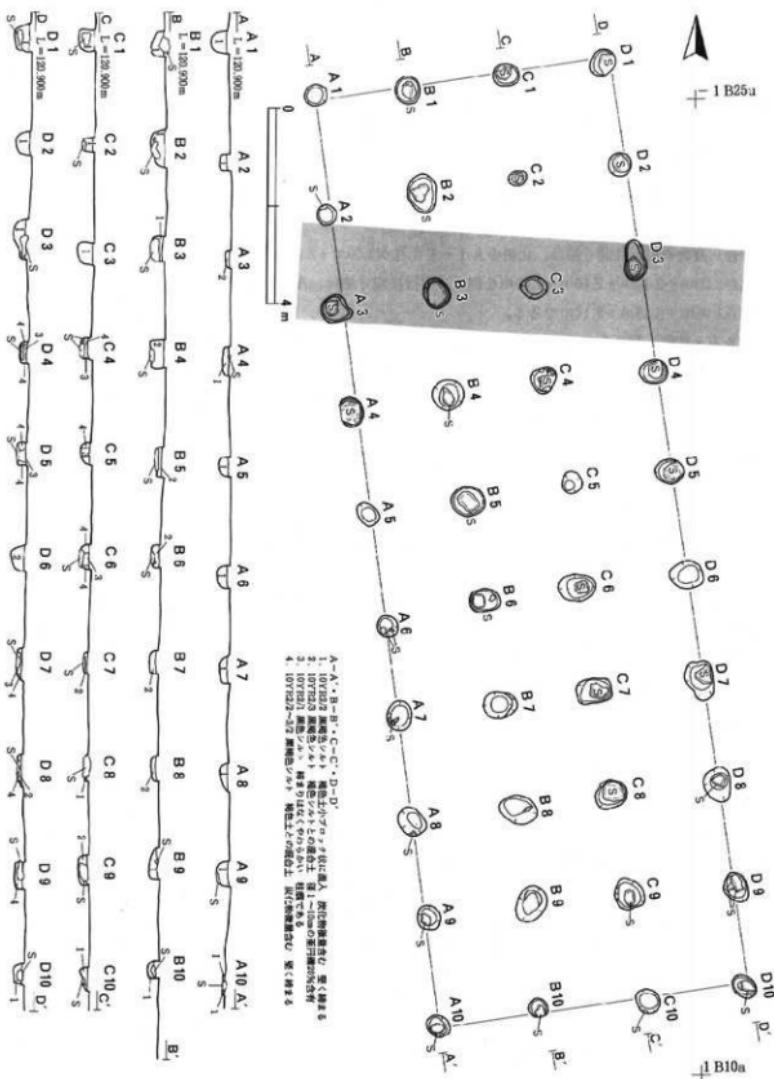
遺構（第33図・写真図版30）

〈位置・重複関係〉B調査区西側の～1B区に位置している。遺構の大部分は第18次調査区に延びており、調査区内では南側のA5～D5柱、A6～F6柱の10本が確認されている。RA210堅穴住居跡（平安時代）・RE006堅穴状遺構と重複し、切っていることから新旧関係は（新）RB009→（旧）RA210・RE006である。遺構はⅢ層下位からIV上面で検出されている。

〈規模・方向〉規模は桁行5間（10.90m）、梁行5間（10.60m）の方形に近い掘立柱建物跡である。棟方向はやや南南東～北北西を示し、北に対して7度30分西偏している。

〈身舎〉身舎の桁行・梁行柱間寸法は、東列のE1～6柱が2.30m+1.94m+2.20m+2.06m+2.10m、西列A1～6柱が2.18m+2.06m+2.10m+2.15m+2.10m、南列がA6～F6柱が2.20m+2.47m+1.78m+2.36m+2.08m、北列が2.16m+2.30m+2.04m+2.18m+2.20mを測る。

〈掘り方・柱痕〉掘り方の平面形は、円形、梢円形、隅丸長方形、方形を呈しており、半数以上が梢円形で



第31図 RB005掘立柱建物跡

占められている。規模は径38~106cm、深さは11~52(平均27.5)cmを測る。

柱痕は径15~20cmを測り、14本の柱穴で確認されている。また、礫石は20本の柱穴から検出され、径20~45cm大の亜円礫と亜角礫を使用している。柱穴の埋土は黒褐~褐色シルトが主体である。

#### 遺物・時期

時期を決定する遺物は出土していないが、柱間寸法等から中世に属すると思われる。

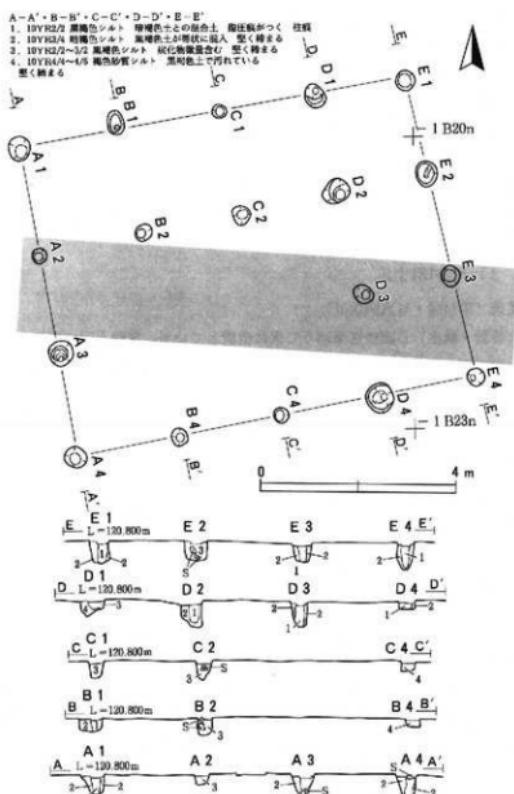
(高・義)

#### (4) 土坑〈RD〉

A調査区から11基、B調査区2基、C調査区1基、D調査区3基の合計18基検出されているが、A調査区は他の遺構も密集状態で検出されており、B~D調査区は遺構全体が極端な密集状態ではない。

##### 1) RD093土坑

遺構(第34図・写真図版31)  
〈位置・検出〉B調査区東端  
1C区に位置している。IV層



第32図 RD093土坑

柱穴No	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	B 1	B 2	B 3
直径cm	64×56	73×63	75×57	67×51	68×62	81×57	67×48	57×53	69×65
深さcm	28	32	34	23	18	52	35	22	32
柱穴No	B 4	B 5	B 6	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6
直径cm	75×73	64×57	73×70	72×68	71×65	70×64	63×55	38×29	55×45
深さcm	27	50	48	23	20	25	21	11	38
柱穴No	D 1	D 2	D 3	D 4	D 5	D 6	E 1	E 2	E 3
直径cm	74×55	44×40	77×65	91×68	56×49	—	78×66	71×58	63×61
深さcm	33	34	28	30	15	—	30	18	23
柱穴No	E 4	E 5	E 6	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
直径cm	76×61	76×70	62×58	75×59	90×63	86×84	61×60	93×87	106×68
深さcm	11	22	33	26	40	31	11	19	20

上面で黒色土の広がりによって検出した。

〈平面形・規模〉 平面形は梢円形を呈し、規模は $1.41m \times 0.95m$ 、深さは62cmを測る。

〈埋土〉 黒色砂質土を主体とする2層で構成される。上位は黒色砂質シルトと暗褐色土との混合土、下位は黒色砂質シルトが堆積している。自然堆積の様相を呈する。 (佐藤)

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代かそれ以降の時期と推測される。

(高橋)

### 2) RD131土坑

#### 遺構 (第34図・写真図版31)

〈位置・検出〉 D調査区東端5C区に位置している。IV層上面で黒色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉 平面形は方形気味の円形を呈し、規模は $1.2m \times 1.2m$ 、深さは35cmを測る。

〈埋土〉 色調が褐色～黒褐色を示すシルトで構成されるが、混入物や色調の違いによって7層に細分されている。1層に炭化物が混入する他、2層以下に黄褐色土や砂質土が混在し一部には粘性がある。自然堆積の様相を呈する。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代かそれ以降の時期と推測される。

(高橋)

### 3) RD132土坑

#### 遺構 (第34図・写真図版31)

〈位置・検出〉 D調査区東端5C区に位置している。IV層上面で黒色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉 平面形は不整な梢円形を呈し、規模は $1.0m \times 0.8m$ 、深さは20cmを測り、断面形がやや不規則であり、土坑と言ふより擾乱痕跡である可能性が強い。

〈埋土〉 色調が褐色～黒褐色を示すシルトで構成されるが、色調や混入物の違いによって4層に細分されている。1層に焼土粒が混入する他、2層以下に黄褐色土や砂質土が混在し一部には粘性がある。また、自然堆積の様相を呈する。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代かそれ以降の時期と推測される。

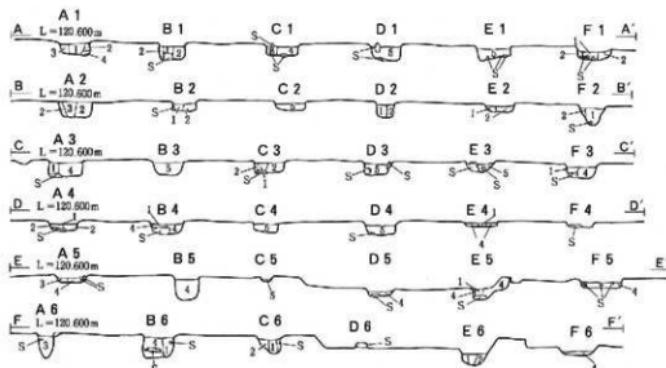
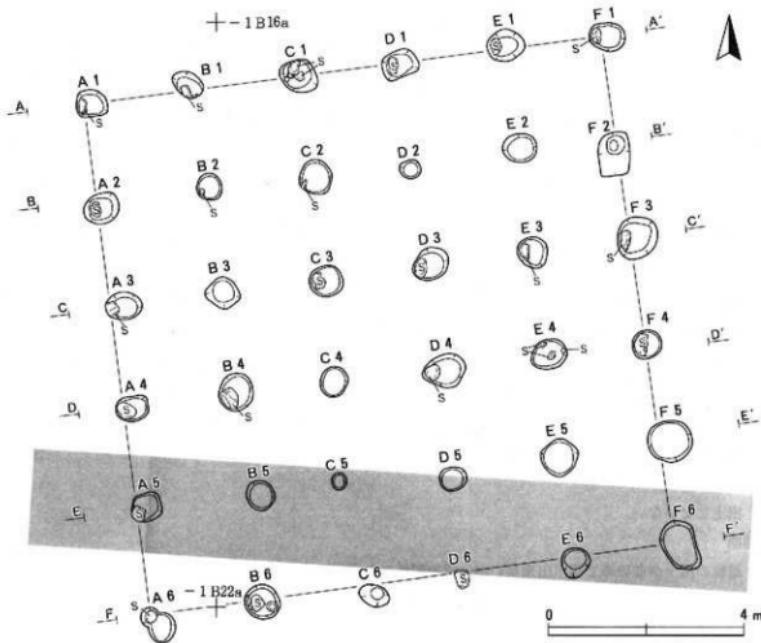
(高橋)

### 4) RD137土坑

#### 遺構 (第34図・写真図版34)

〈位置・検出〉 D調査区中央の5D区に位置している。IV層上面で黒色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉 検出面の平面形は円に近い開丸方形であるが底面は方形をなし、規模は $2.1m \times 1.8m$ 、深



A - A' + B - B' + C - C' + D - D' + E - E' + F - F'

- 1. IGYTR2/2 黄褐色シルト 壓化物・含泥岩がつく 柱状
- 2. IGYTR2/2～2.0 黑褐色シルト 壓化物・鐵土粒強度高め 厚くなる
- 3. IGYTR2/2 黑褐色シルト 黑色土との混合土
- 4. IGYTR2/3～3.0 黑褐色～深褐色シルト 岩化物少多有し 薄く持まる
- 5. IGYTR2/1 黑褐色シルト 小槽・凹凸等多く含む
- 6. IGYNA/0 黑色少質シルト 三層色土で内れている 薄く持まる

第33図 R B 009掘立柱建物跡

さは75cmを測り、断面形が底面から大きく外溝する。

〈埋土〉 色調が褐色～黒褐色を示すシルトで構成されるが、色調の他、混入物の違いによって6層に細分される。1層の他に酸化鉄が混入する層が多く、2層以下に黄褐色土や砂質土が混在し一部には粘性がある。土層の一部に人為的な様相も見られるがほぼ自然堆積による体積と推測される。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代かそれ以降の時期と推測される。

(高橋)

### 5) RD159土坑

#### 遺構(第34図・写真図版31)

〈位置・検出〉 B調査区東側の1C区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりによって検出されている。

〈平面形・規模〉 北西隅部がRA164堅穴住跡の煙道部と重複し、切られていることから新旧関係は(新)RA164→(旧)RD159である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は1.7m×1.5m、深さは17cmを測る。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とする3層で構成され、下位に炭化物を微量含む。壁際には、壁崩落上と思われる褐色砂質土が堆積している。自然堆積の様相を呈している。

(佐藤)

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、重複関係から平安時代かそれよりも古い遺構である。

(高橋)

### 6) RD166土坑

#### 遺構(第35図・写真図版34)

〈位置・検出〉 A調査区中央西側や北寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出された。

〈平面形・規模〉 北部がRD170土坑と重複し、切られることから新旧関係は(新)RD170→(旧)RD166である。平面形は楕円形を呈し、規模は2.4m×1.7m、深さは45cmを測る。

〈埋土〉 黒褐色と褐色の砂質土が混入したシルトで色調と混入物によって3層に細分される。自然堆積の様相を呈している。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代かそれ以降の遺構である。

(高橋)

### 7) RD168土坑

#### 遺構(第34図・写真図版32)

〈位置・検出〉 A調査区中央西側や南寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉北部がR D168土坑と重複する他、西側が調査範囲外に延びることから全体的なことは不明である。R D168土坑と重複関係による新旧関係は（新）R D168→（旧）R D188である。全体の検出ではないが、検出範囲では隅丸方形的な平面形と推測され、規模は $1.9m \times 0.85m$ 以上、深さは25cmを測る。

〈埋土〉全体が3層に細分されるが、色調には黒褐色と褐色があり、2・3層には砂質土が混入する。自然堆積の様相を呈している。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代かそれ以降の遺構である。

(高橋)

### 8) R D169土坑

#### 遺構（第35図・写真図版32）

〈位置・検出〉A調査区中央西側南寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉北部がR D224土坑と重複する他、西側が調査範囲外に延びることから全体的なことは不明である。R D224土坑と重複関係による新旧関係は（新）R D169→（旧）R D224である。全体の検出ではないが、検出範囲では隅丸方形的な平面形と推測され、規模は $2.4m \times 1.85m$ 以上、深さは75cmを測る。

〈埋土〉全体が5層に細分されるが、色調には黒褐色と褐色があり、2・3層には礫が混入し、3層以下には砂質土が混入する。自然堆積の様相を呈している。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代かそれ以降の遺構である。

(高橋)

### 9) R D170土坑

#### 遺構（第35図・写真図版32）

〈位置・検出〉A調査区中央西側北寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉南部がR D166土坑と重複するが、R D166土坑と重複関係による新旧関係は（新）R D170→（旧）R D166である。平面形は隅丸長方形的であり、規模は $3.4m \times 1.85m$ 、深さは60cmを測る。

〈埋土〉色調はいずれも黒褐色であるが、混入物によって全体が3層に細分される。全体に礫が混入する他、1・2層に炭化物が混入し、2・3層は粘土質で酸化鉄が混入する。自然堆積の様相を呈している。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代かそれ以降の遺構である。

(高橋)

### 10) R D171土坑

#### 遺構（第36図・写真図版32）

〈位置・検出〉C調査区中央東側やや北寄りの3A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉東部が調査範囲外に延びるため全体が検出されていないが、検出された範囲から推定される平面形は隅丸方形的である。規模は2.3m×0.8m以上、深さは25cmを測る。断面形が浅い皿形に近く、土坑と言うよりも擾乱の痕跡である可能性も考えられる。

〈埋土〉色調が黒褐色と黄褐色の2層に細分され、土質でシルトである。自然堆積とは言い難い堆積状況であることから、人為的に埋め戻された可能性が強い。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、最近の遺構である可能性が強い。

(高橋)

### 11) RD183土坑

#### 遺構 (第36図・写真図版34)

〈位置・検出〉B調査区中央西側やや南寄りの1B区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉東部が現用道路下に延びるため全体が検出されていないが、検出された範囲から平面形は隅丸方形と推定される。規模は2.65m×0.75m以上、深さは80cmを測り、北部の底面に径約80cm、深さ約10cmの楕円形と推定される副穴状の土坑がある。

〈埋土〉色調と混入物によって全体が7層に細分されているが、色調は褐色を主体に間層として黒褐色があり、土性はいずれもシルトと共に通し、締まりの良い土層が多い。下層は自然堆積とは言い難いものの、全体として見れば自然堆積と言えようか。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代以降の遺構と推測される。

(高橋)

### 12) RD184土坑

#### 遺構 (第34図・写真図版33)

〈位置・検出〉A調査区西側やや北寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈平面形・規模〉南東部がRG135と重複し掘削され全体的なことは不明であるが、検出された範囲から平面形は円形か楕円形と推定される。規模は1m×0.5m以上、深さは10cmを測り、土坑と言うよりも窪み的である。

〈埋土〉砂質土がブロック状に混入した黒褐色シルトの単層である。全体として見れば最近の埋め土である。人為的埋め戻しか。

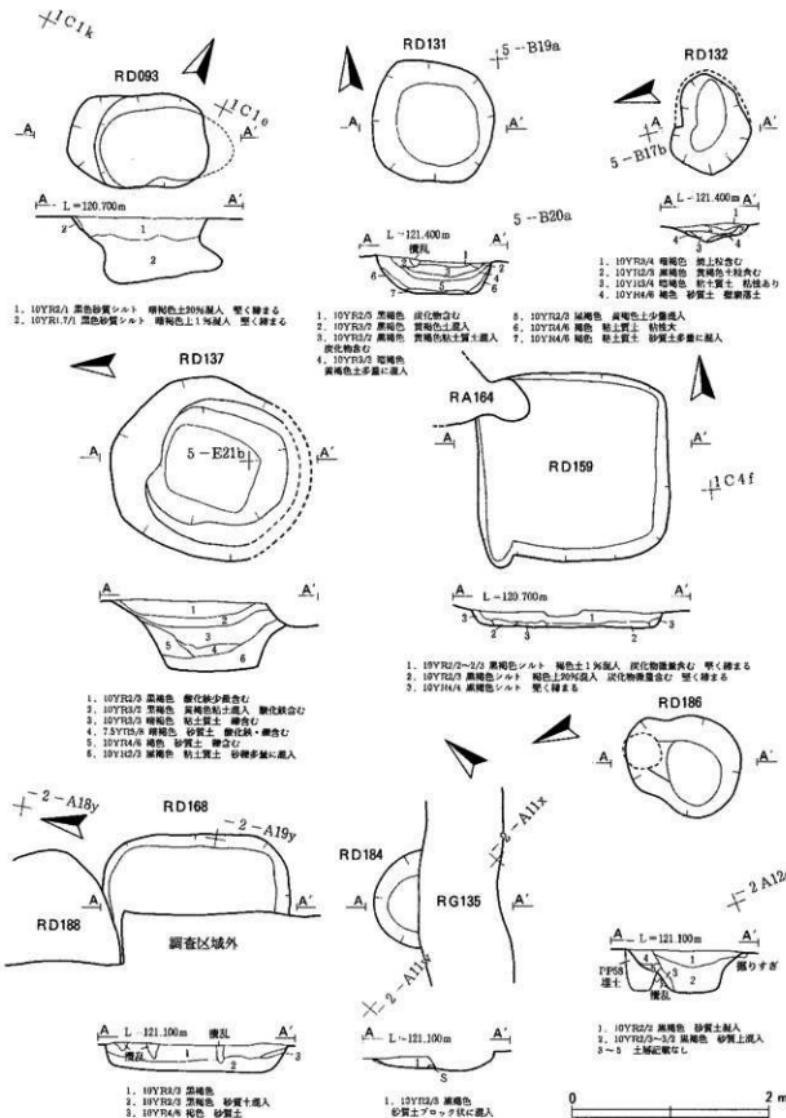
#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、最近の遺構である可能性が強い。

(高橋)



### 13) R D186土坑

遺構（第34図・写真図版33）

〈位置・検出〉 A調査区東側北寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。

重複する遺構もなく単独で検出された。

〈平面形・規模〉 平面形は楕の形に似た不整椭円形である。規模は1.25m×1m、深さは40cmを測る。

〈埋土〉 砂質土が混入した黒褐色シルトであるが、色調の微妙な違いで2層に細分される。なお、3～5層は掘りすぎである。自然堆積か。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、最近の遺構の可能性がある。

(高橋)

### 14) R D187土坑

遺構（第35図・写真図版33）

〈位置・検出〉 A調査区西側やや北寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。重複する遺構もなく単独で検出された。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ円形に近い椭円形である。規模は0.7m×0.8m、深さは10cmを測る。土坑と言うよりも浅い窪み状である。

〈埋土〉 砂質土が混入した黒褐色シルトであるが、色調の微妙な違いで2層に細分される。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、最近の遺構の可能性がある。

(高橋)

### 15) R D188土坑

遺構（第35図・写真図版34）

〈位置・検出〉 A調査区西側やや南寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。R A232住居跡の南部埋め土内に掘削された土坑であり、R A232住居跡より新しい遺構である。また西側が現用道路下に延びるため全体的なことは不明である。

〈平面形・規模〉 道路下の部分は不明であるが、検出された部分から平面形は精円形と推定される。規模は1.7m×1.1m以上、深さは70cmを測る。

〈埋土〉 いずれも黒褐色のシルトであるが、色調の微妙な違いと混入物によって5層に細分される。2・3層には砂質土、5層には粘土質土が混入する。人為的に埋め戻された可能性がある。

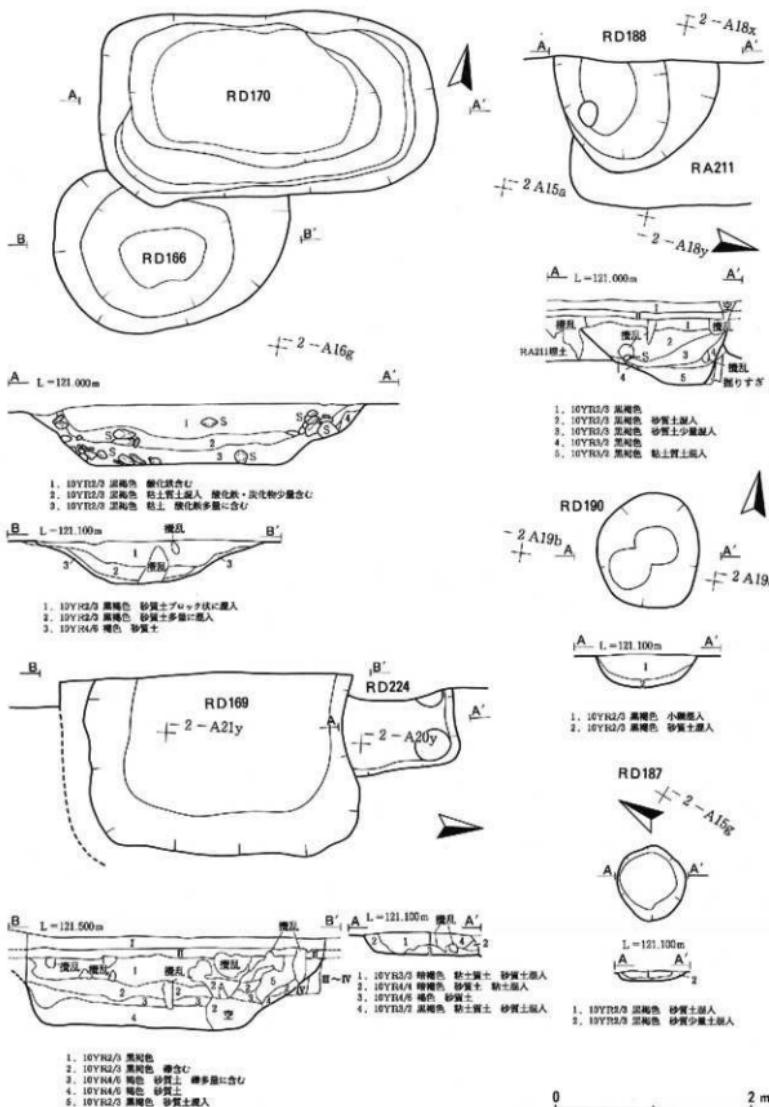
遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代以降の遺構と推測される。

(高橋)



第35図 土坑類 (2)

## 16) RD190土坑

遺構（第35図・写真図版33）

〈位置・検出〉 A調査区東側南寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。他遺構との重複もなく単独で検出された。

〈平面形・規模〉 平面形は楕円形であり、規模は1.2m×1m、深さは35cmを測る。

〈埋土〉 いずれも黒褐色のシルトであるが、混入物によって2層に細分される。1層には小礫、2層には砂質土が混入する。自然堆積かと推測される。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代以降の遺構と推測される。

(高橋)

## 17) RD195土坑

遺構（第36図・写真図版34）

〈位置・検出〉 A調査区最南端東側の2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。RA198生居跡の南部埋め土内に掘削された土坑であるが、正確な輪郭の把握に難点があるものの、当土坑の方が新しい遺構である。また、西端が現用道路下に延びるため全体は検出されていない。

〈平面形・規模〉 輪郭が不明確であるが、平面形は楕円形であり、規模は4m×3.4m位と推測され、深さは40cmを測る。

〈埋土〉 黒褐色を主体に灰黄褐色や黄褐色を示すシルトであるが、色調と混入物によって2層に細分される。混入物としては小礫、炭化物、粘土質土、砂質土などがある。自然堆積による堆積と推測される。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代以降の遺構と推測される。

(高橋)

## 18) RD224土坑

遺構（第35図・写真図版34）

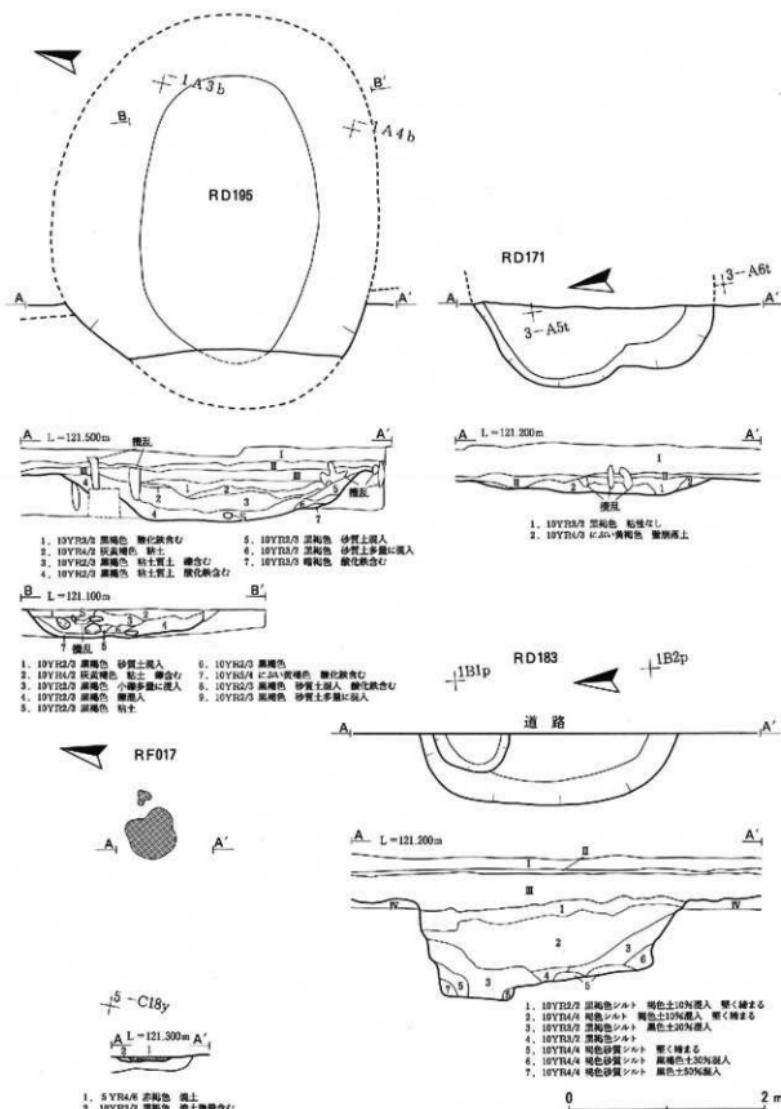
〈位置・検出〉 A調査区中央西側南寄りの2A区に位置し、IV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。RD169土坑の北端部と重複するが、当土坑の方が古い遺構である。また、西端が現用道路下に延びるため全体は検出されていない。

〈平面形・規模〉 重複と道路下に延びるため全体は不明であるが、検出された部分から平面形は隅丸方形か隅丸長方形と推測される。規模は1.15m以上×0.8m以上と推測され、深さは20cmを測る。

〈埋土〉 全体が4層に細分されるが、色調には黒褐色、暗褐色、褐色があり、砂質土か粘土質土が混入物する。人為的な埋め戻しによるものと推測される。

遺物

出土していない。



第36図 土坑類(3)

#### 時期

遺物の出土がないので明示出来ないが、古代以降の遺構と推測される。

(高橋)

#### (5) 溝跡〈RG〉

各調査区とも検出されているが、特に多いのはA調査区とD調査区であり、各調査区ごとではA調査区10条、B調査区2条、C調査区4条、D調査区では20条となり、A・D調査区が特に多い。また、多くの溝跡が18次調査範囲内に連続しており、19次調査範囲内のみでは全体像の見えない遺構が多く、記述ではそれも考慮しながら記載することとする。

##### 1) RG026溝跡

遺構（第42図、写真図版36）

〈位置・重複関係〉 A調査区北部の2A区に位置し、共に東西方向を示す南側のRG102溝跡と北側のRG101溝跡の間を南北に交差するような形で検出されているが、交差する両溝の先に延びる様相は確認されていない。両溝跡との重複による新旧関係は当遺構の方が浅く掘削を受けていることから、当遺構の方が古い。

〈規模・方向〉 規模は上幅が0.6m～0.75m、下幅0.3m～0.4m、深さ10cm前後を測り、長さは重複する両溝跡の間を繋ぐように2.5mであり、磁北からやや東に傾く方向を示している。底面は平坦であるが、壁は丸味を持って外傾するが、若干不規則である。

〈埋土〉 砂質シルトを混入する黒褐色シルトの単層である。

遺物

遺物出土はない。

#### 時期

遺物の出土がないので時期を明確にしがたいが、新期の溝跡と推定される。

(高橋)

##### 2) RG045溝跡

遺構（第37図、写真図版35）

〈位置・重複関係〉 B調査区の東端部の1C区に位置し、遺構の大部分は第18次調査区に延びていることから詳細が不明である。RA159堅穴住居跡（平安時代）と重複し、切っていることから新旧関係は（新）RG045→（旧）RA159である。遺構はⅢ層下位からⅣ上面で検出されている。

〈規模・方向〉 規模は上幅2.8～3.4m、下幅42cm～1.1m、深さ80～90cmを前後を測る。長さは調査区内で、北北西～南南東方向に15m程検出されている。壁は多少崩落しているものの、底面から40度前後の傾斜で立ち上がりっている。底面は多少凸凹があるものの平坦である。

〈埋土〉 黒～黒褐色シルトを主体とする10層に大別される。上位から中位にかけて炭化物と土師器の壊・甕、須恵器の壊等が多く出土している。

(高・義)

遺物（第72～77図、写真図版69～73）

埋め土の上～中位から各種の遺物が大量に出土しており、その中から土師器14点、須恵器36点、縄文土器4点、石製品1点、土製品1点の合計56点を掲載した。

〈土師器・須恵器〉 土師器には壊10点と甕4点が含まれる。壊（154～163・227）はすべてロクロ成形底部

回転糸切り離しであるが、底部が再調整され内面がミガキ後黒色処理される4点（154～157）と再調整のない所謂赤焼き土器の6点（158～163・227）に分けられる。器形は底部から体部が若干の丸味を持って外傾し上師器・須恵器共に同様の器形である。壺の4点（184～187）は、非クロロ成形の185・186の2点と、クロロ成形された184・187の2点に分かれる。前者は共に内外面にハケメの調整痕を持つ体部下半～底部を残存する破片である。後者の内184は内外面ともロクロ調整痕のみを持つ体部上半を残す破片、187は外面にヘラナデとヘラケズリ内面にカキメの調整痕を付す体部下位～底部を残す破片である。

須恵器には环20点（164～183）、壺11点（188～197・199）、壺3点（198・200・201）、長頸瓶2点（202・203）がある。环はすべてロクロ成形底部回転糸切り離し無調整であるが、183には低い高台が付される。器形的には上師器の环とほぼ共通する。壺には大壺8点（190～196・199）と所謂壺3点（188・189・151）がある。大壺の外面には190はヘラケズリされるが他は平行叩き具痕が付され、内面は190がカキメ、195がヘラナデ、199が青海波文、他には平行当て具痕があり、底部が丸底になる器形と推測される。188・189・151は、188がロクロ成形され外面に若干のカキメを残す以外はロクロ成形痕を付す体部上位～口縁部を残し、他の2点は外面へラケズリ、内面カキメの調整痕を持つ体部下半～底部を残す破片である。壺とした3点は198は体部下位～底部、200は肩部～口縁部、201は口縁部のみを残す破片であるが、いずれもロクロ成形痕のを付し、198の底部には回転糸切り痕がある。長頸瓶としたのはロクロ成形された口縁部破片である。

〔土 器〕土器としたのは4点の繩文土器である。器表に繩文のみを付す206・207については時期が不詳であるが、2043・204の特徴は繩文晚期大洞C2式の特徴を示す。

〔石製品〕石皿状に摩滅面が低くなった石であり、繩文時代の遺物である可能性が強い。

〔土製品〕やや歪んだ截頭円錐台形を示す纺錘車である。

#### 時期

出土した古代の遺物は土師器・須恵器とも平安時代前期9世紀中葉の特徴を持つことから、9世紀後半代に満を持する可能性が強い。

### 3) RG094溝跡

#### 遺構（第38図、写真図版35）

〈位置・重複関係〉C調査区中央南寄り東部の3A区に位置し、遺構の大部分は第18次調査区に延び、19次調査範囲では延長約4mの調査である。RG095溝跡と重複しているが、新旧関係は明確に出来なかった。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出されている。

〈規模・方向〉規模は上幅0.7m～0.8m、下幅0.3m～0.4m、深さ20cm前後を測る。長さは18次調査範囲を含め約24m検出しているが、19次調査範囲内では約4mであり、ほぼ東西方向を示している。壁は多少崩落しているものの、底面から40度前後の傾斜で立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉色調が褐色～黒褐色まであり、3層に細分される。全体として粘性と締まりがあり、上2層は砂質、最下層は粘性を持つ。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないので明確にしがたいが、埋め土の状態から新期の遺構である可能性が強い。（高橋）

#### 4) R G095溝跡

遺構（第38図、写真図版35）

〈位置・重複関係〉 C調査区中央南寄り東部の3 A区に位置し、遺構の大部分は第18次調査区に延び、19次調査範囲では延長約9mの調査である。R G094溝跡と重複しているが、新旧関係は明確に出来なかった。遺構はⅢ層下位からIV上面で検出されている。

〈規模・方向〉 規模は上幅0.5m～0.6m、下幅0.2m～0.3m、深さ10cm前後を測る。長さは18次調査範囲を含め約20m検出しているが、19次調査範囲内では約9mであり、磁北よりやや東に偏した方向を示しているが、北端部が東に方向を転じている。壁は多少崩落してるもの、底面から40度前後の傾斜で立ち上がっており、底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉 粘土質の黒褐色シルトの単層であり、全体として粘性と締まりがある。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないので明確にしがたいが、埋め上の状態から新期の遺構である可能性が強い。 (高橋)

#### 5) R G098溝跡

遺構（第40図、写真図版36）

〈位置・重複関係〉 D調査区東端部やや南寄りの5 C区に位置する。遺構の東端は調査区域外の東方にさらに延びるために全体は調査していない。R G099溝跡と西端で重複しているが、当溝跡の埋め土がR G099溝跡の埋め土上部から確認されたことから、当溝跡の方が新しい遺構である。

〈規模・方向〉 規模は上幅0.8m～1.6m、下幅0.5m～1.3m、深さ10cm前後を測る。長さは18次調査範囲を含め約20m検出しているが、19次調査範囲内では約9mであり、磁北よりやや東に偏した方向を示しているが、北端部が東に方向を転じている。壁は多少崩落してものの、底面から40度前後の傾斜で立ち上がっており、底面は多少凹凸があるものの平坦である。

〈埋土〉 粘土質の黒褐色シルトの単層であり、全体として粘性と締まりがある。

遺物（第77・78図、写真図版73・74）

埋め土内から土師器と須恵器が出土しており、その中から実測図と拓本を9点掲載した。

土師器はロクロ成形底部回転糸切り離し再調整で内面ミガキ後黒色処理された壺2点（210・211）と、非ロクロ成形された甕の底部破片1点の合計3点の出土である。須恵器は、ロクロ成形底部回転糸切り離し無調整の壺1点（212）と、ロクロ成形の甕口縁部破片3点（214・216・217）の他体部破片2点（215・218）があり、体部破片に外面に平行叩き具痕、内面平行當て具痕と放射状當て具痕が付される。

時期

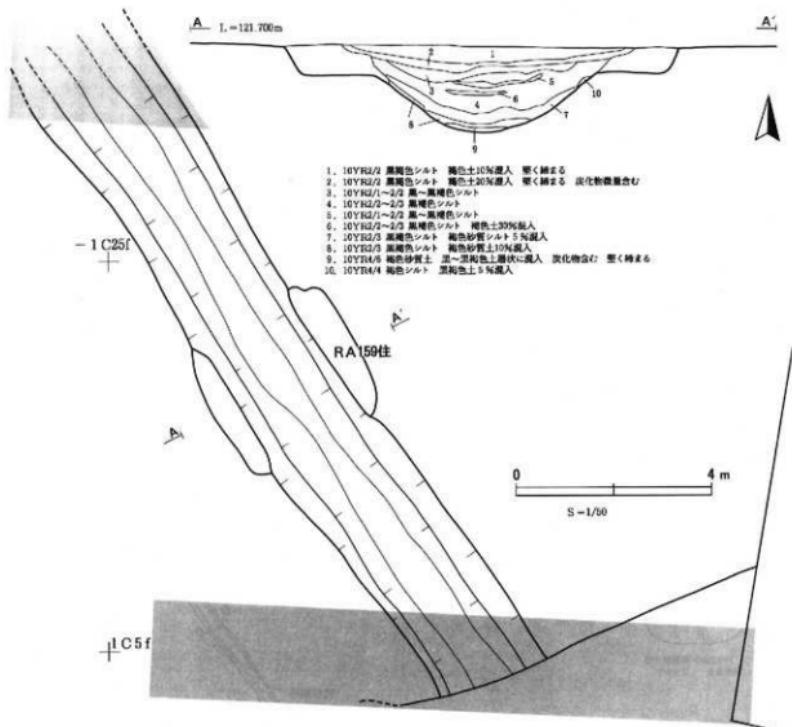
出土遺物の特徴から、平安時代前期9世紀中葉頃に位置づけられようか。

(高橋)

#### 6) R G099溝跡

遺構（第40図、写真図版37）

〈位置・重複関係〉 D調査区の東端～西端まで延びる溝跡で、両方向とも調査区域外のさらに延びるため全体は調査していない。R G098溝跡と東西中央東寄りで重複しているが、当溝跡の埋め土にR G098溝跡の埋



第37図 R G 045溝跡

土が乗っていることから当溝跡の方が旧い遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅1.5m~2.0m、下幅1m~1.5m、深さは最大45cm前後を測る。長さは約115m検出しているが、東西両方向にさらに延びるため全長は不明である。直線的な様相ではなく蛇行しているが、方向は大略東西方向を示し、東端部は18次調査範囲に延びる。壁は多少崩落してるので、底面から40度前後の傾斜で立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

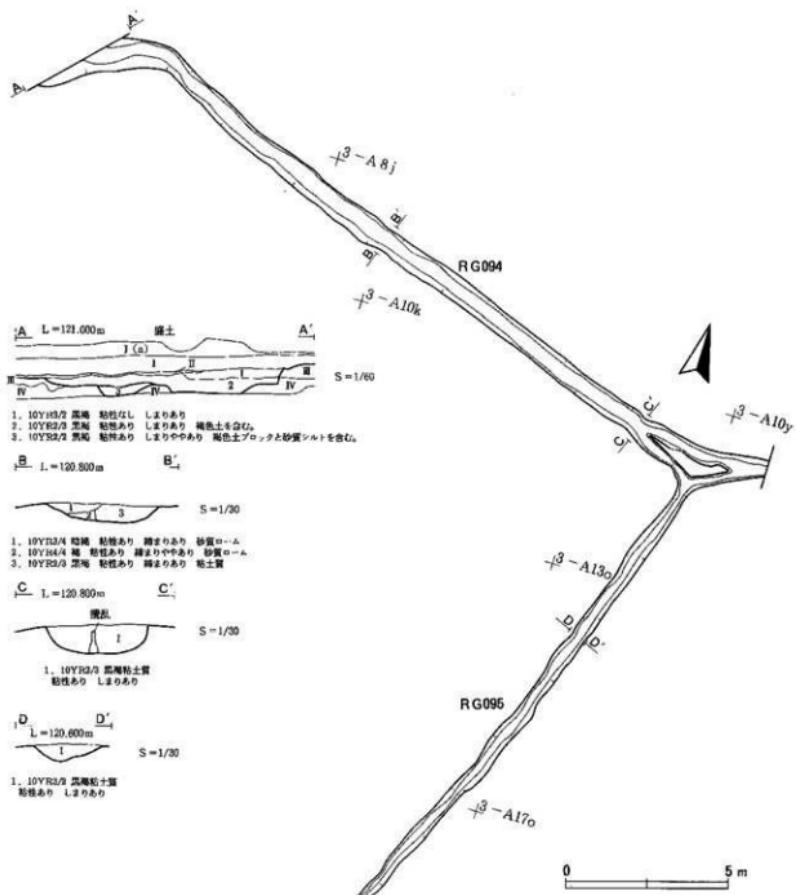
〈埋土〉埋土は位置によって違いが見られるものの、最大で9層に細分されている。色調は黒褐色が主体で暗褐色や明褐色などがあり、砂質シルトや褐鉄の混入する層が多く、下層には粘性を帯びる場合が多い。

当溝跡は方向が蛇行し埋め土の土性も他の溝跡と感触が幾分異なる様相を示し、性格的には人工的な溝跡ではなく自然の小川的な流路である可能性が強いように考えられる。

遺物（第72・79~81図、写真図版69・74~76）

埋土内から非常に多くの遺物が出土しており、その中から実測図と拓本で31点掲載した。

土器器は15点の掲載であるが、その中には壺11点（219~226・228・229）、高台付き壺2点（233・234）、



第38図 RG094溝跡・RG095溝跡

甕1点(235)がある。环はロクロ成形回転糸切り離し一部再調整内面ミガキ後黒色処理される3点(219~221)とロクロ成形底部回転糸切り離し無調整内面処理のない所謂赤焼き土器7点(224~229)がある。高台付き环は内面黒色処理される個体に断面が「ハ」字状に踏ん張る角形の高台と断面三角形で低い高台の2種類ある。甕は内外面ともヘラナデされたロクロ成形の体部下半並底部を残す破片(235)と、非ロクロ成形の体部上位~頸部を残す破片(250)である。須恵器はロクロ成形底部回転糸切り離し無調整の环3点(229~231)、ロクロ成形された所謂甕3点(238~239~241)、大甕の口縁部と体部の破片が7点(236~237)。

240・242~245)、壺の体部破片1点(248)、長頸瓶の肩部と体部下位~高台の付く底部2点(246・247)がある。

#### 時期

出土した遺物がほぼ同時期の特徴を持っていることから、平安時代9世紀中葉頃に水流を伴っていた小川的な自然流路と推定される。  
(高橋)

### 7) RG100溝跡

#### 遺構(第41図、写真図版39)

〈位置・重複関係〉D調査区のほぼ中央に位置する溝跡で、調査範囲内で完結している。重複する遺構はなく、単独で検出された。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.3m~0.5m、下幅0.2m~0.3m、深さは最大25cm前後を測る。長さは約24m検出しているが、方向が不規則で東端がほぼ南北、そして途中から北西方向に転じさらにやや南寄りに方向を変え、直線的ではなく蛇行している。壁は多少崩落してるので、底面から40度前後の傾斜で立ち上がっていいる。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉埋め土は色調によって2層に細分されるが、全体に粘性があって砂質シルトが混入し、下層に褐鉄を少量含む。

#### 遺物

遺物の出土はない。

#### 時期

遺物が出土していないため明示出来ないが、新しい時期の溝跡である可能性が強い。

(高橋)

### 8) RG101溝跡

#### 遺構(第42図、写真図版40)

〈位置・重複関係〉A調査区の北端部に位置する溝跡で、東西両端が調査範囲外に延びるため全体的なことは不明である。RA175住居跡、RG136溝跡、RG026溝跡等と重複するが、新旧関係は(新)RG136→RG101→RG026→(旧)RA175である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.4m~0.9m、下幅0.3m~0.5m、深さは最大20cm前後を測る。検出された長さは約16mであるが、東西方向ともにさらに延び、方向は東北東~西南西にほぼ直線的である。壁は多少崩落してるので、底面から大きく外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉埋め土の色調は黒褐色を主体に暗褐色であるが、色調と混入物によって6層に細分される。砂質シルト褐鉄を混入する土層が多い他一部に粘性がある。

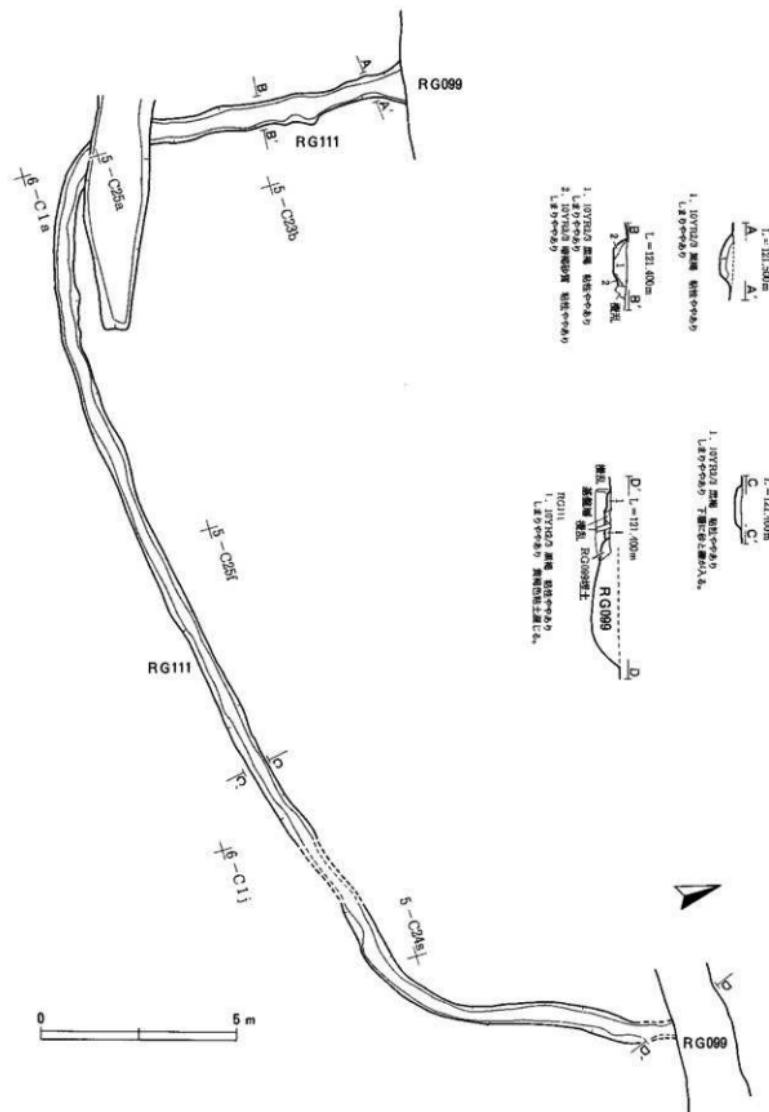
#### 遺物

遺物の出土はない。

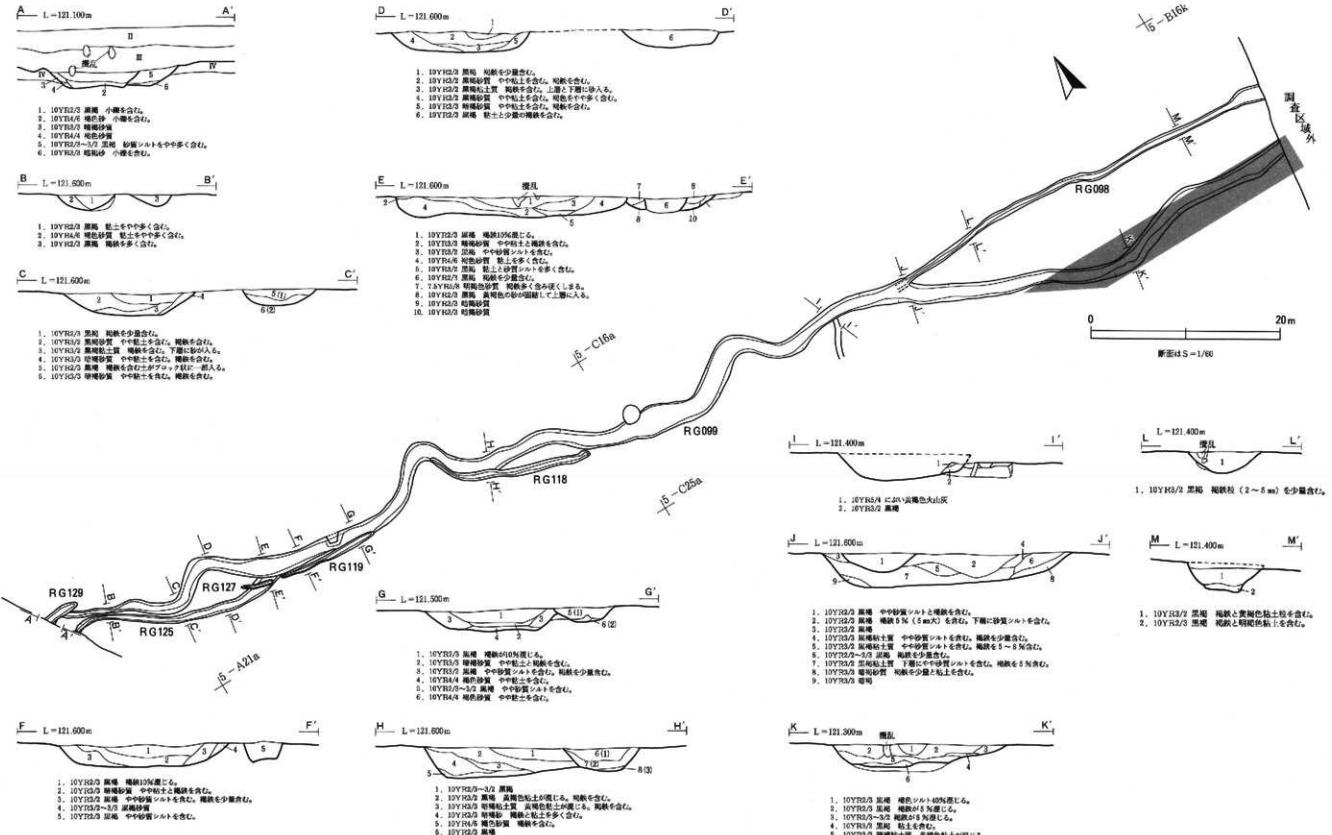
#### 時期

遺物が出土していないため明示出来ないが、重複関係から新期の溝跡である可能性が強い。

(高橋)



第39図 RG 111 溝跡



第40図 R G088溝跡・R G099溝跡・R G118溝跡・R G119溝跡・R G125溝跡・R G127溝跡・R G129溝跡

### 9) RG102溝跡

#### 遺構（第42図）

〈位置・重複関係〉 A調査区の北端部に位置する溝跡で、東西両端が調査範囲外に延びるため全体的なことは不明である。RG026溝跡、RG134溝跡、RG135溝跡と重複するが、新旧関係は（新）RG134→RG102→RG135→（旧）RG026である。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅0.8m～1.1m、下幅0.3m～0.5m、深さは最大50cm前後を測る。検出された長さは約16mであるが、東西方向ともにさらに延び、方向は東北東～西南西にはば直線的である。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉 埋め土の様相が場所によって若干違いがあるものの、概ね5層に細分される。色調はいずれも黒褐色と共通するが上位層には小礫、下位層には砂質シルトが混入し、一部に褐鉄が混在する。

#### 遺物

遺物の出土はない。

#### 時期

遺物が出土していないため明示出来ないが、重複関係から新期の溝跡である可能性が高い。(高橋)

### 10) RG111溝跡

#### 遺構（第39図、写真図版41）

〈位置・重複関係〉 D調査区のほぼ中央東寄りにRG099溝跡から派生し同溝跡に戻る状態で位置し、本来はRG117溝跡に連続する可能性がある。RG099溝跡と重複するが、新旧関係は（新）RG111→（旧）RG099である。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅0.35m～0.7m、下幅0.2m～0.45m、深さは最大15cm前後を測る。検出された長さは総延長約40mであるが、方向は東端が北から南に延びて西に方向を転じ、さらに北に再度変えるという、やや不規則な溝跡である。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉 色調によって黒褐色シルトと暗褐色砂質土と2層に細分されるが、全体としてやや縮まりと粘性がある。

#### 遺物（第81図、写真図版76）

埋土内から須恵器大甕の外面に平行叩き具痕、内面に平行当て具痕を付した体部破片が1点出土している。(高橋)

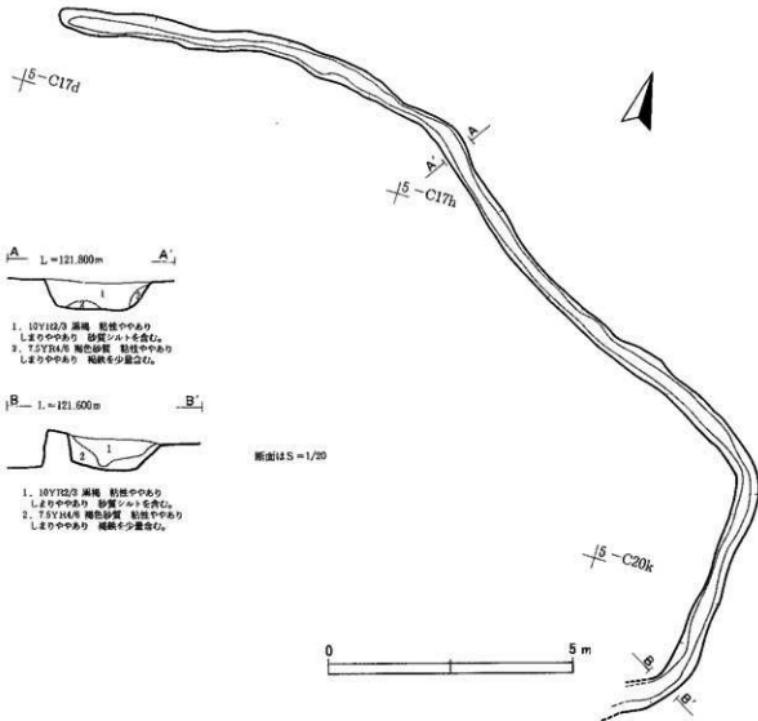
#### 時期

平安時代と推測される須恵器大甕の破片が出土しているものの、埋め土の状況から新期の溝跡である可能性が強い。

### 11) RG117溝跡

#### 遺構（第43図、写真図版40）

〈位置・重複関係〉 D調査区の東寄りにRG099溝跡から北方に派生した溝跡で、本来はRG111溝跡に連続する可能性がある。RG099溝跡と重複するが、新旧関係は（新）RG117→（旧）RG099である。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。



第41図 R G 100溝跡

〈規模・方向〉規模は上幅0.35m～0.65m、下幅0.15m～0.4m、深さは最大20cm前後を測る。検出された長さは総延長約11mであるが、北端部が18次調査範囲に延びる。方向ほぼ南北に直線的である。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉地点によって幾分違いがあるものの、色調が黒褐色と共に、全体的に粘性としまりがややあり、3層に砂質シルトを混じる。

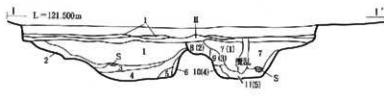
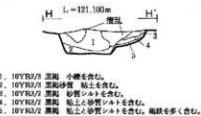
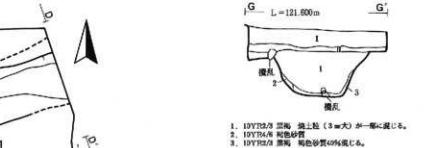
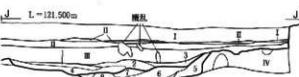
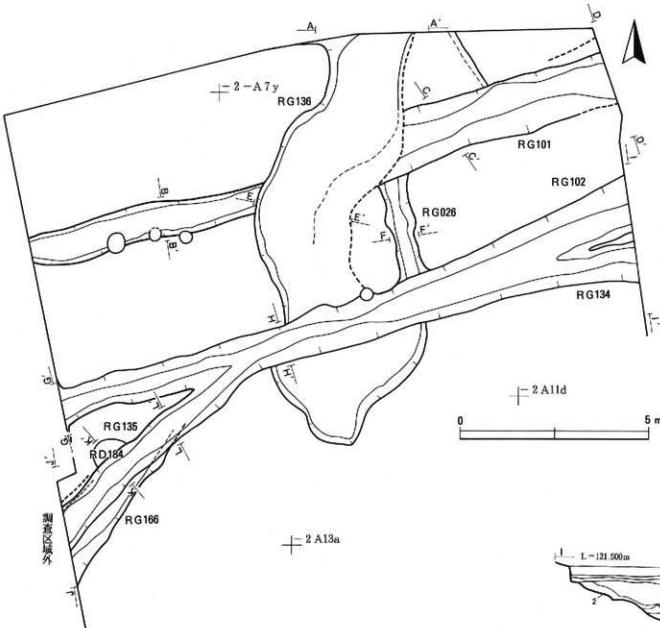
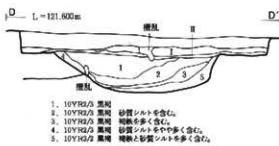
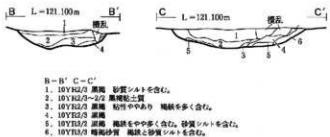
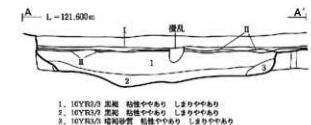
#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋め土の状況から新期の溝跡である可能性が強い。

(高橋)



断面 S = 1/60

第42図 R G026溝跡・R G101溝跡・R G102溝跡・R G134溝跡・R G135溝跡・R G166溝跡

## 12) RG118溝跡

遺構（第40図、写真図版38）

〈位置・重複関係〉D調査区中央西寄りに位置し、RG099溝跡に一部が重複する東西方向の溝跡である。本来はRG119溝跡に連続する可能性がある。重複による新旧関係は（新）RG118→（旧）RG099である。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.15m～0.25m、下幅0.1m～0.15m、深さは最大25cm前後を測る。検出された長さは約4.5mであり、ほぼ直線的な東西方向であるが、西端が北西に軽く曲がる。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がりっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉色調の違いによって3層に細分されるが、2層には粘性があり、3層には褐鉄が混じる。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋め土や重複関係の状況から新期の溝跡である可能性が強い。

(高橋)

## 13) RG119溝跡

遺構（第40図、写真図版41）

〈位置・重複関係〉D調査区西寄りに位置し、RG099溝跡に一部が重複する東西方向の溝跡である。本来はRG118溝跡に連続する可能性がある。重複による新旧関係は（新）RG119→（旧）RG099である。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.1m～0.2m、下幅0.05m～0.1m、深さは最大15cm前後を測る。検出された長さは約3.8mであり、ほぼ直線的な東西方向を示す。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がりっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉色調の違いによって2層に細分され、2層には粘性があり、1層には砂質シルトが混じる。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋め土や重複関係の状況から新期の溝跡である可能性が強い。

(高橋)

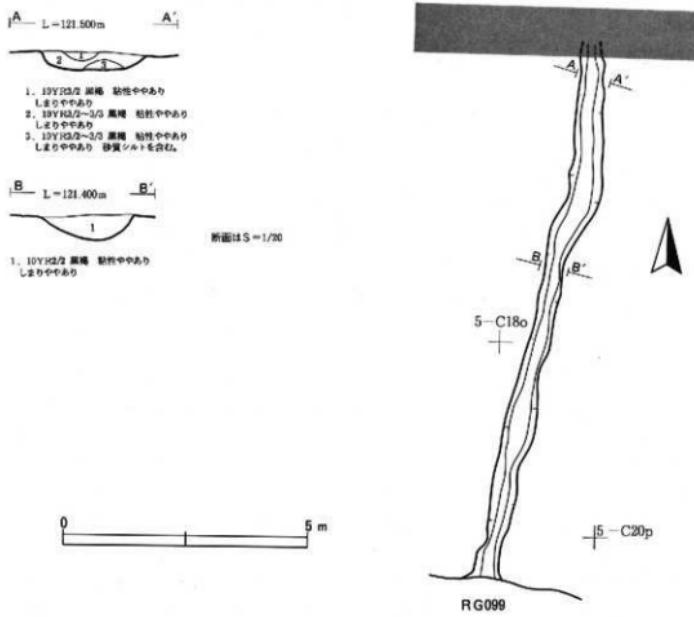
## 14) RG120溝跡

遺構（第44図、写真図版42）

〈位置・重複関係〉D調査区西端寄りに位置し、北西端が18次調査範囲に延びる。重複する遺構も無く単独で検出された。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.45m～0.9m、下幅0.2m～0.5m、深さは最大30cm前後を測る。検出された長さは約3.8mであり、北西～南東方向を示し北西端が2条に分枝し北方に方向を転じる溝跡である。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がりっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉地点によって若干色調に違いがあり3層に細分され、全体的にややしまりと粘性があり、2・3層には粘土、3層には砂が多く混じる。



第43図 RG117清跡

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から新しい時期の溝跡である可能性が強い。（高橋）

### 15) RG122溝跡

#### 遺構（第45図）

〈位置・重複関係〉 C調査区北端部に位置し、検出された西側の大半が18次調査範囲に延び、東端は調査範囲外にさらに延びる。18次調査範囲でRG123溝跡と重複するが、19次調査範囲での重複はない。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅0.2m～0.3m、下幅0.1m～0.35m、深さは最大30cm前後を測る。検出された長さは約20mであるが、19次調査範囲内では約6mであり、ほぼ東～西方向を示す。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉 色調によって黒褐色と暗褐色の2層に細分され、他の土質の土が混在する。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から新しい時期の溝跡である可能性が強い。（高橋）

### 16) RG124溝跡

#### 遺構（第46図）

〈位置・重複関係〉 C調査区のほぼ中央やや南寄りに位置し、検出された西側の大半が18次調査範囲に延び、東端は調査範囲外にさらに延びる。18次調査範囲でRG123溝跡と重複するが、19次調査範囲での重複はない。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅0.4m～0.55m、下幅0.1m～0.35m、深さは最大25cm前後を測る。検出された長さは約21mであるが、19次調査範囲内では約5.5mであり、若干蛇行気味であるが東～西方向を示す。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉 色調によって黒褐色と暗褐色の2層に細分され、1層には砂質シルトと少量の炭化物、2層には黒褐色土が混在する。

#### 遺物

出土していない。

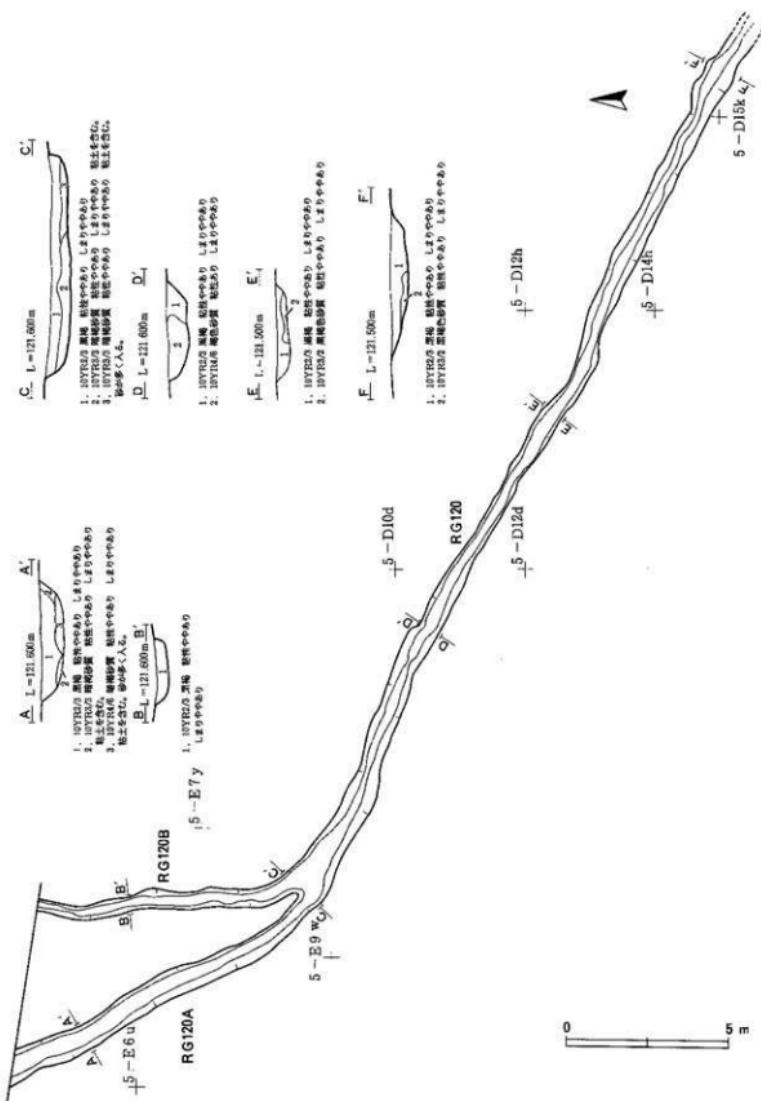
#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から新しい時期の溝跡である可能性が強い。（高橋）

### 17) RG125溝跡

#### 遺構（第40図、写真図版38）

〈位置・重複関係〉 D調査区の西端部に位置し、西側が18次調査範囲にさらに延び、東端はRG099溝跡と重複するが、土層観察から当溝跡の方が古い遺構である。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。



第44図 R G 120溝跡

〈規模・方向〉規模は上幅0.2m~0.3m、下幅0.1m~0.25m、深さは最大18cm前後を測る。

検出された長さは約6mであり、若干蛇行気味であるが東一西方向を示す。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉地点によって若干違いがあるものの、色調によって黒褐色と暗褐色の2層に細分され、1層と2層には褐鉄を含み、2層にはやや粘性がある。

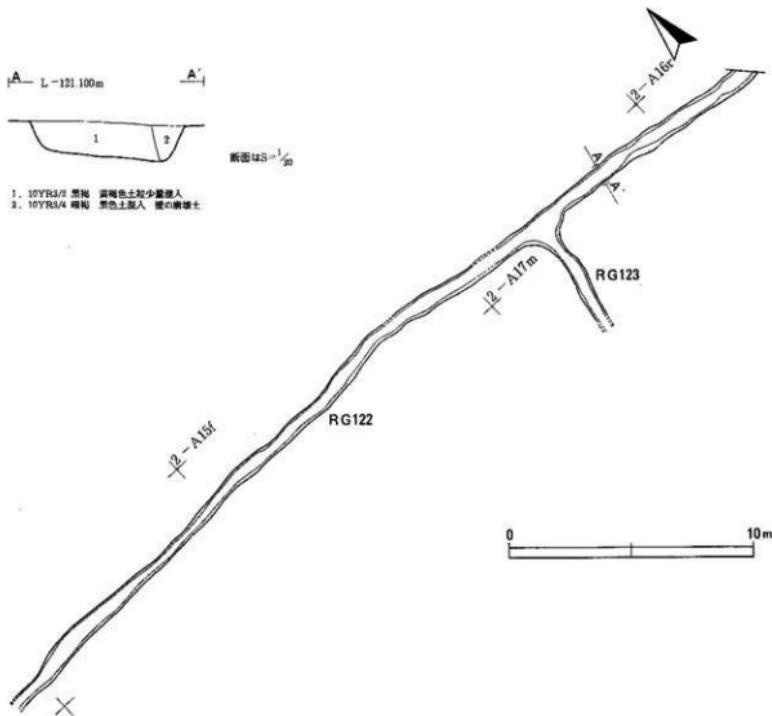
#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、重複関係から古代の可能性がある。

(高橋)



第45図 RG122溝跡

### 18) RG126溝跡

遺構（第47図、写真図版43）

〈位置・重複関係〉D調査区の中央やや西寄りに位置し、南部18次調査範囲にさらに延び、東端はRG099溝跡と接続し、さらにRG142溝跡が分岐するように重複するが、新旧関係は明確に出来なかった。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.35m～0.6m、下幅0.2m～0.4m、深さは最大30cm前後を測る。検出された総延長は約21mであるが、19次調査範囲は3mほどであり、若干蛇行するがほぼ南北方向を示す。壁は多少崩落しているものの、底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉全体が色調によって3層に細分されるが、1層は黒褐色、2・3層が砂質の暗褐色を示し、全体的にしまりと粘性があり、1層には砂質シルトRG126溝跡が混じる。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、重複関係から古代の可能性がある。

(高橋)

### 19) RG127溝跡

遺構（第40図、写真図版44）

〈位置・重複関係〉D調査区の西端寄りに位置し、RG125溝跡の上に重複するような状況を示し、さらに方向や規模ではRG119溝跡と接続するような雰囲気のある溝跡である。重複の新旧関係は当溝跡が新しい。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.05m～0.1m、下幅0.05m、深さは最大5cm前後を測る。検出された長さが約1mであり、痕跡程度の残存状態である。壁は底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉黒褐色シルトの単層である。

遺物

出土していない。

時期

遺物の出がないため断定出来ないが、重複関係から新しい時期の溝跡である可能性がある。

(高橋)

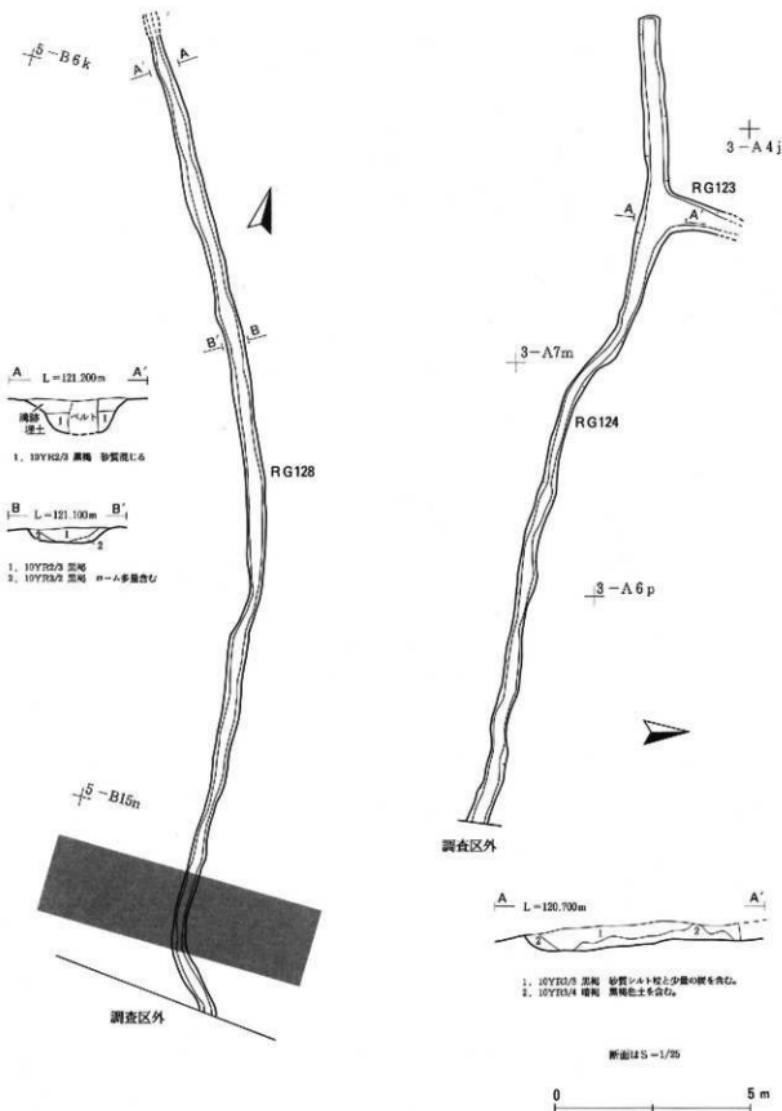
### 20) RG128溝跡

遺構（第46図、写真図版45）

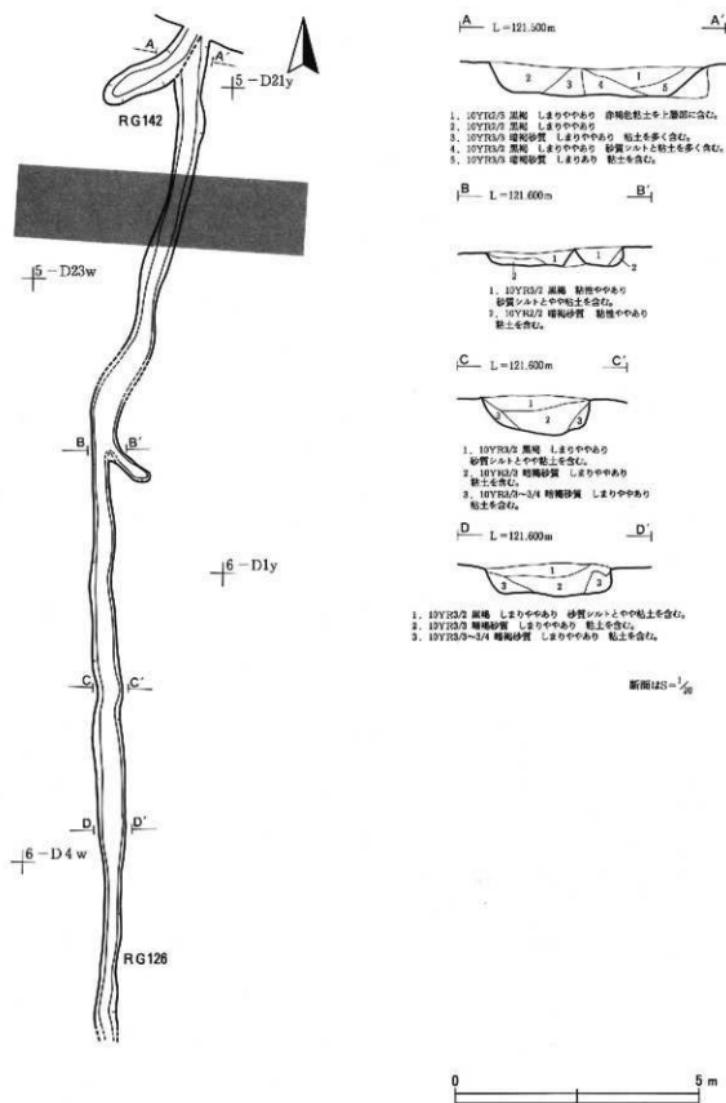
〈位置・重複関係〉D調査区東端部の北隅部に位置し、北部は18次調査範囲、南部は現用道路下に延びる溝跡であり、重複する遺構もなく単独で検出された。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.4m～0.5m、下幅0.15m～0.25m、深さは最大35cm前後を測り、北に寄るほど深くなる傾向が見られる。検出された総延長は約26mであるが、19次調査範囲内は約2mである。壁は底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉地点によって多少混入物に違いがあるものの、色調は黒褐色と共通する。1層には砂質シルトが、2層にはローム質土が大量に混じる。



第46図 RG124溝跡・RG128溝跡



第47図 RG126溝跡・RG142溝跡

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から新しい時期の溝跡である可能性がある。 (高橋)

### 21) RG129溝跡

#### 遺構 (第40図、写真図版45)

〈位置・重複関係〉 D調査区西端部の北隅部に位置し、東部は18次調査範囲に延びる溝跡であり、RG099溝跡と重複し、当溝跡の方が新しい遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅0.2m～0.25m、下幅0.15m、深さは最大15cm前後を測る。検出された長さは約1mである。壁は底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉 黒褐色シルトの単層である。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から新しい時期の溝跡である可能性がある。 (高橋)

### 22) RG132溝跡

#### 遺構 (第48図)

〈位置・重複関係〉 A調査区北部東寄りに位置し、検出状況ではRG133溝跡と重複するが、現実はRG133溝跡から分岐する同性格の溝跡とした方が理解しやすい遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅0.6m～0.8m、下幅0.35m～0.4m、深さは最大25cm前後を測る。検出された長さは約7.5mである。北西～南東にほぼ直線的に延びる。壁は底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるもの平坦である。

〈埋土〉 埋め土全体がしまりと粘性のある黒褐色シルトと共に通するが、混入物シルトによって3層に細分されている。2層には砂質シルト、3層には小礫が多く混入する。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋め土の状況から新規の溝跡である可能性がある。 (高橋)

### 23) RG133溝跡

#### 遺構 (第45図、写真図版46)

〈位置・重複関係〉 A調査区北部に位置し、東部は18次調査範囲に延びる溝跡であり、RG132溝跡と重複するが、検出状況では重複であるが現実はRG132溝跡が分岐する同性格の溝跡とした方が理解しやすい遺構である。さらに、西端がRD166土坑と重複するが、当遺構の方が古い時期の遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.5m～0.85m、下幅0.20m～0.44m、深さは最大30cm前後を測る。検出された総延長は約23.5mであるが、19次調査範囲内は8.5mである。壁は底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるものの平坦である。

〈埋土〉全体としてしまりと粘性があるものの、地点によって色調や混入物が若干異なる。色調は上位層から黒褐色、暗褐色、褐色に細分され、1層には砂質シルトが混じる。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から新しい時期の溝跡である可能性がある。 (高橋)

### 24) RG134溝跡

#### 遺構（第42図、写真図版46）

〈位置・重複関係〉A調査区北端部の東隅部に位置し、東部は18次調査範囲に延びる溝跡であるが、RG102溝跡と重複関係にありRG102溝跡と合流するが、重複関係による新旧関係は不明である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅1m前後、下幅0.4m前後、深さは最大40cm前後を測る。検出された長さは約2mであり、その付近でRG102溝跡と合流しほぼ東西方向を示す。壁は底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるものの平坦である。

〈埋土〉上位の1～3層は黒褐色、下位は暗褐色と褐色と色調に差が見られ、土性についても上位層は砂質シルトが混入し、下位層は主として砂質で5層には礫が混じる。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況や重複関係から古代以降の溝跡の可能性がある。

(高橋)

### 25) RG135溝跡

#### 遺構（第42図、写真図版47）

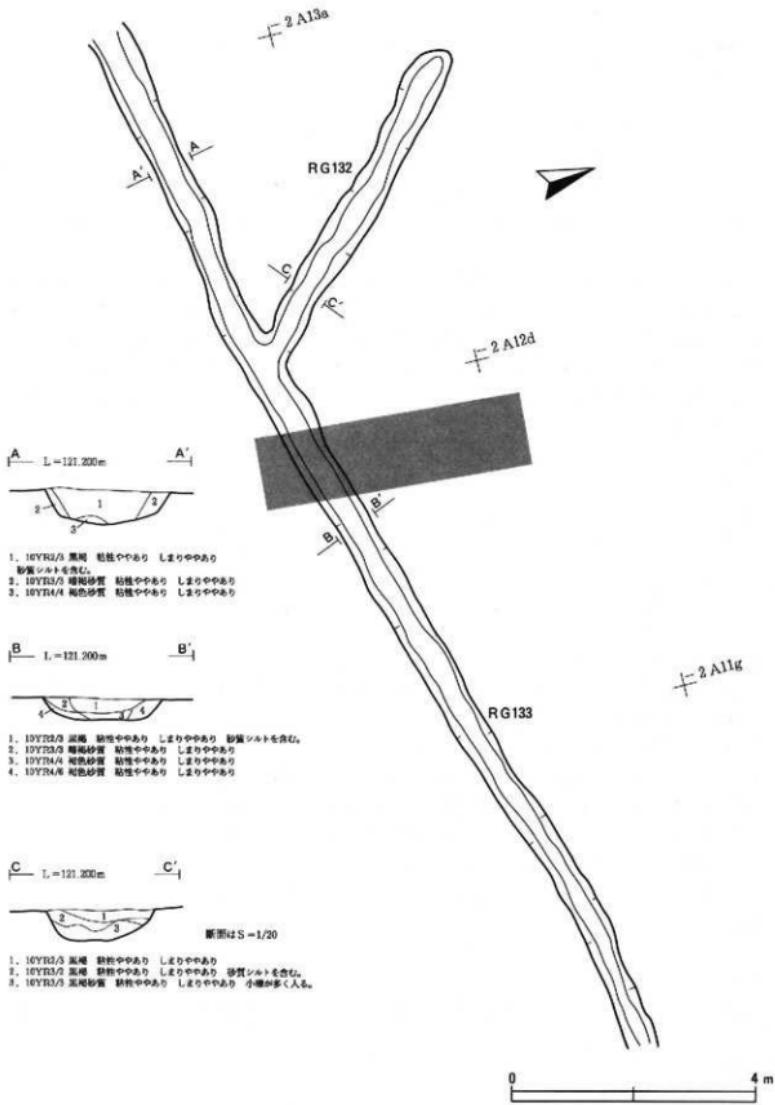
〈位置・重複関係〉A調査区北端部の西隅部付近に位置し、西部は18次調査範囲に延びる溝跡であるが、RG102溝跡と重複関係にありRG102溝跡と合流か分岐しており、重複関係による新旧関係は不明である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅0.8m～1m前後、下幅0.3m～0.6m前後、深さは最大50cm前後を測る。検出された長さは約7mであり、その付近でRG102溝跡と合流する。壁は底面から軽く外傾して立ち上がっている。底面は多少凹凸があるものの平坦である。

〈埋土〉全体が6層に細分されるが、色調は1層～4層の黒褐色と5・6層の黒褐色に大別される。土性は全体がシルトであるが、褐鉄と砂質シルトを含む層が多い他、下層は砂質土である。

#### 遺物

出土していない。



第48図 RG132溝跡・RG133溝跡

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況や重複関係から古代以降の溝跡の可能性がある。

(高橋)

#### 26) RG136溝跡

遺構（第42図、写真図版47）

〈位置・重複関係〉A調査区北端部のはば中央に位置し、北部は調査範囲外に延びる溝跡であるが、RG101溝跡・RG102溝跡と重複関係にあり、重複関係による新旧関係はRG101溝跡が当溝跡より古くRG102溝跡は新しい遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅約2m前後、下幅1.8m前後、深さは10cm～40cm前後と不規則である。検出された長さは約11mであり、北部はさらに延びるため全長は不明である。方向はほぼ南北と言えるが、蛇行しており、角部分が延びたクランク状をなす。壁は底面から軽く外傾して立ち上がるが、凹凸があり全体としてみれば不規則である。溝跡のではあるが、耕作などによって生じた溝跡的な遺構と推測される。

〈埋土〉全体の色調が暗褐色とほぼ共通するが、混入物によって5層に細分される。全体に褐鉄が入る他、下位層には砂質シルトが含まれる。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況や重複関係から古代以降の溝跡の可能性がある。

(高橋)

#### 27) RG138溝跡

遺構（第49図、写真図版48）

〈位置・重複関係〉A調査区南端部に位置し、東部は18次調査範囲に延びる溝跡であるが、西側でRA198堅穴住居跡と重複関係にあり、重複関係による新旧関係はRA198住居跡の方が古い遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅約0.5m～0.8m前後、下幅0.2m～0.5m前後、深さは10cm以下である。検出された総延長は約10mであるが、19次調査範囲部分は0.7mほどである。方向はほぼ東西をしめす。壁は底面から軽く外傾して立ち上がり、幾分底面に凹凸が見られるものの全体として見れば平坦である。

〈埋土〉全体が3層に細分されるが、色調では黒褐色と褐色であり1層には小礫が混じり他の層には砂質シルトの混入がある。

#### 遺物

出土していない。

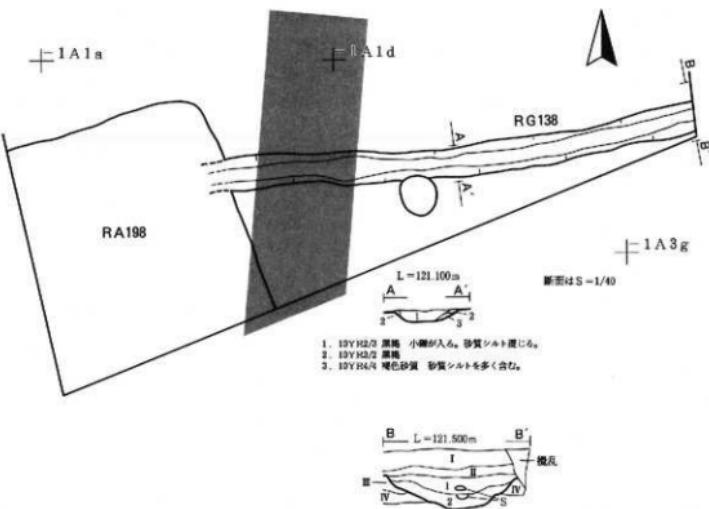
#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況や重複関係から古代以降の溝跡である。

(高橋)

#### 28) RG142溝跡

遺構（第47図、写真図版43）



L = 121.300m  
 1. 10YH2/3 黒褐色 上層部に十和田a層下火山灰を含む。  
 2. 10YH2/2 黒褐色 粘土と砂質シルトを含む。  
 3. 10YH2/0 暗色砂質 粘土を含む。  
 4. 10YH4/4 暗色砂質 粘土を含む。  
 機凡

断面は S = 1/40

0 5 m

第49図 RG138溝跡・RG143溝跡

〈位置・重複関係〉 D調査区中央部南端に位置し、北側でR G111溝跡及びR G099溝跡と重複関係にあり、重複関係による新旧関係は明確に出来なかった。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅約0.5m～0.65m前後、下幅0.2m～0.3m前後、深さは10cm前後である。検出された長さは約2.5mであり、方向は北東～南西を示す。壁は底面から軽く外傾して立ち上がり、幾分底面に凹凸が見られるものの全体として見れば平坦である。

〈埋土〉 全体が5層に細分されるが、色調は黒褐色と暗褐色であり、全体としてしまりよく1層には赤褐色粘土、1層～5層には粘土、4層には砂質シルトの混入がある。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況や重複関係から古代以降の溝跡である。 (高橋)

### 29) R G143溝跡

#### 遺構 (第49図、写真図版48)

〈位置・重複関係〉 D調査区東端部北端に位置し、東端が調査範囲外、西端が一部R E017堅穴状遺構と重複して調査範囲外に延びており、重複関係による新旧関係は当溝跡の方が新しい遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅約0.4m～0.7m前後、下幅0.2m～0.45m前後、深さは6cm前後である。検出された長さは約16mほどであり、方向は湾曲しているがほぼ東～西を示す。壁は底面から軽く外傾して立ち上がり、幾分底面に凹凸が見られるものの全体として見れば平坦である。

〈埋土〉 2層に細分されるが、色調は黒褐色と共に1層上部には十和田a降下火山灰を少量含み、2層には粘土を含む。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から古代の溝跡と推定される。 (高橋)

### 30) R G144溝跡

#### 遺構 (第50図、写真図版49)

〈位置・重複関係〉 D調査区中央部南端に位置し、南端が18次調査範囲、北端がR G099溝跡と重複する他、西側がR G145溝跡とも重複しているが、重複関係による新旧関係は当溝跡の方が新しい遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅約0.8m～1.7m前後、下幅0.5m～1.3m前後、深さは28cm前後である。検出された長さは約6mほどであるが、19次調査範囲内は約1mのみである。方向はほぼ南～北を示す。壁は底面から軽く外傾して立ち上がり、幾分底面に凹凸が見られるものの全体として見れば平坦である。

〈埋土〉 4層に細分されるが、色調は黒褐色を主体に暗褐色と褐灰色があり、土性はいずれもしまりと粘性があり、褐鉄の混在する2層が多い。

## 遺物

出土していない。

## 時期

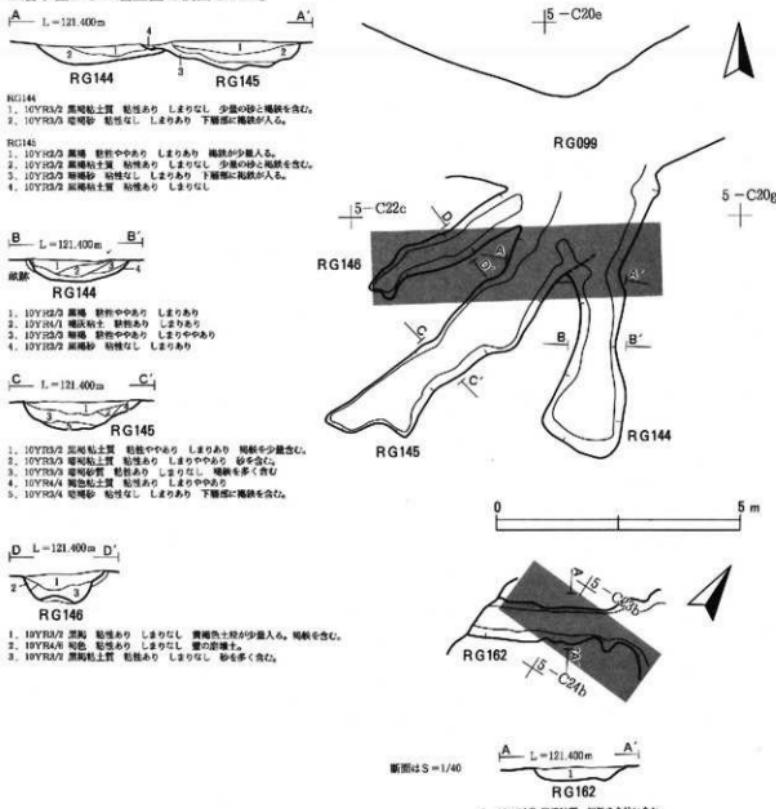
遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から古代以降の溝跡と推定される。

(高橋)

### 31) RG145溝跡

#### 遺構 (第50図、写真図版49)

〈位置・重複関係〉 D調査区中央部南端に位置し、南端が18次調査範囲、北端がRG099溝跡と重複する他、東側がRG144溝跡とも重複しているが、重複関係による新旧関係は当溝跡の方が古い遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。



第50図 RG144溝跡・RG145溝跡・RG146溝跡・RG162溝跡

〈規模・方向〉規模は上幅約0.5m～1.4m前後、下幅0.5m～1.1m前後、深さは20cm前後である。検出された長さは約6.5mほどであるが、19次調査範囲内は約0.5mのみで、方向はほぼ南西～北東を示す。壁は底面から軽く外傾して立ち上がり、幾分底面に凹凸が見られるものの全体として見れば平坦である。

〈埋土〉色調が暗褐色を主体に黒褐色と褐色の4層に細分されるが、土性はいずれもしまりと粘性があり、褐鉄の混在する層が多い。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から古代以降の溝跡と推定される。

(高橋)

### 32) RG146溝跡

#### 遺構(第50図、写真図版49)

〈位置・重複関係〉D調査区中央部南端に位置し、南端が18次調査範囲、北端がRG099溝跡と重複する他、東側がRG145溝跡とも重複しているが、重複関係による新旧関係は明確にされていない。遺構はⅢ層下位からIV層上面で検出された。

〈規模・方向〉規模は上幅約0.4m～0.7m前後、下幅0.2m～0.35m前後、深さは25cm前後である。検出された長さは約3.5mほどであるが、19次調査範囲内は約1.5mのみで、方向はほぼ南西～北東を示す。壁は底面から軽く外傾して立ち上がり、幾分底面に凹凸が見られるものの全体として見れば平坦である。

〈埋土〉色調が黒褐色と褐色の2層に細分されるが、土性はいずれも粘性があり、1層には褐鉄を含み3層には砂を多く混在する。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から古代以降の溝跡と推定される。

(高橋)

### 33) RG157溝跡

#### 遺構(第51図・写真図版49)

〈位置・重複関係〉B調査区東側-1C～1C区に位置し、IV層上面で検出している。RA164堅穴住居跡(平安)・RE005堅穴状遺構(奈良)と重複し、これらに切られていることから新旧関係は(新)RA164→RE005→(旧)RG157である。

〈規模・方向〉RA164・RE005に切られているため詳細は不明である。規模は上幅31～55cm、下幅14～36cm、深さ約16cmで、現存する長さは約8.4mである。北～南方向に約1.9m延びた後-1C区にかかる部分で大きく湾曲し、この部分をRE005堅穴状遺構に切られている。その後、南東方向に約2.3m延びてRA164堅穴住居跡に切られている。壁は底面からやや急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉黒褐色シルトを主体とする単層で、暗褐色土が少量混じっている。

(佐藤)

#### 遺物

出土していない。

### 時期

遺物の出土はないが重複関係から古代の遺構である。

(高橋)

### 34) R G162溝跡

#### 遺構（第50図・写真図版50）

〈位置・重複関係〉 D調査区中央部南端に位置し、南端が18次調査範囲、北端がR G099溝跡と重複しているが、重複関係による新旧関係は明確にされていない。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅約0.6m～0.8m前後、下幅0.4m～0.5m前後、深さは10cm前後である。検出された長さは約4mほどであるが、19次調査範囲内は約1.5mのみで、方向はほぼ南西～北東を示す。壁は底面から軽く外傾して立ち上がり、幾分底面に凹凸が見られるものの全体として見れば平坦である。

〈埋土〉 鉄鉱が混入した黒褐色砂質シルトの単層である。

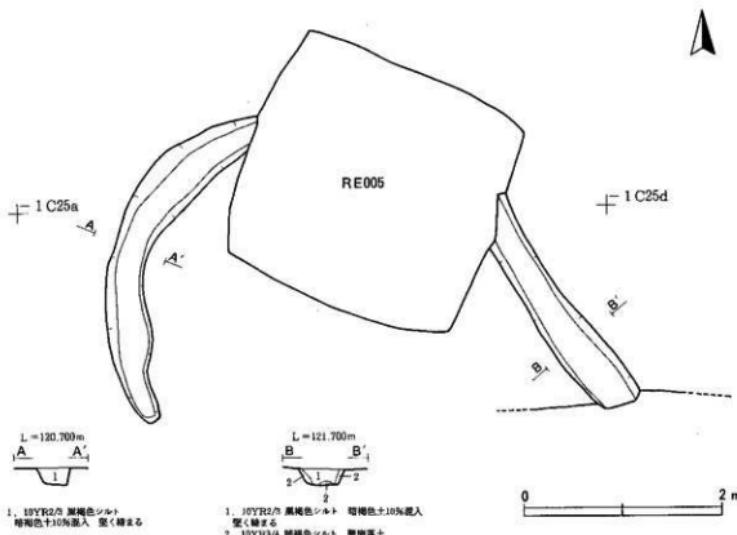
#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋土の状況から古代以降の溝跡と推定される。

(高橋)



第51図 R G 157溝跡

### 35) R G166溝跡

#### 遺構（第42図）

〈位置・重複関係〉 A調査区北端部西端に位置し、西端が現用道路下に延びる他、東側はR G135溝跡と重複しているが、重複関係による新旧関係は当溝跡の方が古い遺構である。遺構はⅢ層下位からⅣ層上面で検出された。

〈規模・方向〉 規模は上幅、下幅ともR G135溝跡の掘削によって残存しておらず計測出来ないが、深さは15cm前後と浅い。検出された長さは約5mほどであるが、西側がさらに延びるため全長は不明である。方向はほぼ南西—北東を示す。壁は底面から大きく外傾して立ち上がり、底面に幾分凹凸が見られるものの全体として見れば平坦である。

〈埋土〉 色調が上位4層は黒褐色、下位の2層は褐色に細分されるが、土性はいずれもシルトであり、褐鉄を含む層が多い他砂質シルトが多く混在する層もある。

#### 遺物

出土していない。

#### 時期

遺物の出土がないため断定出来ないが、埋め土の状況から古代以降の溝跡と推定される。

(高橋)

### (6) 柱穴状土坑群〈R Z〉

柱穴状土坑群がA調査区とB調査区の2カ所で検出されているが、いずれも18次調査範囲にさらに広がる分布状況を示し、建物跡になるかは隣接地の状況とも合わせて考える必要があるが、掘立柱建物跡となつたものについては別項で既述したので、本項では掘立柱建物跡にならなかつた柱穴状土坑に限定して記載する。

#### 1) R Z017柱穴状土坑群

##### 遺構（第52図、写真図版50）

〈位置〉 B調査区西側の1B区で80基が検出されている。検出面はIV層上位で、西端部は南北の18次調査範囲、東端部は北側に隣接する第18次調査区にも延びるものと考えられる。

〈平面形・規模〉 平面形は円形53基、楕円形22基、不整形5基で、約70%が円形を基調としている。規模は長軸径が27cm～117cm（平均47.0cm）、短軸径が25cm～78cm（平均41.4cm）を呈し、深さ2.8cm～最大77.7cm（平均27.1cm）を測る。柱痕跡はいずれも確認されていない。

各柱穴状土坑の計測値は第△表に記載している。

〈埋土〉 黒褐色～暗褐色土を主体とする単層で構成され、堅く締まっている。

(佐藤)

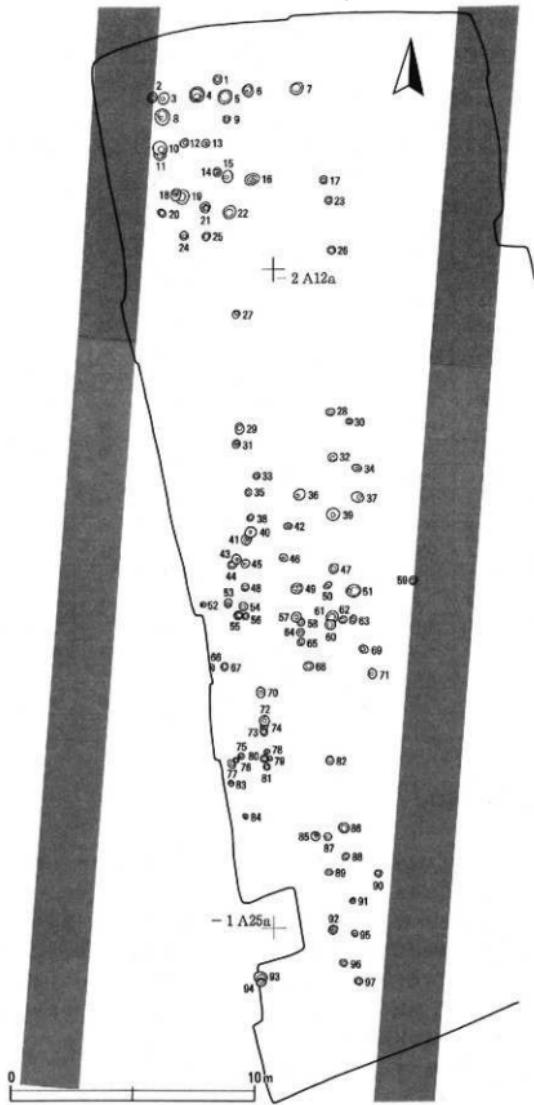
#### 遺物

出土していない。

#### 時期

柵列や建物跡の柱穴になる規則性は認められることや、遺物の出土がないため不明であるが、埋土の堆積状態から大部分が近世～近代に属すると思われる。

(高橋)



第52図 R Z017柱状土坑群

第1表 柱穴状土坑群計測表

柱穴No.	開口部cm	深さcm	形状	柱穴No.	開口部cm	深さcm	形状	柱穴No.	開口部cm	深さcm	形状
1	50×31	26.3	楕円形	28	30×34	30.1	楕円形	55	48×45	11.6	円形
2	41×40	30.6	円形	29	39×33	24.6	楕円形	56	39×38	14.2	円形
3	49×45	30.6	楕円形	30	57×48	36.8	楕円形	57	28×26	7.3	円形
4	46×41	37.8	楕円形	31	47×44	36.9	不整形	58	39×34	13.2	円形
5	41×39	27.0	円形	32	42×39	23.8	円形	59	56×52	51.1	円形
6	50×49	39.1	円形	33	53×41	38.1	円形	60	31×27	31.8	円形
7	45×41	26.1	円形	34	37×31	16.6	楕円形	61	35×34	17.9	円形
8	47×45	30.5	円形	35	66×48	55.4	不整形	62	70×58	39.1	楕円形
9	36×33	21.4	円形	36	53×52	31.7	円形	63	54×44	55.7	楕円形
10	84×63	18.2	楕円形	37	45×42	22.2	円形	64	27×25	20.4	円形
11	27×27	17.0	円形	38	48×47	2.8	円形	65	48×45	57.9	円形
12	31×31	23.0	楕円形	39	52×52	5.4	円形	66	37×32	13.6	円形
13	47×35	17.2	楕円形	40	49×42	3.1	楕円形	67	29×29	35.5	円形
14	32×29	14.1	円形	41	50×44	4.4	楕円形	68	60×44	41.5	楕円形
15	39×33	41.3	円形	42	33×32	37.4	円形	69	39×38	18.4	円形
16	47×46	25.6	円形	43	48×38	29.5	楕円形	70	54×48	8.6	円形
17	35×33	4.5	円形	44	59×53	48.7	円形	71	117×71	22.3	不整形
18	37×33	4.8	円形	45	77×57	43.0	楕円形	72	60×57	67.5	円形
19	35×29	7.8	円形	46	56×42	28.0	楕円形	73	45×45	36.0	円形
20	38×35	17.1	円形	47	46×42	50.8	円形	74	45×45	12.0	円形
21	47×31	3.2	楕円形	48	85×78	53.0	楕円形	75	27×26	9.4	円形
22	40×37	26.9	円形	49	42×42	30.3	円形	76	56×51	77.7	楕円形
23	34×30	25.4	円形	50	46×39	22.0	楕円形	77	38×35	25.1	円形
24	37×32	39.3	円形	51	43×40	10.9	円形	78	70×67	68.6	不整形
25	37×34	24.0	円形	52	50×46	14.8	円形	79	71×61	23.0	楕円形
26	30×30	4.4	円形	53	47×47	8.6	円形	80	52×48	53.0	不整形
27	34×34	25.3	円形	54	44×44	24.2	円形				

## 2) RZ018柱穴状土坑群

## 造構（第53図）

〈位置〉 A調査区西側の-2 A区で97基が検出されている。検出面はIV層上位で、一部は東側に隣接する第18次調査区にも分布範囲が広がるものと考えられる。

〈平面形・規模〉 平面形は円形80基、楕円形27基に分けられるが、80%以上が円形をなし楕円形も含めるとすべて円形を基調とする。規模は長軸径が20cm~62cm（平均39cm）、短軸径が12cm~62cm（平均35cm）を呈し、深さ8.8cm~最大69.5cm（平均34cm）を測る。柱痕跡はいずれも確認されていないが、等間隔で直線的に配置される柱穴35・36・37と、南側の柱穴48・49・51が相対する配置関係を示しており、掘立柱建物跡である可能性がある。各柱穴状土坑の計測値は第1表に記載している。

〈埋土〉 黒褐色～暗褐色土を主体とする単層で構成され、堅く締まっている。

## 遺物

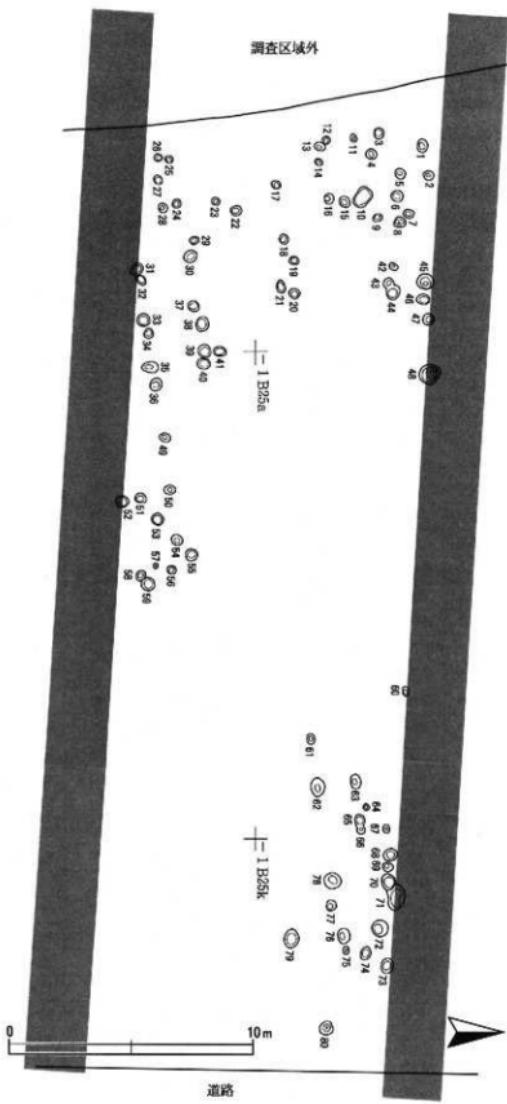
出土していない。

## 時期

据立柱建物跡を1棟含む可能性があるが、規則的な配置関係の認められない柱穴が多いことや、遺物の出土がないため不明であるが、埋土の堆積状態から大部分が近世～近代に属すると思われる。 (高橋)

第2表 柱穴状土坑群計測表

柱穴No.	開口部cm	深さcm	形状	柱穴No.	開口部cm	深さcm	形状	柱穴No.	開口部cm	深さcm	形状
1	32×31	25.2	円形	34	40×38	13.5	円形	67	33×28	46.8	椭円形
2	50×47	48.9	円形	35	30×28	51.0	円形	68	46×37	27.7	椭円形
3	61×52	36.4	椭円形	36	41×39	51.2	円形	69	44×42	50.5	椭円形
4	58×58	31.0	円形	37	36×30	10.2	椭円形	70	40×36	22.6	円形
5	46×42	33.8	円形	38	40×33	57.1	椭円形	71	32×30	22.9	円形
6	50×46	21.3	円形	39	40×39	29.3	円形	72	34×32	32.0	円形
7	64×62	32.1	円形	40	42×40	50.0	円形	73	32×30	36.2	円形
8	30×28	13.7	円形	41	34×34	23.2	円形	74	29×26	25.7	椭円形
9	61×48	38.5	椭円形	42	50×42	63.0	円形	75	30×26	36.6	椭円形
10	56×54	54.5	円形	43	28×28	23.8	円形	76	28×26	15.7	円形
11	34×33	48.4	円形	44	28×28	25.8	円形	77	32×30	11.2	円形
12	36×36	62.0	円形	45	28×18	42.4	椭円形	78	26×23	20.5	椭円形
13	36×32	37.4	椭円形	46	32×30	62.5	円形	79	28×25	8.8	椭円形
14	48×44	37.0	円形	47	33×33	45.5	円形	80	37×36	50.7	円形
15	58×42	36.2	椭円形	48	33×30	48.7	円形	81	25×23	32.7	円形
16	34×28	21.0	椭円形	49	28×28	46.6	円形	82	23×22	14.1	円形
17	50×42	22.5	椭円形	50	38×36	49.9	円形	83	39×38	36.9	円形
18	60×46	33.0	椭円形	51	42×35	19.4	椭円形	84	34×33	29.0	円形
19	32×29	45.5	円形	52	57×36	28.7	椭円形	85	45×33	54.1	椭円形
20	40×40	42.5	円形	53	33×33	27.5	円形	86	36×35	41.2	円形
21	50×48	19.2	円形	54	33×30	51.9	円形	87	33×32	37.4	円形
22	32×32	24.5	円形	55	28×28	49.2	円形	88	34×32	25.2	円形
23	29×28	35.5	円形	56	38×36	62.3	円形	89	29×27	22.4	円形
24	34×34	39.0	円形	57	42×35	29.2	椭円形	90	33×30	41.8	円形
25	36×31	18.0	椭円形	58	57×36	45.3	椭円形	91	27×26	14.3	円形
26	36×35	16.0	円形	59	42×40	46.3	円形	92	57×51	57.6	椭円形
27	42×38	57.4	円形	60	35×28	31.5	椭円形	93	30×29	17.3	円形
28	28×28	69.5	円形	61	36×36	43.4	円形	94	28×27	11.2	円形
29	44×44	43.7	円形	62	33×33	29.5	円形	95	31×28	47.3	円形
30	49×48	59.1	円形	63	35×30	26.2	椭円形	96	30×29	—	円形
31	30×30	54.5	円形	64	32×30	31.3	円形	97	30×28	—	円形
32	53×53	41.1	円形	65	28×12	30.5	椭円形				
33	45×43	55.1	円形	66	35×32	40.6	円形				



第53図 R Z018柱穴状土坑群

## (7) 焼土遺構〈R F〉

焼上遺構はD調査区から1カ所検出されたのみである。

### 1) R F017焼土遺構

遺構(写真図版34)

〈位置〉 D調査区東端部北寄りよりの5C区に位置するR E017壁穴状遺構の検出面から検出されている。検出は遺構の検出面であるが、基本層序ではIV層上面に相当する面である。

〈平面形・規模〉 規模は長軸径が約53cm、短軸径が約45cmのやや不整な略円形の広がりをしめし、層厚約4cmの現地性の焼土である。また、東側に約10cm離れた位置に15cm×13cmの不整形な広がりを持つ焼土が見られ、当焼土遺構に関連する焼土である可能性が強い。

〈埋土〉 焼成によって赤暗褐色に変化しており、長時間連続して燃焼された焼上である可能性が強い。

遺物

出土していない。

時期

関連遺物の出土がないので明示出来ないが、重複関係と検出面から近世以降～近代の遺構と推測される。

(高橋)

## (8) 道路跡状遺構〈R Z〉

道路跡状遺構としたのは、短い溝跡が並列で波板状に連続する状況を示す遺構に対して付した名称であるが、現地調査の段階では畠の畝間状遺構としていた遺構である。19次調査範囲ではA地区とD地区の2カ所から検出されている。

### 1) R Z005道路跡状遺構

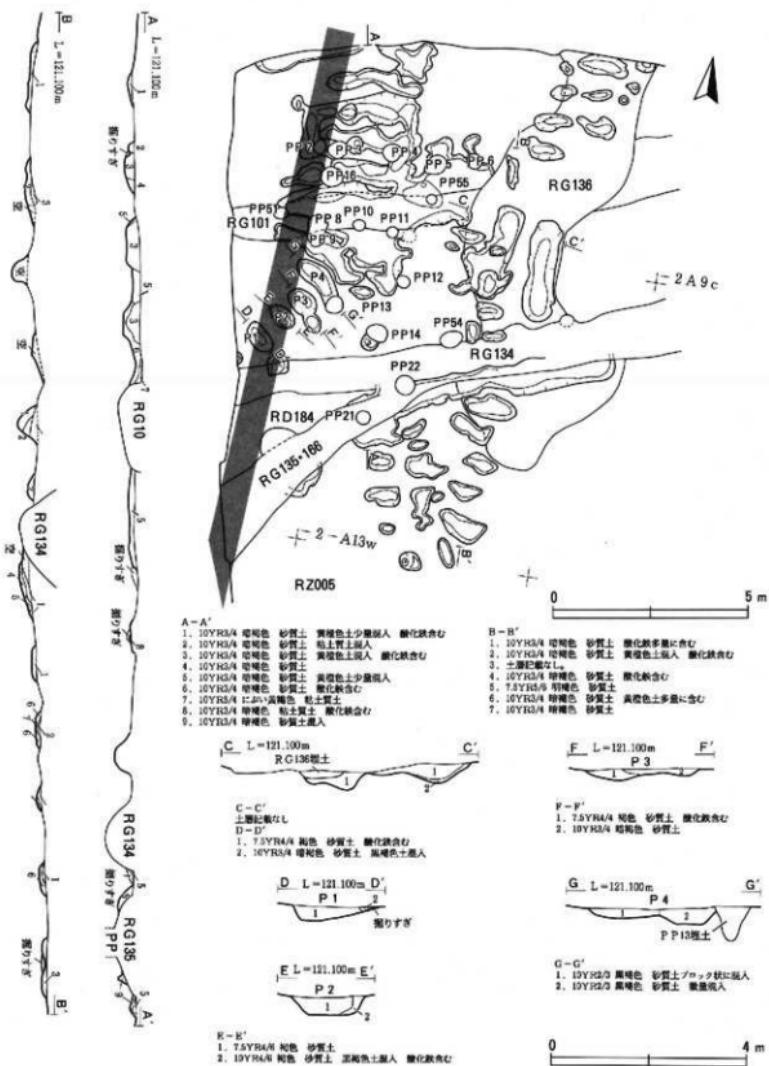
遺構(第54図、写真図版51・52)

〈位置〉 A調査区北端部西寄り－2A区に位置し、R D184十坑、R G134溝跡、R G135溝跡、R G136溝跡など多くの遺構と重複しているが、これらの重複遺構との新旧関係は重複関係から溝跡より当遺構の方が古いことが確認されている。当遺構の検出面は重複する溝跡とほぼ同様の基本層序IV層上面に相当する面である。また、当遺構は北側や西側の現用道路下にも連続することが確認されており、全体的なことは不明であるが、南北方向を指していることは確実である。なお、検出された部分の南側については連続していたのか判然としなかった。

〈平面形・規模〉 遺構の広がる全体範囲は東西約10m、南北約14mであり、実際はもっと広い範囲、特に南北に長い範囲に広がっていることが推測される。遺構配置図全体を見ると、横長の短い溝跡がほぼ一定の間隔で並列して連続する形を読み取れ、それが何条か入り乱れている最終の形と考えることが出来る。この状態から、路面の位置が時間と共に位置が微妙に動いていることが分かる。溝状をなす個別の規模は、長軸径が最長で約2.5m、最短で約0.5m位、幅が約60cm～40cm、深さ約20cm～5cmであり、幾分バラツキが大きい。

道路の単位として見た場合には、このような短い溝跡が10条以上並列で連続しており、全体では3条～4条の道路跡の存在が想定されるが、断定は出来ない。

〈埋土〉 砂や砂質シルトが大量に混在する色調が黒褐色～黄褐色を示すシルトが堆積し、全体として堅くし



第54図 R Z 005道路跡状構造

まっている。混入物には褐鉄の他に黄橙色などがあり、いずれも大量に混じっている。

**遺物** (第81図・写真図版76)

250が出土している。

**時期**

関連遺物の出土がないので明示出来ないが、重複関係と検出面から中世以降～近世・近代の遺構と推測される。

(高橋)

2) R Z 009道路跡状遺構

**遺構** (第55図・写真図版53・54)

〈位置〉D調査区ほぼ中央部西寄り5D区に位置し、RG111溝跡、RG144溝跡、RG145溝跡、RG146溝跡・RG162溝跡など多くの溝跡と重複しているが、重複する遺構との新旧関係は当遺構の方が古いことを確認している。当遺構の検出面は重複する溝跡とほぼ同様の基本層序IV層上面に相当する面である。また、当遺構の南側は18次調査範囲に延びるため、19次調査範囲分は極僅かである。

〈平面形・規模〉遺構の広がる全体範囲は東西約23m、南北約9mであり、18次・19次調査範囲内で完結する状況で検出されている。遺構配置図全体を見ると、横長の短い溝跡がほぼ一定の間隔で並列して連続する形を読み取れ、それが何条か入り乱れている最終の形と考えることが出来る。この状態から、路面の位置が時間と共に位置が微妙に動いていることが分かる。溝状をなす個別の規模は、長軸径が最長で約3.2m、最短で約0.9m位、幅が約80cm～40cm、深さ約20cm～5cmであり、幾分バラツキが大きい。

道路の単位として見た場合には、このような短い溝跡が5条～10条位並列で連続しており、全体では6条～7条の道路跡の存在が想定されるが、断定は出来ない。

〈埋土〉砂や砂質シルトが大量に混在する色調が黒褐色～黄褐色を示すシルトが堆積し、全体として堅くしまっている。混入物には褐鉄の他に黄橙色などがあり、いずれも大量に混じっている。

**遺物**

出土していない。

**時期**

関連遺物の出土がないので明示出来ないが、重複関係と検出面から中世以降～近世・近代の遺構と推測される。

(高橋)

(9) 遺構外の出土遺物 (第81図・写真図版76)

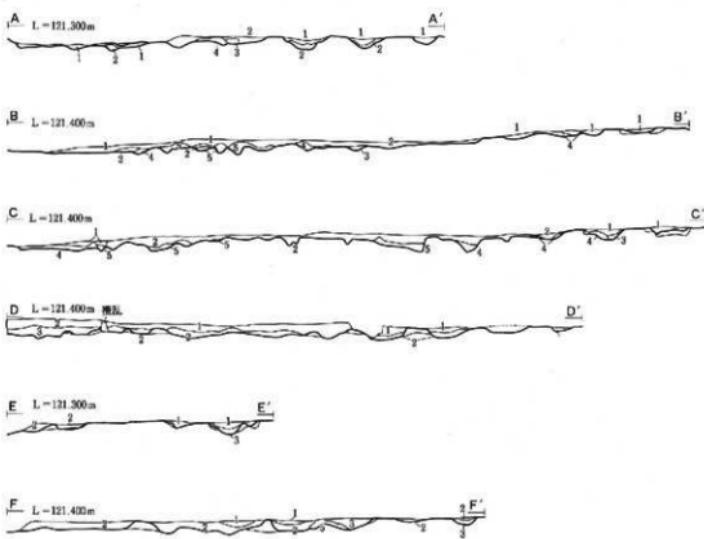
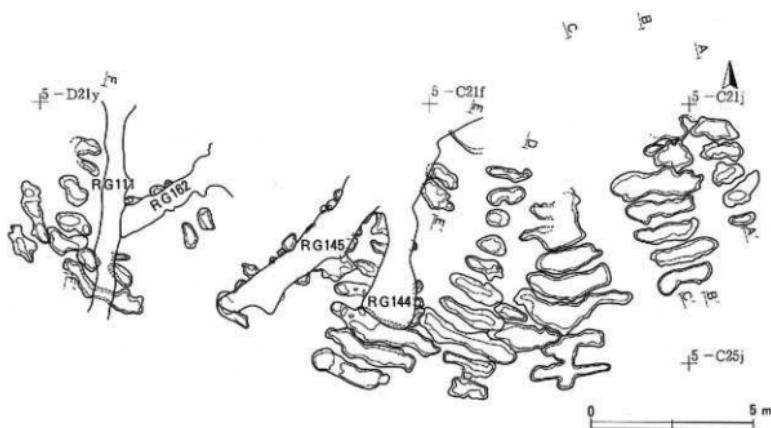
遺構外の出土とした遺物は、主として粗掘り中に表土内から出土した遺物であるが、粗掘り作業のほとんどに重機を使用したため、ほとんど出土しなかった。当報告書に掲載した4点は遺構検出時に住居跡や柱穴群の周辺部から出土した遺物である。

252はロクロ成形底部回転条切り離し無調整の土師器坏である。平安時代の遺物である。

253はロクロ成形された磁器の碗であり、近世・近代の物であるし、254は磁器の水滴である。

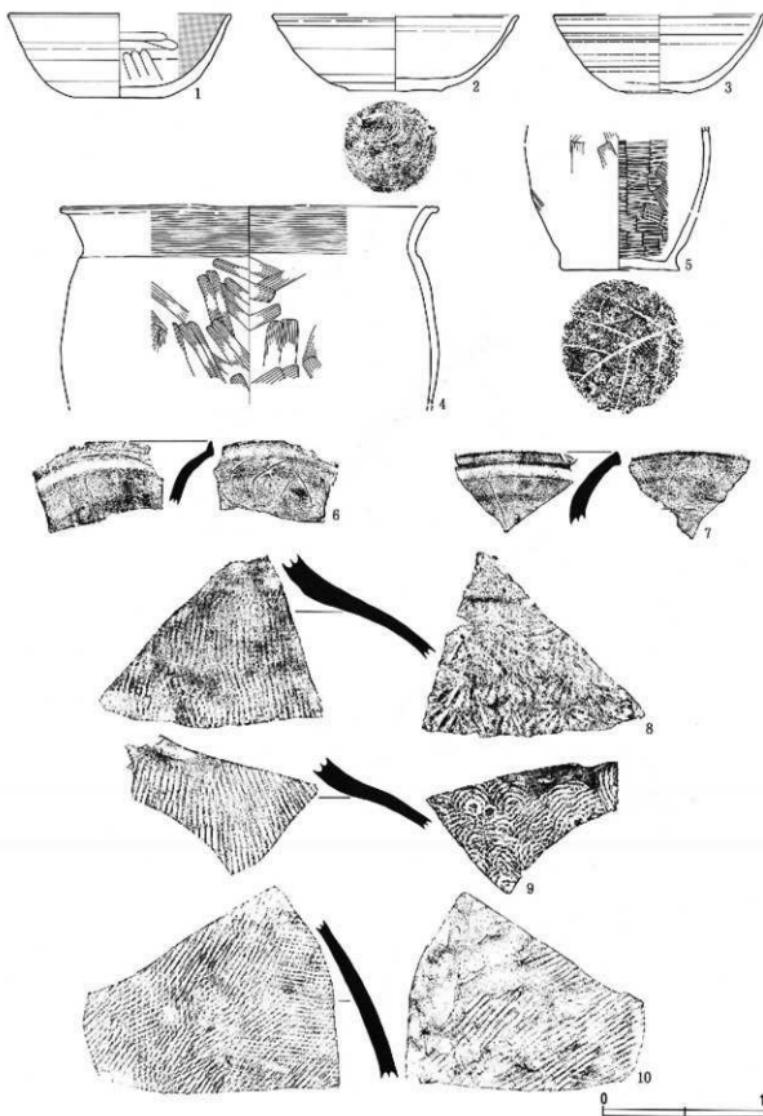
255は陶器の拂り鉢であるが、下ろし目の単位と単位の間に空白を持つ物であり、中世～近世初期の製品である可能性が強い。

(高橋)

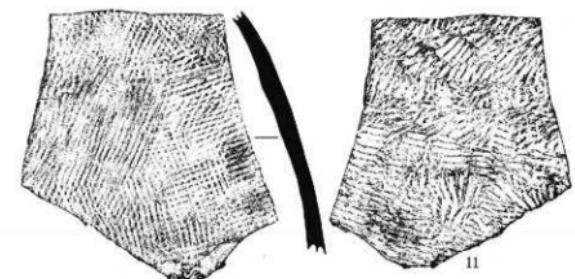


1. IDYH3/3 黄褐色 彩絆・礫化軽合む
2. IDYH2/2 黄褐色 彩質土
3. IDYH2/2 黄褐色 軽化角・彩合む 壓く締まる
4. IDYH2/2 に記す黄褐色 黑色土混入 軽化軽合む 壓く締まる
5. IDYH2/2 黄褐色 彩質土 黑褐色土混入

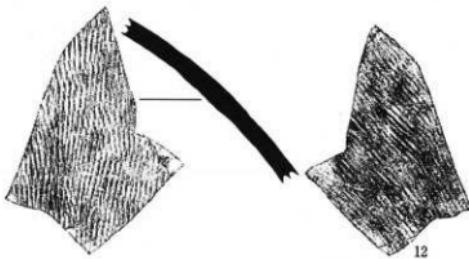
第55図 R Z009道路跡状遺構



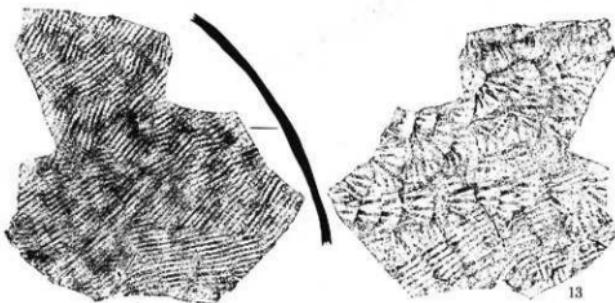
第56図 遺構内出土遺物(RA 116-1)



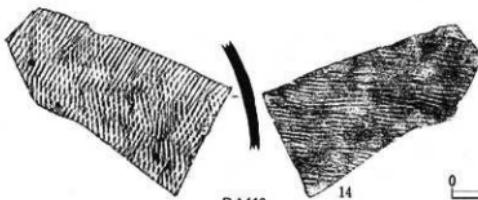
11



12



13

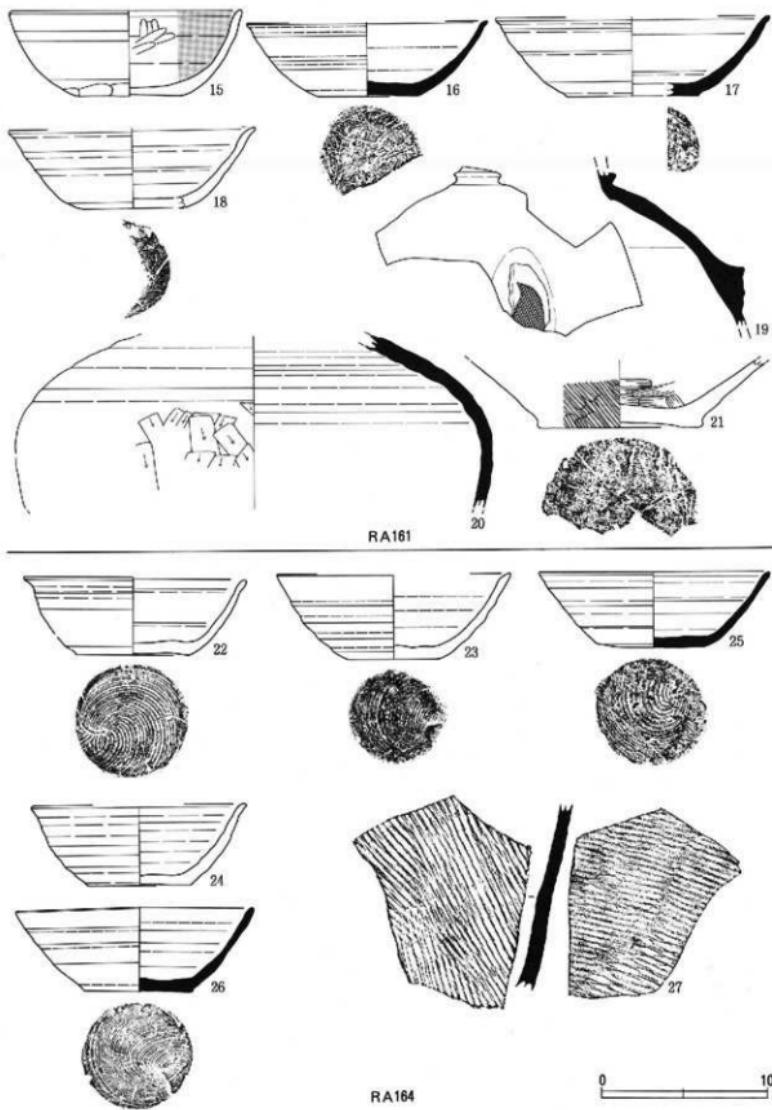


RA116

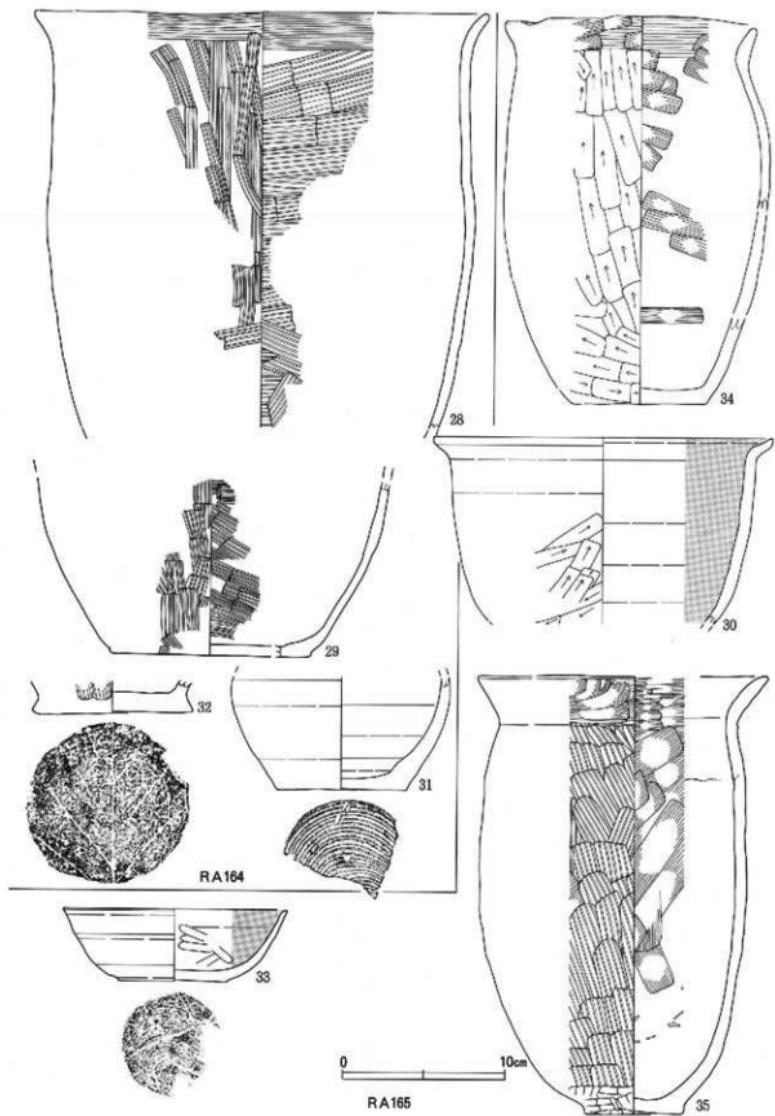
14



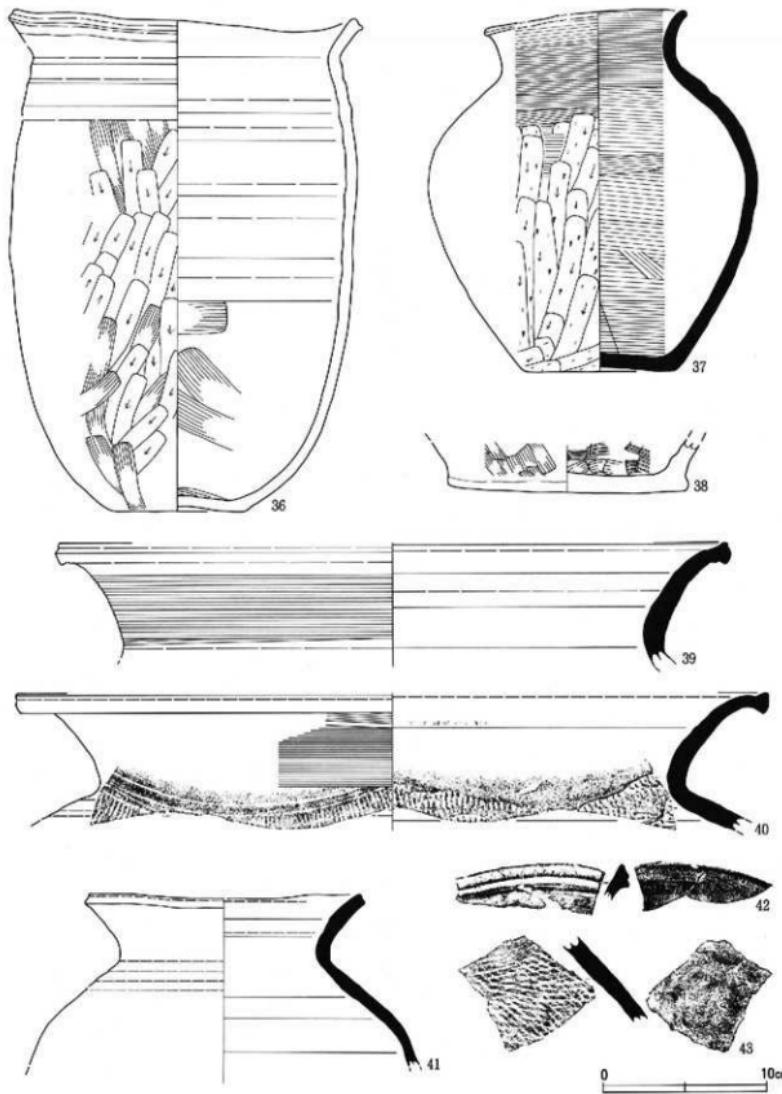
第57図 造構内出土遺物(RA116-2)



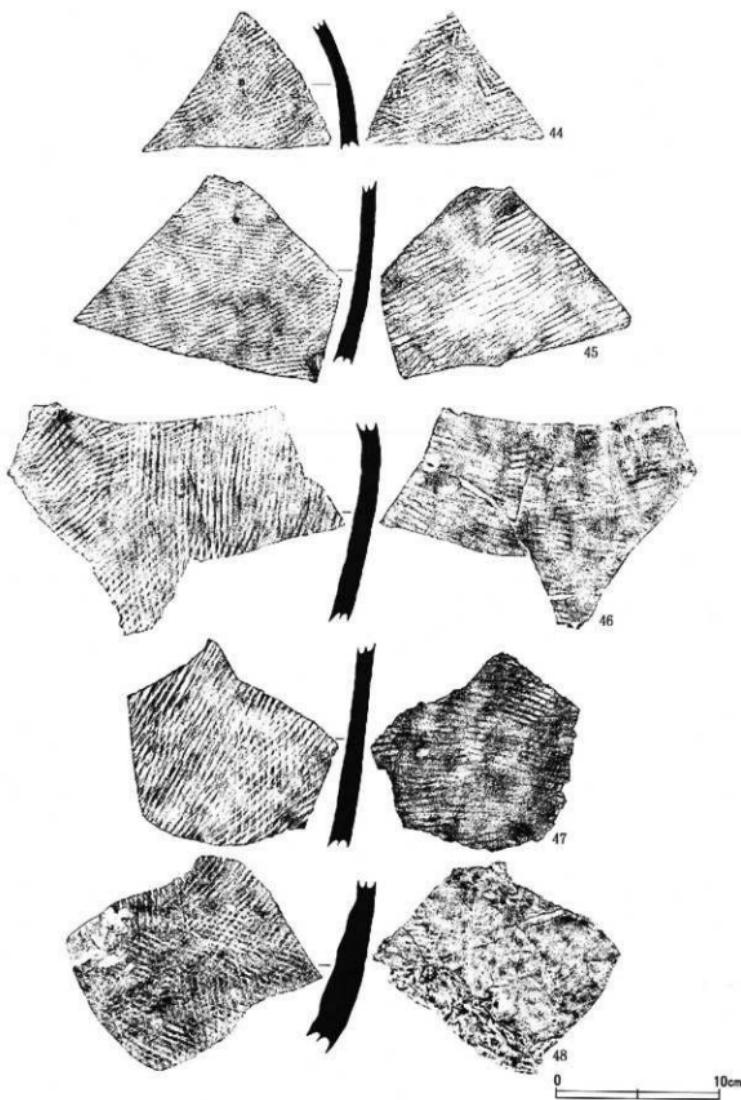
第58図 遺構内出土遺物 (RA161・RA164-1)



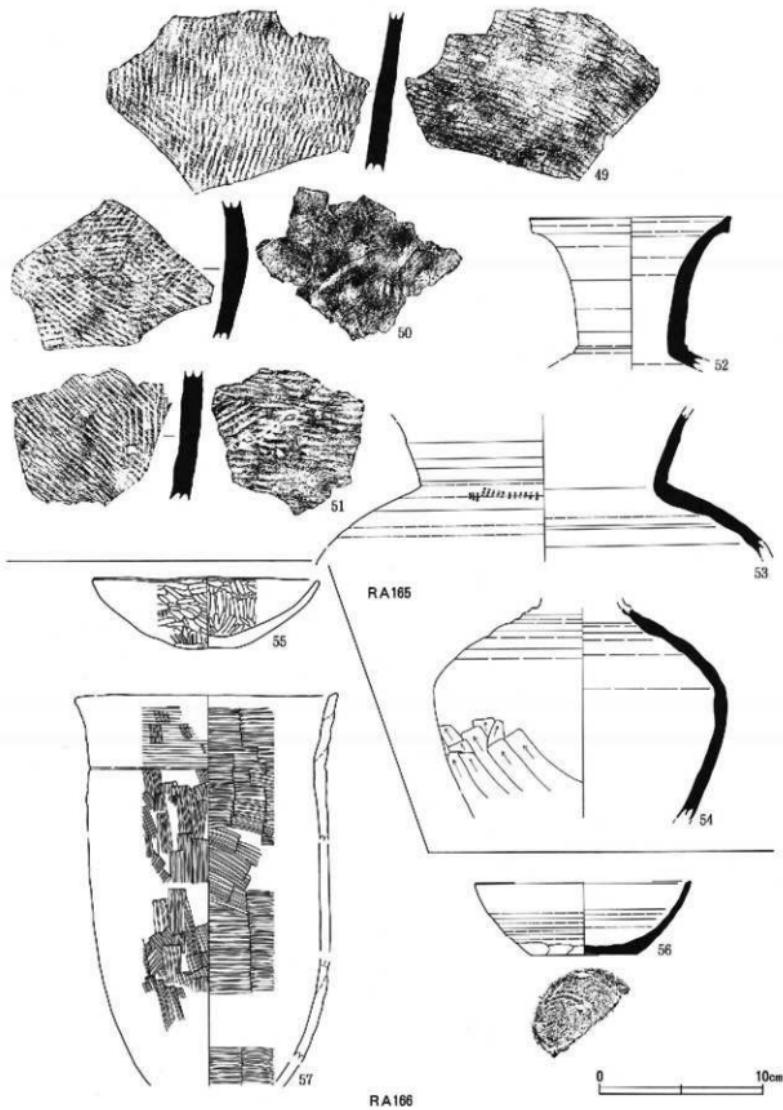
第59図 造機内出土遺物(RA164-2・RA165-1)



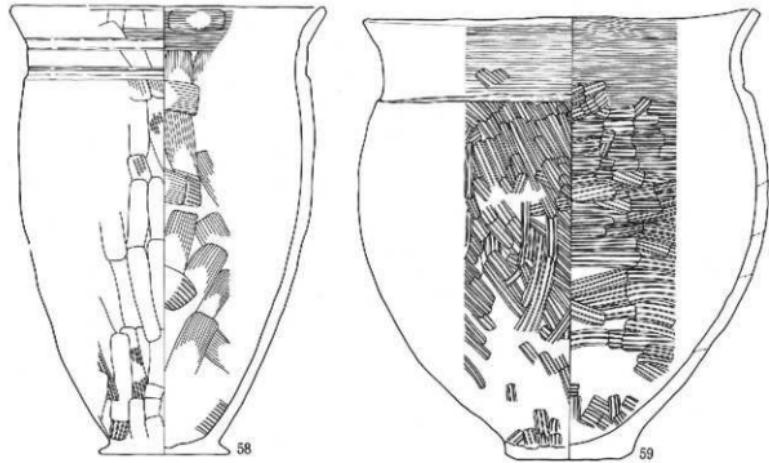
第60図 遺構内出土遺物(RA 165-2)



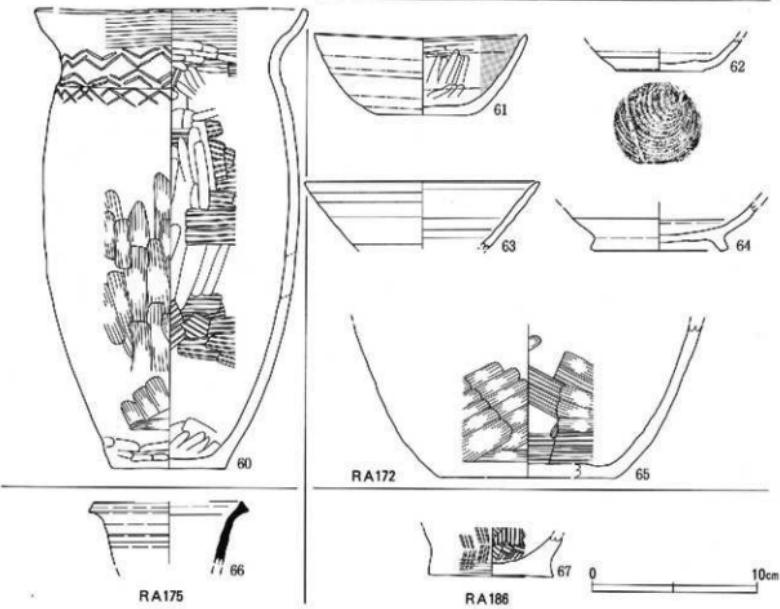
第61図 遺構内出土遺物(R A 165-3)



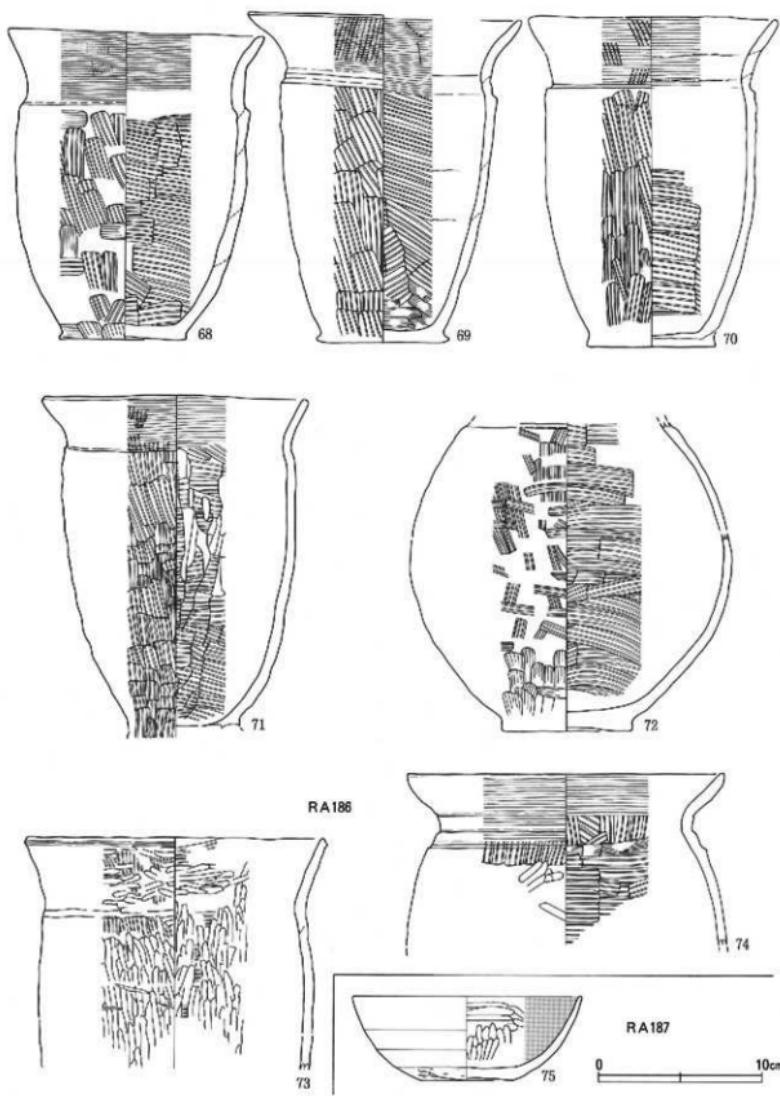
第62図 造構内出土遺物(RA165-4・RA166-1)



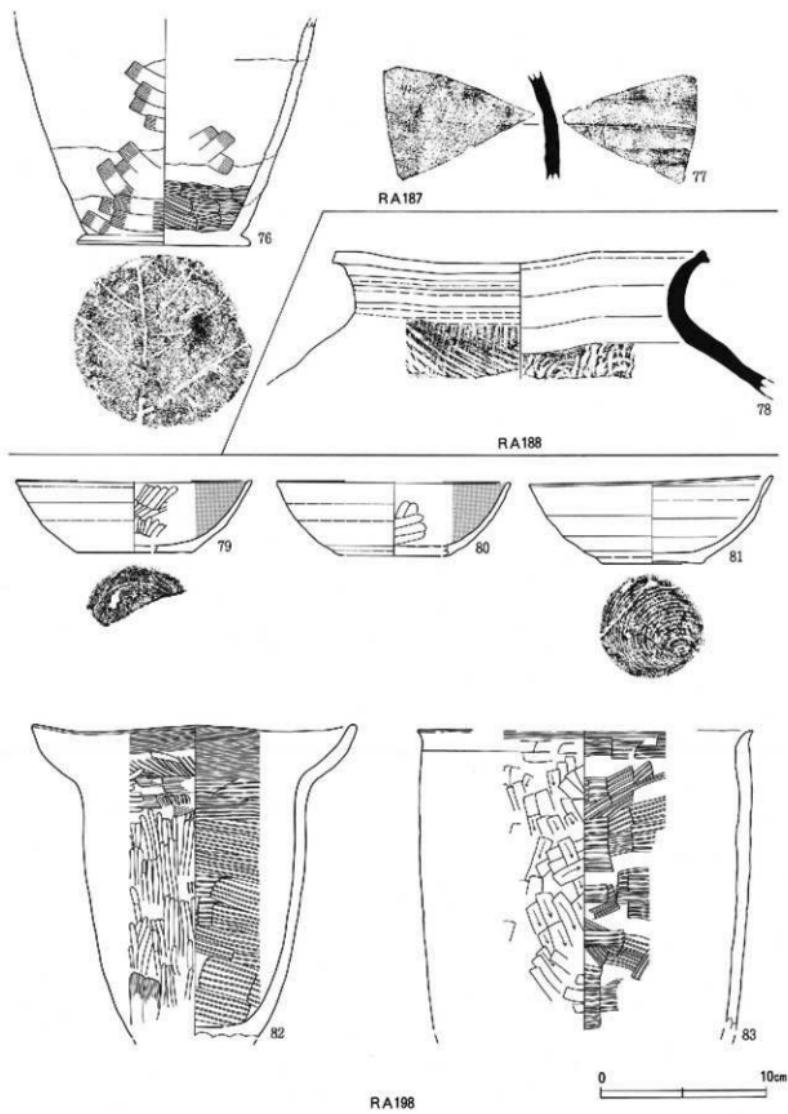
RA166



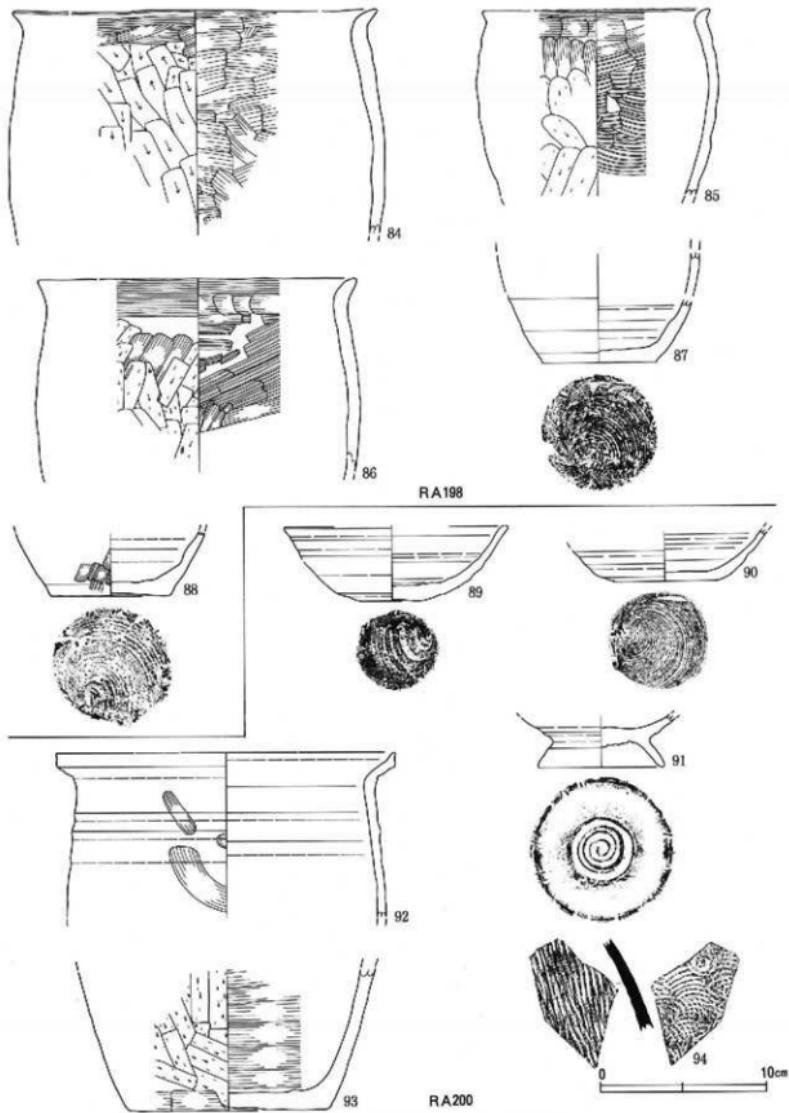
第63図 造構内出土遺物 (RA166-2・RA172・RA175・RA186-1)



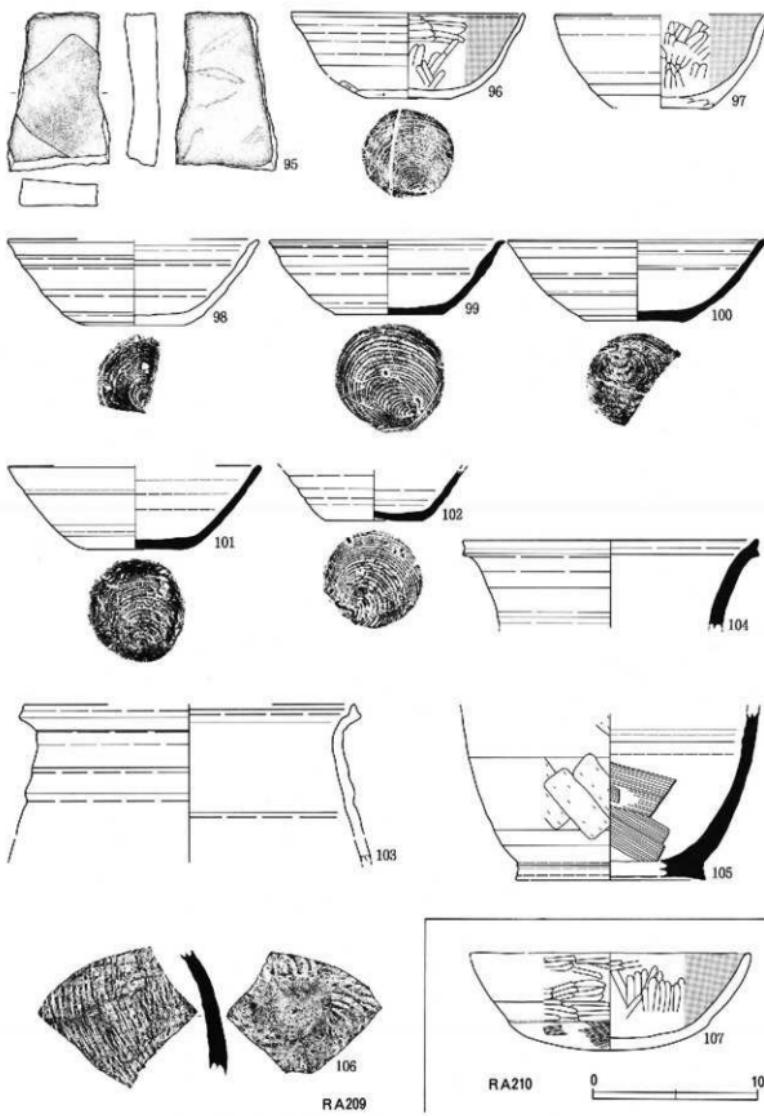
第64図 遺構内出土遺物(RA 186-2・RA 187-1)



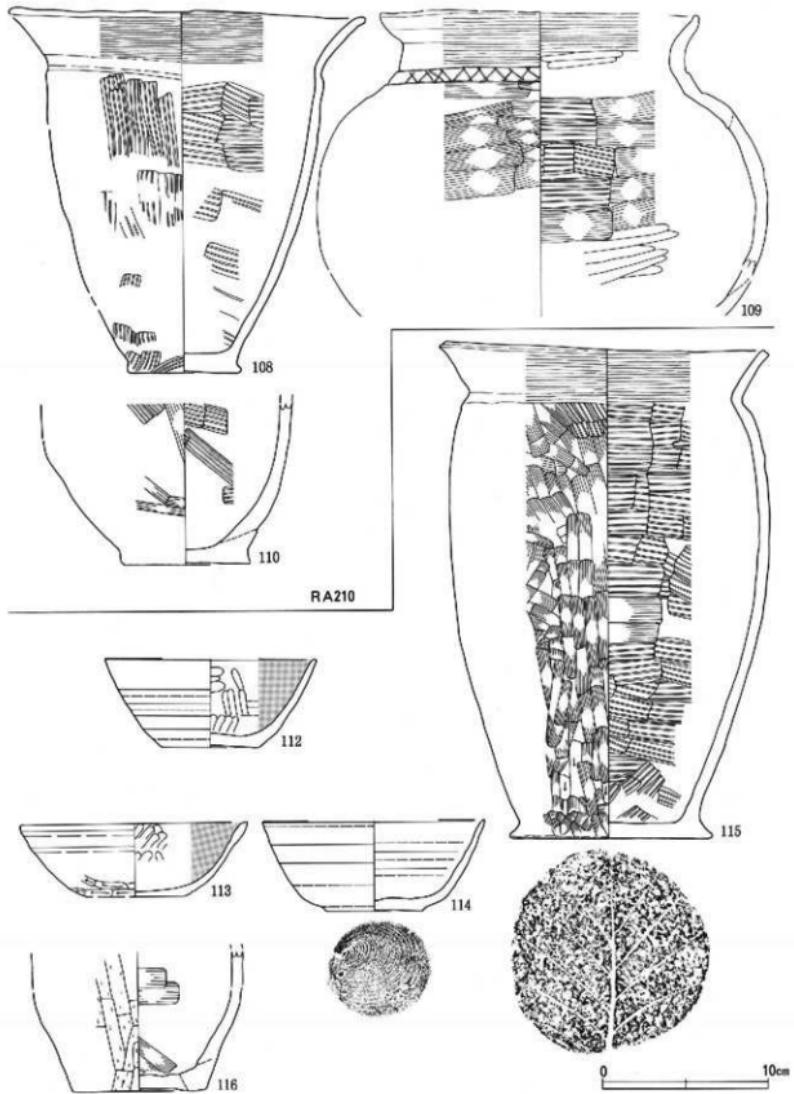
第65図 遺構内出土遺物(RA 187-2・RA 188・RA 198-1)



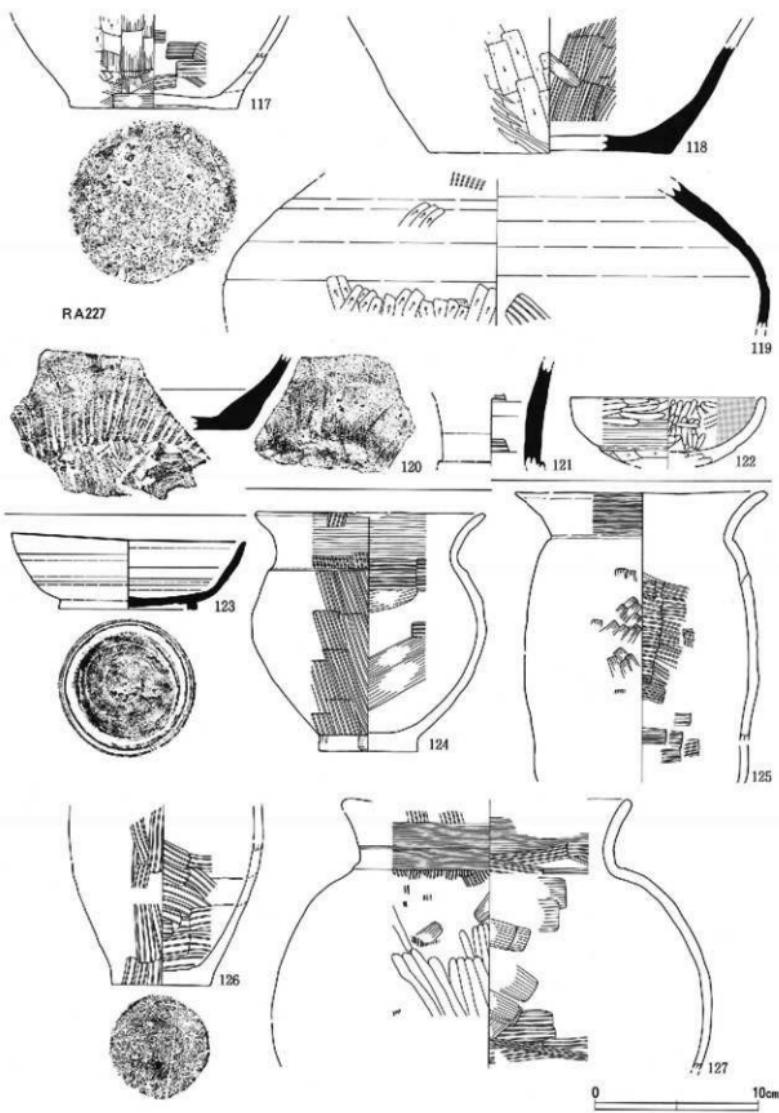
第66図 遺構内出土遺物(RA198-2・RA200)



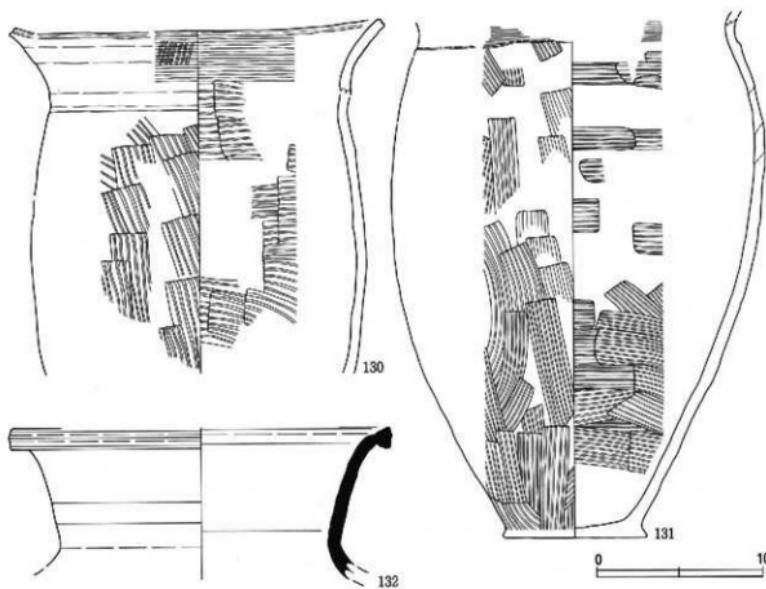
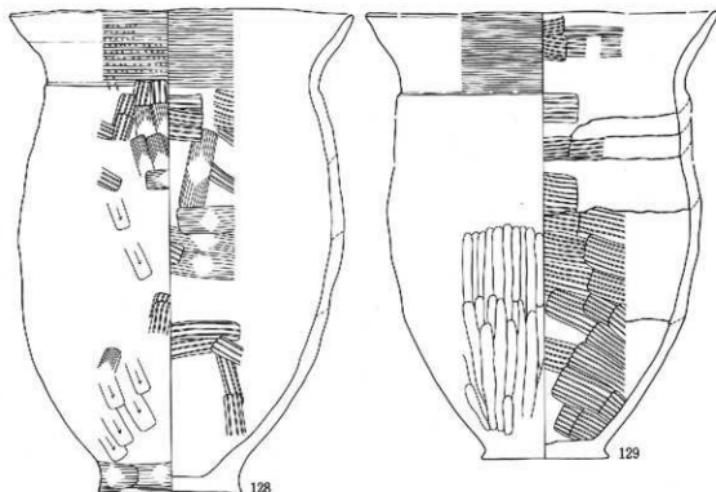
第67図 遺構内出土遺物 (RA209・RA210-1)



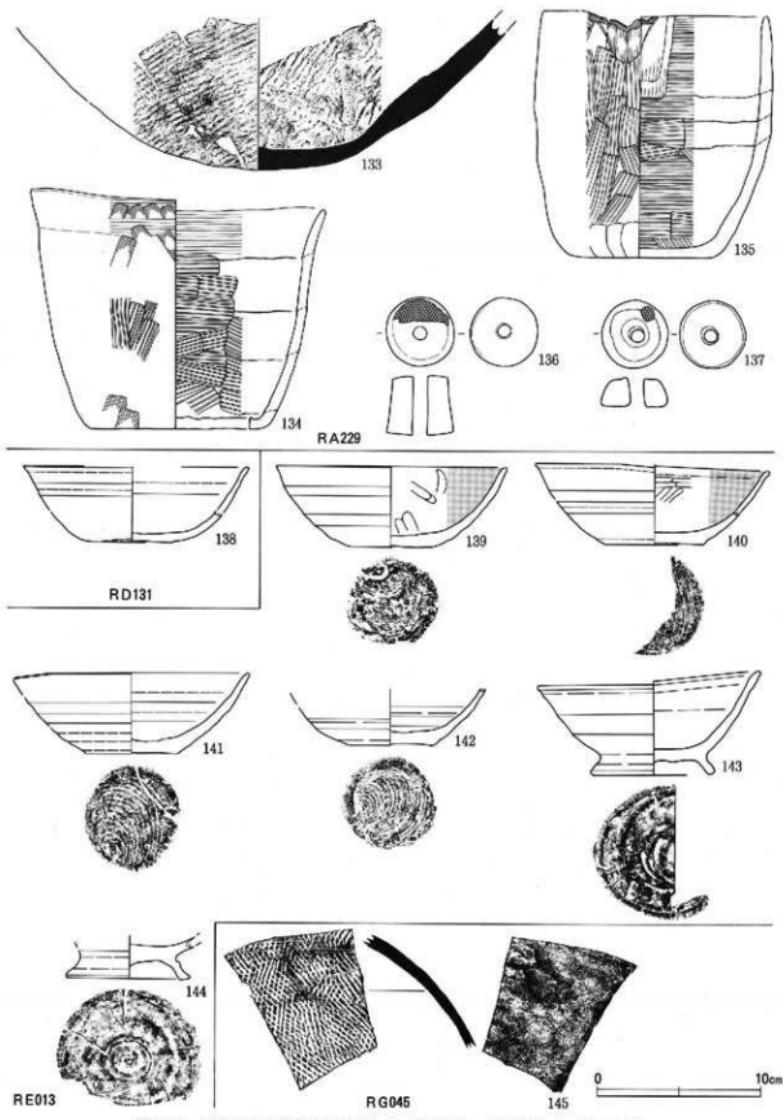
第68図 造構内出土遺物(RA210-2・RA211・RA227-1)



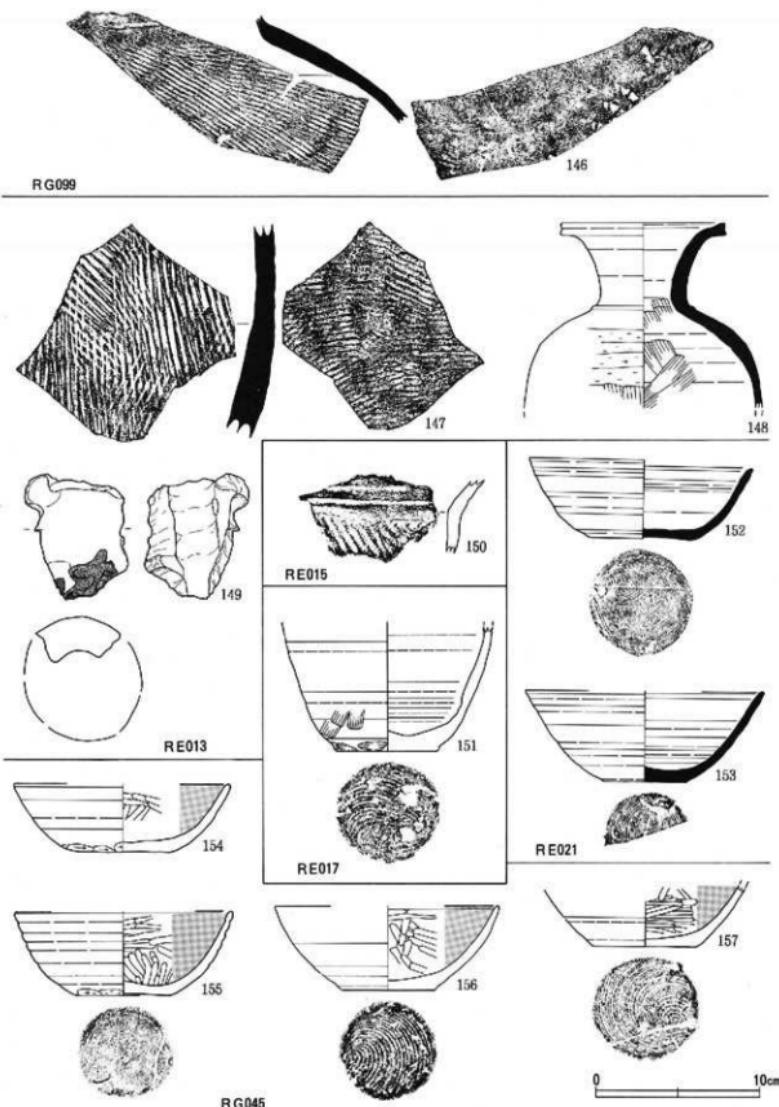
第69図 遺構内出土遺物 (R A227-2・R A228・R A229-1・R A230・R A231)



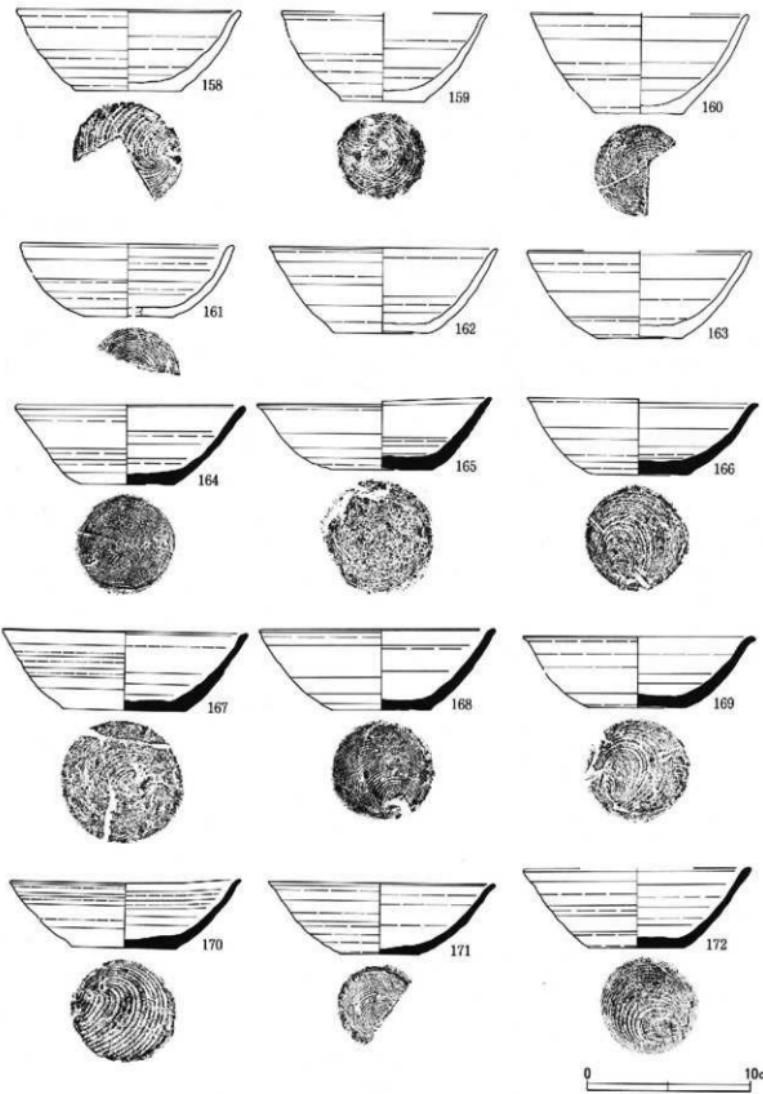
第70図 遺構内出土遺物(R A 229-2)



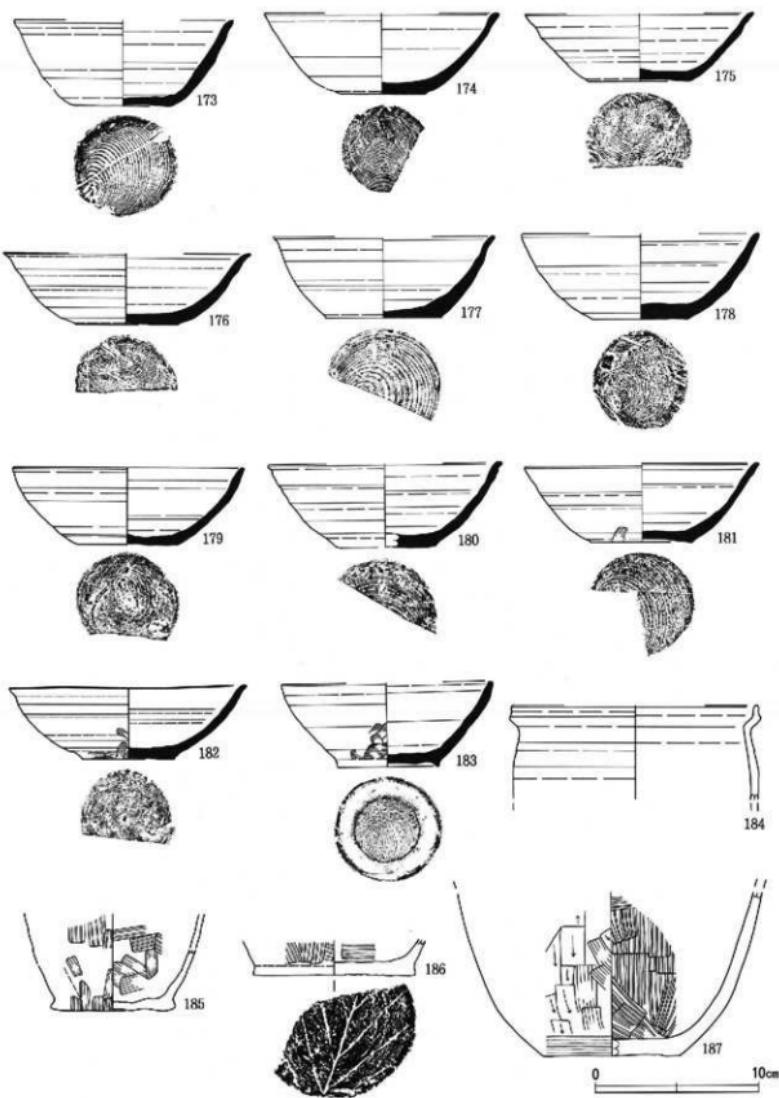
第71図 遺構内出土遺物 (RA229-3・RD131・RE013-1・RG045)



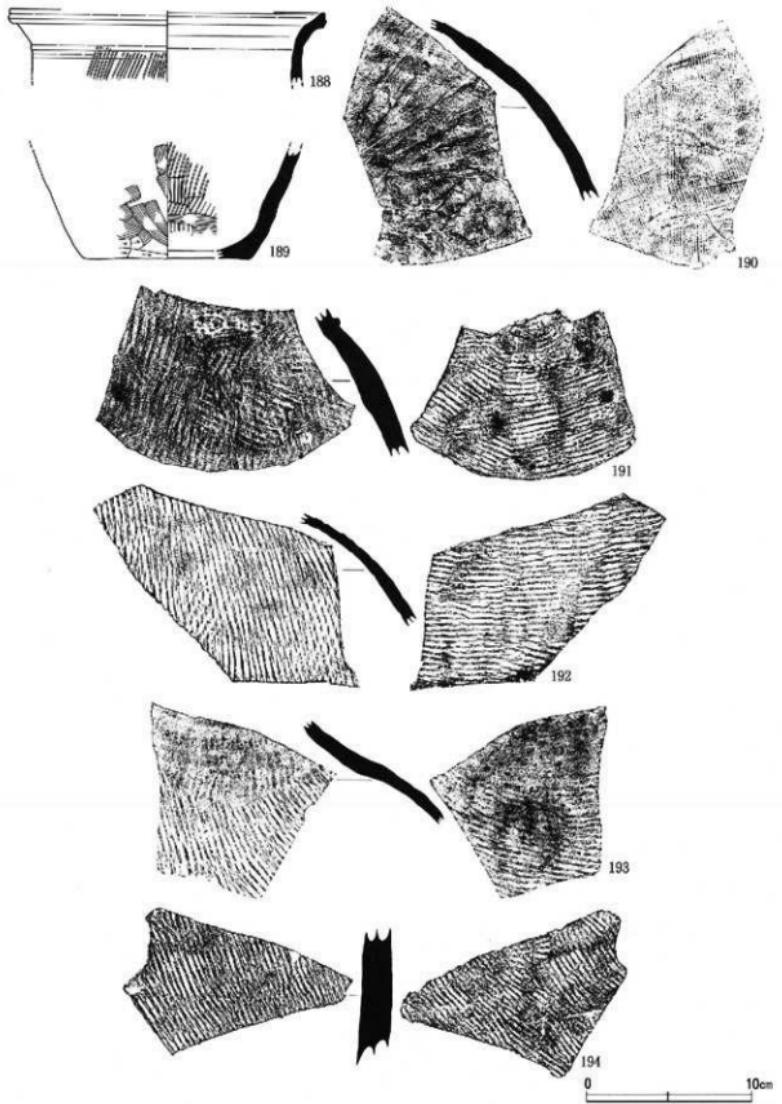
第72図 造構内出土遺物 (RE013-2・RE015・RE017・RE021・RG045-1・RG099)



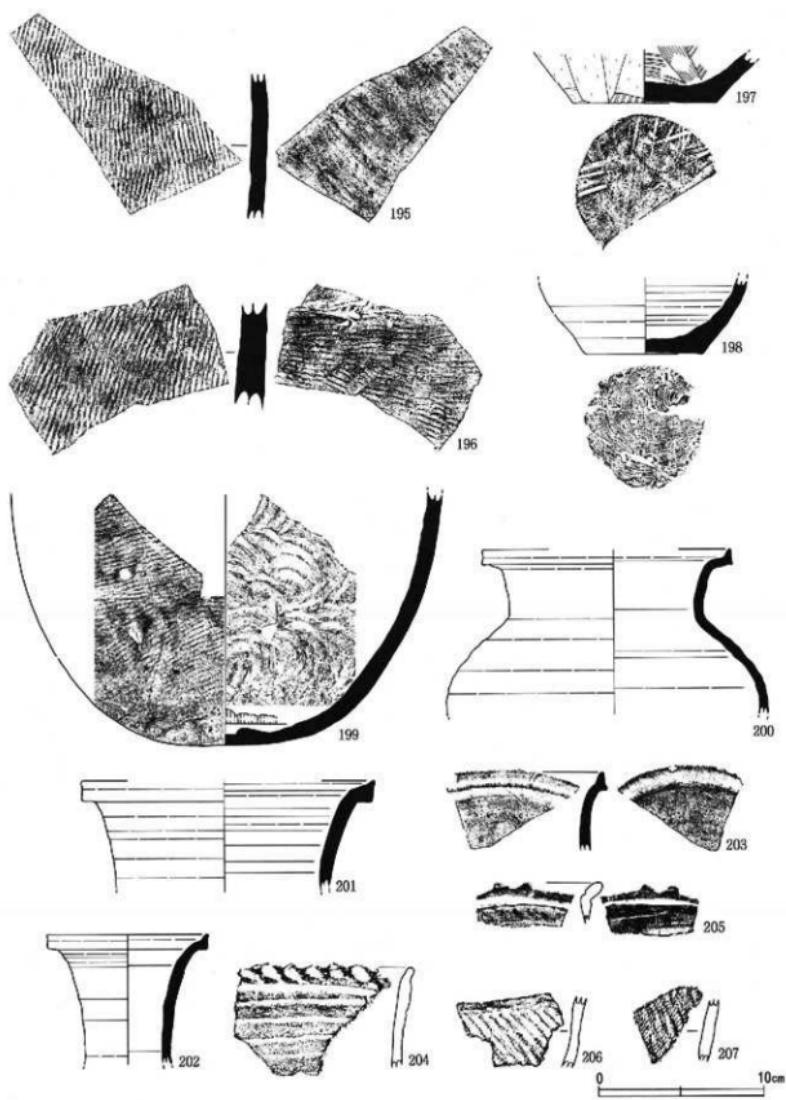
第73図 遺構内出土遺物(R.G045-2)



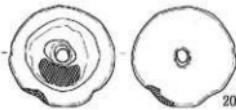
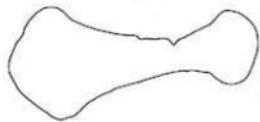
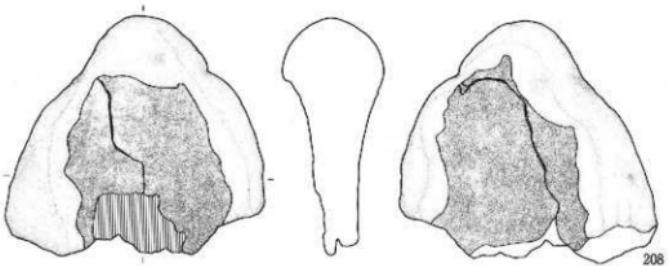
第74図 遺構内出土遺物 (R G 045-3)



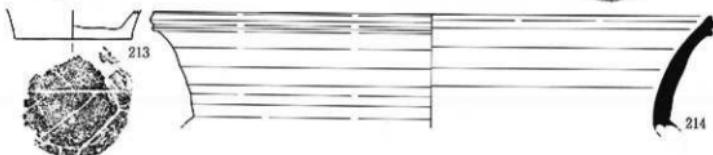
第75図 造構内出土遺物 (R G045-4)



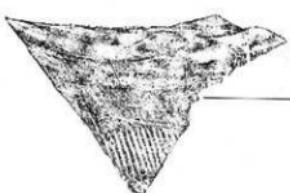
第76図 遺構内出土遺物(R G 045-5)



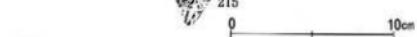
RG045



214

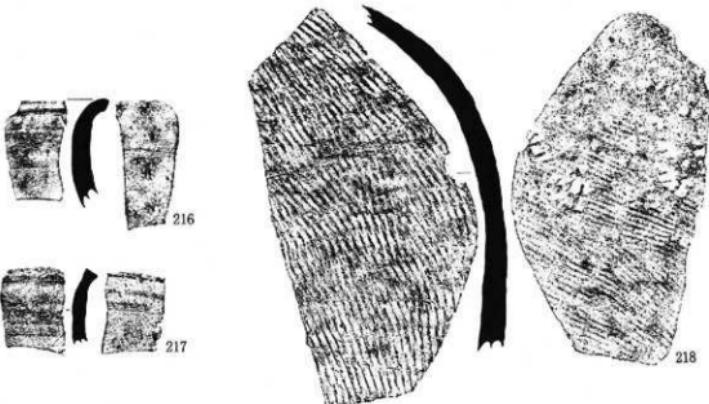


RG098

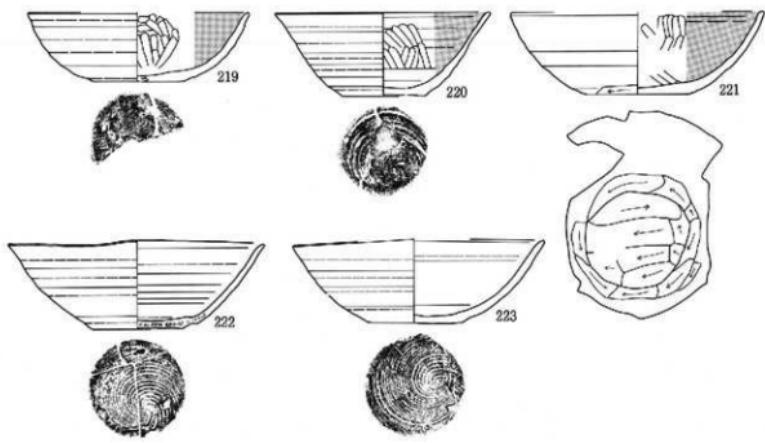


0 10cm

第77図 遺構内出土遺物 (R G045-6・RG098-1)



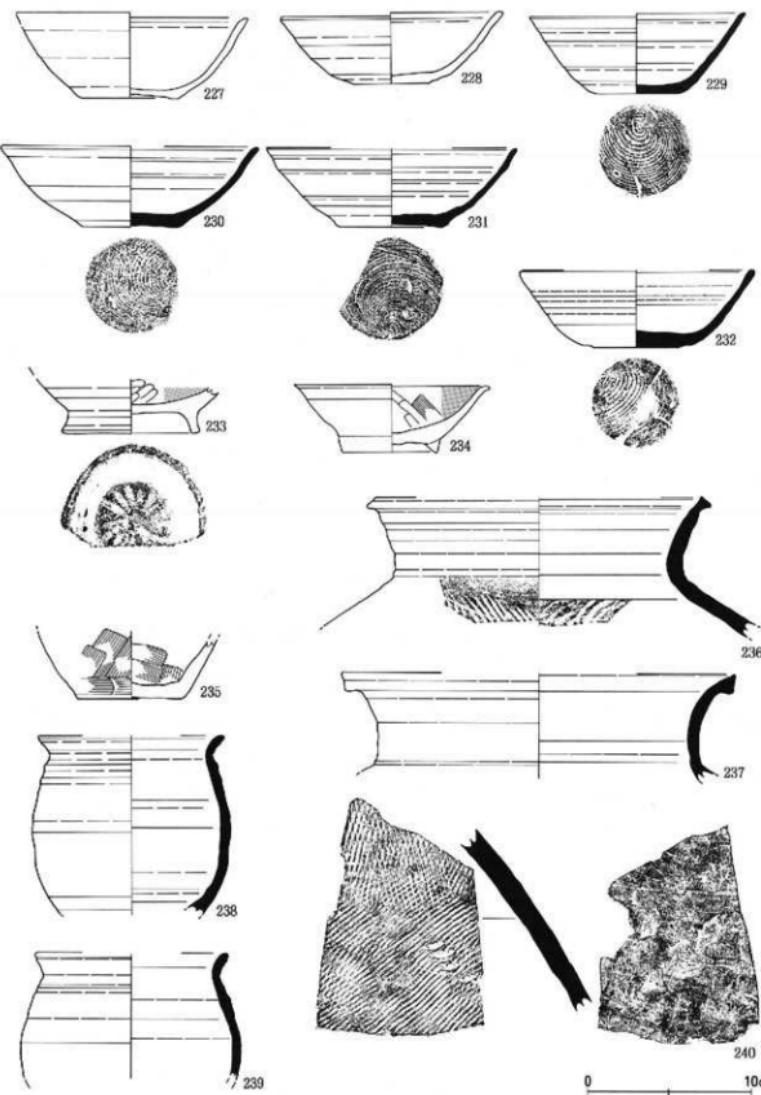
RG098



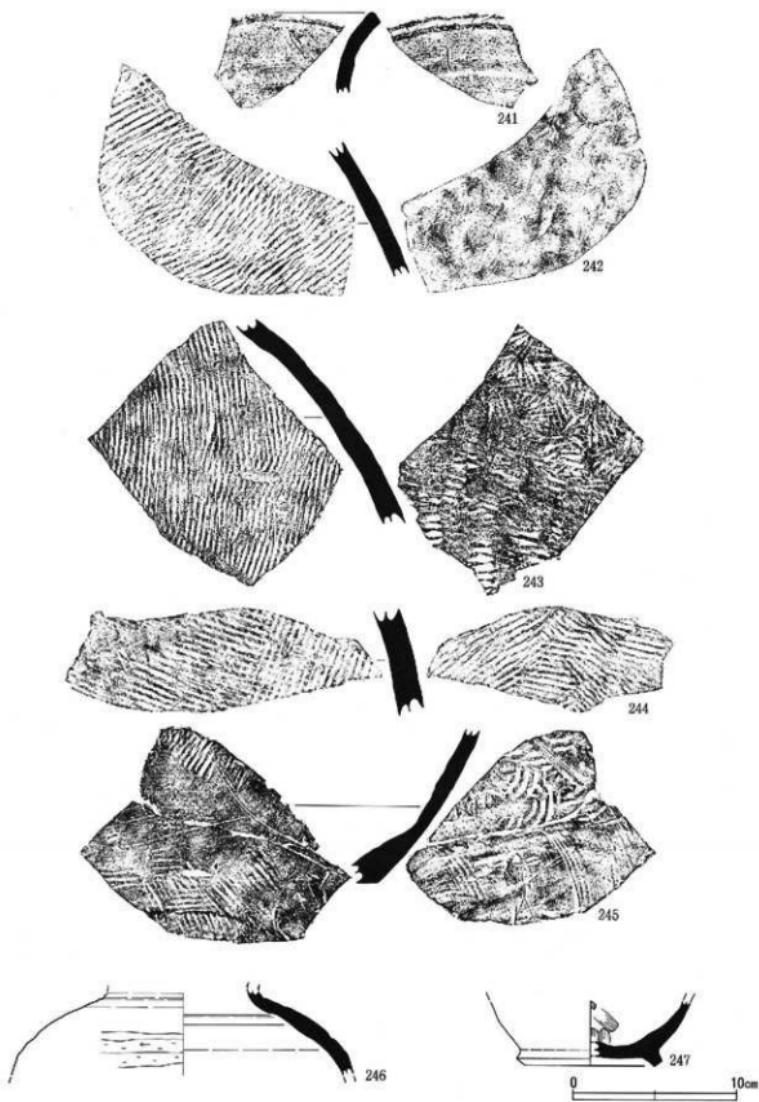
RG099



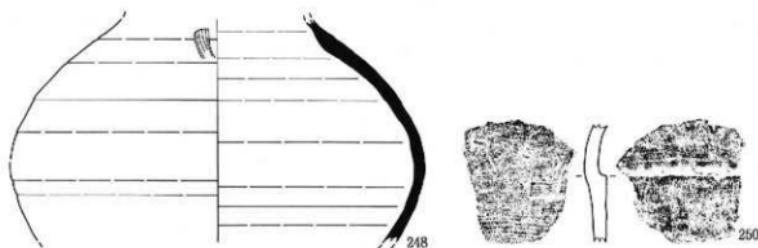
第78図 造構内出土遺物(R G098-2・RG099-1)



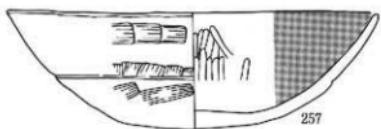
第79図 遺構内出土遺物(R G099-2・R G045)



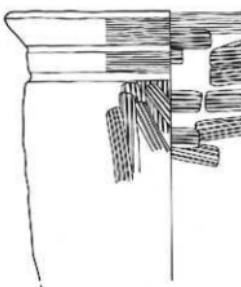
第80図 遺構内出土遺物 (R G 099-3)



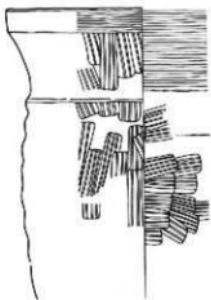
第81図 遺構内(R G099-4・R G111・R Z005・R A175)・遺構外出土物



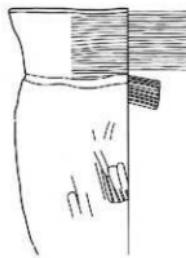
257



259



258



256

第82図 遺構内出土遺物 (RE 005)

第3表 土師器・須恵器觀察表

卷之三



No.	出土地点	層位	形態	工具部(内/外)	機械部(内/外)	工具部(内/外)	機械部(内/外)	分類	備考
96	RA29 床上	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ガガ・ロナデ	□	A.5	内里
97	RA29 床上	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ガガ・ロナデ	□	(5.8) A.5 内里	
98	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	A.5	内里
99	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	(13.0) 6.0	
100	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	(15.5) 6.6	
101	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	(14.5) 6.6	
102	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	6.2	
103	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	5.0	
104	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	5.2	
105	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	5.2	
106	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	6.0	
107	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	6.0	
108	RA29 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	6.0	
109	RA210 カマド右端	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	A.5	内里・外里
110	RA210 カマド右端	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	A.5	外面に奥化け有
111	RA21 地下	土下	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	A.5	内里
112	RA22 地下	中～下位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	A.5	内里・外里
113	RA22 地下	中～下位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	A.5	内里・外里
114	RA227 地下	中～下位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	A.5	内里・外里
115	RA227 地下	中～下位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	A.5	内里・外里
116	RA227 P1 土下	中～下位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	A.5	内里・外里
117	RA227 P1 土下	中～下位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	A.5	内里・外里
118	RA230 地下	中～下位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	A.5	内里・外里
119	RA230 地下	中～下位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	A.5	内里・外里
120	RA227 地下	中～下位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	A.5	内里・外里
121	RA231 地下	中～下位	□	ロ/ロ・ナデ	□	ロ/ロ・ナデ	□	B.5	長頭鑿
122	RA235 地下	中～下位	□	ロ/ロ・ナデ	□	ロ/ロ・ナデ	□	B.5	長頭鑿
123	RA235 地下	中～下位	□	ロ/ロ・ナデ	□	ロ/ロ・ナデ	□	B.5	長頭鑿
124	RA229 Q2 位	中位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	(4.7) 8.3	
125	RA229 地下	中位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	8.6	
126	RA229 P2	中位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	4.3	
127	RA229 P5	中位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	13.8	
128	RA229 P5	中位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	14.5	
129	RA229 地下	中～下位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	13.0	
130	RA229 地下	中～下位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	13.0	
131	RA229 P7	中位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	13.0	
132	RA229 地下	中位	□	ロ/ロ	□	ロ/ロ	□	13.0	
133	RA229 Q3 位	中位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	13.0	
135	RA229 Q3 位	中位	□	ロコナデ/ロコナデ	□	ロ/ロコナデ	□	13.0	
136	HD13 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	13.0	
139	RE03 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	14.2	
140	RE03 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	14.2	
141	RE03 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	14.2	
142	RE03 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	14.2	
143	RE03 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	14.2	
144	RE03 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	14.2	
145	RG045 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	14.2	
146	RG049 地下	中位	□	ロナデ/ロナデ	□	ロ/ロナデ	□	14.2	

No.	出土地点	層位	器種	形態	上部部(内/外)	全体(内/外)	底面(内/外)	口径cm	底径cm	高さcm	分類	備考
147	RE013 墓土	-	盆	口縁部	アツ・ロナデ・ロナデ*	アツ・ロナデ・ロナデ*	ロナデ	(10.4)	-	-	B1b	金物含 箋文土器片
148	RE013 墓土	中～下位	盆	長縫蓋	ロナデ・ロナデ	ロナデ	ロナデ	-	-	-	B1b	-
149	RE017 墓土	-	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	-	-	-	A1b	-
150	RE017 墓土	-	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	-	-	-	-	-
151	RE017 墓土	-	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	-	-	-	-	-
152	RE021 墓土	下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.4	B1a	-
153	RE021 墓土	下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.4	B1a	-
154	RG046 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	B1a	-
155	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	A1c	内 装
156	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	A1a	内 装
157	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	A1a	内 装
158	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	A1a	内 装
159	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	A1a	-
160	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	A1a	-
161	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	A1a	-
162	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	A1a	底部内装あり
163	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	S1b	底部内装あり
164	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	S1b	-
165	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	S1b	-
166	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	S1b	-
167	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	S1b	-
168	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.2	S1b	-
169	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	-
170	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	-
171	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	-
172	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	-
173	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	-
174	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	-
175	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	-
176	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	-
177	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1a	底部内装あり
178	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	S1b	-
179	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	S1b	-
180	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	S1b	-
181	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	S1b	-
182	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	S1b	-
183	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	S1b	底部内装あり
184	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	S1b	-
185	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	S1b	-
186	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	A1b	底部内装あり
187	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	A1b	底部内装あり
188	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1b	-
189	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1b	-
190	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1b	-
191	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1b	-
192	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1b	-
193	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1b	-
194	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1b	-
195	RG045 墓土	中～下位	土器	-	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	ロナデ	6.0	B1b	-

No.	出力位置	周	量	電形	口解部(内/外)	体部(内/外)	腹面(内/外)	U面	直面	直面	分類	備考
196	RG045	中~上位	無	□	アツゲ/ ハゲド・ケズリ	ハゲド/ ハゲド・チヂ	ロ/ ロ	8.7	8.7	8.7	B1b	
197	RG045	中~上位	無	□	アツゲ/ ハゲド・ケズリ	ハゲド/ ハゲド・チヂ	ロ/ ロ	7.4	7.4	7.4	B1b	
198	RG045	中~上位	無	□	アツゲ/ ハゲド・ケズリ	ハゲド/ ハゲド・チヂ	ロ/ ロ	8.8	8.8	8.8	B1b	
199	RG045	中~上位	無	□	アツゲ/ ハゲド・ケズリ	ハゲド/ ハゲド・チヂ	ロ/ ロ	(14.2)	(14.2)	(14.2)	A1b	
200	RG045	中~上位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(18.6)	(18.6)	(18.6)	B1a	
201	RG045	中~上位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(10.0)	(10.0)	(10.0)	B1a	
202	RG045	中~上位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(18.6)	(18.6)	(18.6)	B1a	
203	RG045	中~上位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(10.0)	(10.0)	(10.0)	B1a	
204	RG045	中~上位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(18.6)	(18.6)	(18.6)	B1a	
205	RG045	中~上位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(10.0)	(10.0)	(10.0)	B1a	
206	RG045	中~上位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(18.6)	(18.6)	(18.6)	B1a	
207	RG045	中~上位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(14.4)	(14.4)	(14.4)	B1a	
211	RG098	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	14.2	14.2	14.2	A1a	
212	RG098	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	5.8	5.8	5.8	A1b	
213	RG098	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	14.5	14.5	14.5	B1a	
214	RG098	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	7.2	7.2	7.2	A1b	
215	RG098	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(34.4)	(34.4)	(34.4)	B1a	
216	RG098	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(15.8)	(15.8)	(15.8)	B1b	
217	RG098	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(15.8)	(15.8)	(15.8)	B1b	
218	RG098	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(13.6)	(13.6)	(13.6)	B1a	
219	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(12.2)	(12.2)	(12.2)	A1a	
220	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	5.2	5.2	5.2	A1b	
221	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	15.6	15.6	15.6	A1a	
222	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	6.0	6.0	6.0	A1b	
223	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	5.6	5.6	5.6	A1a	
224	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	13.6	13.6	13.6	A1a	
225	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	5.6	5.6	5.6	A1b	
226	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	7.7	7.7	7.7	A1c	底面部凹陥あり
227	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	13.3	13.3	13.3	A1b	底面部凹陥あり
228	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	13.7	13.7	13.7	A1b	底面部凹陥あり
229	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	4.4	4.4	4.4	A1a	底面部凹陖あり
230	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	13.3	13.3	13.3	B1a	
231	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	5.0	5.0	5.0	B1a	
232	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	13.3	13.3	13.3	B1a	
233	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	5.0	5.0	5.0	B1a	
234	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	4.4	4.4	4.4	A1	底部凹陖あり
235	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	6.5	6.5	6.5	A1	底部凹陖あり
236	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(19.4)	(19.4)	(19.4)	B1b	
237	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(23.8)	(23.8)	(23.8)	B1a	
238	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(11.8)	(11.8)	(11.8)	B1a	
239	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(11.8)	(11.8)	(11.8)	B1b	
240	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(11.8)	(11.8)	(11.8)	B1b	
241	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(11.8)	(11.8)	(11.8)	B1b	
242	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(11.8)	(11.8)	(11.8)	B1b	
243	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(11.8)	(11.8)	(11.8)	B1b	
244	RG099	中~下位	無	□	ロナテ/ ロナテ	ロナテ/ ロナテ	ロ/ ロ	(11.8)	(11.8)	(11.8)	B1b	

No.	出土場所	層位	器種	形状	口縁部(内/外)	底面(内/外)	底径(cm)	底深(cm)	高さ(cm)	分類	備考
246	RG1099	墳土下位	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	B1b	
247	RG1099	墳土下位	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	B1b	
248	RG1099	墳土下位	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	B1b	
249	RG1111	墳土	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	B1b	
250	R2005	墳上	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	AII	
251	R2005	P2	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	AII	
252	墳頂外	土	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	AII	
253	墳頂外	土	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	B1b	
254	墳土	土	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	B1b	
255	R2005	P2・4	羽口壺	口	□/□	ナデ/ハラキリ	—	(6.0)	—	AII	
257	RE005	P1	二重	羽口壺	口	ナガキ/ナデ	—	(6.0)	—	内黑・丸底	
258	RE005	墳土上～中位	二重	羽口壺	口	ナガキ/ナデ	—	(6.0)	—	内黑・丸底	
259	RE005	P3	二重	羽口壺	口	ナガキ/ナデ	—	(6.0)	—	AII	

第4表 陶器觀察表

No.	出土場所	層位	器種	形狀	口縁部	底面	底径(cm)	底深(cm)	高さ(cm)	分類	備考
253	RA105	墳土上位	鰐頭	三	□/□	ナデ	(4.4)	—	—	RC	
254	RA105	墳土上位	鰐頭	水滴	□/□	ナデ	(4.4)	—	—	RC	

第5表 石製品觀察表

No.	出土場所	層位	器種	形狀	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	石質	产地	年代	備考
95	RA10	灰土	石刀	三	9.8	6.3	1.9	—	—	—	
136	RA10	灰土	石刀	三	4.1	3.6	1.6	—	—	—	
208	RA227	墳土下位	石刀	三	(14.5)	16.4	6.2	1385	鶴石安山岩	—	裏手地

第6表 土製品觀察表

No.	出土場所	層位	器種	形狀	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	金屬包含
137	RA29	墳土	切妻口	口	4.6	4.1	1.9	—
149	RC013	墳土	切妻口	口	—	—	—	—
209	RC046	墳土	切妻口	口	6.4	6.4	2.7	—

#### 4.まとめ

当遺跡の発掘調査は、今年度の調査を含めて過去に18回に及ぶ調査が実施され、今回が19次の調査に相当し、今年度も並行して18次調査が実施されているが、今回の調査範囲は本来はこの18次調査範囲の中に含まれており、たまたま事業者が異なることにより、19次調査調査として便宜的に別件としたものであり、本来は台太郎遺跡としては同一の遺跡である。

検出された遺構も全休が調査されたものの、ほとんどの遺構が18次調査の範囲に延びているのが実態であり、詳細については台太郎遺跡18次発掘調査報告書に記載されるので、詳細は18次発掘調査報告書に譲ることとし、簡単に概略をまとめてその責を果たすこととする。

- (1) 当遺跡は約10万㎡という広大な面積を有する大規模な遺跡であることは、過去のこれまでの発掘調査によって明らかであり、今回の調査範囲から検出された遺構と遺物を見ると、これまでの調査結果をさらに補強する結果となった。
- (2) 遺跡の内容・性格・時代は地点によって異なるが、概ね古墳時代末期～平安時代の大集落遺跡であることが明らかとなつたが、古墳時代末期と奈良時代の竪穴住居跡は混然一体となる形で東側と西側に密集する傾向が見られ、平安時代の竪穴住居跡は北部に多く分布するが、地点によっては各時代の遺構が重複しあう状況を示す地点も多い。
- (3) 検出された撫立柱建物跡は、共伴した遺物の出土がないため所屬時期を明確に出来ないが、これまでの調査例からすると、近世の屋敷跡を構成する建物跡の場合がもっとも多いと推測されるが、一部は中世の屋敷を構成すると思われる建物跡群もある。
- (4) 出土した遺物の大半は古墳時代末期～平安時代の土師器であり、須恵器の出土は非常に少ない。
- (5) 上師器の器種には、壺の他長財壺がほとんどで球財壺はまったく含まれていない。また、須恵器は壺が少なく袋物所謂壺・壺・大甕・瓶の類が主体をなす。
- (6) 古墳時代末期～奈良時代の住居跡には土製の紡錘車を伴う住居跡が多いように感じられた。

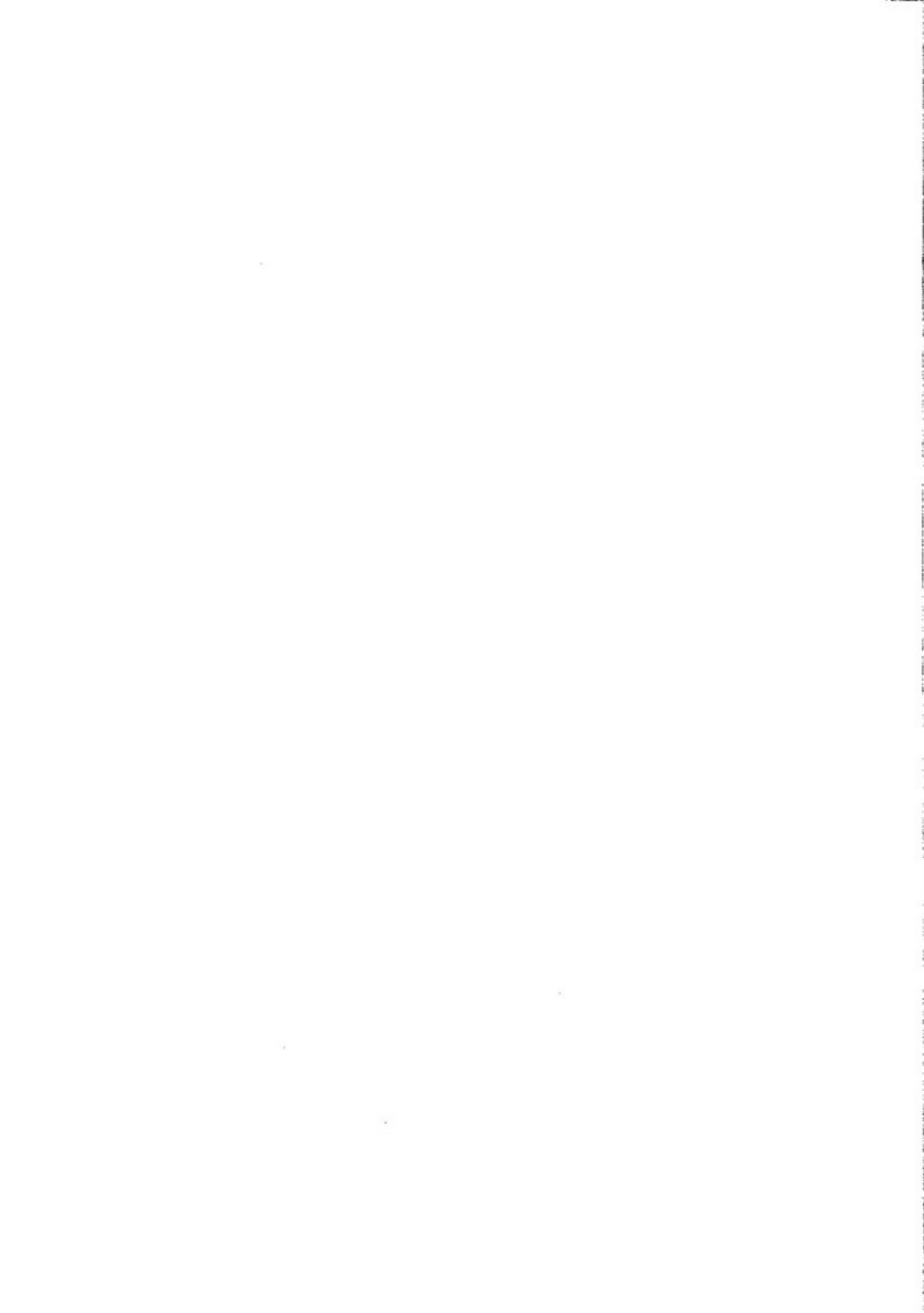
以上、簡単ではあるが、台太郎遺跡第19次調査に係る調査結果について、その一部を要約してまとめとする。既述のように、詳細については第18次調査報告書に記されるものと考えられる。

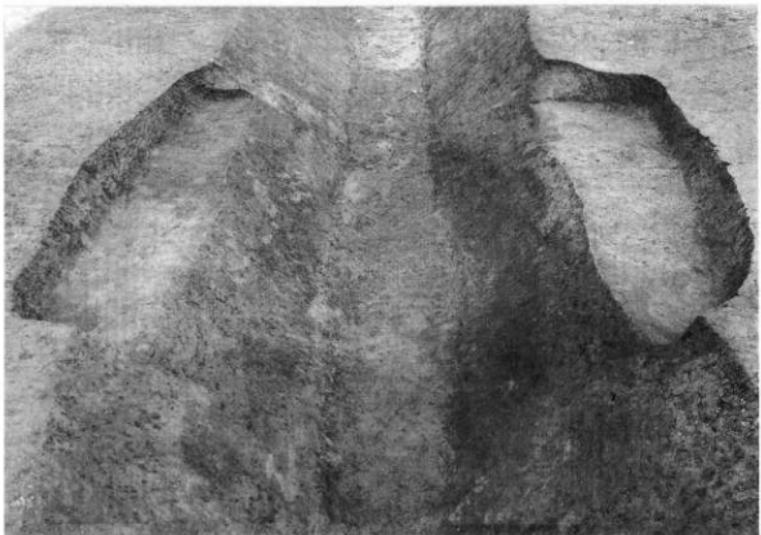
#### 5.最後に

当遺跡の全面に対する発掘調査が開始された平成9年度以来、本報告書が刊行される平成11年度まで早3ヶ年に及び、調査面積も延べて約6万㎡に及ぶものと推測される。今後数年度で当遺跡全体の発掘調査が終了する予定で在り、今後の調査結果に期待するものが大きい。

当遺跡の発掘調査に当たり、現地調査と室内整理に協力を頂いた多くの方々に深く感謝申し上げ、当報告書の終わりとしたい。

台太郎遺跡第19次  
写 真 図 版





RA159 完掘（南から）



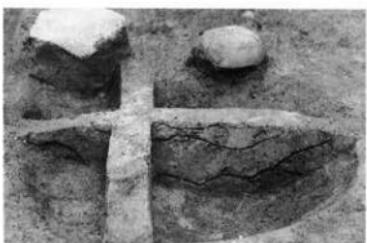
RA161 完整（東から）



上層断面（南から）



上層断面（西から）

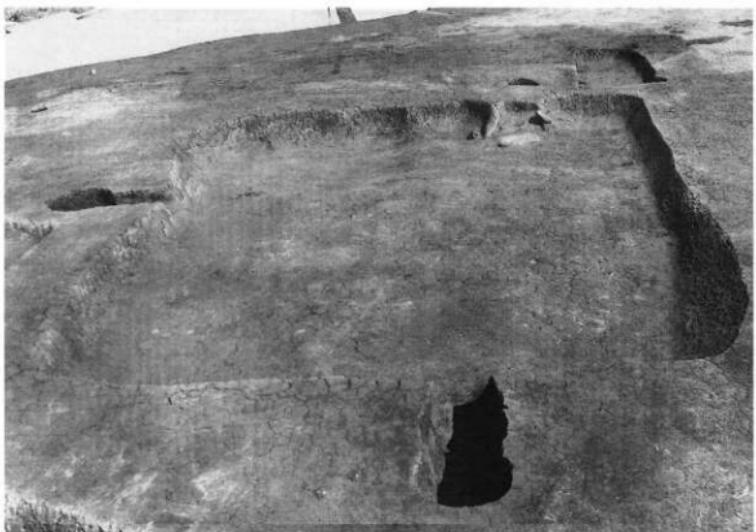


燃焼部断面（W-E）

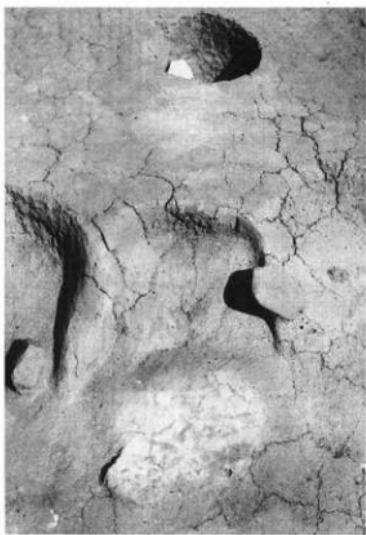


煙道断面（W-E）

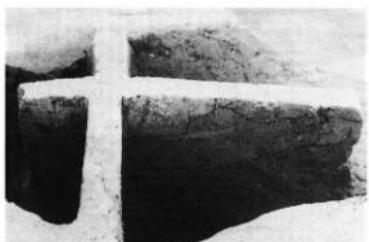
写真図版 2 RA161堅穴住居跡



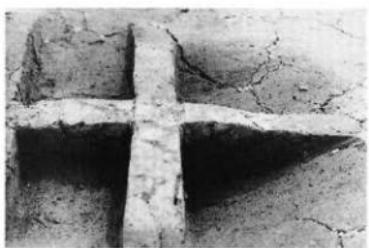
RA164 完掘（西から）



東カマド平面（東から）



東カマド断面（N-S）



東カマド断面（W-E）

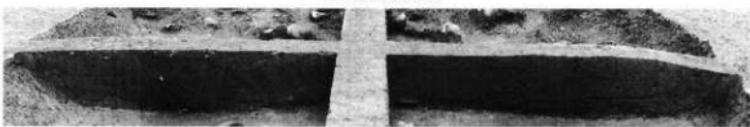
写真図版 3 RA164堅穴住居跡



RA165 完整（西から）



RA165 東西断面



RA165 南北断面



カマド断面東側（E-W）



カマド断面西側（E-W）



カマド断面（W-E）



カマド断面（W-E）

写真図版4 RA165堅穴住居跡 (1)



カマド平面（西から）



カマド煙道断面（N-S）



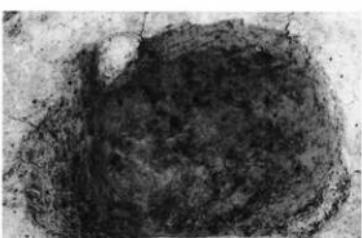
カマド煙道断面（N-S）



Pit 1 平面（南から）



Pit 1 断面（W-E）

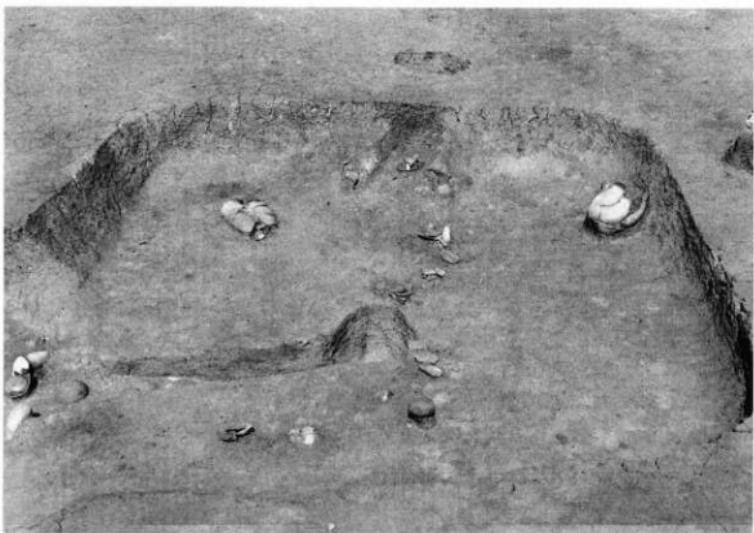


Pit 2 完掘（南から）

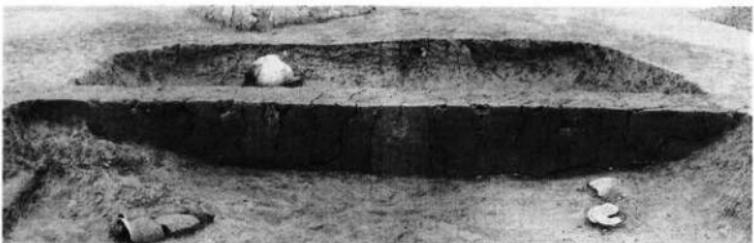


Pit 2 断面（W-E）

写真図版 5 RA165堅穴住居跡 (2)



RA166 完掘（南東から）



RA166 断面（NW-SE）

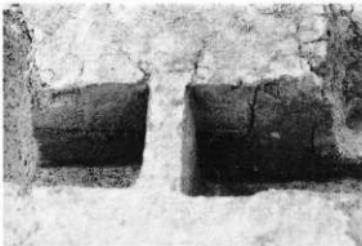


RA166 カマド断面（NW-SE）

写真図版 6 RA166堅穴住居跡 (1)



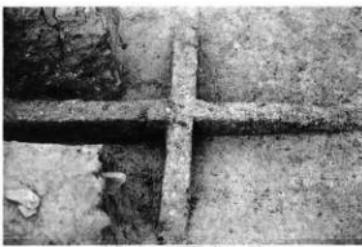
カマド平面（南東から）



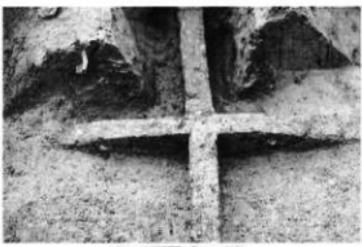
カマド断面（NW-SE）北側



北側 カマド断面（NW-SE）南側



南側 カマド断面（N-S）



カマド断面（W-E）



カマド断面（W-E）

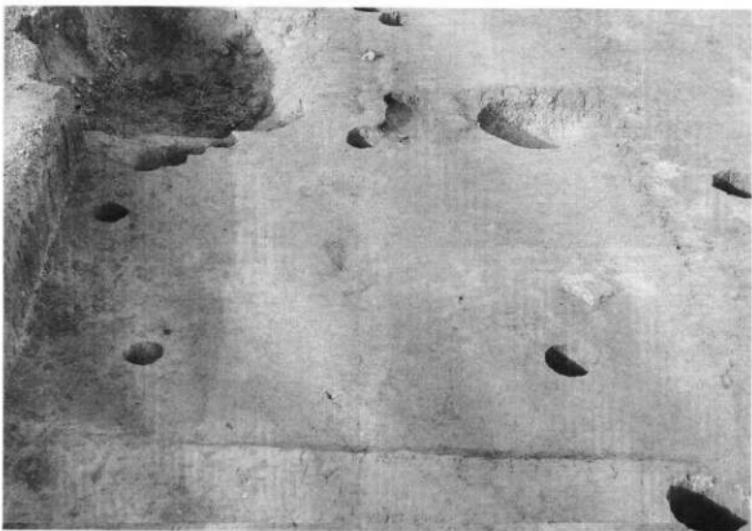


煙道断面



遺物出土状況

写真図版 7 RA166堅穴住居跡 (2)



RA172 完振（南から）



東西断面



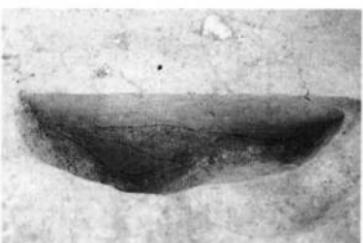
カマド断面（N-S）



カマド断面（W-E）



Pit 1 平面（南から）



Pit 1 断面（W-E）

写真図版 8 RA172堅穴住居跡



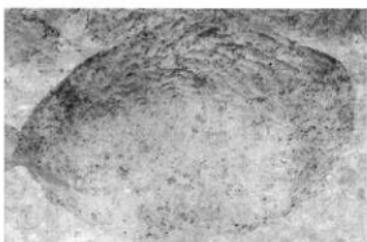
RA175 完掘（南から）



南北断面



東西断面

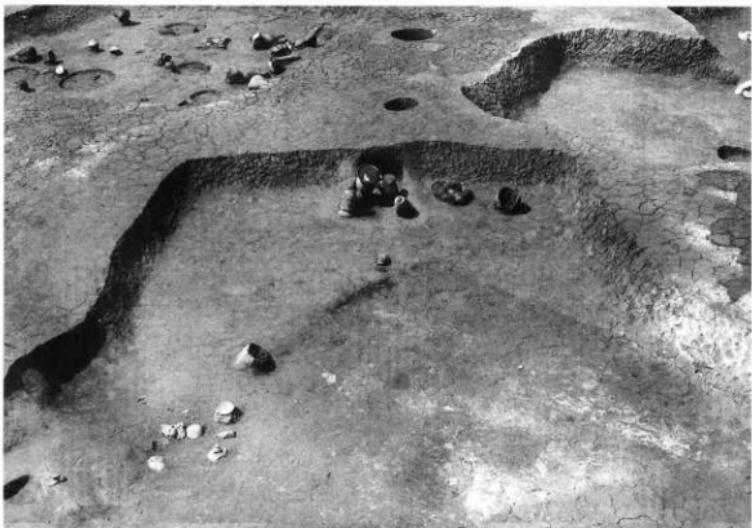


Pit 1 完掘

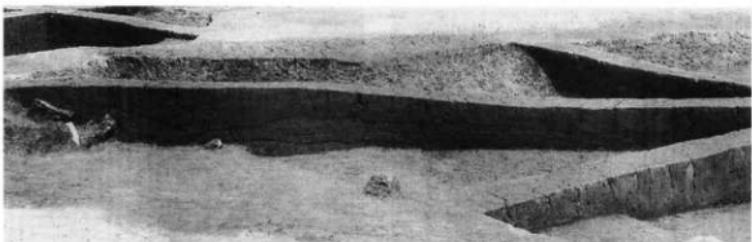


Pit 1 断面（N-S）

写真図版 9 RA175 積穴住居跡



RA186 完掘（南から）



RA186断面（NW-SE）

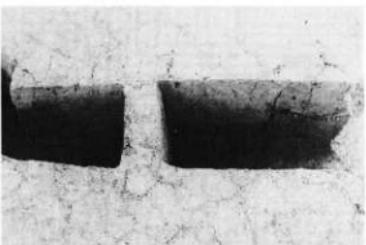


RA186 断面（NW-SE）

写真図版10 RA186堅穴住居跡 (1)



カマド完掘（南から）



煙道断面（N-S）



カマド断面（N-S）



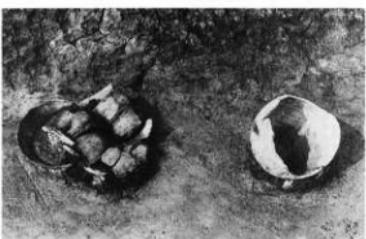
カマド検出状況



カマド袖断面（W-E）

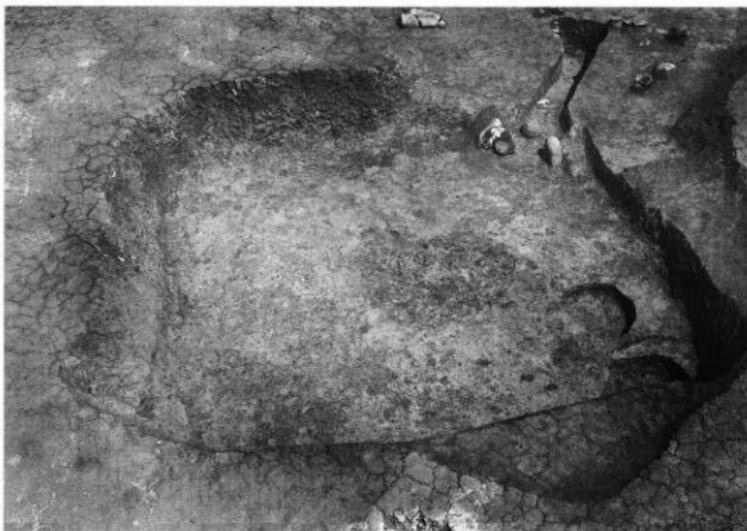


カマド煙道断面（W-E）

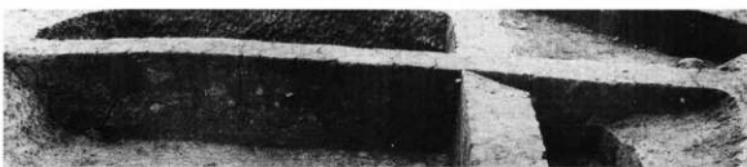


土器出土状況

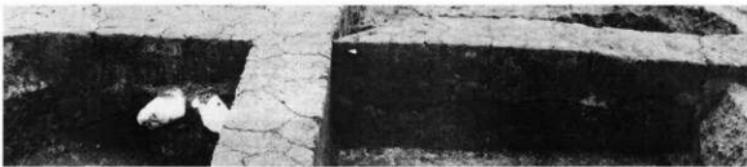
写真図版11 RA186堅穴住居跡 (2)



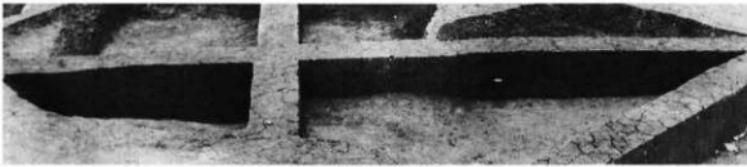
RA187 完整（南から）



RA187 東西断面

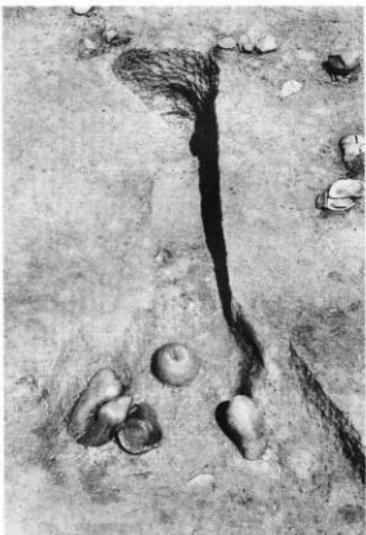


RA187 南北断面

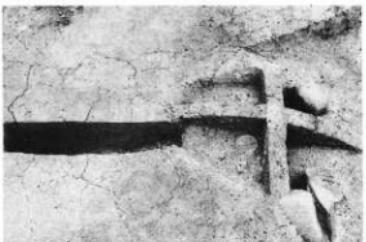


RA187 南北断面

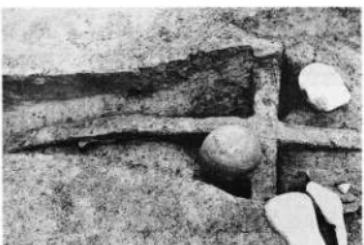
写真図版12 RA187堅穴住居跡 (1)



カマド完掘



カマド断面 (N-S)



カマド焼土断面 (N-S)



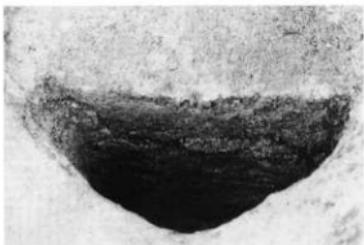
カマド焼土断面 (W-E)



RA 187・166 完掘

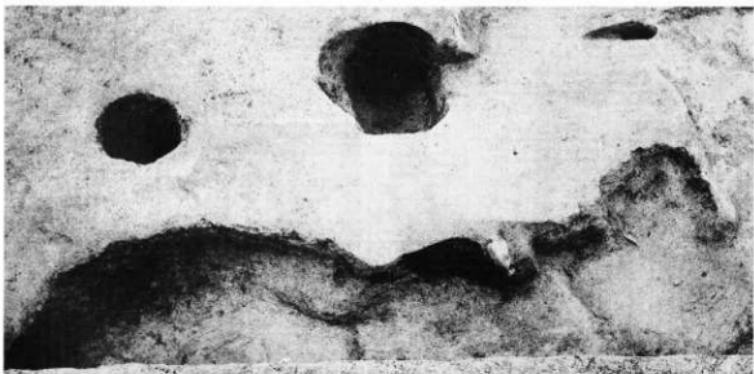


Pit 1 断面

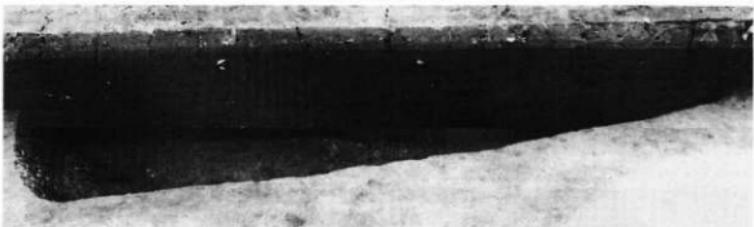


Pit 2 断面

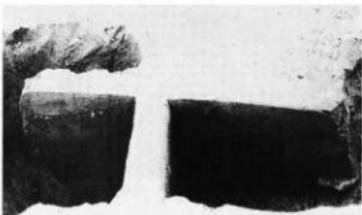
写真図版13 RA187堅穴住居跡 (2)



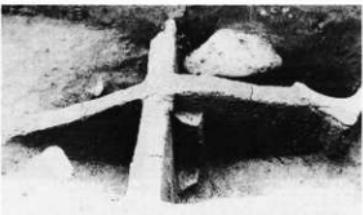
RA188 完壁（西から）



RA188 断面（N-S）



カマド断面（E-W）



カマド断面（N-S）



カマド断面（W-E）



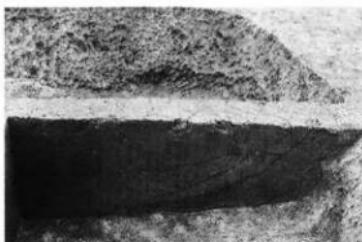
写真図版14 RA188堅穴住居跡



RA197 完掘（南東より）



RA197 南北断面



RA197 東西断面

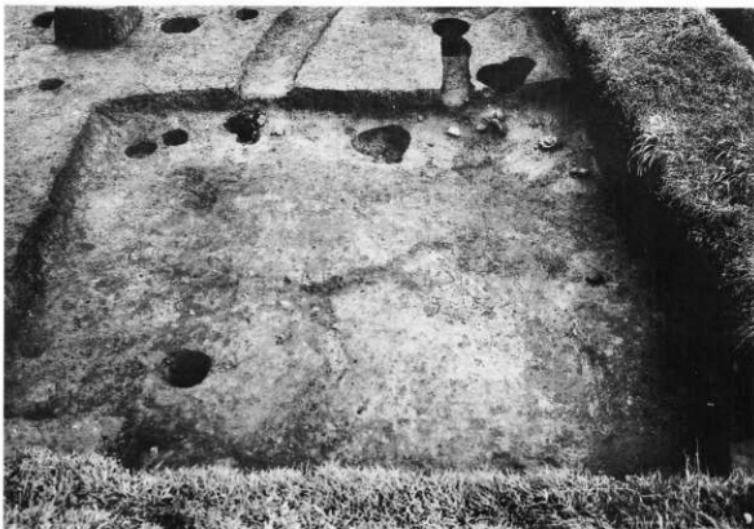


カマド断面（N-S）



RA197 貼床除去後（南東から）

写真図版15 RA197整穴住居跡



RA198 完掘



RA198 南北断面



RA198 カマド断面 (W-E)

RA198

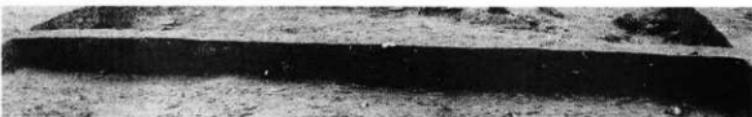


P 4 断面 (W-E)

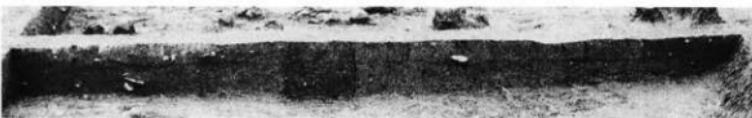
写真図版16 RA198堅穴住居跡



RA200 (右下)・209 (左上) 完報



RA200 東西断面



RA200 南北断面



RA200・209 東西断面（北から）

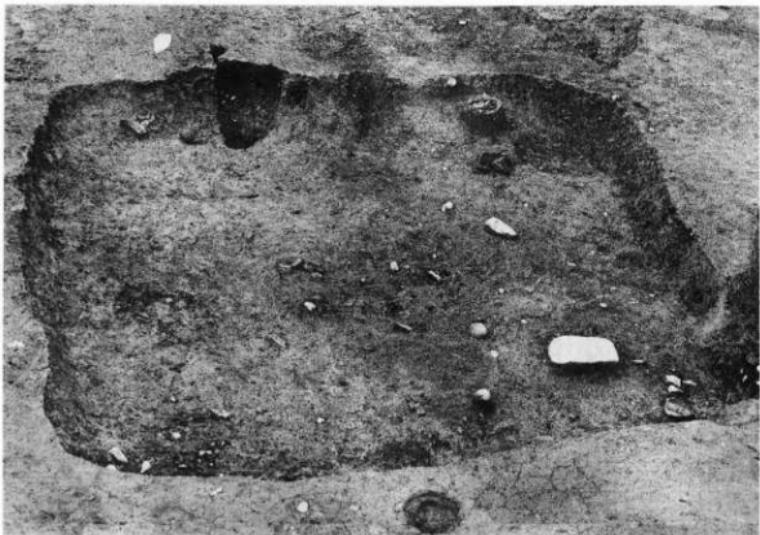


RA200 カマド断面（N-S）



RA200 カマド断面（W-E）

写真図版17 RA200・209堅穴住居跡



RA210



RA210 東西断面（南から）



RA210 南北断面（西から）



カマド煙道断面

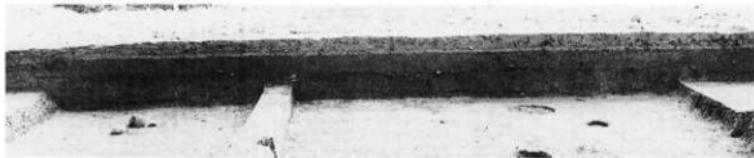


カマド煙道完掘

写真図版18 RA210堅穴住居跡



RA227 完振（北から）



RA227 南北断面（西から）



RA227 東西断面（北から）



カマド断面（W-E）



Pit 1・2 断面（NE-SW）



カマド断面（N-S）



Pit 2

写真図版19 RA227堅穴住居跡



RA229 完據（南東より）



RA229 東西断面（W-E）



RA229 南北断面（N-S）



カマド断面（N-S）

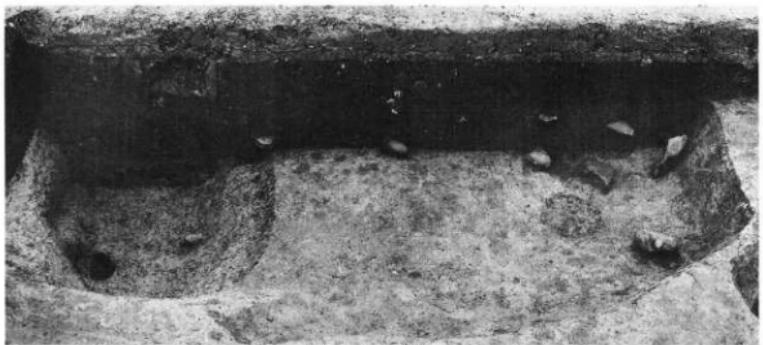


カマド断面（W-E）



遺物出土状況

写真図版20 RA229堅穴住居跡



RA232 完掘（東から）



RA232 南北断面（S-N）



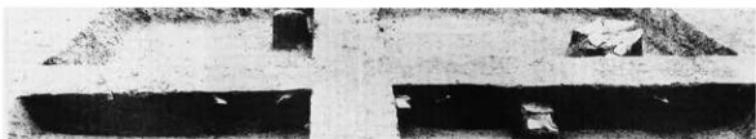
RA232 東西断面（W-E）



RE005 完観（北から）



RE005断面（W-E）



RE005 断面（N-S）



遺物出土状況（W-E）



遺物出土状況（W-E）

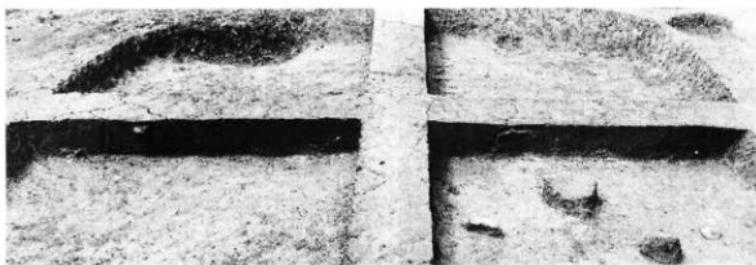
写真図版22 RE005堅穴状遺構



RE006 完掘（北から）



RE006 断面B-B' (N-S)



RE006 断面A-A' (W-E)

写真図版23 RE006堅穴状遺構



RE013



RE013 南北断面



RE013 東西断面



遺物出土状況



RE013 完掘

写真図版24 RE013堅穴状遺構



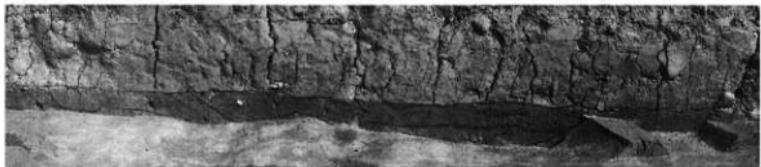
RE017 完掘（南から）



RE017 断面（N-S）



RE017 断面（SW-NE）

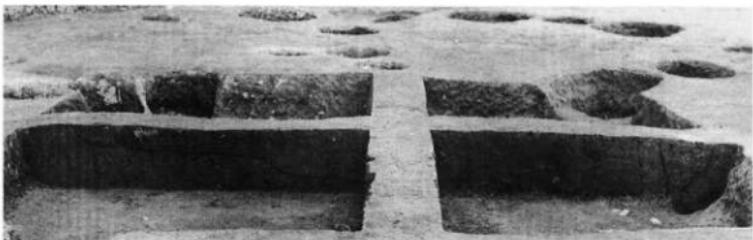


RE017 断面（W-E）

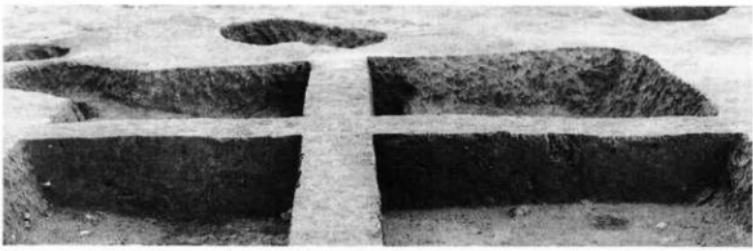
写真図版25 RE017堅穴状遺構



RE021 完振



RE021 断面 (W-E)

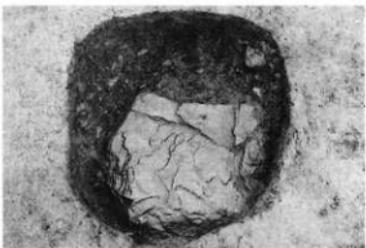


RE021 断面 (N-S)

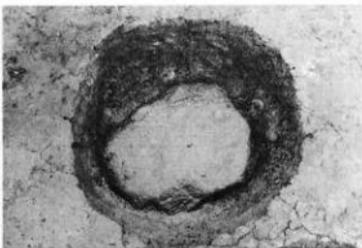
写真図版26 RE021堅穴状遺構



RB005 挖立柱建物跡完掘全景（北から）



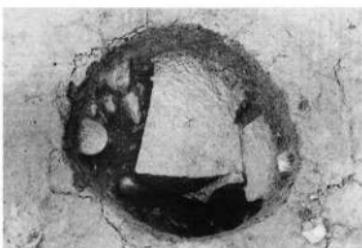
RB005 柱穴 A 4 完掘



RB005柱穴 B 5 完掘

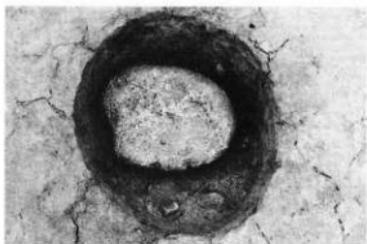


RB005柱穴 B 9 完掘



RB005柱穴 C 4 完掘

写真図版27 RB005挖立柱建物跡 (1)



RB005柱穴 D 3 完掘



RB005柱穴 D 8 完掘



RB005柱穴 A 1 断面 (N-S)



RB015柱穴 B 2 断面 (N-S)



RB005柱穴 B 4 断面 (N-S)



RB005柱穴 C 6 断面 (N-S)

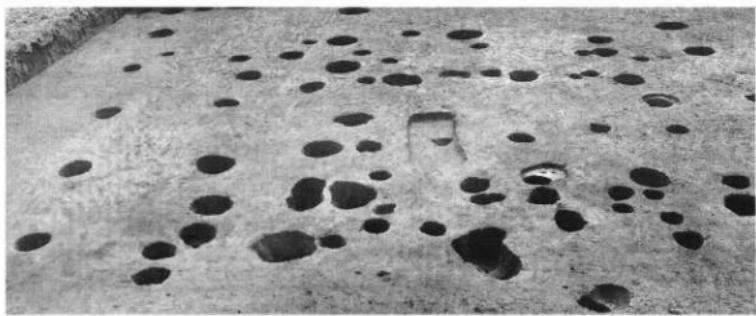


RB005柱穴 D 1 断面 (N-S)



RB005柱穴 D 4 断面 (N-S)

写真図版28 RB005掘立柱建物跡 (2)



RB008 揭立柱建物跡完掘全景 (W-E)



RB005柱穴 A 1断面



RB005柱穴 A 3断面



RB008柱穴 B 1断面



RB008柱穴 C 2断面



RB008柱穴 D 2断面



RB008柱穴 E 1断面

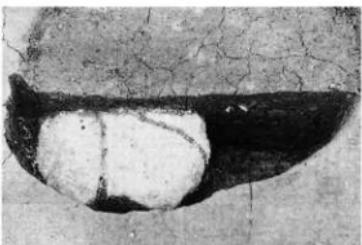
写真図版29 RB008掲立柱建物跡



RB009 振立建物跡完掘全景（北から）



RB009柱穴 A2断面（W-E）



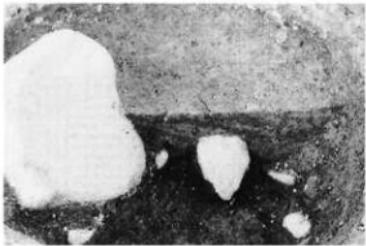
RB009柱穴 B4断面（W-E）



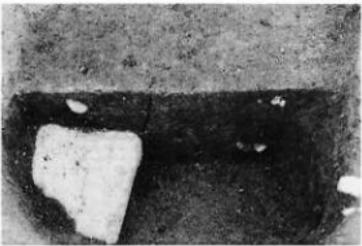
RB009柱穴 B5断面（W-E）



RB009柱穴 C1断面（W-E）



RB009柱穴 E3断面（W-E）

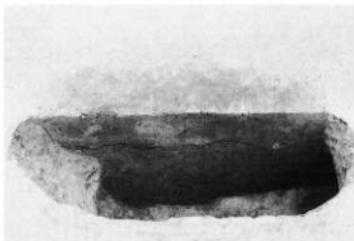


RB009柱穴 C3断面（W-E）

写真図版30 RB009振立柱建物跡



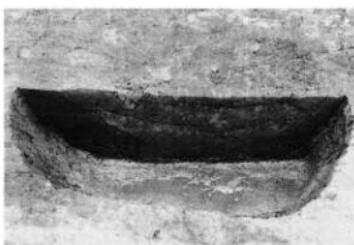
RD093 土坑平面



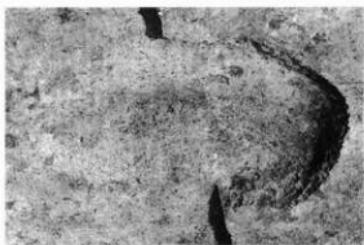
RD093 土坑断面 (W-E)



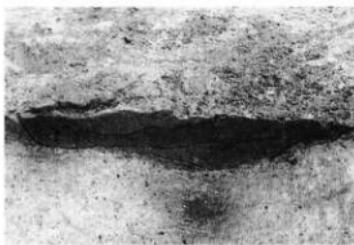
RD131 土坑平面



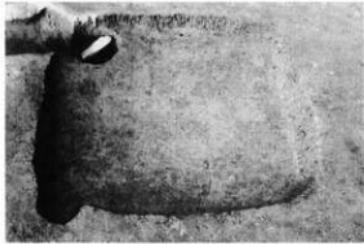
RD131 土坑断面 (W-E)



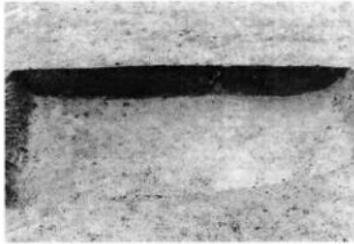
RD132 土坑平面



RD132 土坑断面 (S-N)



RD159 土坑平面

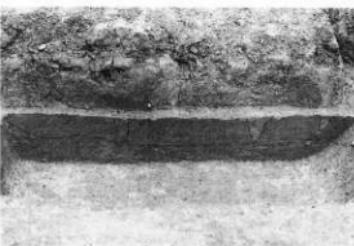


RD159 土坑断面 (W-E)

写真図版31 土坑類 (1)



RD168 土坑平面（西から）



RD168 土坑断面（S - N）



RD169 土坑平面（西から）



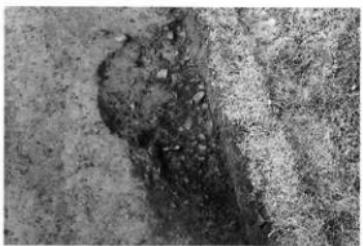
RD169 土坑断面（S - N）



RD170 土坑平面（南から）



RD170 土坑断面（W - E）

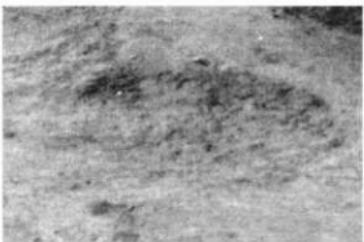


RD171 土坑平面（南から）



RD171 土坑断面（N - S）

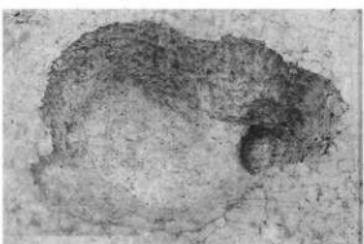
写真図版32 土坑類 (2)



RD184 土坑平面（北東から）



RD184 土坑断面（NW-SE）



RD186 土坑平面（南東から）



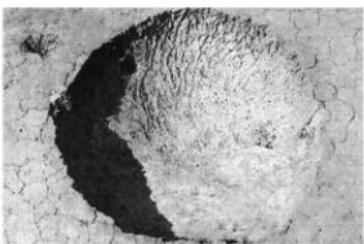
RD186 土坑断面（NE-SW）



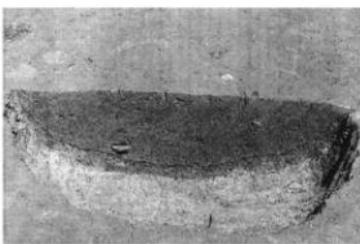
RD187 土坑平面（南西から）



RD187 土坑断面（NW-SE）

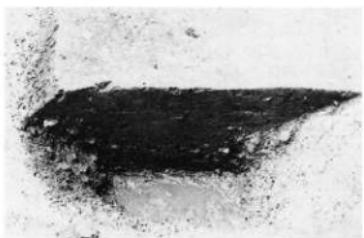


RD190 土坑平面（南から）

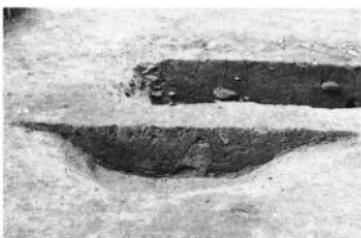


RD190 土坑断面（W-E）

写真図版33 土坑類（3）



RD137 土坑断面



RD166 土坑断面



RD183 土坑断面



RD188 土坑断面



RD195 土坑断面



RD224 土坑断面



RF017 烧土

写真図版34 土坑類 (4)・焼土遺構



RG045 溝完掘（北から）



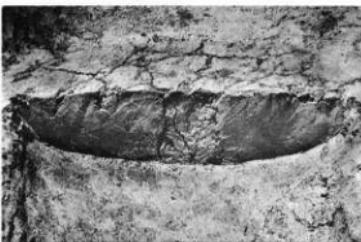
RG045 溝断面 (SE→)



RG045 溝断面 (SE→)



BG094 溝完掘（西から）



RG094 溝断面 (SE→)



RG095 溝断面 (SW→)

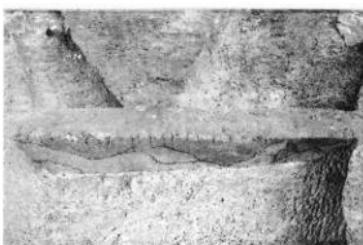
写真図版35 溝 跡 (1)



RG026 清完層（南から）



RG026 溝断面（W-E）



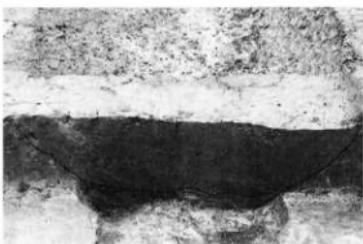
RG096・097 切り合い断面（S-N）



RG098 清完層



RG098 溝断面（S-N）



RG098 溝断面（S-N）

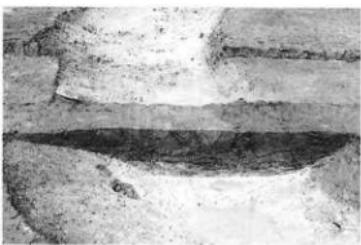
写真図版36 溝 跡 (2)



RG099 溝完掘西側



RG099 溝完掘東側



RG099 断面 (S-N)

写真図版37 溝 跡 (3)



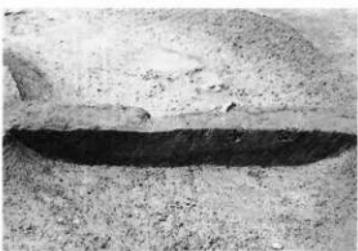
RG099-118 溝完成（西から）



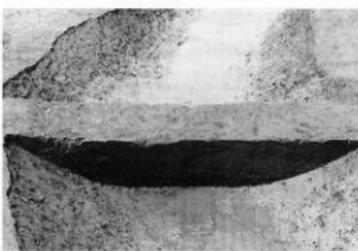
RG099-125 溝断面（B-B'）



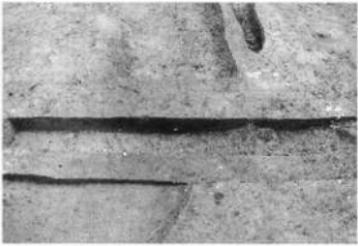
RG125 溝断面（C-C' 南側）



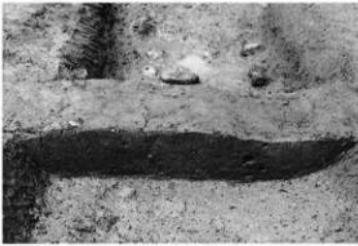
RG099 溝断面（D-D' 北側）



RG099 溝断面（C-C' 北側）

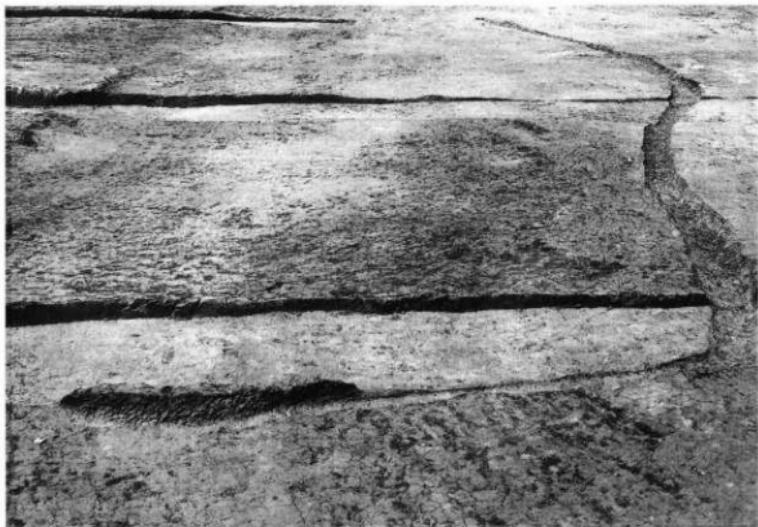


RG099-125溝（E-E'）



RG125 溝断面（D-D' 南側）

写真図版38 溝 跡 (4)



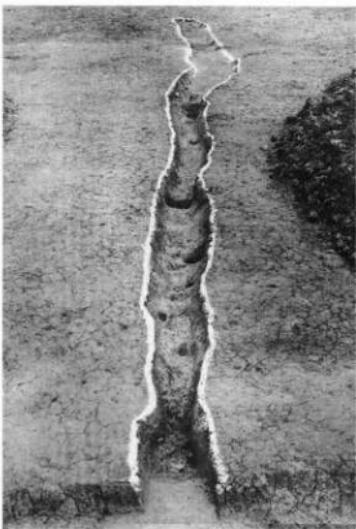
RG100 溝完成（東から）



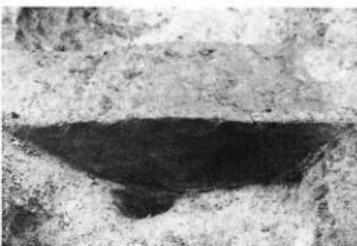
RG100 溝断面（A-A'）



RG100 溝断面（B-B'）



RG117 溝完掘（南から）



RG111 溝断面（W-E）



RG101 溝完掘（西から）



RG118 溝跡完掘

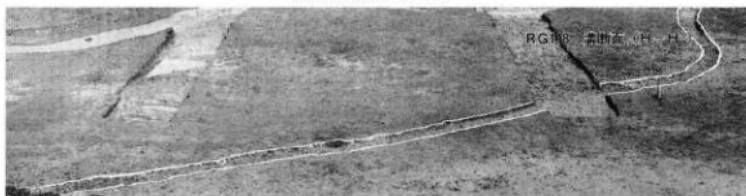


RG118 溝断面（H-H'）

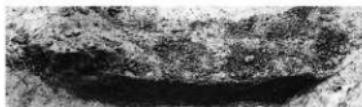
写真図版40 溝 跡 (6)



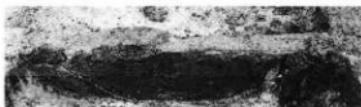
RG111 溝完掘（西から）



RG111 溝完掘（東から）



RG111 溝断面（A-A'）



RG111 溝断面（B-B'）



RG119 溝完掘

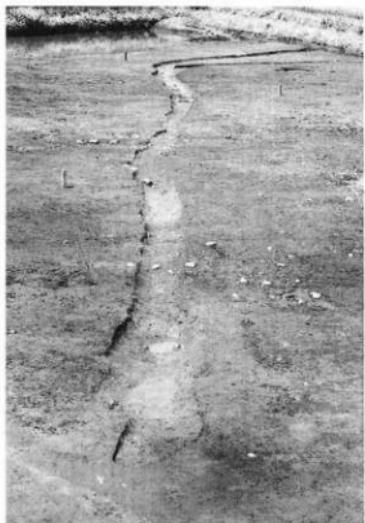


RG119 溝断面（F-F'）

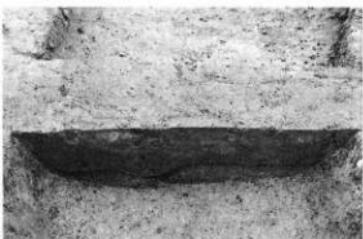


RG119 溝断面（G-G'）

写真図版41 溝 跡 (7)



RG120 溝完攝



RG120 溝断面 (A - A')



RG120 溝断面 (B - B')



RG120 溝西侧完攝



RG120 溝断面 (C - C')



RG120 溝断面 (D - D')



RG120 溝断面 (E - E')

写真図版42 溝 跡 (8)



RG126 溝完掘



RG126 溝断面 (A-A')



RG126 溝断面 (B-B')



RG142 溝完掘



RG126 溝断面 (C-C')



RG126 溝断面 (D-D')

写真図版43 溝 跡 (9)



RG127 溝完成



RG134 完掘



RG134 溝断面 (G-G')

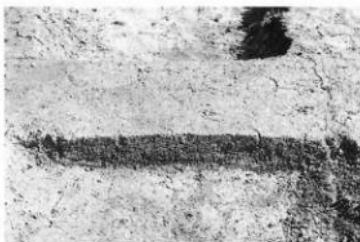


RG134 溝断面 (H-H')

写真図版44 溝跡⑩



RG128 溝完掘



RG128 溝断面 (C-C')



RG128 溝断面 (B-D')



RG129 溝完掘



RG129 溝断 (A-A')



RG132 溝完掘



RG132 溝断面 (A-A')



RG132・133分歧点



RG133 溝完掘



RG133 溝断面 (A-A')



RG133 溝断面 (B-B')

写真図版46 溝跡 (II)



RG135・136 溝完掘（北東より）



RG135 溝断面（J - J'）



RG135 溝断面（L - L'）



RG136 溝完掘（南から）



RG136 溝断面（A - A'）



RG136 溝断面（E - E'）

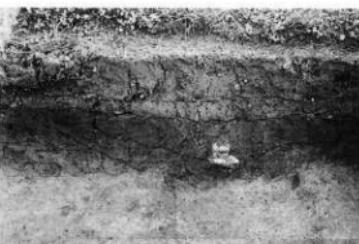
写真図版47 溝跡⑬



RG138 溝完成（西から）



RG138 溝断面（A-A'）



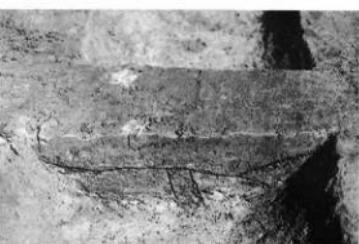
RG138 溝断面（B-B'）



RG143 溝完成（南から）

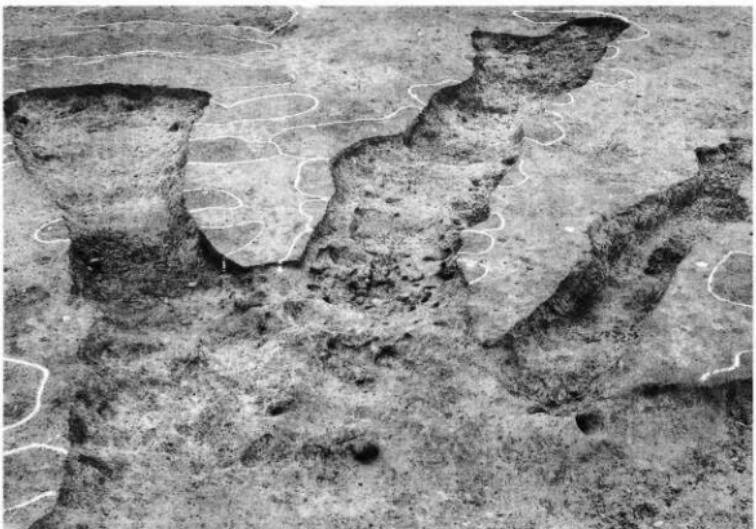


RG143 溝断面（A-A'）



RG143 溝断面（B-B'）

写真図版48 溝 跡 04



RG144・145・146 溝完掘（右から堆）（南から）



RG157 溝完掘



RG157 溝断面（A-A'）



RG157 溝断面（B-B'）

写真図版49 溝跡 (5)



RG162 溝完成

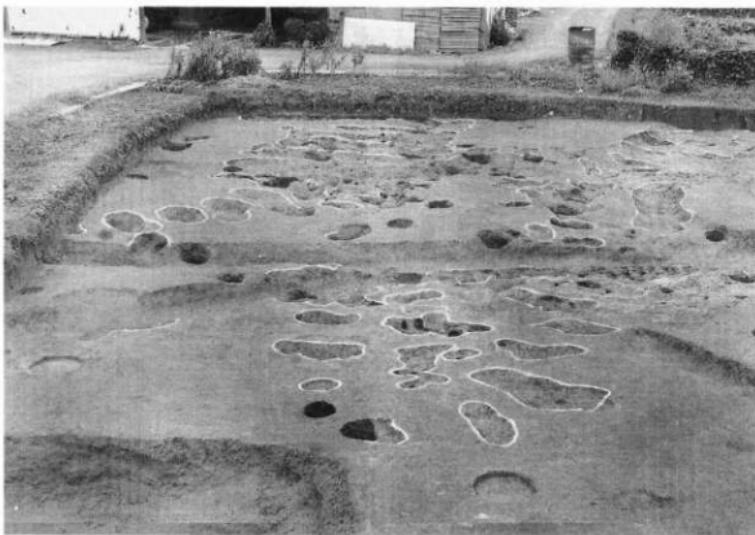


RG162 溝断面 (A-A')



RZ017 柱穴群

写真図版50 溝跡⑨・RZ017柱穴群



RZ005 完掘（南側）



RZ005 南北断面（W→）

写真図版51 RZ005道路跡状遺構（1）



RZ005 断面A-A'（西から）



RZ005 断面A-A'（西から）



RZ005 断面B-B'（西から）



RZ005 断面B-B'（西から）



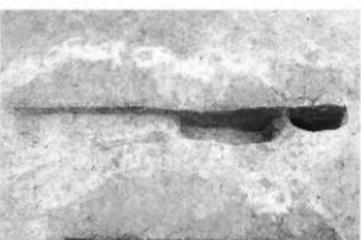
RZ005 P1断面



RZ005 P2断面

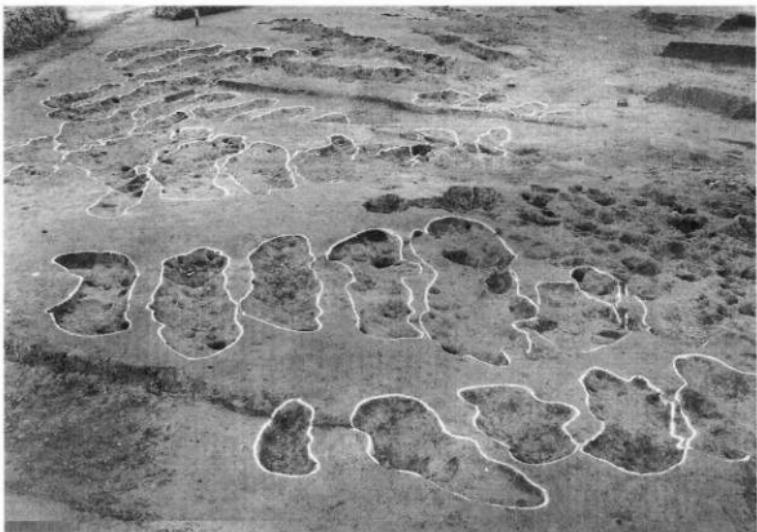


RZ005 P3断面

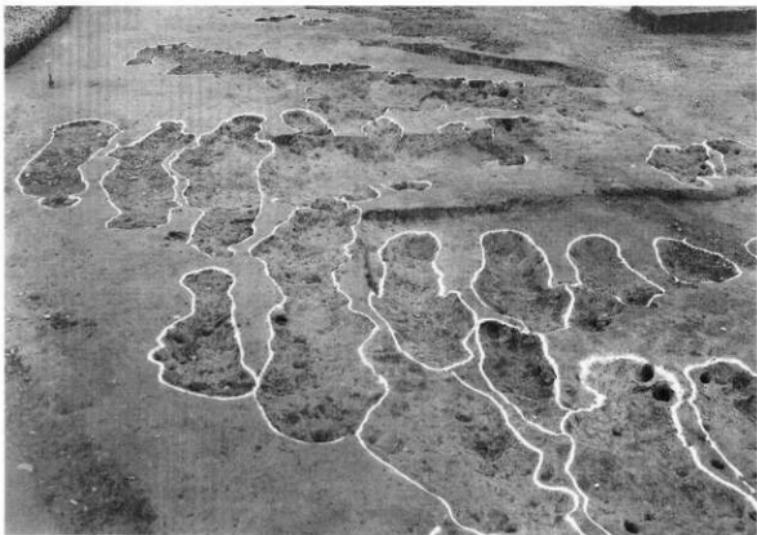


RZ005 P4断面

写真図版52 RZ005道路跡状造構 (2)



RZ009 完掘（北東側から）



RZ009 完掘（南東側から）

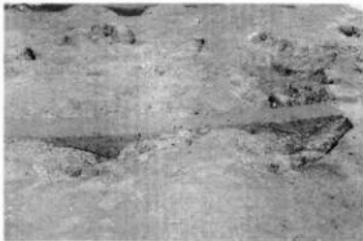
写真図版53 RZ009道路跡状造構（1）



RZ009 完掘（中央部南から）



RZ009 完掘（南西から）



A-A' 南側断面

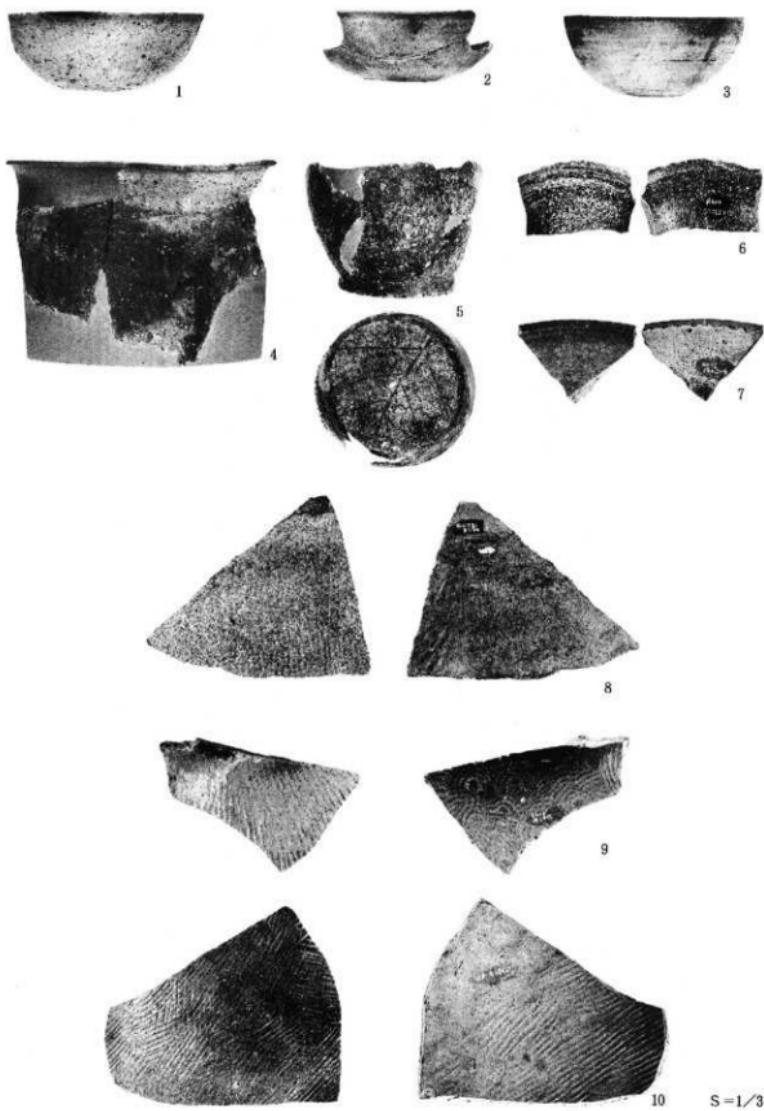


B-B' 北側断面



G-G' 南側断面

写真図版54 RZ009道路跡状遺構（2）



写真図版55 遺構内出土遺物 (RA116)



11



12



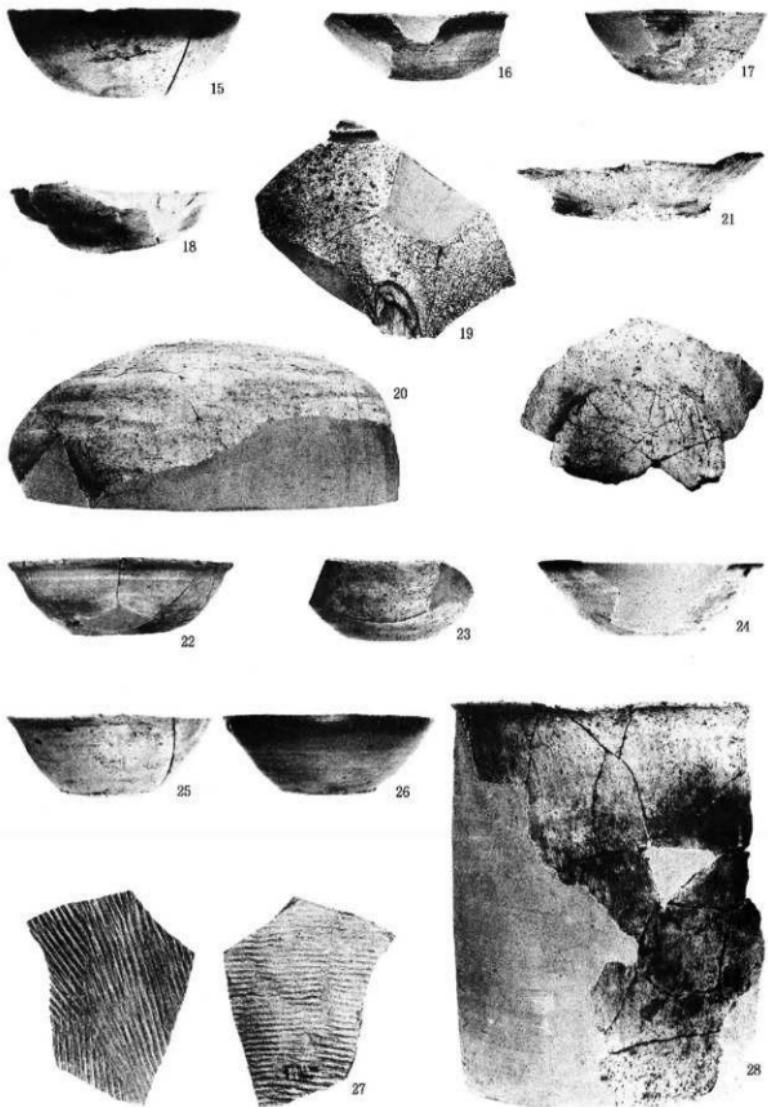
13



14

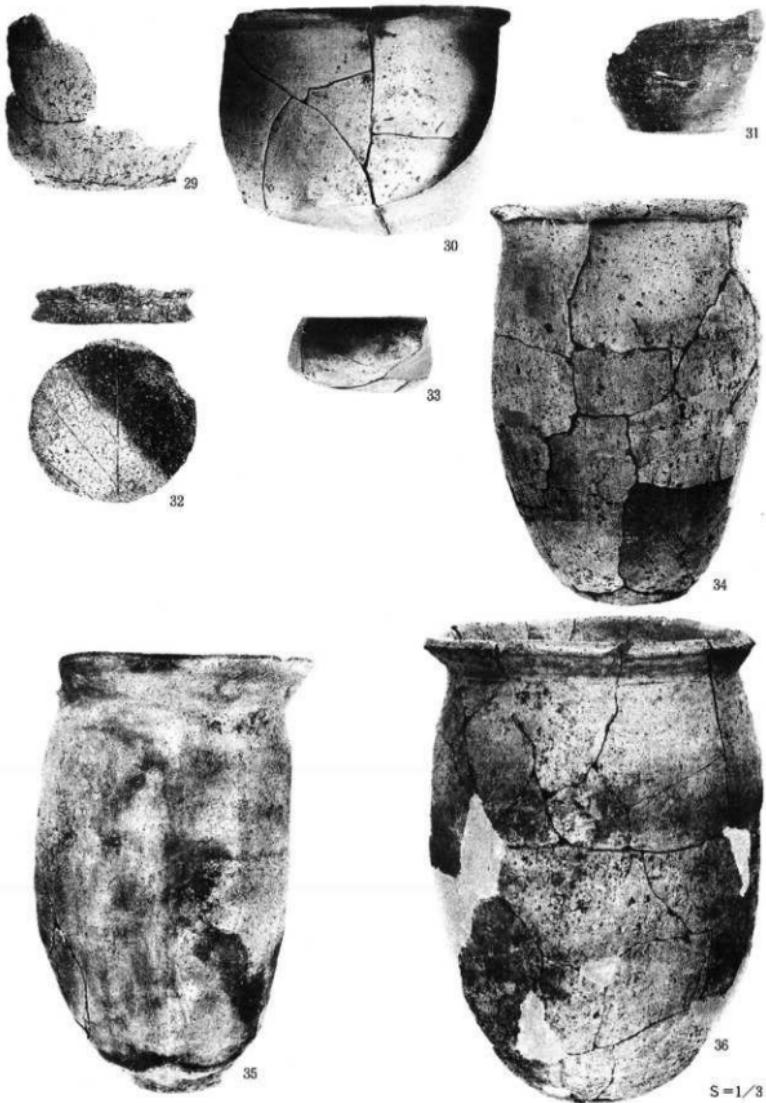
S = 1/3

写真図版56 遺構内出土遺物 (RA116)



S=1/3

写真図版57 造構内出土遺物 (RA161・RA164)



写真図版58 遺構内出土遺物 (RA164・RA165)



37



38



39



40



41



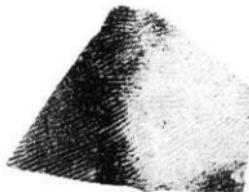
42



43



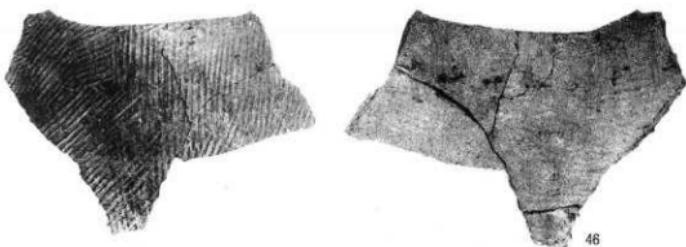
44



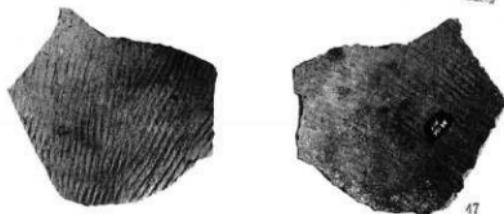
45

S = 1/3

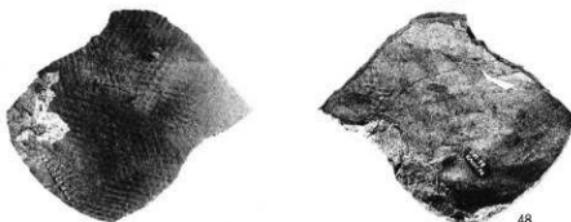
写真図版59 遺構内出土遺物 (RA165)



46



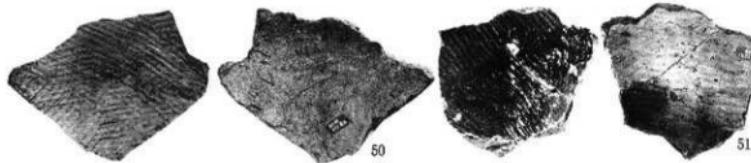
47



48



49

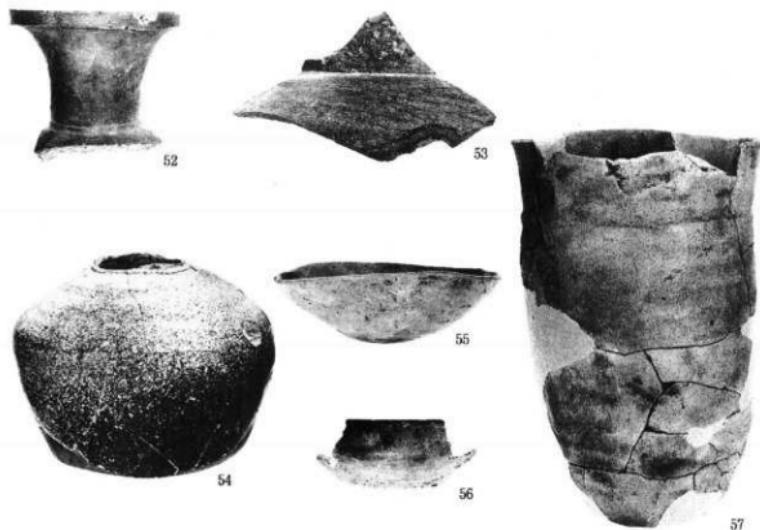


50

51

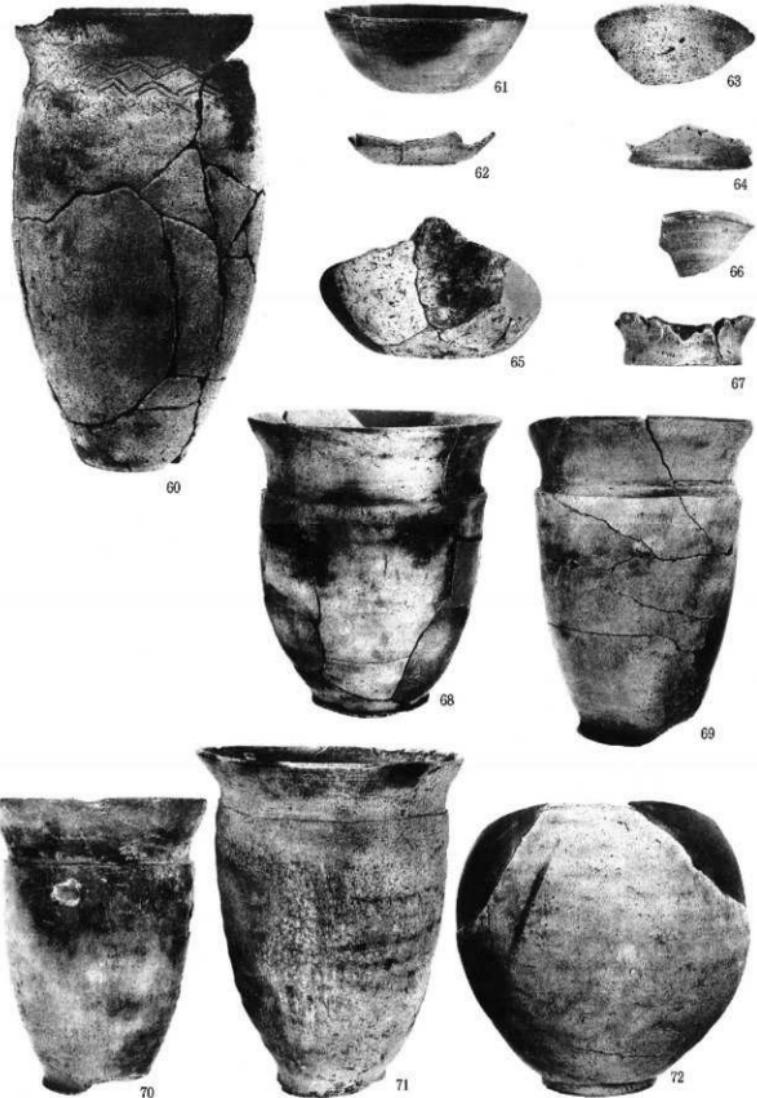
S = 1/3

写真図版60 遺構内出土遺物 (RA165)



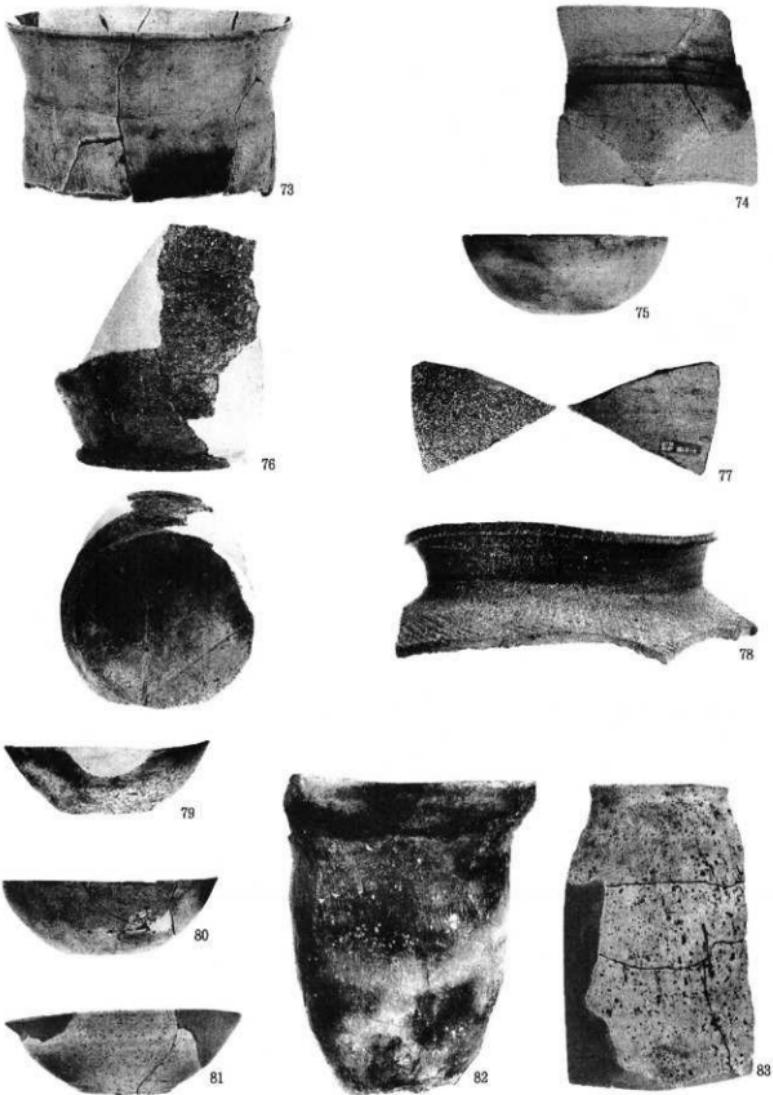
S = 1/3

写真図版61 遺構内出土遺物 (RA165~RA166)



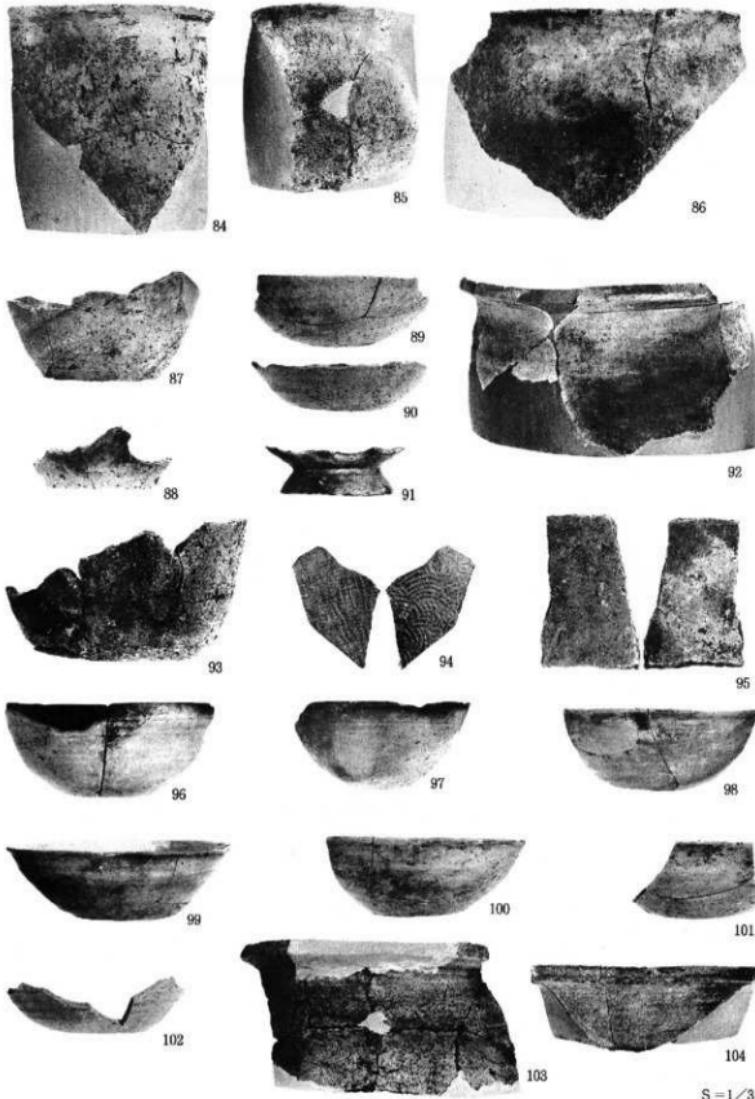
S = 1/3

写真図版62 遺構内出土遺物 (RA166・RA172・RA175・RA186)



S = 1/3

写真図版63 遺構内出土遺物 (RA186~RA188・RA198)

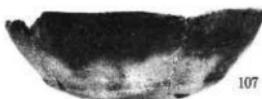


S = 1/3

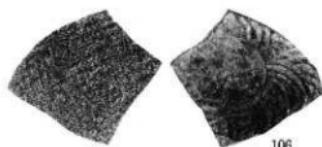
写真図版64 造構内出土遺物 (RA198・RA200・RA209)



105



107



106



108



109



110



111



112



113



114

S = 1/3

写真図版65 造構内出土遺物 (RA209~RA211・RA227)



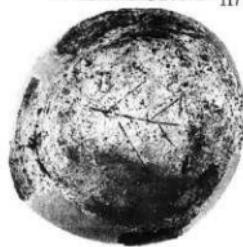
115



116



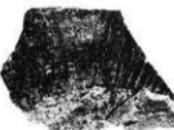
117



118



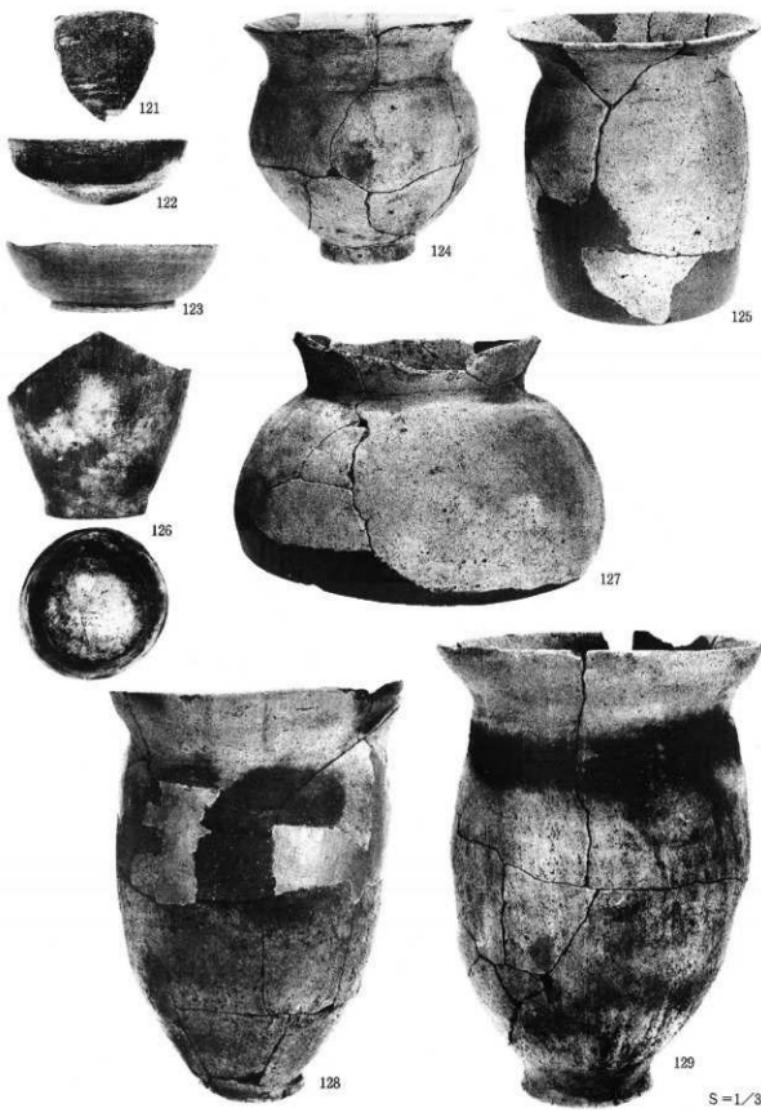
119



120

 $S = 1/3$ 

写真図版66 造構内出土遺物 (RA227~RA230)



写真図版67 遺構内出土遺物 (RA229・RA231)



130



131



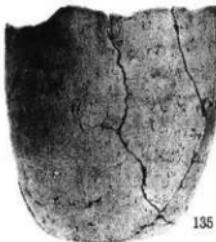
132



133



134



135



136



137



138



139



140



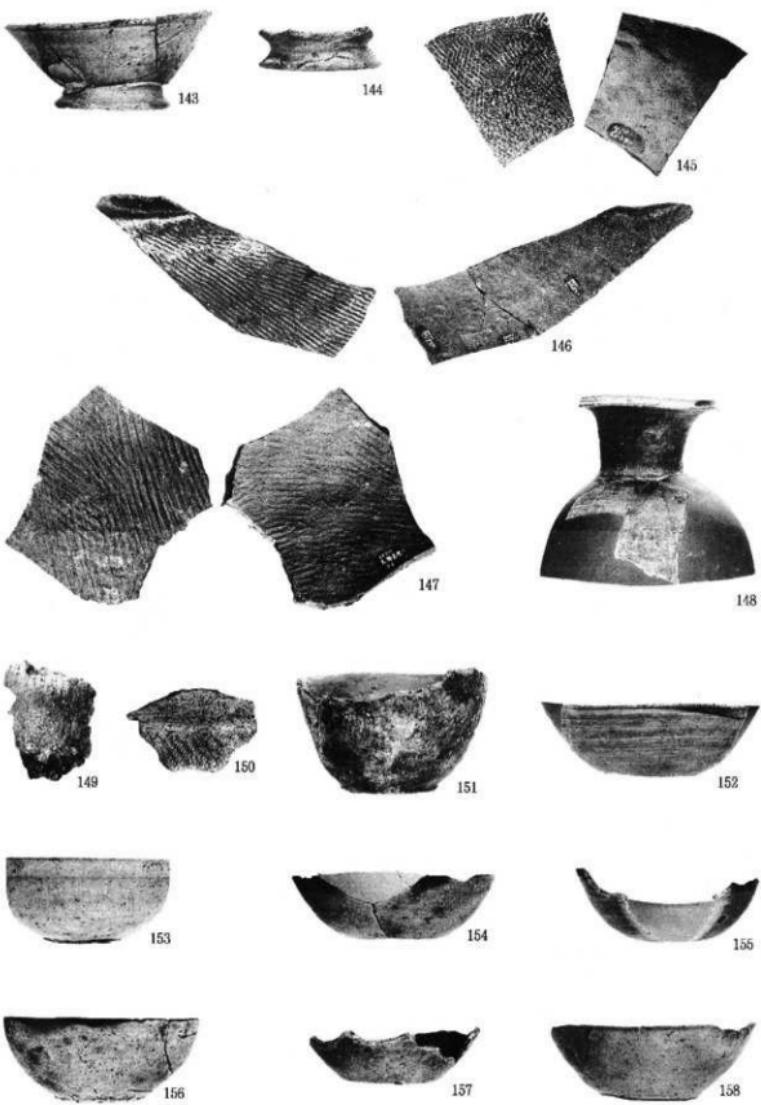
141



142

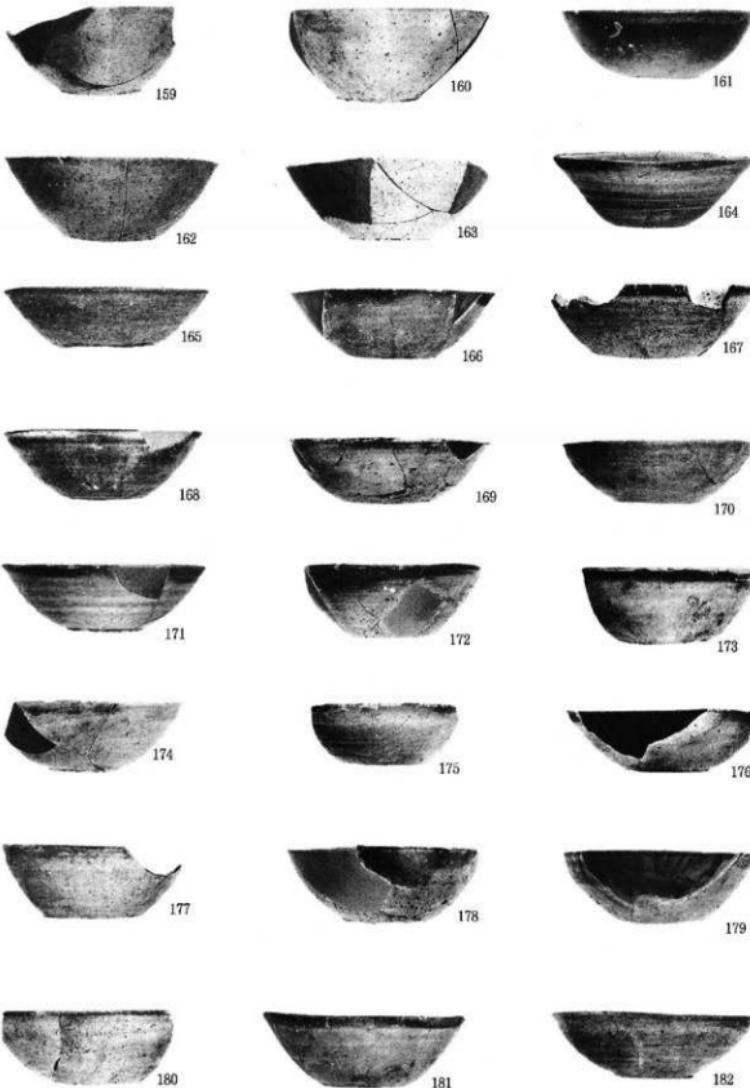
S = 1/3

写真図版68 遺構内出土遺物 (RA229・RD131・RE013)



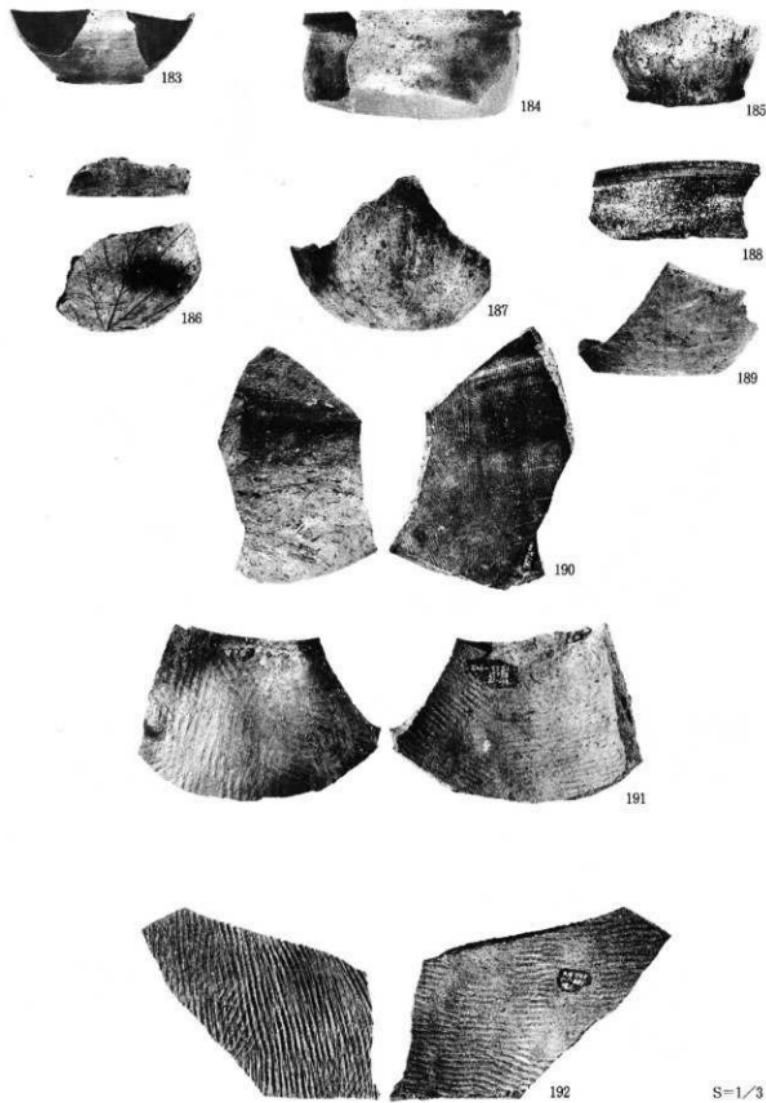
S = 1/3

写真図版69 造構内出土遺物 (RE013・RG045・RG099・RE015・RE017・RE021)



S = 1/3

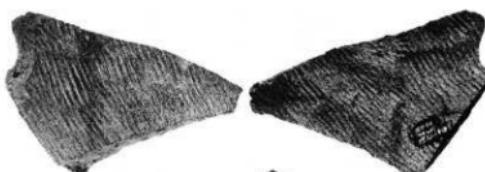
写真図版70 造構内出土遺物 (RG045)



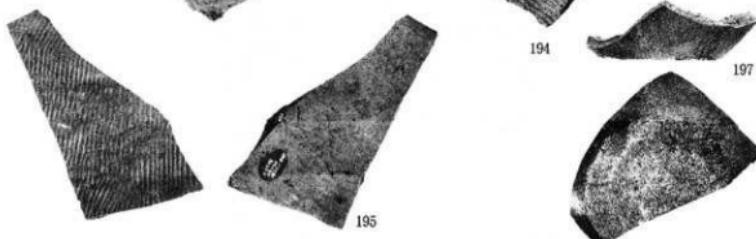
写真図版71 遺構内出土遺物 (RG045)



193



194



195



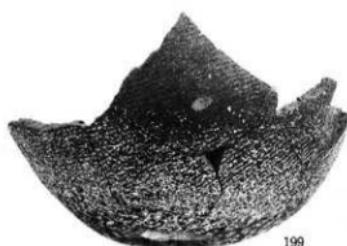
196



197



198



199



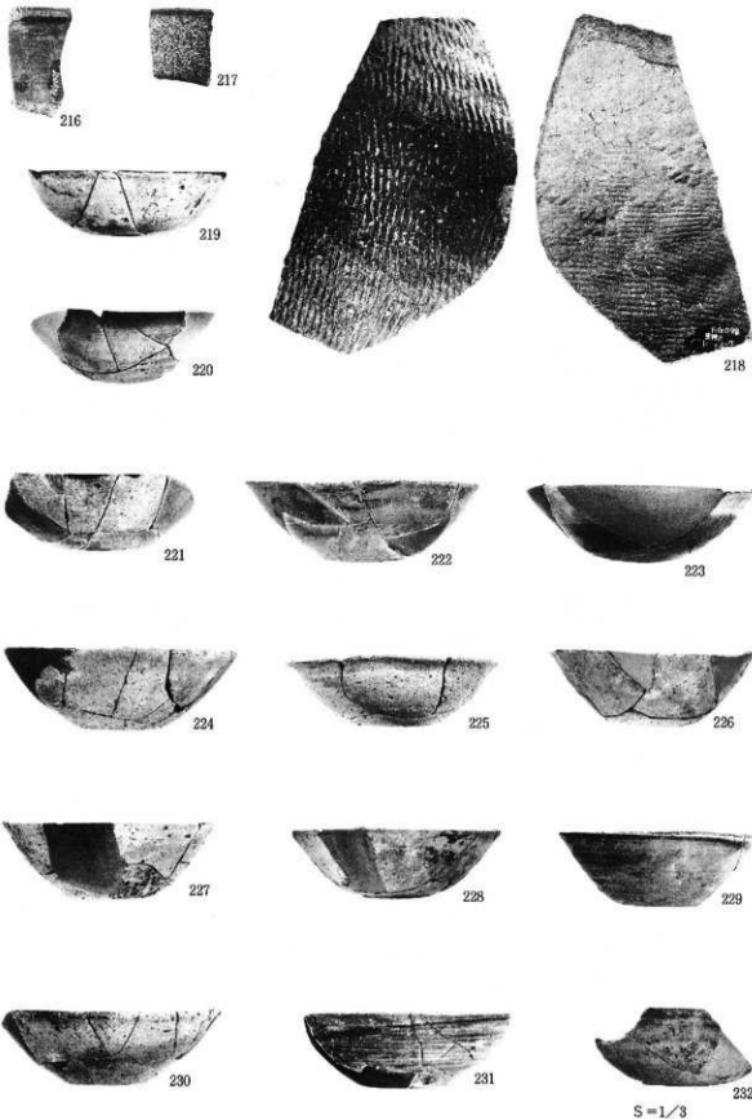
200

S = 1/3

写真図版72 遺構内出土遺物 (RG045)



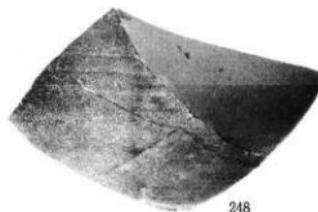
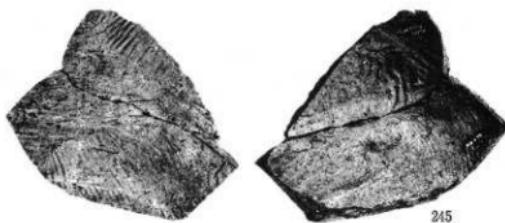
写真図版73 遺構内出土遺物 (RG045・RG098)



写真図版74 造構内出土遺物 (RG098~RG099)



写真図版75 造構内出土遺物 (RG099)



250



251



252



253



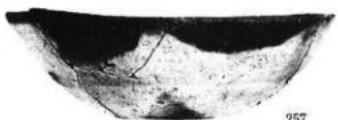
254



255

S = 1/3

写真図版76 遺構内出土遺物 (RG099・RG111・RZ005・RA175) 遺溝外出土遺物



257



258



259



256

写真図版77 遺構内出土遺物 (RE005)

## 報告書抄録

ふりがな	むかなかのだてあとひじこ山ひせきひじゅいちし・ひたろうせきだいじゅくじはくつちょうさはうくしょ							
書名	向中野館跡第4次・小幡遺跡第11次・台太郎遺跡第19次発掘調査報告書							
副書名	盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第321集							
編著者名	下田隆衛・溜沢一郎・山口俊規・佐藤綾子・鈴木見誌・高橋與右衛門・高橋義介							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
向中野館跡 第4次調査	岩手県盛岡市飯岡新田2地割 124-1ほか	03201	LE26-0205	39度 40分 32秒	141度 08分 32秒	1998. 5.19~8.7	911m <sup>2</sup>	「盛岡南 新都市土 地区開整 理事事業」 に伴う緊 急発掘調 査
小幡遺跡 第11次調査	岩手県盛岡市本 宮字小幡88-1ほか	03201	LE16-2009	39度 41分 06秒	141度 07分 36秒	1998. 8.17~10.6	819m <sup>2</sup>	
台太郎遺跡 第19次調査	岩手県盛岡市向 中野字向中野 16-6ほか	03201	LE16-2269	39度 40分 44秒	141度 08分 40秒	1998. 7.1~8.31	4,757m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
向中野館跡 第4次調査	集落跡	平安時代 中世	堅穴住居跡 土坑 溝・堀跡	5 3 4	土師器、須恵器、陶磁 器、石器、古錢	中世の向中野館に伴う と思われる堀跡を検出		
小幡遺跡 第11次調査	集落跡	平安時代	堅穴住居跡 土坑 焼土遺構 溝跡	3 5 4 3	土師器、須恵器、陶磁 器	9世紀後半~10世紀前 半の集落跡		
台太郎遺跡 第19次調査	集落跡	奈良・平 安時代中 世・近世・ 不明	堅穴住居跡 堅穴状遺構 土坑 建物跡 溝跡 焼土遺構 道路跡状 柱穴群	20 5 18 3 35 1 2 2	土師器、須恵器、陶磁器、 鐵器中世・近世建物跡 群の一部	8・9世紀代の集落跡 の一一部中世・近世建物 跡群の一部		

財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	佐藤 基	嘱託	島忠子
副所長	伊藤 直司		
[管理課]			
管理課長	川浪 清徳	嘱託	藤島 新
主査	立花 多加志	〃	田トヨ
主任	日影 瞳夫	〃	佐々木 光重
[調査第一課]			
調査第一課長	小田野 哲恵	調査第二課長	高橋 與右衛門
調査第一課長補佐	佐々木 清文	調査第二課長補佐	中川 重義
主任文化財専門調査員	酒井 宗孝	主任文化財専門調査員	高橋 真芳
"	小山内 透	文化財専門調査員	古尾
文化財専門調査員	中田 伸迪	"	阿松
"	吉田 充勉	"	小工
"	鎌田 勉	"	前田
"	小笠原 健一郎	"	金子
"	鳥居 達人	"	岩澤
"	濱田 宏	"	早苗
"	佐々木 進	"	佐々木
"	安藤 由紀夫	"	晴星
"	木戸口 俊子	"	雅
"	小野寺 则之	"	佐々木
"	阿部 勝正	"	昭太郎
"	千葉 彰彦	"	杉澤
"	羽柴 正直	"	浩二郎
"	高木 淳	"	北村
"	佐藤 雄一郎	"	鈴平
"	菅原 大拓	"	木澤
"	半澤 幸一郎	"	里佳
"	朝倉 拓美	"	山谷
"	菊池 美治	"	吉田
"	村上 幸子	"	吉吉
"	本多 順一郎	"	藤原
"	中原 直浩	"	
"	丸山 綾美	"	
期限付専門職員	佐藤 純	期限付専門職員	香規
"	平	"	恵彦
"	小原 広	"	和徹
"	小林 弘	"	里
"	北田 敦	"	賢

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第321集

向中野館跡第4次・小幅遺跡第11次  
・台太郎遺跡第19次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成12年3月20日

発行 平成12年3月31日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

TEL(019) 638-9001

印刷 梅興出版社

〒020-0816 盛岡市中野1-4-14

TEL(019) 624-3456

---

## 向中野館跡堀配置図

### 基準点座標値

基1 X = -35,950.000 Y = +26,500.000

基2 X = -35,950.000 Y = +26,470.000



0 5 10m  
1 : 200

RG06

RG07

RG08

B'

B'

基1

A'

A'

009

010

011

012

013

014

015

016

017

018

019

